
行 田 市

築道下遺跡 III

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

- IV -

<第1分冊>

2000

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



堺道下遺跡全景（南から）



築道下遺跡全景（西から）



調査区全景（西から）



第514号住居跡出土管玉・ガラス玉出土状態



第514号住居跡出土管玉・ガラス玉



第1号土器焼成窯跡（南から）



第1号土器焼成窯跡（西から）



第1号土器焼成窯跡（東から）



第1号土器焼成窯跡焼成室（北から）



第1号土器焼成窯跡焼成室（南から）



第1号土器焼成窯跡・第60号溝跡（灰原）出土遺物

序

埼玉県では、豊かな彩の国の実現を目指して「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念とし、各種の施策を進めております。

テクノグリーン構想は、「創造性に満ちた活力ある産業社会づくり」という基本方向に沿って計画された事業で、自然環境などと調和させながら、先端技術産業などの導入を軸とした、産業の振興を図るものであります。

行田市野地区に計画された、行田南部工業団地の造成は、このテクノグリーン構想を積極的に推進するとともに、行田市の掲げる「水と緑の快適創造都市」の実現に向け、工業基盤の整備や工業機能の高度化を図り、地域の活性化と県土の均衡ある発展に資することを目的とした事業であります。

行田市は、古くから足袋の町として栄えてまいりましたが、現在は被服に限らず、広く商工業の都市として発展を続けております。一方、利根川と荒川の二大河川に挟まれるという地の利から、周辺には近世の忍藩を十萬石たらしめた、広大な水田地帯が広がっております。

この肥沃な大地の恵みは、市内あまたの文化遺産によって物語られるところでもあります。国宝金錯銘鉄剣の出土で知られる埼玉古墳群、古代の創建とされる旧盛徳寺址、万葉集に歌われた小崎沼や埼玉の津、さらには忍の浮城として名高い忍城跡など、県名発祥の地にふさわしく、まさに歴史と文化の宝庫であります。

工業団地造成事業地内も例外ではなく、すでに築道下遺跡、八ッ島遺跡の所在が確認されておりました。関係機関では造成工事の実施に先立ち、両遺跡の取り扱いについて、慎重な協議を重ねてまいりました。そ

の結果、現状での保存が困難となる範囲については、やむを得ず記録保存のための発掘調査を行なうこととなりました。当事業団は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県企業局の委託を受けて、対象となる埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

ここに報告します築道下遺跡は、元荒川に沿った自然堤防上に営まれた集落遺跡であります。三年間にわたる発掘調査により、古墳時代から中世に至るおびただしい数の遺構・遺物が発見されました。この集落跡は、堅穴住居跡約800軒、掘立柱建物跡約240棟からなり、埼玉県内では最大規模を誇っています。また、規則的に配置された古代の大型建物跡、中世の墓跡、土師質土器焼成遺構などの発見は、当地域ばかりでなく、埼玉県の歴史を考える上で重要であります。

本書は平成8年度刊行の第I巻、平成9年度刊行の第II巻に引き続き、築道下遺跡の調査成果をまとめた第III巻となります。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財保護思想の普及・啓発、および教育機関の参考資料として広くご利用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県企業局、行田市教育委員会各位に深く感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県行田市に所在する築道下遺跡の発掘調査報告書（第三巻）である。

なお、築道下遺跡の報告書は、以下のように分割刊行している。

第Ⅰ巻 築道下遺跡A・B区
事業団報告書第188集 1997

第Ⅱ巻 築道下遺跡B・C区
事業団報告書第199集 1998

第Ⅲ巻 築道下遺跡C区（本書）
事業団報告書第245集 2000

第Ⅳ巻 築道下遺跡E～H区
事業団報告書第246集 2000

2. 遺跡のコード番号と、各年度の発掘調査届に記した代表地番、およびこれに対する埼玉県教育長の指示通知は、以下のとおりである。

築道下遺跡（No.68-144）

平成8年度

行田市大字野字高畑3700番地1他

平成8年4月18日付 教文第2-12号

平成9年度

行田市野字高畑3744番地5他

平成9年4月15日付 教文第2-14号

3. 発掘調査は、行田南部工業団地造成事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査事業は、第Ⅰ章-3に示す組織により実施した。このうち、本書にかかるC区の発掘事業については、平成8年4月1日から平成9年3月31日までの鶴持和夫、赤館浩一、大屋道則、栗阿潤が担

当し、平成9年4月1日から10月30日、および12月15日から平成10年2月24日までを鶴持、西井幸雄、山本清、伊藤暁が担当した。

整理報告書作成事業は鶴持が担当し、平成10年4月1日から平成12年3月24日まで実施した。

ただし、本書で扱うC区の範囲は、第101・105号溝より南東部、および新幹線脇の追加調査部分である。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は株式会社アイシー、木材、土壌の分析はパルノサーベイ株式会社、須恵器、ガラス小玉、管玉の分析は幹第四紀地質研究所、巻頭の遺物カラー写真撮影は小川忠博氏に、それぞれ委託した。

6. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は大屋が撮影した。

7. 出土品の整理および図版の作成は、兵ゆり子の協力を得て鶴持が行なったが、縄文時代の遺物については黒坂慎二が行なった。

8. 本書の執筆は、第Ⅰ章-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、その他を鶴持が行った。

9. 本書の編集は、鶴持が行った。

10. 本書にかかる諸資料は、平成12年度以降、埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11. 発掘調査から本書の刊行まで、下記の方々に御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬省略）

内山敏行 加藤恭朗 門脇伸一 栗原文蔵
黒済和彦 黒済玉恵 斎藤国夫 酒井清治
塚田良道 中島洋一 堀口萬吉 山崎 武
渡辺 一 行田市教育委員会

例 則

本書における挿図等の指示は以下のとおりである。

1. 全体図および遺構挿図

①XとYで示した数値は、国家標準直角度座標第K系に基づく各座標値であり、方位を表わす矢印は全て座標北を示す。

第K系の座標原点は北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒で、原点座標値はX=0.000m、Y=0.000mである。(第1図参照)

②グリッドは上記の座標に基づき、10m×10mの方眼を設定した。各グリッドの呼称は北西隅の杭を用い、北から南へアルファベット、西から東へ算用数字で表示している。

③遺構の表記記号は次のとおりである。

P…ピット SA…柵列跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 SF…窯跡
SJ…住居跡 SK…土塙 SX…性格不明遺構

④挿図の縮尺は原則として次のとおりである。例外的なものについては、個別にスケールを示した。

遺構全測図・溝跡…1/200

住居跡・掘立柱建物跡・柵列跡・井戸跡・土塙・性格不明遺構・窯跡・溝跡断面・ピット…1/60

⑤住居跡の主軸は、カマドを備えるものはその付設された壁と直交する軸線とし、規模は主軸長×これに直交する軸長を記した。また、主軸方向は座標北を基点に、これの東西に偏する角度を示した。

⑥土層図中のレベル数値は、すべて標高(単位m)を表わす。

⑦土層図の説明文に用いた色調表示は、『新版標準土色帖』1997年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)による。ただし、現地調査でこれを用いなかったものについては、土色番号が記されていない。

2. 遺物挿図

①挿図の縮尺は原則として次のとおりである。例外的なものについては、個別にスケールを示した。

土器・木製品…1/4 縄文土器拓影図…1/3

土製品・鉄製品・石製品…1/2 玉類…1/1

②土器実測図の網かけは、赤色塗彩(20%)、および黒色処理(40%)の範囲を示す。

③土器実測図の断面は、須恵器を塗りつぶし、その他は白抜きで表現した。

3. 遺物観察表

①口径・器高・底径の計測値の単位はcmである。

()を付した数値は、口径・底径については推定値、器高については残存高を示す。

②胎土は土器に特徴的に含まれる物質、およびその粒度を表示した。含有物質は次の略号で表わし、粒度は微・細・粗・礫の4段階に分けた。

W…石英や長石など、白色ないし光沢を有する透明なもの。

B…角閃石など、光沢を有する黒色のもの。

C…チャートなど、W、B以外の光沢を有する多色のもの。

R…土器の細粒状で、粉質な赤色のもの。

F…鉄分など、黒色しみ状のもの。

片…緑泥片岩をはじめとする、片岩類。

針…白色針状物質

③焼成は焼きしまりの程度により、次の3段階に分けた。ただし、多分に感覚的なものである。

良…硬質 普…普通 劣…軟質

④色調は遺構の土層観察と同様、『新版標準土色帖』に拠った。照合は器表面の平均的な部位で行なった。

⑤残存率は5%刻みで表示したが、あくまで目安としての大まかな目測である。

目次

〈第1分冊〉

序	
例言	
例則	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	2
3. 調査の組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
III 遺跡の概要	19
IV 遺構と遺物	36
1. 住居跡	36

〈第2分冊〉

2. 掘立柱建物跡	311
3. 柵列跡	341
4. 土塙	344
5. 井戸跡	385
6. 溝跡	419
7. 土器焼成窯跡	431
8. ビット	439
9. 性格不明遺構	452
10. その他の遺物	456
(1) 縄文土器	
(2) 石器・石製品	
(3) 片岩製品	
(4) 砥石	
(5) 紡錘車	
(6) 玉類(管玉・ガラス玉・白玉・土玉・土錘)	
(7) 滑石製模造品	
(8) ミニチュア・手捏ね土器	
(9) 鉄製品	
(10) その他のグリッド出土遺物	
V 結語	472
1. 築道下遺跡出土土器について	
付編 築道下遺跡出土遺物の科学分析	490
1. 分析の目的	
2. 土器胎土分析	
3. ガラス製丸玉・碧玉製管玉の化学分析	

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	6	第36図	第357号住居跡出土遺物	51
第2図	遺跡の分布と微地形の復元	8	第37図	第358号住居跡	52
第3図	周辺の遺跡分布図	11	第38図	第358号住居跡出土遺物	53
第4図	調査区全体図	20	第39図	第359号住居跡	53
第5図	調査区基本土層	21	第40図	第360・361・362号住居跡	54
第6図	調査区全測図(1)	23	第41図	第362号住居跡出土遺物	55
第7図	調査区全測図(2)	24	第42図	第363・364号住居跡	56
第8図	調査区全測図(3)	25	第43図	第365号住居跡	57
第9図	調査区全測図(4)	26	第44図	第365号住居跡出土遺物	58
第10図	調査区全測図(5)	28	第45図	第366号住居跡カマド・貯蔵穴	59
第11図	調査区全測図(6)	30	第46図	第366号住居跡	60
第12図	調査区全測図(7)	32	第47図	第366号住居跡出土遺物(1)	62
第13図	調査区全測図(8)	33	第48図	第366号住居跡出土遺物(2)	63
第14図	調査区全測図(9)	34	第49図	第367号住居跡	64
第15図	第193号住居跡	37	第50図	第367号住居跡出土遺物	65
第16図	第198号住居跡出土遺物	37	第51図	第368号住居跡	65
第17図	第198号住居跡	38	第52図	第369・370号住居跡	66
第18図	第209号住居跡出土遺物	38	第53図	第369号住居跡出土遺物	67
第19図	第209号住居跡	39	第54図	第370号住居跡出土遺物	67
第20図	第337号住居跡出土遺物	39	第55図	第371号住居跡・貯蔵穴	69
第21図	第345・350号住居跡	40	第56図	第371号住居跡出土遺物	69
第22図	第346・349号住居跡	41	第57図	第372・373号住居跡	70
第23図	第347号住居跡	42	第58図	第372号住居跡出土遺物	70
第24図	第348号住居跡	43	第59図	第374号住居跡	71
第25図	第349号住居跡出土遺物	43	第60図	第374号住居跡出土遺物	71
第26図	第351・352・353号住居跡	44	第61図	第376号住居跡出土遺物	71
第27図	第351号住居跡カマド	45	第62図	第375号住居跡	72
第28図	第351号住居跡出土遺物(1)	46	第63図	第376号住居跡	72
第29図	第351号住居跡出土遺物(2)	47	第64図	第377号住居跡	73
第30図	第354号住居跡出土遺物	47	第65図	第377号住居跡出土遺物	74
第31図	第354号住居跡	48	第66図	第378号住居跡	75
第32図	第355号住居跡出土遺物	48	第67図	第378号住居跡カマド・貯蔵穴	76
第33図	第355・357号住居跡	49	第68図	第378号住居跡出土遺物	76
第34図	第356号住居跡	50	第69図	第379号住居跡	77
第35図	第356号住居跡出土遺物	51	第70図	第379号住居跡出土遺物	77

第71図	第380・381号住居跡	78	第108図	第412号住居跡出土遺物	110
第72図	第381号住居跡出土遺物	78	第109図	第414号住居跡	112
第73図	第382号住居跡出土遺物	79	第110図	第414号住居跡出土遺物	113
第74図	第382号住居跡	80	第111図	第415号住居跡出土遺物	113
第75図	第383号住居跡出土遺物	81	第112図	第416号住居跡	114
第76図	第383号住居跡	82	第113図	第417号住居跡出土遺物	114
第77図	第385・387号住居跡・カマド	94	第114図	第417号住居跡	115
第78図	第385号住居跡出土遺物	86	第115図	第418号住居跡	116
第79図	第386号住居跡出土遺物	87	第116図	第418号住居跡出土遺物	117
第80図	第386号住居跡・貯蔵穴B	88	第117図	第419号住居跡出土遺物	118
第81図	第387号住居跡出土遺物	91	第118図	第420号住居跡	118
第82図	第388・389号住居跡	92	第119図	第419号住居跡	119
第83図	第388号住居跡出土遺物	94	第120図	第420号住居跡出土遺物	119
第84図	第389号住居跡出土遺物	94	第121図	第421号住居跡	120
第85図	第391号住居跡	95	第122図	第421号住居跡出土遺物	121
第86図	第392・393・394・396号住居跡	96	第123図	第425号住居跡出土遺物	121
第87図	第395号住居跡	97	第124図	第425号住居跡	122
第88図	第397・398号住居跡	97	第125図	第426号住居跡	123
第89図	第399号住居跡	98	第126図	第427・428・429号住居跡	124
第90図	第399・400号住居跡出土遺物	99	第127図	第427号住居跡出土遺物	126
第91図	第400号住居跡	99	第128図	第429号住居跡出土遺物	126
第92図	第401号住居跡	100	第129図	第430号住居跡出土遺物	127
第93図	第401号住居跡出土遺物	101	第130図	第430号住居跡	128
第94図	第402号住居跡出土遺物	101	第131図	第431号住居跡	129
第95図	第402・406号住居跡	102	第132図	第431号住居跡出土遺物	130
第96図	第403号住居跡	103	第133図	第432・433号住居跡	131
第97図	第404号住居跡出土遺物	103	第134図	第432号住居跡出土遺物	131
第98図	第404号住居跡	103	第135図	第434号住居跡	132
第99図	第405号住居跡	104	第136図	第434号住居跡出土遺物	132
第100図	第408号住居跡出土遺物	104	第137図	第435・436号住居跡	133
第101図	第407・408号住居跡	105	第138図	第436号住居跡出土遺物	134
第102図	第409・415号住居跡	106	第139図	第437号住居跡	135
第103図	第410号住居跡出土遺物	106	第140図	第438号住居跡	135
第104図	第410号住居跡	107	第141図	第439・442号住居跡	136
第105図	第411号住居跡	108	第142図	第439号住居跡出土遺物	137
第106図	第411号住居跡出土遺物	109	第143図	第440号住居跡出土遺物	137
第107図	第412・413号住居跡	109	第144図	第440号住居跡	138

第145図	第441号住居跡カマド・貯蔵穴	138	第182図	第463号住居跡出土遺物	171
第146図	第441号住居跡	139	第183図	第464号住居跡	172
第147図	第441号住居跡出土遺物(1)	140	第184図	第464号住居跡出土遺物	172
第148図	第441号住居跡出土遺物(2)	141	第185図	第465号住居跡出土遺物	173
第149図	第442号住居跡出土遺物	142	第186図	第465・466号住居跡	174
第150図	第443号住居跡出土遺物	142	第187図	第466号住居跡出土遺物	175
第151図	第443号住居跡	143	第188図	第467号住居跡出土遺物	175
第152図	第444号住居跡	144	第189図	第467号住居跡	176
第153図	第444号住居跡出土遺物	145	第190図	第468・469号住居跡	177
第154図	第445号住居跡	146	第191図	第469号住居跡出土遺物	178
第155図	第445号住居跡出土遺物	147	第192図	第469号住居跡カマド・貯蔵穴	179
第156図	第446号住居跡	147	第193図	第470・471・493号住居跡	180
第157図	第447・448・449・450号住居跡	148	第194図	第470号住居跡出土遺物	181
第158図	第447号住居跡出土遺物	148	第195図	第471号住居跡出土遺物	182
第159図	第448号住居跡出土遺物	148	第196図	第472号住居跡	183
第160図	第451号住居跡	149	第197図	第472号住居跡カマド・貯蔵穴	184
第161図	第452号住居跡	150	第198図	第472号住居跡出土遺物(1)	185
第162図	第452号住居跡出土遺物	152	第199図	第472号住居跡出土遺物(2)	186
第163図	第454号住居跡	153	第200図	第473・474号住居跡出土遺物	187
第164図	第454号住居跡出土遺物	153	第201図	第473・474号住居跡	188
第165図	第455号住居跡	155	第202図	第475・476・478号住居跡	190
第166図	第456号住居跡出土遺物	155	第203図	第476号住居跡出土遺物	191
第167図	第456号住居跡	156	第204図	第477号住居跡	192
第168図	第457号住居跡出土遺物	157	第205図	第477号住居跡出土遺物	193
第169図	第457号住居跡	158	第206図	第479号住居跡出土遺物	194
第170図	第458号住居跡カマド	160	第207図	第479・480・489号住居跡	195
第171図	第458号住居跡	161	第208図	第481号住居跡	196
第172図	第459号住居跡	161	第209図	第485号住居跡カマド・貯蔵穴	197
第173図	第458号住居跡出土遺物	162	第210図	第482・483・484・485・486・ 491号住居跡	198
第174図	第460号住居跡	163	第211図	第485号住居跡出土遺物	200
第175図	第460号住居跡出土遺物	164	第212図	第486号住居跡出土遺物	201
第176図	第461号住居跡出土遺物(1)	165	第213図	第487・488号住居跡	202
第177図	第461号住居跡	166	第214図	第487・488号住居跡出土遺物	204
第178図	第461号住居跡出土遺物(2)	168	第215図	第490号住居跡	204
第179図	第462号住居跡出土遺物	169	第216図	第491号住居跡出土遺物	205
第180図	第462号住居跡	170	第217図	第492号住居跡	205
第181図	第463号住居跡	171			

第218图	第493号住居跡出土遺物	206	第254图	第524号住居跡	242
第219图	第494号住居跡	206	第255图	第524号住居跡出土遺物	243
第220图	第495号住居跡出土遺物	207	第256图	第525号住居跡出土遺物	244
第221图	第495・496・497号住居跡	208	第257图	第526号住居跡出土遺物	244
第222图	第499号住居跡出土遺物	209	第258图	第527号住居跡出土遺物	245
第223图	第498・499号住居跡	210	第259图	第527号住居跡	245
第224图	第500号住居跡出土遺物	211	第260图	第528・529・530・531号住居跡	246
第225图	第500・501号住居跡	212	第261图	第529・530・531号住居跡出土遺物	248
第226图	第501号住居跡出土遺物	218	第262图	第532号住居跡	250
第227图	第502・503号住居跡	214	第263图	第532号住居跡出土遺物	251
第228图	第505・510号住居跡	216	第264图	第533号住居跡	252
第229图	第506号住居跡	218	第265图	第533号住居跡出土遺物	253
第230图	第507号住居跡出土遺物	219	第266图	第534・535・536号住居跡	254
第231图	第506号住居跡出土遺物	220	第267图	第534号住居跡出土遺物	256
第232图	第507・509号住居跡	221	第268图	第538号住居跡出土遺物	257
第233图	第508号住居跡	222	第269图	第537・538号住居跡	258
第234图	第508号住居跡出土遺物	223	第270图	第537号住居跡出土遺物	260
第235图	第509号住居跡出土遺物	224	第271图	第539号住居跡出土遺物	261
第236图	第511・518号住居跡	225	第272图	第539号住居跡	262
第237图	第512号住居跡	226	第273图	第541号住居跡出土遺物	263
第238图	第510号住居跡出土遺物	227	第274图	第542号住居跡	264
第239图	第512号住居跡出土遺物	228	第275图	第543号住居跡	265
第240图	第513号住居跡出土遺物	229	第276图	第544号住居跡	266
第241图	第513・514号住居跡	230	第277图	第543・544号住居跡出土遺物	267
第242图	第514号住居跡出土遺物	231	第278图	第545号住居跡	268
第243图	第515・516号住居跡	232	第279图	第545号住居跡出土遺物	269
第244图	第515号住居跡出土遺物	233	第280图	第549号住居跡出土遺物	270
第245图	第517・525号住居跡	234	第281图	第549号住居跡・貯藏穴	272
第246图	第518号住居跡出土遺物	234	第282图	第550号住居跡出土遺物	273
第247图	第519号住居跡	235	第283图	第550号住居跡	274
第248图	第520・526号住居跡	236	第284图	第551号住居跡	275
第249图	第521・523号住居跡	237	第285图	第552号住居跡出土遺物	275
第250图	第521号住居跡出土遺物	238	第286图	第552・553号住居跡	276
第251图	第522号住居跡出土遺物	239	第287图	第553号住居跡出土遺物	277
第252图	第523号住居跡出土遺物	239	第288图	第554号住居跡	279
第253图	第522・540・541・546・547・ 548号住居跡	240	第289图	第554号住居跡出土遺物	280
			第290图	第555号住居跡	281

第291圖	第555号住居跡出土遺物	282	第306圖	第567・568号住居跡	295
第292圖	第556号住居跡出土遺物	282	第307圖	第567号住居跡出土遺物	296
第293圖	第556号住居跡	283	第308圖	第569号住居跡	297
第294圖	第557号住居跡	284	第309圖	第570号住居跡出土遺物	298
第295圖	第557号住居跡出土遺物	285	第310圖	第570号住居跡	298
第296圖	第558号住居跡出土遺物	287	第311圖	第571号住居跡	299
第297圖	第559号住居跡出土遺物	287	第312圖	第572号住居跡出土遺物	299
第298圖	第558号住居跡	288	第313圖	第572・574号住居跡	300
第299圖	第559号住居跡	290	第314圖	第573・579号住居跡	301
第300圖	第560・562・563・564号住居跡	291	第315圖	第573号住居跡出土遺物	301
第301圖	第560号住居跡出土遺物	292	第316圖	第575号住居跡	302
第302圖	第561号住居跡	292	第317圖	第576号住居跡	302
第303圖	第565号住居跡	293	第318圖	第576号住居跡出土遺物	302
第304圖	第566号住居跡	293	第319圖	第577号住居跡	303
第305圖	第566号住居跡出土遺物	294	第320圖	第578号住居跡	304

表目次

第1表	行田南部工業団地関連遺跡調査工程	19	第21表	第372号住居跡出土遺物觀察表	70
第2表	検出遺構数一覧表	22	第22表	第374号住居跡出土遺物觀察表	71
第3表	第198号住居跡出土遺物觀察表	38	第23表	第376号住居跡出土遺物觀察表	71
第4表	第209号住居跡出土遺物觀察表	38	第24表	第377号住居跡出土遺物觀察表	74
第5表	第337号住居跡出土遺物觀察表	40	第25表	第378号住居跡出土遺物觀察表	77
第6表	第349号住居跡出土遺物觀察表	43	第26表	第379号住居跡出土遺物觀察表	77
第7表	第351号住居跡出土遺物觀察表	47	第27表	第381号住居跡出土遺物觀察表	78
第8表	第354号住居跡出土遺物觀察表	48	第28表	第382号住居跡出土遺物觀察表	79
第9表	第355号住居跡出土遺物觀察表	49	第29表	第383号住居跡出土遺物觀察表	83
第10表	第356号住居跡出土遺物觀察表	50	第30表	第385号住居跡出土遺物觀察表	83
第11表	第357号住居跡出土遺物觀察表	51	第31表	第386号住居跡出土遺物觀察表	90
第12表	第358号住居跡出土遺物觀察表	52	第32表	第387号住居跡出土遺物觀察表	90
第13表	第362号住居跡出土遺物觀察表	55	第33表	第388号住居跡出土遺物觀察表	93
第14表	第365号住居跡出土遺物觀察表	59	第34表	第389号住居跡出土遺物觀察表	95
第15表	第366号住居跡出土遺物觀察表(1)	63	第35表	第399・400号住居跡出土遺物觀察表	98
第16表	第366号住居跡出土遺物觀察表(2)	64	第36表	第401号住居跡出土遺物觀察表	101
第17表	第367号住居跡出土遺物觀察表	65	第37表	第402号住居跡出土遺物觀察表	101
第18表	第369号住居跡出土遺物觀察表	67	第38表	第404号住居跡出土遺物觀察表	103
第19表	第370号住居跡出土遺物觀察表	68	第39表	第408号住居跡出土遺物觀察表	104
第20表	第371号住居跡出土遺物觀察表	69	第40表	第410号住居跡出土遺物觀察表	106

第41表	第411号住居跡出土遺物觀察表	109	第78表	第465号住居跡出土遺物觀察表	173
第42表	第412号住居跡出土遺物觀察表	111	第79表	第466号住居跡出土遺物觀察表	173
第43表	第414号住居跡出土遺物觀察表	112	第80表	第467号住居跡出土遺物觀察表	175
第44表	第415号住居跡出土遺物觀察表	113	第81表	第469号住居跡出土遺物觀察表	178
第45表	第417号住居跡出土遺物觀察表	114	第82表	第470号住居跡出土遺物觀察表	181
第46表	第418号住居跡出土遺物觀察表	118	第83表	第471号住居跡出土遺物觀察表	182
第47表	第419号住居跡出土遺物觀察表	118	第84表	第472号住居跡出土遺物觀察表	184
第48表	第420号住居跡出土遺物觀察表	119	第85表	第473・474号住居跡出土遺物觀察表	187
第49表	第421号住居跡出土遺物觀察表	120	第86表	第476号住居跡出土遺物觀察表	191
第50表	第425号住居跡出土遺物觀察表	121	第87表	第477号住居跡出土遺物觀察表	193
第51表	第427号住居跡出土遺物觀察表	126	第88表	第479号住居跡出土遺物觀察表	194
第52表	第429号住居跡出土遺物觀察表	126	第89表	第485号住居跡出土遺物觀察表	199
第53表	第430号住居跡出土遺物觀察表	127	第90表	第486号住居跡出土遺物觀察表	201
第54表	第431号住居跡出土遺物觀察表	130	第91表	第487・488号住居跡出土遺物觀察表	201
第55表	第432号住居跡出土遺物觀察表	131	第92表	第491号住居跡出土遺物觀察表	205
第56表	第434号住居跡出土遺物觀察表	132	第93表	第493号住居跡出土遺物觀察表	206
第57表	第436号住居跡出土遺物觀察表	134	第94表	第495号住居跡出土遺物觀察表	207
第58表	第439号住居跡出土遺物觀察表	136	第95表	第499号住居跡出土遺物觀察表	209
第59表	第440号住居跡出土遺物觀察表	137	第96表	第500号住居跡出土遺物觀察表	211
第60表	第441号住居跡出土遺物觀察表(1)	139	第97表	第501号住居跡出土遺物觀察表	211
第61表	第441号住居跡出土遺物觀察表(2)	141	第98表	第506号住居跡出土遺物觀察表	217
第62表	第442号住居跡出土遺物觀察表	142	第99表	第507号住居跡出土遺物觀察表	219
第63表	第443号住居跡出土遺物觀察表	142	第100表	第508号住居跡出土遺物觀察表	223
第64表	第444号住居跡出土遺物觀察表	145	第101表	第509号住居跡出土遺物觀察表	224
第65表	第445号住居跡出土遺物觀察表	147	第102表	第510号住居跡出土遺物觀察表	227
第66表	第447号住居跡出土遺物觀察表	149	第103表	第512号住居跡出土遺物觀察表	228
第67表	第448号住居跡出土遺物觀察表	149	第104表	第513号住居跡出土遺物觀察表	229
第68表	第452号住居跡出土遺物觀察表	151	第105表	第514号住居跡出土遺物觀察表	231
第69表	第454号住居跡出土遺物觀察表	154	第106表	第515号住居跡出土遺物觀察表	233
第70表	第456号住居跡出土遺物觀察表	155	第107表	第518号住居跡出土遺物觀察表	235
第71表	第457号住居跡出土遺物觀察表	160	第108表	第521号住居跡出土遺物觀察表	238
第72表	第458号住居跡出土遺物觀察表	162	第109表	第522号住居跡出土遺物觀察表	238
第73表	第460号住居跡出土遺物觀察表	164	第110表	第523号住居跡出土遺物觀察表	239
第74表	第461号住居跡出土遺物觀察表	164	第111表	第524号住居跡出土遺物觀察表	244
第75表	第462号住居跡出土遺物觀察表	169	第112表	第525号住居跡出土遺物觀察表	244
第76表	第463号住居跡出土遺物觀察表	172	第113表	第526号住居跡出土遺物觀察表	245
第77表	第464号住居跡出土遺物觀察表	173	第114表	第527号住居跡出土遺物觀察表	245

第115表 第529・530・531号住居跡	
出土遺物觀察表	248
第116表 第532号住居跡出土遺物觀察表	249
第117表 第533号住居跡出土遺物觀察表	253
第118表 第534号住居跡出土遺物觀察表	256
第119表 第538号住居跡出土遺物觀察表	257
第120表 第537号住居跡出土遺物觀察表	261
第121表 第539号住居跡出土遺物觀察表	262
第122表 第541号住居跡出土遺物觀察表	263
第123表 第543・544号住居跡出土遺物觀察表	267
第124表 第545号住居跡出土遺物觀察表	267
第125表 第549号住居跡出土遺物觀察表	271
第126表 第550号住居跡出土遺物觀察表	275
第127表 第552号住居跡出土遺物觀察表	275
第128表 第553号住居跡出土遺物觀察表	278
第129表 第554号住居跡出土遺物觀察表	278
第130表 第555号住居跡出土遺物觀察表	282
第131表 第556号住居跡出土遺物觀察表	283
第132表 第557号住居跡出土遺物觀察表	286
第133表 第558号住居跡出土遺物觀察表	287
第134表 第559号住居跡出土遺物觀察表	287
第135表 第560号住居跡出土遺物觀察表	292
第136表 第566号住居跡出土遺物觀察表	294
第137表 第567号住居跡出土遺物觀察表	297
第138表 第570号住居跡出土遺物觀察表	298
第139表 第572号住居跡出土遺物觀察表	299
第140表 第573号住居跡出土遺物觀察表	301
第141表 第576号住居跡出土遺物觀察表	302
第142表 住居跡一覽表(1)	305
第143表 住居跡一覽表(2)	306
第144表 住居跡一覽表(3)	307
第145表 住居跡一覽表(4)	308
第146表 住居跡一覽表(5)	309

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩のくづくりを推進するため、種々の施策を講じている。工業の振興では、都心からおおむね50km以遠の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノグリーン構想を推進している。

その一環として埼玉県企業局では、工業誘致と適切な工場配置を行うために、行田市大字野地内に行田工業団地の造成を計画した。県教育局生涯学習部文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めてきたところである。

行田工業団地の造成計画にあたり平成6年2月1日付け企局十二第280号で、企業局土地造成課長から教育局生涯学習部文化財保護課長あて、行田工業団地造成予定地における「埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて」の照会があった。

工業団地予定地内には、古墳時代から平安時代にあたる集落跡である築道下遺跡及びハツ島遺跡の二遺跡がすでに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたが、それぞれの範囲については不明であった。遺跡の範囲を明らかにすることは、開発事業との円滑な調整を図る意味でも重要なことであった。照会を受けて文化財保護課では平成7年3月6日～9日の4日間にわたって、造成予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。範囲確認調査の結果、築道下遺跡の立地する元荒川の左岸の自然堤防上には、ほぼ例外なく古墳時代か

ら平安時代にわたる集落跡が存在することが判明し、周知の包蔵地の範囲が西から南東側に大きく広がるということが明らかになった。

この結果を踏まえて平成7年3月15日付け教文第125-1号をもって、文化財保護課から企業局土地開発第二課長あて次のように通知した。

1 埋蔵文化財の所在

工業団地用地内には築道下遺跡(68-144)、ハツ島遺跡(68-146)が所在する。

2 取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する地区については、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施については当課と協議すること。

その後の協議により、緑地や公園として現状保存の図られる場所を除き、記録保存のための発掘調査もやむを得ないとの結論に至った。発掘調査は平成7年4月1日から平成10年3月31日までの3か年にわたった。

発掘調査にかかわる通知は以下のとおりである。

(平成7年度)

平成7年4月28日付 教文第2-23号

(平成8年度)

平成8年4月18日付 教文第2-12号

(平成9年度)

平成9年4月15日付 教文第2-14号

(文化財保護課)

2. 調査の経過

(1) 発掘

行田南部工業団地造成に伴う築道下遺跡の発掘調査は、平成7年4月から平成10年3月まで、3年間にわたって実施した。本書で扱うC区のうち、報告対象となるのは、平成8・9年度の調査部分である。既に第Ⅱ巻で報告済みの範囲も含むが、以下にその経過を記す。また、併行して実施したE・F・G・H各区の調査経過については、第Ⅳ巻に譲る。

[平成8年4月] 前年度からの継続作業となる、第60号溝南側の遺構精査を開始する。同時に、重機による未着手部分の表土除去を再開し、順次、遺構確認を実施する。

また、現場事務所では発掘作業の迅速化を図るため、各種図面の整合作業等、記録類の整理を進める。

[5月] 井戸跡などの深い遺構の排水や、大雨による調査区の水没に備え、各種の排水用ポンプを導入する。第175号住居跡まで終了。

[6月] 降雨による出水があったため、重機で調査区外周に排水溝を設ける。8日、埋蔵文化財センターとの共催で遺跡見学会を開催。650名以上の参加を得る。上旬には表土除去を終える。

[7月] 第77号溝までの遺構精査を終了し、4日に航空写真撮影を行なう。24日、前年度に調査した土師質土器焼成窯の切り取り作業を実施。第192号住居跡まで終了。

[8月] 晴れて暑い日が続く。第38・85号溝に沿った一角の調査を進め、第228号住居跡までを終了する。

[9月] 18日、企業局の視察。前半は天候に恵まれて順調に進んだが、週末の台風で24日は全面水没してしまふ。直ちに排水を行ない、第254号住居跡まで終了。

[10月] 第85号溝の南西部を中心に遺構精査。降雨による出水や作業中止日もほとんどなく、第296号住居跡まで終える。

[11月] 第101・105号溝周辺の遺構精査。排土の搬出を考慮し、先に千間塚に沿った北東部分を調査する。

第344号住居跡まで終了。

[12月] 前月に引き続き、第101・105号溝の南西部を中心に遺構精査する。第106・110号溝、第389号住居跡までの調査を終了する。

[平成9年1月] 第106号溝の東側部分の精査を進める。22日、降雪。第415号住居跡まで終了する。

[2月] 4日、季節風が吹き荒れ、作業困難となる。その後も寒く風の強い日が続く。第440号住居跡まで終了し、26日に航空写真撮影を行なう。

[3月] 第85号溝以北の図面作成、および第453号住居跡までの精査と写真撮影を完了。精査中の遺構のシート養生、調査区の安全確保を行ない、機材撤収。平成8年度の調査を終了する。

[4月] 未完了の調査範囲に応じ、事業規模を縮小する。調査担当者の変更もあったが、そのまま前年度の継続調査に着手する。第460号住居跡まで終了。30日、企業局の視察。

[5月] 第113・114号溝以北の遺構精査を実施。500番台はじめの住居跡は30軒以上が密集重複し、相互関係の把握に困難を極める。第494号住居跡まで終了。

[6月] 500番台の重複住居跡群の精査続行。同時に第113号溝以南の遺構精査を開始する。20日、台風の直撃を受け、調査区が完全に水没する。翌週なかばまで排水作業に追われるが、第523号住居跡まで終了、ないし着手する。なお、下旬にはG区の調査開始に伴い、調査員と補助員の一部がそちらへ移動する。

[7月] 4日に気温37度を記録するなど、猛暑が続く中、調査区端まで一気に手をつける。土木作業員を投入し、斜面部を面す大型の第124号溝の掘削を行なうが、常時の出水と排土量の多さに難航する。

[8月] 第124号溝もようやく目途が付き、調査区端までの遺構精査を進める。第550号住居跡まで着手、ないしは終了する。

[9月] 台風19・20号の連続接近、その影響による秋

雨前線の活発化。このため、10日以降は肌寒い日が多く、調査区も水没を繰り返す。そのような中、排土搬出のため最後になった、第124号溝北端部周辺の精査を行なう。

[10月] 8日までに第567号住居跡など、大半の遺構精査を終え、調査員・補助員ともに、順次F区の調査へ赴く。14日に航空写真撮影を実施し、30日までに図面の作成など、C区すべての調査を終了する。

[11月] F区の調査。

(2) 整理・報告書作成

本書で対象となるC区の整理・報告書作成作業は、平成10年4月1日より平成12年3月24日まで実施した。

[平成10年4月～] 出土遺物、および各種記録類の搬入後、遺物の洗浄と註記、遺構図面・写真の整理に着手する。註記の終了した遺物は遺構単位で接合・復元を行ない、遺構図面に二次原因を作成する。

[5月～] 接合・復元の済んだ遺物は順次、人手のほか三次元測定機などを用いて実測を行なう。二次原因はこれを複写し、切り取って挿図用の仮版組みを進める。

[7月～] 遺物の註記を終え、以後は遺物の接合・復元、実測、仮版組みを重点的に行なう。

[10月～] 仮版組みを行なった遺構については、個別にカードを作成し、規模などのデータを記入し始める。年内にはほぼ二次原因の仮版組みを終える。

[12月] 11日、企業局と緊急会議。造成に伴う千間堀悪水路の改修工事に伴い、新たに発掘調査の必要が生じる。直ちに調整を取り、15日から調査を開始する。

[平成10年1月] 15日までに三度の大雪。除雪や排水の繰り返しで、作業効率は低下する。

[2月] 実質1ヶ月間ほどであったが、24日までにかかる調査を終了する。その後F区へ復帰し、3月いっぱいを持って、予定された築道下遺跡すべての調査を完了する。

[平成11年1月～] 仮版組みした遺構図はカードとともに確認の後、版下用のトレースを開始する。3月中旬、遺物の接合・復元をほぼ終了する。須臾器の一部に胎土分析を実施する。

[4月～] 引き続き遺物の実測、遺構関係の版下用トレースを行なう。併せて遺物実測図のトレース、一部原稿執筆も開始する。

[7月～] 実測の終了した遺物に、写真撮影用の補修と着色を施す。遺構個別のトレースを終え、網掛けや文字記入等を行なう。同時に遺跡全体図や遺構分布図等を作成する。

[9月～] 遺物の写真撮影、版組みを開始するとともに、原稿執筆を進める。その後、割り付けと編集作業を行なう。

[平成12年1月～] 1月に入札を行ない、3回の校正作業を経て、3月に本書の刊行となる。

3. 調査の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘事業(平成8・9年度)

平成8年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理事兼調査部長	小 川 良 祐

管理 部

専門調査員兼総務課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 事	菊 池 久

調 査 部

調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 四 課 長	酒 井 清 治
主 査	今 井 宏
主 任 調 査 員	中 村 倉 司
主 任 調 査 員	鰐 持 和 夫
主 任 調 査 員	赤 熊 浩 一
主 任 調 査 員	岩 瀬 謙
主 任 調 査 員	山 本 靖 晴
主 任 調 査 員	大 屋 道 則
調 査 員	栗 岡 潤
調 査 員	松 澤 浩 一

平成9年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	塩 野 博
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理事兼調査部長	梅 沢 太 久 夫

管 理 部

専門調査員兼総務課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二

調 査 部

調 査 部 副 部 長	今 泉 泰 之
調 査 第 二 課 長	杉 崎 茂 樹
主 任 調 査 員	鰐 持 和 夫
主 任 調 査 員	西 井 幸 雄
主 任 調 査 員	山 本 靖 晴
調 査 員	伊 藤 暁

(2) 整理・報告書作成事業(平成10・11年度)

平成10年度

理事 長 荒井 桂
副理事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 任 福田 昭美
主 任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主 査 田中 裕二
主 任 長滝 美智子
主 任 腰塚 雄二

資料部

資料部長 増田 逸朗
主幹兼資料部副部长 小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長 坂野 和信
統括調査員 劍持 和夫
主任調査員 山本 靖

平成11年度

理事 長 荒井 桂
副理事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部长兼経理課長 関野 栄一
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二
主 任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主 査 田中 裕二
主 任 江田 和美
主 任 長滝 美智子

資料部

資料部長 高橋 一夫
専門調査員兼資料部副部长 石岡 憲雄
専門調査員 大和 修
統括調査員 劍持 和夫
主任調査員 山本 靖

II 遺跡の立地と環境

忍之地沃野遼闊

荒河統方南

刀水横於北

富峯之雪映於筑波之霞

浅嶽之煙接於日光之雲

これは天保六年(1835)、忍藩の佐竹香齋が藩主松平忠亮の命により撰した、『忍名所図会』の序文劈頭を飾る一節である。意訳するならば、おおよそ次のように解されよう。

1. 沃野忍の地

築道下遺跡は、埼玉県行田市大字野字築道下、および字高畑に所在する大規模な集落遺跡である。JR高崎線北鴻巣駅の北東約1.4km、上越新幹線と国道17号(熊谷バイパス)の交差部西側に展開している。地形図上での位置は、およそ北緯36度05分51秒、東経139度29分15秒で、標高は約16mを測る。

野地区は行田市南端の一画を占め、東は北埼玉郡川里村、西は北足立郡吹上町、南は鴻巣市、それぞれに

忍という土地の地味の肥えた平地が遙か遠くまで広がっている。荒川の大きく湾曲した流れが南の方を包むように巡り、利根川の滔々たる奔流が北に横たわる。富士山を覆う白い雪は筑波山にかかる霞に映えて美しく輝き、浅間山より上がる噴煙は日光連山に湧き立つ雲につながって溶け合う。

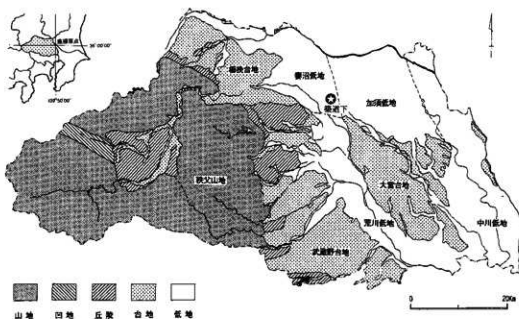
ここに言う「忍の地」とは、現在の埼玉県行田市を中心とする地域のことである。この雄大にして幽玄な景観は、如何なる自然環境の下に望まれ、また、望んだ人々は如何なる足跡を印してきたのであろうか。

接している。

気候はいわゆる内陸性で、冬は乾燥して晴天が多い。日中は北西の季節風が強く吹き、夜間の冷え込みは厳しい。夏は南西の季節風が弱く、日中の最高気温は非常に高くなる。同様に湿度も高く、蒸し暑く夕方に雷雨が多い。

遺跡は鴻巣市と境をなす元荒川の左岸、河流に沿って形成された自然堤防上に立地する。もっとも、調査

第1図 埼玉県の地形



前の築道下遺跡を含めた「忍の地」は、傾斜3度未満という平坦な水田地帯であり、現状で微地形を観察することは極めて困難である。つまり、冒頭に掲げた「忍名所図会」序文は、低平広大な土地なればこそその風景描写なのである。今日、謳われたほどの絶勝は望むべくもない。ただ冬の晴天時、霜野の彼方に富士、浅間、日光、筑波の山々を拝し、佐竹香斎の心情を偲ぶのみである。

もちろん、こうした平坦な地勢が古来不変のものであった訳ではない。

埼玉県東部は、残丘状の洪積ローム台地である大宮台地を取り囲むように、広く沖積低地が発達している。広義には北西の妻沼低地、北東の加須低地、東の中川低地、西から南の荒川低地に分類されている。築道下遺跡は妻沼、加須、荒川の三低地の分割点付近に位置することになるが、さらに細分された「土地分類基本調査 熊谷(埼玉県 1974)、『同 鴻巣』(同 1975)の地形区分に従えば、それは笠原低地ということになる。

笠原低地は、元荒川と星川によって形成された沖積低地で、北側は加須低地、西側は荒川低地に接している。三者はいずれも谷底平野に分類され、表層は河道や氾濫原を示す砂泥堆積物が広く覆っている。北西は荒川によって形成された熊谷低地である。これは行田市街地を扇端とする、いわゆる熊谷扇状地のことで、表層は後背湿地を示す砂質礫堆積物に覆われている。ただし、各低地間の境界は明確なものではない。

第2図は明治17・18年(1884・1885)に測量された第一軍官地方迅速測図(旧参謀本部陸軍部測量局)に、現行の地形図、前掲「土地分類基本調査」の地形分類図、縄文遺跡の発掘調査成果等を加味し、微地形の復元を試みたものである。

図に示したように、自然堤防は行田市北部の星川、中心部の忍川(現忍川は昭和初期の付け替えであるが、古くにも同様の流路があったと思われる。以下、この流路を忍川として扱う)、南部の元荒川、各流路に沿って発達しており、表層はいずれも砂質泥堆積物が

らなっている。これらの自然堤防は直線的に延び、下流は分断されて島状となっている。築道下遺跡の立地する自然堤防も狭長な島状であり、忍川から元荒川沿いに連なる一群に含まれる。

ローム台地はこの笠原低地内の自然堤防群を挟み、東側に騎西台地群、西側が大宮台地の主台となっている。騎西台地群は、河川の浸食で島状に取り残された低台地群である。自然堤防群と並行して連なり、最も大きいものには埼玉古墳群が乗っている。低地との境界は不明瞭ながら、北端は利根川河畔にまで達しているようである。

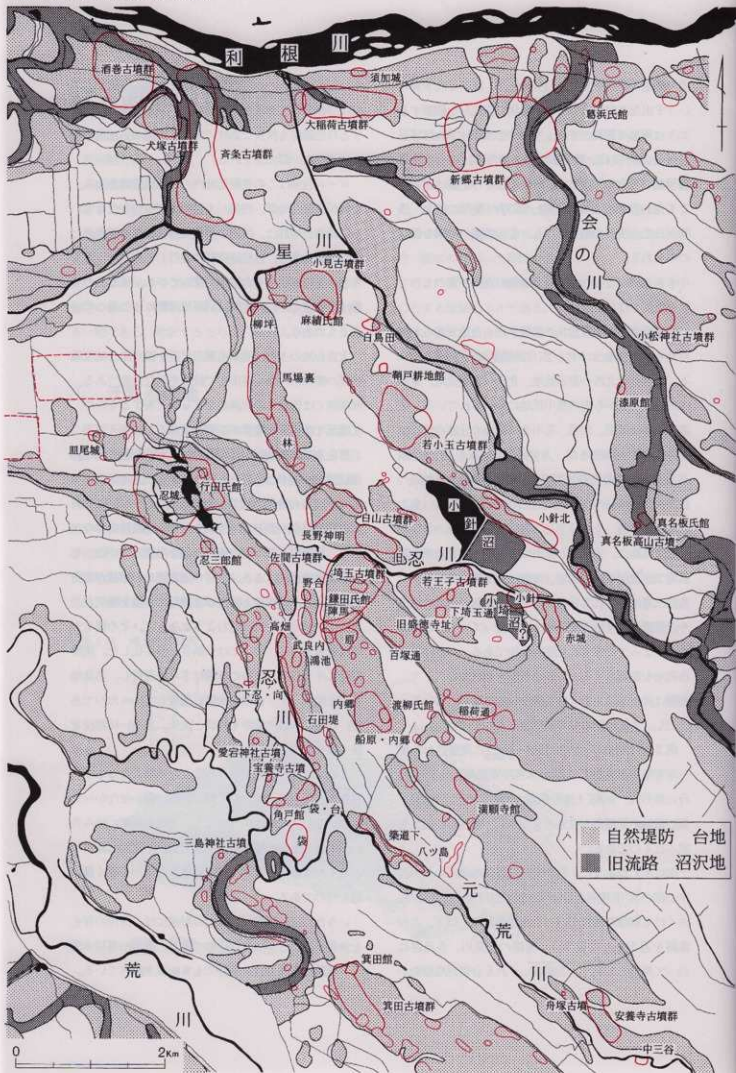
大宮台地の主台は鴻巣市箕田付近を頂点に、埼玉県南部の浦和市、鳩ヶ谷市まで続く平坦な台地である。南端部では低地との比高差を8mほど有するもの、北端部ではこれも境界が不明瞭である。

県北東部に展開する加須低地は、関東造盆地運動(構造盆地)の中心であり、今なお地盤の沈降が続いている。騎西台地群と大宮台地の主台(より以前はこれらと群馬県側の館林台地も)は、本来地続きのものであり、利根川と荒川も台地の西側を南流していた。それが造盆地運動により、大宮台地北部から館林台地南部が沈降し、利根川と荒川は合流して台地を横切り、東の中川低地へと流れ込むようになった。その後も台地は浸食を受け、ついには分断され孤立化した。流路変化に伴う侵食と土砂の堆積はさらに進行し、造盆地運動と相俟って、台地は次第に埋没していったのである。同様に、自然堤防も形成と流失、あるいは埋没を経たものと思われる。

このように、現在見られるような地勢となるまで、利根川と荒川は一時として同じ表層は覗かせなかったに違いない。本流ばかりでなく、支流も複雑に絡み合い、侵食と土砂の堆積を繰り返した。結果的に諸河川の運んだ土砂は、複雑に刻み込まれた地形を厚く覆い隠したのである。

いうなれば、「沃野忍の地」の形成には、河川が存在を無視することができないのである。今日の荒川本流は、遺跡から最も近い部分でも3km以上離れている。

第2図 遺跡の分布と微地形の復元



自然堤防 台地
 旧流路 沼沢地

0 2Km

それは寛永六年(1629)、代官頭伊奈忠治によって行なわれた瀬替え、つまり流路の変更工事があって以降のことである。それまでの本流はその名が示すとおり、築道下遺跡の岸を洗う元荒川であった。遺跡から望む元荒川は、流幅約10mのごく緩やかな流れである。とはいえ、雷雨や台風など短時間での降水量が多ければ、水嵩も流速も一気に増す。その様子はかつて、荒ぶる川と畏れられたことを彷彿とさせる。

瀬替えの主たる目的は明らかとなっていないが、少なくとも原因は荒川、それも当地域の乱流・氾濫にあったと見て大過なからう。遺跡から上流の吹上町にかけては、今も元荒川の蛇行は顕著であり、乱流の名残をよくとどめている。また、河川から取り残された

2. 忍の地に印された人々の足跡

築道下遺跡周辺の遺跡分布を見ると、いずれも自然堤防、ないしは洪積台地(埋没台地を含む)の上に乗っているのが分かる。しかし、「忍の地」に起居したであろう人々は、前節で触れたような地勢の変化に従い、その時々足跡を印してきたはずである。とすれば、現在知られる遺跡の分布は結果的なものであり、既にあるものは地下深く埋もれてしまい、またあるものは跡形もなく流されてしまったとは考えられまいか。はたして、『忍名所図会』序文のごとき沃野たりつづけたのであろうか。いわんや、安住を約束された土地だったのであろうか。少なからぬ疑問を覚える。

然るに、「忍の地」は遺跡をはじめとする文化遺産をあまた擁し、歴史の宝庫というに躊躇するところが無い。歴史上きわめて重要な位置を占めるがゆえに、県

(1) 旧石器時代

行田市内では、かつて長野中学校校内遺跡と称された馬場裏遺跡で、削器と細石刃石核の採集が報告されているにすぎない(栗原1963)。鴻巣市では中三谷遺跡(富田・細田1989)、新屋敷遺跡(金子・大谷1996、昼間・大谷1998)などで、岩宿Ⅱ期に属するナイフ形石器を主体とする石器群や、礫群が検出されている。周辺では他に調査例がないため、当該期の様相は明らか

ように、市内には近年まで多くの池沼が見られた。

一方、利根川も徳川家康の江戸入府後、流域の新田開発などを目的とし、直ちに瀬替えが画策された。文禄二年(1593)には伊奈忠治(忠治の父)が、本流であった会の川を羽生市新郷で締め切り、加須方面への東流化に着手している。

こうした瀬替えが継続して行なわれた結果、中川流域の沖積低地は全面的に開発が可能となり、新田や村落は増加していった。

「忍の地」は大地の運動や自然の営力、さらには人為的な改修が加えられたことによって、はじめて、『忍名所図会』に沃野と記されることとなるのである。

名産祥の地を誇っているのである。このことは、人々がこの地に綿々と住まいをなし、しかも豊かな恩恵を蒙ってきたことの証にはかならない。

激しい環境変化と歴史の宝庫。この一見矛盾するかのような状況も、利根川や荒川といった河川の存在の大きさを、象徴的に示すものとして理解できる。いずれにせよ、河川を無視してこの地域の歴史を訪ねることはできない。そこで、“水”とのかわりという視点から、周辺の遺跡を眺めてみたい。

なお、利根川と荒川の河道変遷や加須低地の形成(関東造盆地運動)については、主に『荒川 自然』(埼玉県1987)、および「中川水系 総論・自然」(埼玉県1993)の内容に拠った。

となっていない。

立地的には馬場裏遺跡が騎西台地群、中三谷遺跡が大宮台地主台である。両台地はともに、関東造盆地運動による地盤の沈降と、これに伴う河川の侵食・堆積作用により、分断され埋没した低台地である。先述のように両者は本来同一の洪積台地で、造盆地運動の始まる以前は、利根川を超えた館林台地とも陸続きで

あった。この大宮・館林台地は、東側の中川谷を渡良瀬川や思川、西側の荒川谷を利根川や荒川がそれぞれ南流し、下総台地と武蔵野台地に対峙していた。

上記の三遺跡の立地は、その西縁部に復元できるものと思われる。中三谷遺跡や新屋敷遺跡の位置を考えると、後に元荒川の流下する開析谷は、北西に向かっ

(2) 縄文時代

旧石器時代に引き続き、低地内での報告例は少ない。その中で馬場裏遺跡は唯一、長期間にわたって形成された集落跡である可能性を指摘されている。22次におよぶ発掘調査では、前期3軒、中期と後期各1軒の住居跡をはじめ、早期から後期の遺構や遺物が検出されている(斎藤1980他)。また、中三谷遺跡は後期、川里村赤城遺跡(新屋1988)は後期から晩期、それぞれを中心とする、大規模な環状集落であることが明らかとなっている。この他では原遺跡(栗原他1978)、船原・内郷通遺跡(中島1990他)、稲荷通遺跡(中島1989)、瓦塚古墳(中島1988)、下埼玉通遺跡(同)などを挙げる事ができる。

中三谷遺跡以外はいずれも騎西台地群に乗り、特に埼玉古墳群周辺に集中する傾向が窺える。遺跡の多くは中期から後期の遺構や遺物が主体であるが、集落としての規模や内容、遺跡相互の関係といった点はいまだ不明確である。

反面、佐間古墳群の調査では、自然堤防の表層をなす二次堆積ローム層の下に、前期の遺物包含層が形成され、さらにその下に、本来の洪積ローム層の存在す

て開口していたのかもしれない。大宮・館林台地がこうした開析谷の多くを走る、起伏に富んだ地形であったとすれば、現在の大宮台地や館林台地の南部同様、行田市周辺にも旧石器時代の人々の足跡が多く印されているはずである。地中深くに、未知の遺跡が埋没していることは十分に予想されなければならない。

ることが観察されている(中島1991)。二次堆積ローム層は、佐間古墳群から武良内遺跡、石田堤遺跡(中島1996)、築道下遺跡へと連なる自然堤防上の遺跡に認められる。築道下遺跡(E区)でも厚さ2m以上にわたり、黄褐色ロームと黒色腐植土の互層しき層相が観察できた。しかし各層ともに、遺物の包含は一切認められなかった。土壌の科学分析でも、腐植土と思しき層を含め、すべてが立川ロームに由来する二次堆積ロームであるとの結果を得ている。このため、一様に評価することは叶わないが、現在、自然堤防となっている部分にも埋没したローム台地が残存し、縄文時代以前の遺構や遺物が埋藏されている可能性は充分にある。

縄文時代前期の海進は、中川谷を栗橋付近、荒川谷を川越付近まで達した。依然、大宮・館林台地は陸続きで、海の中へ突出した半島状の台地であったと推定されている。中期になると海退が始まり、後期には河川の堆積作用で自然堤防と後背湿地を形成し、河成平野へと変化していった。それでもなお、中川谷への利根川の流入はほとんどなく、熊谷付近で荒川と合流、

周辺の遺跡

1. 須加城 2. 葛浜氏館 3. 漆原館 4. 真名板氏館 5. 麻織氏館 6. 白鳥山遺跡 7. 鶴戸耕地館
8. 小針北遺跡 9. 柳浮遺跡 10. 馬場裏遺跡 11. 林遺跡 12. 神明遺跡 13. 鎌田氏館 14. 旧盛徳寺址
15. 下埼玉通遺跡 16. 小針遺跡 17. 赤城遺跡 18. 百塚通遺跡 19. 稲荷通遺跡 20. 陣馬遺跡 21. 原遺跡
22. 内郷遺跡 23. 船原・内郷通遺跡 24. 波柳氏館 25. 満願寺館 26. 池守遺跡 27. 小敷田遺跡 28. 皿尾城
29. 忍城跡 30. 行田氏館 31. 忍三郎館 32. 野合遺跡 33. 高畑遺跡 34. 武良内遺跡 35. 鴻池遺跡
36. 下忍・向遺跡 37. 石田堤遺跡 38. 袋・台遺跡 39. 角戸館 40. 袋遺跡 41. 築道下遺跡 42. 八ツ島遺跡
43. 中三谷遺跡 44. 箕田館
- a. 酒巻古墳群 b. 犬塚古墳群 c. 齊条古墳群 d. 大稲荷古墳群 e. 新郷古墳群 f. 小松神社古墳群
- g. 真名板高山古墳 h. 小見古墳群 i. 若小玉古墳群 j. 白山古墳群 k. 埼玉古墳群 l. 若王子古墳群
- m. 佐間古墳群 n. 愛宕神社古墳 o. 安養寺古墳 p. 三島神社古墳 q. 箕田古墳群 r. 舟塚古墳
- s. 安養寺古墳群

第3図 周辺の遺跡分布図



南下したものとされている。

したがって、中期までは荒川谷やその支谷に面した台地上に営まれていた上掲の遺跡群も、緑辺のものは河成平野となる過程で浸食を受けたり、流失したロームに被覆されたりしたものとされる。故に、台地奥

(3) 弥生時代

周辺地域に限らず、埼玉県全体でも前期から中期前葉の遺跡は少なく、しかも確実な集落遺跡は未見である。中期中葉になると、遺跡は妻沼低地内の自然堤防上に数多く認められるようになる。中でも、行田市から熊谷市にかけて広がる池上遺跡(中島他1984)、池上西遺跡(宮1983)、小敷田遺跡(吉田1991)は、本格的な農耕集落の嚆矢として著名である。

三者は一連の遺跡群であり、須和田式期の濠を備える住居跡群や、並列する3基の方形周溝墓が調査されている。集落には継続して営まれた様子がなく、ごく短期間で廃絶してしまったようである。立地は熊谷扇状地の扇端部、蛇行する埋没河川に接する微高地上である。北西から南東へ向かってやや傾斜する地形を考えると、遺跡内の河川も大きく蛇行しながら、南東へ流れていたものと思われる。

その周辺低地内では、中期後葉の住居跡が検出された袋・台遺跡(高橋他1982)が知られる程度で、後期についてもほとんど不明である。

弥生時代以降、関東造盆地運動による加須低地の沈降は進行し、台地と低地の比高差は小さくなった。や

(4) 古墳時代

a. 集落

弥生時代も末頃になると、袋・台遺跡の方形周溝墓群や船原・内郷通遺跡(中島1990他)など、低地内に遺構や遺物の検出が認められるようになる。そして古墳時代前期(五領式期)には小敷田遺跡、小針遺跡(斎藤1980他)、鴻池遺跡、武良内遺跡、高畑遺跡(以上は栗原・田部井他1977)、陣場遺跡(栗原・駒宮1990他)、白鳥田遺跡(木戸1985)、柳坪遺跡(中島1993)、下忍・向遺跡(高橋1983)など、遺跡数にはわかき増加する。

多くの遺跡では集落や墓域の存在が明らかとなり、

部にあたる埼玉古墳群周辺には、前期の遺跡が見られないのではなからうか。それが中期以降の土砂の堆積に伴い、次第に古墳群周辺へ占地を移していったのであろう。

がて、南流していた利根川や荒川は流向を東へ転じ、加須地域の中川谷へ流れ込むようになる。両河の運んだ土砂は、沈降した大宮・館林台地を次第に覆い、台地群は分断され孤立化していったとされている。

今のところ明かな答えは出されていないが、利根川と荒川の流路変化が、いつの時点で起こったかは重要な問題である。周辺では弥生時代後期の遺跡が見られず、終末から古墳時代前期になって急増する。また、加須や羽生地域においては、現利根川沿いの自然堤防から後期の土器が出土している。こうした傾向を考慮すると、利根川の分流は既に弥生時代後期には加須低地へと流入しており、それが古墳時代前期になって急速に本流化していった。ということにはなるまいか。その過程で行田市付近の低地化は急速に進行し、可耕地も広く形成されたのであろう。埋没してしまった可能性は否定できないものの、池上遺跡群のような中期の遺跡は、台地を分断した現利根川沿いに発見されていない。やや強引だが、その時期はまだ利根川の東流はなく、農耕に適した環境にはなっていなかったものと解釈したい。

これより東海系のS字状口縁壺など、多くの外来系土器の出土をみている。立地はいずれも低台地上、ないし自然堤防上である。

中期(和泉式期)では鴻池遺跡、武良内遺跡、高畑遺跡のような継続するものに加え、神明遺跡(塩野1969)、小針北遺跡(斎藤1981)、石田堤遺跡などでも集落の一部が調査されている。

後期(鬼高式期)は埼玉古墳群の築造に歩を合わせるがごとくに、小針遺跡、陣場遺跡、馬場裏遺跡、高畑遺跡、神明遺跡、船原・内郷通遺跡、築道下遺跡など

で集落が営まれる。特に小針遺跡は築道下遺跡とともに、該期の大規模集落跡として看過できない。調査面積の関係上、検出数では築道下遺跡に及ばないながら、住居跡の密集度としては遜色のあるものではない。

埼玉古墳群を中心とすれば、小針遺跡はその東方約2km、「万葉集」に謳われた「埼玉の津」が推定される低台地北縁に、築道下遺跡は同じく南方約3km、元荒川左岸の自然堤防上に、それぞれ占地している。両者はともに河川に面した大規模遺跡であり、内容や立地もよく似ている。おそらくは埼玉古墳群勢力とのかかわりの中、水上交通の要衝として営まれた集落であると考えられる。古墳群の周囲には、こうした拠点の集落が河川ごとに形成されていたのかもしれない。

前段では、利根川本流の東遷によって土砂が堆積し、可耕地が拡大した結果、古墳時代前期になって遺跡数が増加したのではないかとした。また、高畑遺跡で検出された五領末から和泉初頭の方形周溝墓は、一辺が26mを超える規模を有し、祭祀関係遺物を含む土器の出土も多いことから、豪族の居宅跡ではないかとの指摘を受けている(金子1998)。

ところが、この仮定上問題なのは、袋・台遺跡の古墳が和泉Ⅱ式期と報告されている以外、周辺に前・中期の古墳が見られないことである。5世紀第Ⅳ四半期に突如、全長120mの前方後円墳として稲荷山古墳が出現することを考えると、現状では、ここに埼玉古墳群成立の経済的基盤を認証することは、かなり難しいと言わざるを得ない。やはり、より広い範囲を視野に入れねばなるまい。

b. 古墳

埼玉古墳群は、国宝の金錯名鉄剣を出土した稲荷山古墳から、6世紀第Ⅳ四半期とされる中の山古墳まで、およそ100年間にわたり築造の続いた関東地方有数の大古墳群である。古墳群と“水”とのかわりて興味深いのは、中の山古墳から出土した須恵質の埴輪壺の搬入ルートである。埴輪壺は須恵質の製品で、末野窯で生産されたことが窯跡の調査で明らかとなっている(福田1998)。末野窯跡は大里郡寄居町、荒川の左岸

段丘上に位置することから、製品の埴輪壺は船で運ばれてきたものと思われる。そのルートは、まず窯跡付近で船積みされて荒川を下り、利根川に合流する前に支流に入る(あるいは、人工的な運河などが開削されていたかもしれない)。そして小針遺跡や築道下遺跡などの川辺の集落で荷揚げされた後、陸路を中の山古墳までということになる。

埼玉古墳群の周囲には、数多くの古墳群が分布している。北から東へかけては酒巻、斉条、大塚、小見、若子玉、若王子の各古墳群が騎西台地群の低台地上に並び、その東には大稲荷、新郷、真名板の三古墳群、西には佐間、武良内の両古墳群が自然堤防上に存在する。一方、築道下遺跡の西方には袋・台遺跡の古墳群、および群としては認識されていないが、墳丘の残る宝養寺、愛宕神社、三島神社の三古墳が分布している。さらに、埼玉古墳群へ埴輪を供給した工人集団の墳墓とされる、新屋敷・生田塚古墳群が大宮台地主の北縁に展開している。

上記の古墳群は未調査や部分的な調査が多いうえ、酒巻古墳群や斉条古墳群のように、地下へ埋没してしまったものも少なくない。そのため構成する古墳の数や群の範囲、内容などは不明な点も多い。これまでの知見では、大半の古墳群は5世紀後半から6世紀代を中心に築造され、埼玉古墳群の動向と軌を一にするものとされている。ただし、埼玉古墳群が築造を終えて後、北方の古墳群に以下のごとき特異な古墳が出現する点は注意される。

若王子古墳群の八幡山古墳は、関東の石舞台と称される複室構造の横穴式石室を有し、漆塗りの木棺片やその金具、銅腕などを出土している。7世紀中葉から後葉の築造で、武蔵国造に任命された聖徳太子の舎人、物部連兄麻呂の奥津城ではないかとの指摘もある。同古墳群の地蔵塚古墳は、7世紀後葉から8世紀初頭の築造とされる。石室には武人、船に乗り棹さす人、水鳥、馬などの線刻壁画が描かれ、ここにも“水”との深い結びつきを見ることができる。また、小見古墳群の真観寺古墳は、7世紀中葉に位置付けられる

112mの大型前方後円墳で、主頭太刀や脚付有蓋銅碗などが出土している。

こうした点のほか、周辺古墳群には墳形や規模など構成上の差もあり、埼玉古墳群との関係の中で一律に等視することはできない。古墳群を築造した集団の集落は明らかでないが、各々が自立した集団であるならば、古墳群の近辺には独自の耕地を有していたはずである。

荒川を合流した利根川の奔流は、この地に土砂の堆

(5) 古墳時代末～奈良・平安時代

7世紀後半以降の遺跡としては、馬場裏遺跡、原遺跡、小針遺跡、愛宕遺跡(滝瀬1985)、下埼玉通遺跡、陣場遺跡、内郷遺跡(斎藤1982他)、柳坪遺跡、野合遺跡(斎藤1979)、八ッ島遺跡(山本1998)、白鳥田遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡、下忍・向遺跡などが挙げられる。いずれも集落遺跡で、8～9世紀代を中心としている。

このうち、律令初期にあたる7世紀後半から8世紀初頭のもの、築道下遺跡を含め、小針遺跡、柳坪遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡など数少ない。小敷田遺跡では書簡文、呪符、出挙にかかわる木簡が出土しており、ミヤケヤ国郡(評)里の公的施設、ないしは地首長の経営による私的施設であった可能性を指摘されている(宮瀬1991)。小針遺跡は前代に引き続き、拠点的な大規模集落であったようで、大型建物群の検出された築道下遺跡とともに、この地における性格上の位置付けが問題となっている。

前項の繰り返しになるが、小針遺跡の北側はかつて小針沼と呼ばれた低地になっており、『万葉集』「埼玉の津に居る船の風をいたみ綱は絶ゆるとも言え絶えそね」と謳われた、埼玉の津があった場所と比定されている。遺跡の南側には同じく、「埼玉の小崎の沼に鴨ぞ羽根きる己が尾にふり置ける霜を払うとにあらし」とある小崎沼も伝承されている。場所の比定はともかく、埼玉の地に港湾施設のある河川や、池沼が描写されている点は見逃せない。

寺院としては、旧盛徳寺址が小針遺跡の南西に所在

積を促進させた。そこに灌漑技術の発達が相俟って、次第に耕地は拡大したものとされる。ただ、いまだ全体的な湿潤地化はなく、台地と低地の比高差は大きかったであろう。真名坂高古墳址は現地表から3mも埋没しているが、これは築造後に造益地運動が激化したためとされている。この事例からしても、当時、集落や古墳は乾燥した高台に築かれ、耕地は台地間や自然堤防間の浅田を主体としたに違いない。

している。寺伝では大同年間(806～809)の創建とされ、12世紀に平重盛の心願により再建されたという。採集された瓦は、平安時代から鎌倉時代まで数時期ある(行田市1963他)。円形の柱座を作り出した礎石が境内に散在するほか、現在の堂宇にも転用され、20個以上が遺存している。大きさに個体差があることから、かつては大小さまざまな建物があつたと考えられている。なお、小針遺跡から愛宕遺跡にかけては、9～10世紀の集落跡が広がっており、隣接する旧盛徳寺址との深い関連性が窺われる。

小針遺跡の北側からは「矢作私印」、あるいは「矢作能印」と鋳出された銅印(いわゆる大和古印)の出土もある。こうしたことから、近辺には旧盛徳寺址を氏寺とする有力氏族が存在し、一帯は埼玉郡埼玉郷の中心地だったと考えられている。しかし、埼玉古墳群の築造終了から旧盛徳寺址の創建までは、約200年の開きがあるため、これを同一氏族の動きの中で捉えることには無理があるろう。

また、遺構を伴わないので寺院跡との確認は得られないが、馬場裏遺跡では瓦堂の破片が出土している(大谷1999)。遺跡内には8世紀後半から9世紀前半の住居跡群が存在しており、付近に「仏堂的施設のあった可能性が指摘されている。

旧盛徳寺址の近辺に想定される有力氏族の存在は、古社からも窺うことができる。それは埼玉古墳群中の、浅間山古墳墳頂に鎮座する前玉神社である。同社の創祀ははっきりせず、斎庭としてもふさわしくない

やに思われるが、『延喜式』神明帳巻載の「前玉神社二座」として異論がない。現在の祭神は前玉命と木之花開耶姫命の二柱である。これは後世、浅間信仰の影響を受けて変化したもので、本来は埼(前)玉の地主の神である、サキタマヒコとサキタマヒメの男女神とされる。創始の時期や場所は不明ながら、延喜式が延長五年(927)の撰進なので、それまでには旧盛徳寺址にかかわった氏族の手で、氏神として奉斎されていたのではなかろうか。

律令期、行田市域は埼玉郡埼玉郷に含まれていたと考えられる。『和名抄』に記された埼玉郡は、太田・笠原・埼玉・萱原・余戸の5郷からなる下郡であった。このうち埼玉郷は、上述のように小針遺跡や旧盛徳寺址を中心とする地域、笠原郷は鴻巣市の笠原地区を中心とする元荒川左岸地域で、諸説は概ね一致している。さらに後世の資料ではあるが、応安元年(1368)、足利氏満の鶴岡八幡宮社領寄進状には、「武蔵国足立郡箕田郷地頭職内河面村」とある。河面村は鴻巣市川面のことで、築道下遺跡とは元荒川を挟んだ対岸にあたる。元荒川の左岸に埼玉郡の笠原郷、右岸に足立郡の箕田郷となれば、当然、郡境をなしたのは元荒川である。したがって、築道下遺跡は郡境に位置する集落で、その所属は埼玉郡であったことになる。余戸郷でなかったとできれば、場所的には埼玉郷がふさわしい。

埼玉郡の郡衙所在地は不明である。とはいえ、これまで述べてきたように、埼玉郷には他郷に優越する状況を認めざるを得ない。それは、大規模集落の小針遺跡や築道下遺跡、古代寺院の旧盛徳寺址の存在であり、大和古印の出土、港湾施設である埼玉の津の伝承、式内社である前玉神社の鎮座、そして、ここから想定される有力氏族の存在などである。しかもこれらは一定の範囲に集中しており、郷は無論のこと、郡の中心地と言っても決して過言ではない。

このほか、古代の埼玉郡に関しては、次の出来事や人物が良く知られている。『続日本紀』の天平五年(733)六月条には、「武蔵・国埼玉・郡新羅人徳師等男女五十三人ヲ請ニ依テ金ノ姓ト為ス。」とある。彼らが

埼玉郡のいずこに居住していたか不明であるが、新羅(新座)郡の建郡が天平宝字三年(759)であるので、それ以前に埼玉郡に渡来人の入植があった点は等閑視できない。

一方、埼玉郡出身者には、第二代天台座主となった円澄がいる。円澄は宝龜三年(772)の生まれで、俗姓は壬生氏である。18歳で鑑真的の高弟の道忠に従って受戒し、延暦十七年(798)には叡山に登って最澄の門に入る。やがて最澄から天台宗の奥旨を授けられ、天長十年(833)には座主に補せられた。彼の題目すべき歩み考えると、壬生氏は郡内でも屈指の氏族であったに相違ない。と、これを直ちに旧盛徳寺址にかかわる氏族と結びつけるのは性急かもしれない。

以上述べてきたように、7世紀後半以降はこの地に新たな展開があったことが窺える。木簡に示された出挙の実施や渡来人の入植は、耕地のより拡大された姿を、津の整備は水上交通の要衝であることを、川辺の大規模建物群は公的施設の設置を、それぞれ想起させる。

また郡境が元荒川であれば、既に荒川の本流は利根川に合流せず、現状に近い流路となっていたのであろう。加須低地の沈降が進むにつれて利根川の氾濫は拡大し、侵食と堆積で新たな可耕地を形成するとともに、小崎沼のような池沼も多く出現させていった。「忍の地の低平・湿潤化は、この頃から漸次進行していったのではあるまいか。

反面、大里条里の範囲を注視すると、低平・湿潤化も「忍の地」全体とは言いきれないことに気がつく。『江南町史』資料編2に示された大里条里は、荒川をまたいで大里郡大里村まで広がり、その東限は忍川付近に想定されている(江南町1999)。9～10世紀には施行されていたとされ、この時期、新たな低地部の大開発があったことが知られる。同書の復元のように、忍川を条里の東辺とすると、築道下遺跡や埼玉古墳群方面は含まれないことになる。理由は明示されていないが、この点は条里の設定原理を考察する上にも、重要な意味合いを持ってこよう。もし、条里が未開拓の沖積地を中心に企画されたものであるならば、忍川以東

は低台地や自然堤防、河川が複雑に入り組む起伏に富んだ地であったがゆえに、その範囲外に置かれたとも考えられる。あるいは、そこが前代からの居住域や墓域として、強く意識されたからなのであろうか。これまでの地勢の変化より類推するならば、案外、この頃までの台地部と低地部は、人々が容易に識別し得るものだったのかも知れない。いずれにせよ、沖積低地の開発は条里制施行によって一段と進展し、以降は「忍の地」に多くの武士団の台頭を促すのである。

ここで、埼玉県北部の遺跡に特徴的な地震の痕跡、いわゆる噴砂について触れておきたい。噴砂は地盤の液状化により、裂け目から砂が地表に噴き出す現象のことである。震度V以上の地震で起こると言われ、行

(6) 中近世

武蔵国では平安時代の末期になると、武蔵七党に代表される多くの武士団の活躍が知られるようになる。特に埼玉県の北部では分布が濃密で、行田市周辺に限っても、久下・忍・河原・長野・行田・麻績・波柳・広田・野・津之戸・笠原・真名板等等、氏の名は枚挙にいとまがない。これらの氏名は現在も地名としてよく残っているほか、拠点となった館跡の伝えられるものも多い。

内郷遺跡では構堀らしき溝が検出され、東西約140m、南北約100mの館跡が復元されるといふ。この館跡は地名や伝承などから、波柳氏一族のものとして推定されている。神明遺跡でも二重に堀を巡らせた屋敷跡が調査され、外堀から500枚を超える柿絵の出土を見ている。

また百塚通遺跡(中島1991)では、寺院に關係すると思われる溝や墓域などが調査されている。築道下遺跡でも既に報告済みのB区では、方形に区画された13~14世紀代の墓跡を検出している。

戦国期の遺跡としては、忍城跡があまりにも有名である。忍城は関東七名城の一つに数えられ、その行まいか「忍の浮城」と称された。築城は15世紀後半頃とされ、16世紀末までは成田氏の居城であった。

永正六年(1509)十月、連歌師の宗長は忍城に成田親

田市では築道下遺跡、柳坪遺跡、酒巻古墳群で観察されている。築道下遺跡では6~7世紀の住居跡の覆土、6世紀末の築造とされる酒巻14号墳では周堀の覆土を噴き抜けている。柳坪遺跡では9世紀中頃の住居跡の床面を噴き上がり、覆土の中ほどで止まっている。

これらの噴砂は、古記録から弘仁九年(818)、ないし元慶二年(878)の地震に起源を求められている(堀口1985)。柳坪遺跡の住居跡例から推せば、噴砂は元慶二年の地震痕跡である可能性が高い。なお、築道下遺跡では砂の噴出はないものの、遺構を分析する地盤の亀裂も見られた。やはり、同一の地震による地割れであろう。

泰を訪ね、催された千句興行で第一発句を務めている。彼の著わした紀行文『東路の津登』には、その折の忍城の様子が決のように記されている。

「水郷也。館のめぐり四方沼水幾重ともなく蘆の霜がれ。廿(卅)餘町四方へかけて。水鳥おほく見えわたるさまなるべし。」

この描写から、当時の「忍の地」は水郷と称されるほどの沼沢地で、城も広く水鳥の群れる池沼に囲まれていたことがわかる。

その後、天正十八年(1590)には豊臣秀吉の北条氏征討に伴い、忍城は石田三成によって水攻めにされている。この時に築かれた土堤は、現在も「石田堤」の名で一部が残されている。石田堤は利根川と荒川を弧状に結ぶように築かれ、総延長は14kmにも達したという。築堤の後、荒川を堰き止めて水を引き込んだが、築道下遺跡の西方、堤根と袋の中間地点が大雨による増水で決壊した。このため、川面付近に陣を敷いていた寄せ手は、270余人が溺死したと言われている。決壊がもたらした洪水の痕は特定できなかったが、築道下遺跡では15世紀以降、度重なる洪水による氾濫土が厚く堆積していた。

中世、多くの武士がこの地に奮闘した事実は、彼らを領地の獲得と安堵に奔走させ得る、豊かな土地で

あったことの証左となろう。低地の沈降と河川の堆積はさらに進み、平坦化は一層増したようである。池沼が発達した湿潤地であったことは、宗長の紀行文や三成の水攻めに如実に示されている。反面、築道下遺跡の氾濫の痕跡などは、人々が御し難い乱流に翻弄される姿を想像させてあまりがある。

家康の入府後、一帯は忍藩領となって幕藩体制の中に組み入れられる。そこでは河根川や荒川の瀬替え、用排水路の整備、新田開発が積極的に推し進められ、領知高十萬石を誇る一大穀倉地帯に発展した。生産された「忍米」をはじめとする農産物は、舟舩によって江

戸へ運ばれる(主に利根川)など、河川交通も盛んであった。

ここに、佐竹香齋の称えた「沃野忍の地」は、ようやくにして成ったのである。

以上、雑駁ながら「忍の地」の変貌と人々の活動の跡を辿ってみた。この地に住まう人々は、時々の環境に即応しつつ、常に“水”と不離のかかわりを持ち続け、川の流れのごとき不断の足跡を印してきたのである。河川の運ぶ土砂の堆積にも似たその重畳こそが、「忍の地」を歴史の宝庫たらしめているのである。

引用・参考文献

- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
大谷 徹 1999 『馬場裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第230集
金子彰男 1998 「埼玉県における豪族居館関連遺跡について」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会・群馬県考古学研究所
金子直行他1996 『新屋敷遺跡 C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
木戸春夫 1985 『白鳥田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第54集
行田市役所1963 『行田市史』上巻
栗原文蔵 1963 『古代の行田』行田市郷土文化会
栗原文蔵他1978 『原遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第34集 埼玉県遺跡調査会
栗原文蔵他1990 「行田市陣馬遺跡の調査」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
江南町 1998 『江南町史』資料編2 古代・中世
埼玉県 1987 『荒川』自然 荒川総合調査報告書Ⅰ
埼玉県 1993 『中川水系』総論・自然 中川水系総合調査報告書Ⅰ
斎藤國夫 1979 『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第5集 行田市教育委員会
斎藤國夫 1980 『長野中学校校内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第9集 行田市教育委員会
斎藤國夫 1980 『小針遺跡発掘調査報告書-B地区-』行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会
斎藤國夫 1981 『小針北遺跡』行田市遺跡調査会報告書第1集 行田市遺跡調査会・東京電力(株)埼玉支店
斎藤國夫 1982 『さきたま古墳群周辺遺跡群発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第13集 行田市教育委員会
斎藤國夫 1990 『小針遺跡-第3次調査報告書-』行田市遺跡調査会報告書第2集 行田市遺跡発掘調査会
塩野 博 1969 「埼玉県行田市長野神明遺跡」『考古学雑誌』第55巻第4号 学生社
高橋俊男他1982 『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会
高橋俊男他1983 『下忍・向遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書 吹上町教育委員会
藤瀬芳之 1985 『愛宕通遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第51集

- 田部井功他1977 『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集 埼玉県教育委員会
- 塚田良道他1988 『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集 行田市教育委員会
- 富田和夫他1989 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 中島 宏他1984 『池守・池上』埼玉県教育委員会
- 中島洋一 1989 『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』行田市文化財調査報告書第21集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1990 『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第23集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1991 『行田市市内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第24集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1992 『陣馬遺跡(5次)発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第26集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』行田市文化財調査報告書第28集 行田市教育委員会
- 中島洋一 1996 『石田堤遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第32集 行田市教育委員会
- 昼間孝志他1998 『新屋敷遺跡 D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集
- 福田 聖 1998 『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集
- 松丸国照他1974 『土地分類基本調査』熊谷 埼玉県
- 松丸国照他1975 『土地分類基本調査』鴻巣 埼玉県
- 宮籬 交二1991 『小敷田遺跡出土木簡について』『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 宮 昌之 1983 『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
- 山本 靖 1998 『八ッ島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第219集
- 吉田 稔他1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

III 遺跡の概要

築道下遺跡における調査のうち、本書で扱う範囲はC区の第101・105号溝跡より南東と、新幹線の土木路工事にかかる調査部分である。F区との区分は現道を以って行なったが、その後これも調査対象となったため、第125号溝跡以南をF区とした。但し、第240号井戸跡はC区で扱う(第14図参照)。

これより検出された遺構は、古墳時代後期から奈良時代の住居跡22軒、奈良時代～中世の掘立柱建物跡28棟、櫓列跡5基、古墳時代から中世の土壇167基、井戸跡111井、溝跡35条、中世の土師質土器焼成窯跡1基、墓跡(性格不明遺構)1基等である。

築道下遺跡の概要については、刊行した2冊の報告書において既に触れている。但し、刊行時には発掘調査が継続中であったため、内容はそれぞれの報告対象範囲に限定している。そこで、以下ではまとめた意味も含め、遺跡全体を総合的に述べてみることにする。そして、本書の対象となる上記の各遺構については、次章の遺構項目ごとに概略を記していく。

a) 立地と範囲

築道下遺跡は、元荒川左岸に形成された自然堤防上に営まれている。この自然堤防は、忍川沿いに行田市街地から南へ連続するもので、元荒川と合流後は北西から南東へと直線的に延びていく。遺跡は合流点の東方下流約300mから始まり、南東端部のF区で二筋に

分岐する。南の堤防は瘤状の張り出しとなって収束し、北の堤防は国道17号(熊谷バイパス)を境にハッ島遺跡まで連続する。両者の間には沖積地が湾入し、一段低い窪地となっていた。

前章の地形復元図では、これより下流にも自然堤防の存在を示しているが、ここからは遺構や遺物の検出は一切なかった。おそらくは中世以降、新たに形成されたものであろう。よって元荒川左岸、自然堤防上の遺跡は築道下、ハッ島の両遺跡で一旦途切れることになる。現在のところ、下流の遺跡は鴻巣市の安養寺古墳群となり、その間約2.5kmには遺跡の存在が知られていない。ただ右岸については、F区突出部の対岸に鴻巣市の集落が広がっているため、そちら側に続いている可能性は充分にある。この集落は周囲よりも一段高まっており、自然堤防に乗っていることは明らかである。あるいは、F区から連続していた自然堤防が、元荒川の流路変更によって分断されたのであろうか。

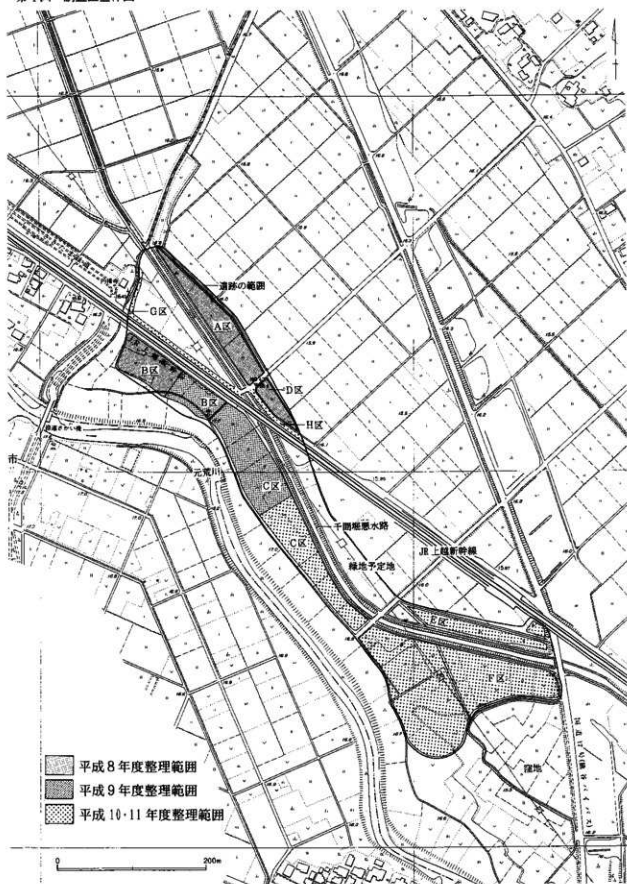
また、築道下遺跡と平行する対岸部にも自然堤防の形成を復元したが、後述のように、遺跡側に旧河道の肩部が検出され、遺構の分布のないことからすれば、一つの自然堤防が中央部で等分されているとは思えない。やはり、これも新しい自然堤防で、遺跡は形成されていないものと推測できる。

自然堤防上という立地の特性から、遺跡の範囲は長

第1表 行田南部工業団地関連遺跡調査行程

	面積(m ²)	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	報告者
築道下A区	5,300	■					第188集「築道下遺跡Ⅰ」1997
築道下D区	1,200	■	■				
築道下B・C区	25,250	■	■	■			第199集「築道下遺跡Ⅱ」1998 第245集「築道下遺跡Ⅲ」2000
		■	■	■	■		
築道下E区	6,300		■				第246集「築道下遺跡Ⅲ」2000
築道下F区	23,150		■	■	■		
築道下G区	2,600			■			
築道下H区	500			■			
ハッ島	51,000	■	■		■		第219集「ハッ島遺跡」1998

第4図 調査区全体図



さ約800m、幅80～250mと極めて狭長である。標高は約16m、周囲はほぼ平坦で、調査前は全面が水田となっていた。遺跡の北側には、幅500m程の沖積低地が埼玉古墳群まで延びている。比高差は1m程有するもの、ごく緩やかな傾斜であるため、ほとんど実感することができない。

b) 調査区と調査工程

発掘調査は平成7～9年度の3年にわたって実施した。狭長な遺跡であるうえ、中央部を上越新幹線や悪水路が縦断していることもあり、調査はA～Hの8区に分割して行なった(第4図)。但し、これはあくまで便宜上の区分であり、遺構の分布状況や地形の相違を考慮したものでない。

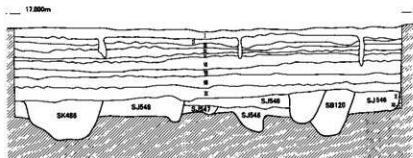
調査対象面積は64,300㎡で、ほぼ遺跡の全域におよんでいる。各区の調査時期と面積、各報告書の掲載対象は第1表に記すとおりである。

c) 基本層序と地形

遺跡の基本層序を第5図に示す。遺跡は厚さ1m以上の氾濫土に覆われ、その下に腐植土からなる黒色土が30cm程堆積し、次いで遺構確認面となる黄褐色土となっている。

氾濫土は流水を物語る砂の薄層を何枚も挟んでいる

第5図 調査区基本層序



基本層序 (西側)

- I. 10YR4/2 灰黄褐色土 浅間A軽石を多数に含む。水田耕作土。
- II. 10YR4/3 に近い黄褐色土 I層との境はFe・Mnの集中で明瞭。浅間A軽石多いしまり強い床土。
- III. 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土層。河川(元荒川)氾濫堆積土。
- IV. 10YR4/3 に近い黄褐色土 シルト状。花炭土。黄色味強。
- V. 10YR3/4 暗褐色土 シルト状ではあるが、河川性堆積の砂層。氾濫土。
- VI. 10YR4/3 に近い黄褐色土 腐植と河川性黄褐色土。砂のブロックが多く含む。氾濫土。
- VII. 10YR3/4 暗褐色土 互層に近似。より砂っぽく色調暗い。
- VIII. 10YR3/3 暗褐色土 互層層。互層が顕著。ほぼ14世紀代までの地表面。腐植土。
- IX. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物微量含む。本層直下から遺構が埋り込まれる。腐植土。
- X. 10YR2/3 黒褐色土 互層に近似。互層の堆積前に上層は幾分流失したと思われる。腐植土。
- XI. 10YR4/4 褐色土 ほぼ砂質堆積。X層ブロック混在。遷移的。

ので、洪水は幾度も起こっていたことがよく分かる。黒色土は古墳～平安時代の遺物を包含し、遺構もこの層から掘り込まれている。最上部は氾濫土との境界が明瞭で、中世の地表面となっている。

『築道下遺跡II』で報告した中世墓跡では、最も新しい板石塔婆は明徳三年(1392)のものであり、15世紀以降の遺物はまったく出土していない。これらは氾濫土にバックされた状態になっており、洪水によって廃絶したことは明らかである。ゆえに、元荒川の氾濫は15世紀初頭頃初めて起こり、以後は頻りに発生したものと理解される。

氾濫土中に人々の足跡は認められない。天正十八年(1590)の忍城水攻めに際し、石田堤の決壊で洪水となったことも前章で触れたとおりである。水田として開発されるのは、耕作土中の遺物から見て17世紀中頃以降と思われる。

遺構確認面は河川堆積性のシルト～砂質で、粘性に優れている。ところが、乾燥すると硬く締まり、亀裂を多く生じてしまう。確認面上層の黒色土、すなわち遺跡形成時の自然堤防は、元荒川の流れに沿って南東へわずかに傾斜するほか、北側の低地へ向けごく緩やかに落ち込んでいく。南側は元荒川の浸食を受ける

ものの、部分的に旧河道の肩部を確認している。ただし、傾斜部の黒色土は堆積が薄くなっている。

遺構確認面より下層約2mは、厚い黄褐色土と薄い暗褐色土の互層となる。遺物を含まないとはいえ、観察された二枚の暗褐色土は日表土状であるため、下には縄文時代ないし弥生時代の遺構が存在するのではな
いかと思われた。そこで、E区の工事用掘削面から土壌を採取し、鉱物分析等を行なった。その結果、これらの土壌はいずれも洪水性の堆積物で、立川ローム層に相当することが明確となった。

すなわち、築道下遺跡の乗る自然堤防の基層は、侵食を受けて流出した周辺台地上の立川ローム層が、洪水により二次堆積したもので形成されているのである。

d) 検出遺構

3年間の調査で検出した遺構の総数は、第2表のとおりである。これらの遺構は調査区、すなわち自然堤防全体に分布し、かつ、密度は非常に高い。こうした遺跡の在り方は、自然堤防という立地上の制約を受けたためとも思われるが、それにも増して、この地が重要な位置を占めていたことを物語るのではなからうか。

遺構の時期は古墳時代後期から平安時代前期、中世にまでおよんでいる。遺跡内での占地には、特に時期的な偏在を認めることはできないが、古墳時代後期のものはB・C区に、奈良・平安時代のものはE・F区に、より集中する傾向を窺見できる。中世の遺構は遺跡全体に広がり、溝によって方形の区画がなされているようである。

住居跡は、元荒川沿いのB・C・F区で濃密な分布

を示し、遺構間の重複も極めて激しい。逆に自然堤防北辺のA・D・E区、および最も幅の狭まるC区とF区の境目付近は密度が低い。その境界はB区の西半部に見られるごとく、自然堤防の中心線、つまり尾根筋のようである。

これらの住居跡は単独で検出されることが稀で、多くの場合数軒から十数軒、最も激しいところでは30軒以上が重複していた。このため、ごく一部しか残存しないものや、旧住居の覆土中に構築されたものも数多い。時期的には古墳時代後期から、奈良時代が主体である。

掘立柱建物跡は遺物の出土が少なく、時期的には不明確な点もあるが、おおよそ7世紀後半から中世に構築されたものと考えられる。中世の建物跡は少数で、しかも規模や柱穴の掘り方が小さい。

古代の建物跡は遺跡全域に分布し、B区の中央部、C区の北西部、D区、F区の中央部に大きなまとまりが認められる。梁行1～2間、桁行2～3間規模の側柱・総柱の建物跡が大半ながら、桁行6間以上となる大型のものも少なくない。中でも、C区第63号掘立柱建物跡は県内屈指と言ってよく、その規模は梁行3間、桁行11間以上という長大なものである。

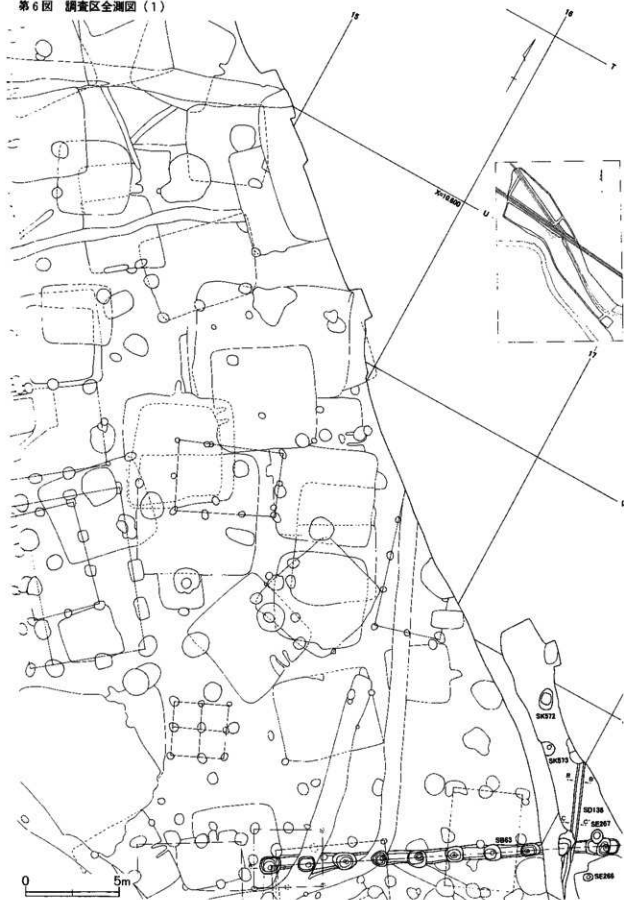
周囲にも大型の建物跡が並んでおり、規則的に配置された様子も窺える。この一般集落に見られない姿は、官衙などの公的施設存在、あるいは私的施設としても有力首長層のそれを強く意識させる。

土壌と井戸跡は特に集中することもなく、調査区内にくまなく分布する。遺物の出土は少ないが、古墳時

第2表 検出遺構数一覧表

	A区	B・C区	D区	E区	F区	G区	H区	合計
住居跡(SJ)	2	565	0	2	196	20	4	789
掘立柱建物跡(SB)	7	120	8	3	89	9	5	241
溝跡(SD)	44	119	13	53	137	49	14	429
土壌(SK)	82	475	24	39	543	69	22	1254
井戸跡(SE)	36	245	13	20	244	16	9	583
櫓跡(SA)	0	9	7	0	12	0	2	30
奈良跡(ST)	2	4	0	9	5	0	0	20
墓跡	0	1	0	0	1	0	0	2
土器焼成窯(SF)	0	1	0	0	0	0	0	1
階溝状遺構(SZ)	0	4	0	0	0	0	0	4
性格不明遺構(SX)	4	10	0	0	2	4	0	20

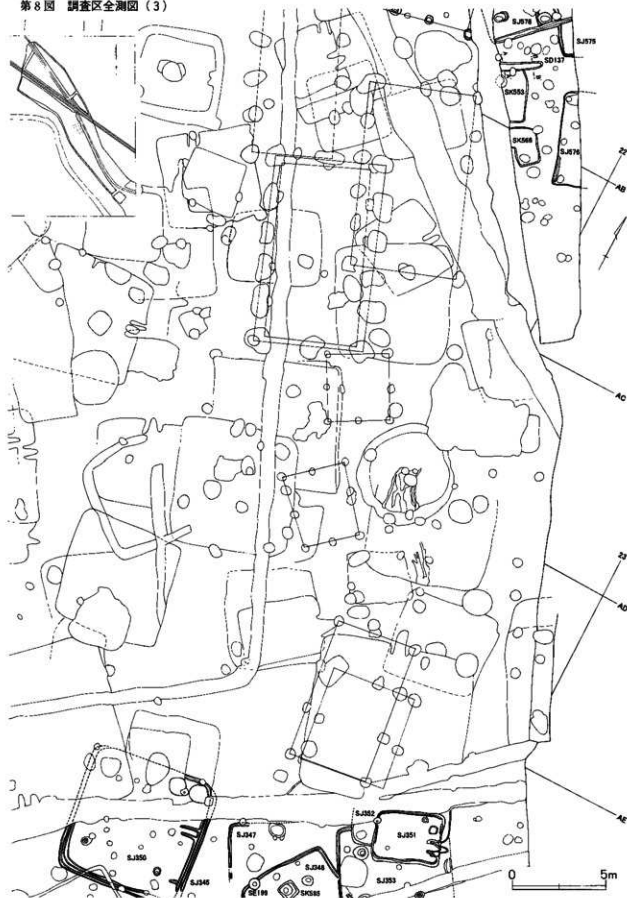
第6図 調査区全測図(1)



第7図 調査区全測図(2)



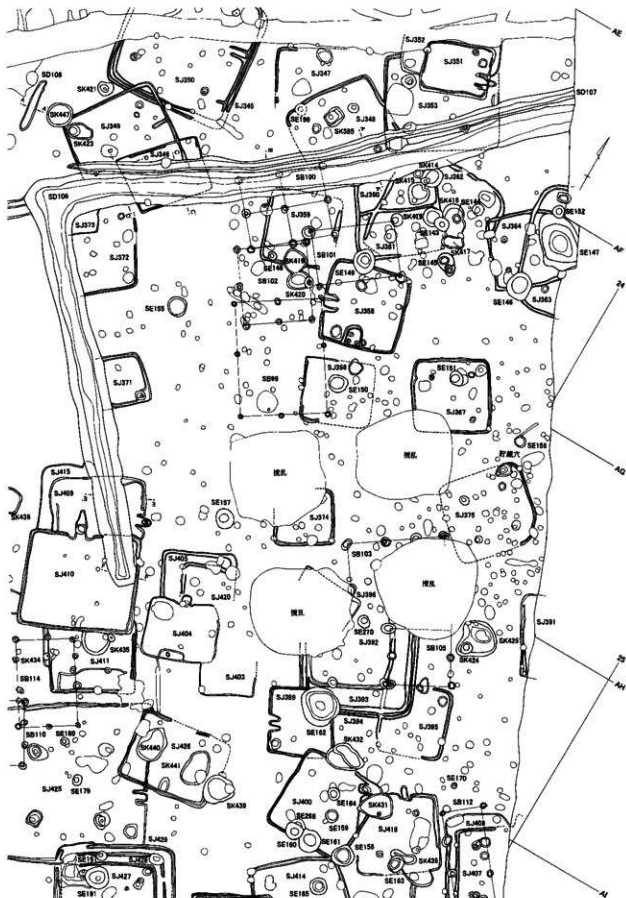
第8図 調査区全測図(3)



第9図 調査区全測図(4)







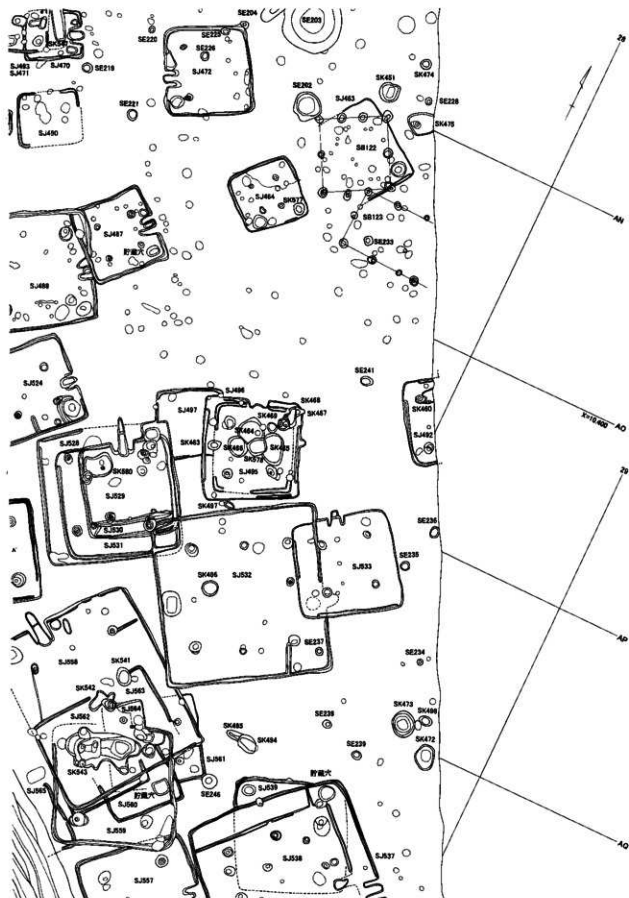
第10图 調査区全測図(5)





第11图 調査区全測图(6)

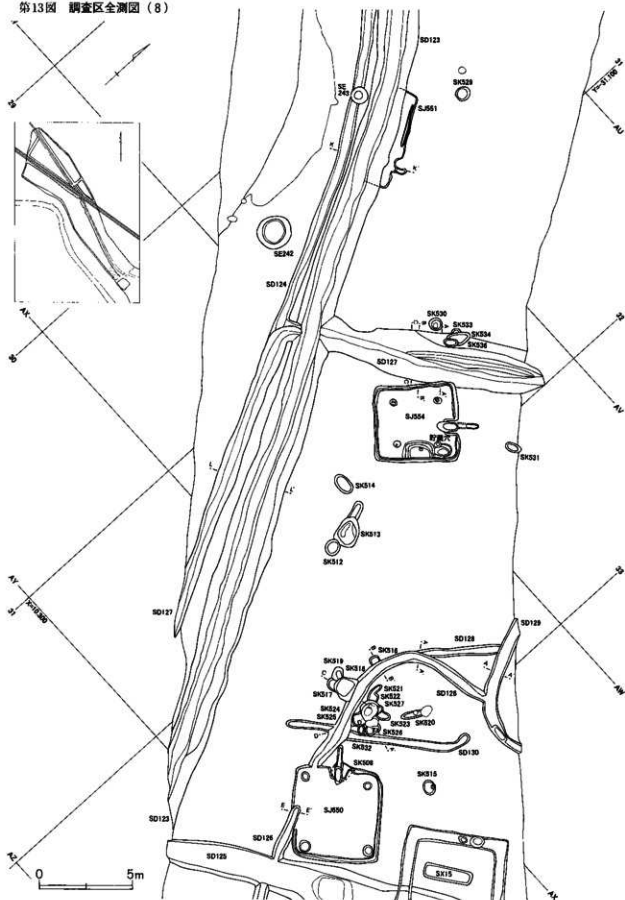




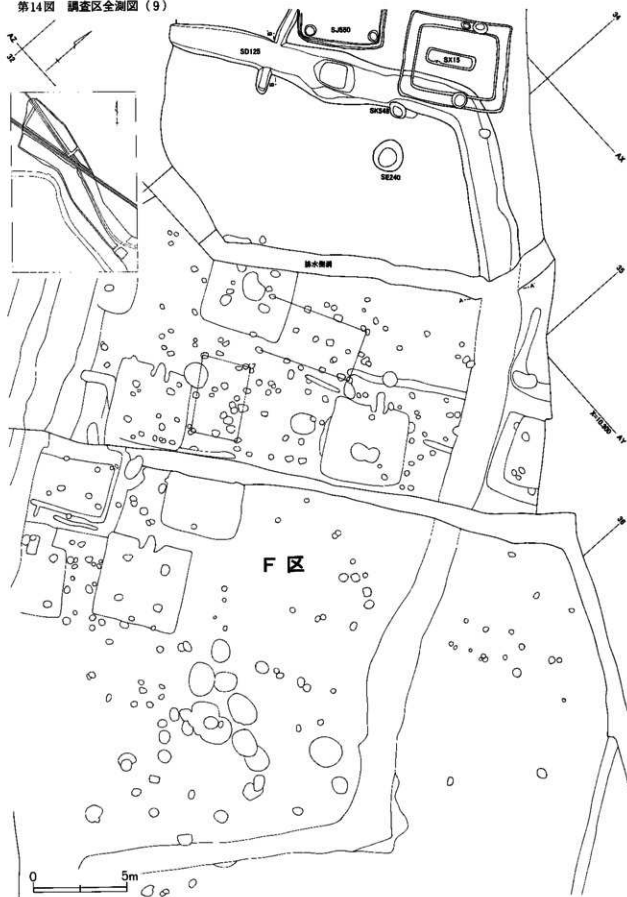
第12図 調査区全測図 (7)



第13图 調査区全測図(8)



第14図 調査区全測図(9)



代から中世にまでおよんでいる。井戸跡は、大別すると直径50cm前後で細長い小型のもの、1~1.5m程で円筒状の中型のもの、2m以上の大型のものとなる。小型のものは古墳時代から奈良時代、中・大型のものは中世が多い。

性格不明遺構はC区、とりわけ大型の掘立柱建物跡周辺に分布する。時期的にも同様で、関連性が窺われる。形状は不整な円形で、深さはまちまちである。覆土中には多量の焼土・炭化物からなる層があり、土器を集中して出土するものも見られた。

ただし、第15号性格不明遺構はこれらと異なり、方形の周溝遺構で、中心部に長方形の土壇を有する。おそらく、中世の墳墓と思われる。

溝跡は遺跡内を方形に区画する直線的なもの、自然堤防の縁辺を巡るような曲線的なもの二者がある。前者は中世に属し、等間隔に開鑿されるなど、規格性を有している。後者は奈良~平安時代に属し、一部の例外(第38号溝跡などの)を除き、居住地と低地を分け

るような位置に構築されている。いずれも通水の様子はなく、地境や浸水時の防水的性格のものであろう。

ピットは柱痕跡の観察できたものと、浅く単一覆土のものが混在する。前者には竪穴住居跡や掘立柱建物跡に伴うものもあると思われるが、それらの遺構として認識できなかったため、一括して扱った。

このほか、中世の遺構では土器焼成窯跡、および既報告の墓跡などの検出が特記される。このうち、『築道下遺跡Ⅱ』において報告した墓跡は、溝で方形に区画されたもので、内部には礎で区画した埋葬施設群3区、茶毘跡2基が存在した。埋葬施設群からは板石塔婆22基、五輪塔3基以上、蔵骨器6個、埋納焼骨23基等を検出している。墓跡の造営時期は、板石塔婆に刻まれた記年銘や蔵骨器の年代から推して、13世紀後半から14世紀末頃までである。造墓の施主は特定し得ないが、おそらくは在地領主である武士の一族と考えられる。

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

今回、報告対象となるのは、第345号住居跡から第579号住居跡である。但し、『築道下遺跡Ⅱ』(1998)で報告した第193・198・209号住居跡については、その後C区北端部で追加調査を行なったため、これに新規検出分を加えて再録する。また、第377号住居跡は同書において、「実測可能な遺物は、検出できなかった。」と報告したが、遺物は今次の整理分に混入していたので、これを本書に掲載する。なお、第384・390・422・423・424・453・504号は欠番である。

C区の住居跡分布は、F区寄りやや稀薄となるもののきわめて濃密で、位置的、ないしは時期的に集中する傾向は特に認められない。その密集度の高さは、単独での検出は稀であり、数軒から十数軒の重複が大半であったことから窺えよう。重複の形態には、入れ籠状となって拡張・縮小のあったことを想定させるもの、旧住居を埋め戻して(あるいは埋没途中)床を貼るものなどが見られた。住居跡の方向は、概ね自然堤防の肩部ラインに一致している。

基本的に、住居跡は一边5m前後の方形で、壁は直線的である。内部には4本の主柱穴とカマド、壁溝と貯蔵穴を備える。

平面は長方形となるもののほか、隅丸や四辺がわずかに膨らむものも少なくない。また特殊な例として、台形に突出する入り口状の施設を備えた、第456・512号住居跡を挙げる事ができる。

覆土は自然堆積、および故意の埋め戻しが観察された。後者は上述のように、新住居の構築に伴う場合に認められ、床面には地山の黄褐色土を貼っていた。

カマドは、四辺いづれかの壁中央部に付設されるのを基本とし、一方の隅部へ偏在するものも多い。袖は地山の黄褐色土を主な構築材とし、壁に造り付けられている。袖全体を削り出したものはごく稀で、焚き口には藁を芯材として用いたものもある。両袖はほぼ平行して壁より垂下するもの、「ハ」の字状に湾曲して開

くものなどが見られる。故に、燃焼部も方形や長方形、楕円形や卵形などバラエティーに富んでいる。

貯蔵穴はカマド側の一方の隅部に備わるものが多く、カマドが偏在する場合は、寄った側の隅部に設けられる傾向がある。但し、カマドのすぐ脇や、対面する隅部、あるいは2基備えるものもある。形態的には方形、長方形、円形、楕円形とさまざまで、深さも一定しない。また、突壁などが巡らされたものは未見である。

主柱穴は4本が方形に配置されるが、一边が9mを超えるような大型の住居跡では、これが8本となる場合もある。

遺物はカマドや貯蔵穴を中心に出土する割合が高い。しかし、大半は覆土中からの破片としての出土であり、1軒当りの出土量も決して多いとは言えない。

第193号住居跡(第7・15図)

X-18グリッドに位置する。既に『築道下遺跡Ⅱ』において報告しているが、平成9年度の調査で新たに住居跡北半部を検出したため、ここにこれを補って再録する。

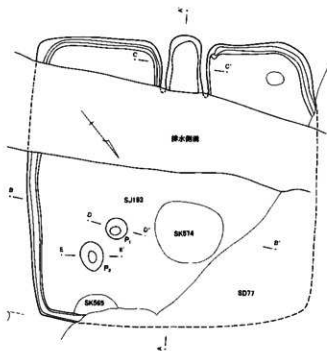
住居跡間の重複はないものの、北隅は第574・565号土壇、第77・147号溝跡に切られている。平面は軸長4.56m×4.40mの方形で、面積は25.50㎡を測る。主軸方向はS-42°-Wを指す。

床までの深さは最大で5cm、部分的に観察された覆土は、自然堆積を示していた。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は北西から南東へやや傾斜する。壁溝は検出範囲で全周し、幅は15~20cm、深さは約7cmである。

カマドは北東壁のほぼ中央部に構築される。燃焼部は91cm×53cmで、床面からの深さは5cmを測る。中央部には土製支脚が据えられていた。

柱穴は東隅寄りに2本を検出した。いずれかが主柱

第15図 第193号住居跡

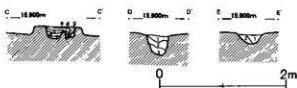


第193号住居跡 1層説明
 1. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロック少量含む。
 2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

第193号住居跡 P-1土層説明
 1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒、少量の炭化物を含む。
 2. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
 3. 10YR2/3 暗褐色土

第193号住居跡 P-2土層説明
 1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
 2. 10YR4/3 に近い黄褐色土

第193号住居跡 カマド土層説明
 a. 5YR2/4 麻痺赤褐色土 堆土粒多く含む。
 b. 7.5YR4/3 褐色土 堆土粒、炭化物粒若干含む。
 c. 5YR5/8 明赤褐色土 焼土粒・ブロック主体。天井崩落土。
 d. 10YR2/1 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒、灰含む。
 e. 5YR4/4 に近い暗褐色土 堆土が北側に焼土化。煙道先端部。
 f. 5YR5/4 に近い赤褐色土 炭化物粒、若干の焼土粒、焼土ブロック含む。
 g. 5YR2/1 黒褐色土 炭化物粒、若干の焼土粒含む。灰層。



穴になるものと思われるが、ともに柱痕は観察できなかった。P₁は径40cm、深さ15cm、P₂は径24cm、深さ30cmである。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は既報告分を除き、土部器の小片を微量検出したのみで、今回は図示するには至らなかった。

第198号住居跡 (第7・17図)

Y-19グリッドを中心に位置する。これも既に報告済みであるが、新たに住居跡北側を検出したため、これを補足して再録する。

東辺で第571号住居跡を切り、逆に西壁中央部を第

313号土塊に切断される。平面は軸長4.15m×3.46mの方形で、面積は14.36㎡を測る。主軸方向はN-25°-Wを指す。

覆土は自然堆積を示し、床までの深さは15cm程である。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は東から西へやや傾斜する。壁溝は検出範囲で全周し、幅10~20cm、深さ約15cmを測る。

カマドは北東壁のやや南寄りに設けられるが、一部は攪乱坑により破壊されていた。煙道は長さ29cm、幅37cmで緩やかに立ち上がり、燃焼部は96cm×58cmが想定される。火床面はほぼ平坦である。

柱穴は1本のみが検出された。大きさは径26cm、深さは36cmである。

貯蔵穴は検出されなかった。

今次の調査で出土した遺物は、土部器の坏が1点のみである。

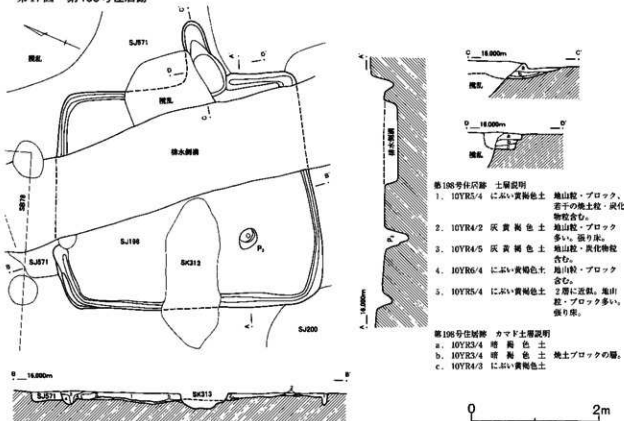
第16図 第198号住居跡出土遺物



第3表 第198号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.9)	(4.5)		細 (B, R)	良		25	内由黒色処理

第17図 第198号住居跡



第209号住居跡 (第7・19図)

Z-20グリッドを中心に位置する。やはり、既に報告した住居跡であるが、新たに東壁部分を検出したため、これを補足して再録する。

中央部を第210号住居跡、第62・79・80号掘立柱建物跡、東隅を第261号井戸跡に大きく切られ、遺存状態は良くない。平面は軸長5.10m×5.00mの方形を呈し、面積は26.00㎡を測る。長軸方向はN-45°-Wを指す。

床までの深さは約10cm、覆土は自然堆積を示す。

第18図 第209号住居跡出土遺物



第4表 第209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.5)	(5.0)		細 (W, B, R)	良	橙	30	

は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。幅約20cm、深さ6~10cmの壁溝は、南西壁で途切れる。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径80cm×72cmの楕円形を呈し、深さは約30cmである。

カマドと柱穴は検出されなかった。

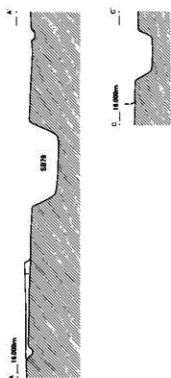
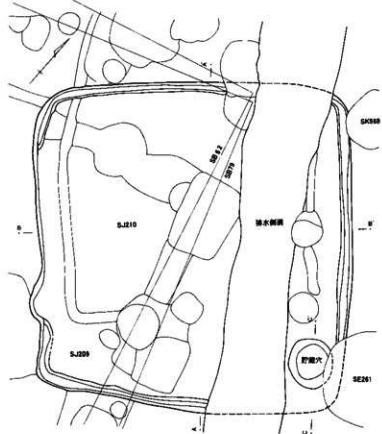
土師器の細片を少量検出したが、図示できたのは1点のみである。

第337号住居跡出土遺物 (第20図)

報告済みの住居跡ではあるが、先述のように遺物が今次の整理分に混入していたため、あらためてこれを掲載する。これらの遺物は住居跡の北西隅部、貯蔵穴およびその周辺の床面上より出土している。

なお、遺構図は「築道下遺跡Ⅱ」を参照されたい。

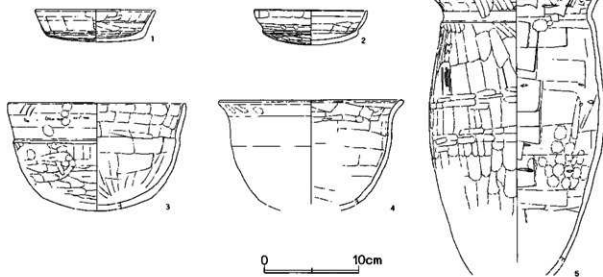
第19图 第209号住居跡



第209号住居跡 上層視別
1. 10YR5/3 に近い黄褐色土 焼土・堆山内む。

0 2m

第20图 第337号住居跡出土遺物



第5表 第349号住居跡出土遺物観察表

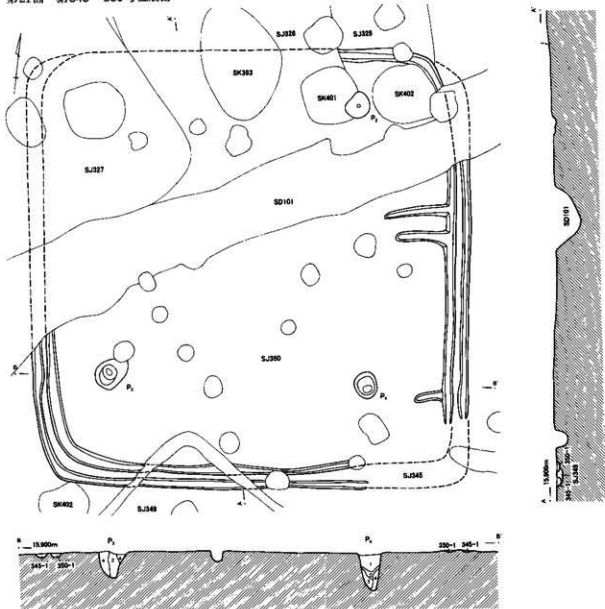
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.9)	3.4		細 (W, B)	良	橙	40	
2	坏	12.1	3.7		細 (W, B)	良	にぶい橙	90	
3	鉢	19.0	(11.2)		細 (W, B, R)	良	明赤	35	
4	鉢	(19.8)	(11.1)		粗 (W, R)	良	明赤	25	
5	甕	18.1	(28.6)		粗 (W, R)	良	橙	70	

第345・350号住居跡 (第8・21図)

A F-21グリッドを中心に位置する。2軒は入れ籠状に重複しており、拡張、乃至は縮小の関係にあると

も思われる。しかし、床面での検出であるため、そのいずれとも半跡はつかなかった。また、住居内を横断する第101号溝跡との関係も不明である。

第21図 第345・350号住居跡



第345号住居跡 1層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭山・炭化物・焼土含む。

第350号住居跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 炭山多く含む。

第345・350号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭山・炭化物・焼土含む。構成粒子は全体に不均一。
2. 10YR2/3 黒褐色土 1層より炭山多い。
3. 10YR2/3 強褐色土 1層より炭山少量。炭化物・焼土含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土含む。

0 2m

第345号住居跡で軸長を測れるのは一方のみであり、それはおよそ6.98mとなる。第350号住居跡は軸長6.70m×6.50mの方形で、面積は43.55㎡を測る。長軸方向はおよそN-7°-Wを指す。

壁溝は検出範囲で全周し、幅約10cm、深さ約6cmを測る。なお、第350号住居跡の壁溝からは、間仕切り状の溝が3ヵ所で派生している。

柱穴は3本検出した。位置的に見て主柱穴と思われるが、どちらの住居跡に伴うものかは明確とし得なかった。大きさは径37~45cm、深さは40~68cmである。

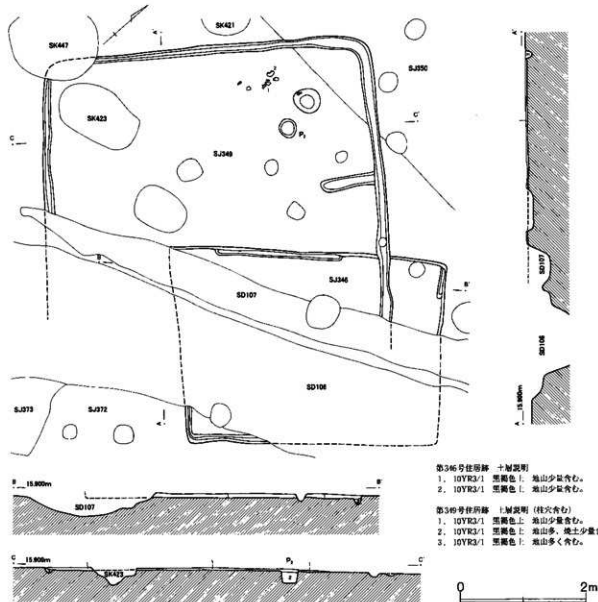
カマドと貯蔵穴、遺物は検出されなかった。

第346号住居跡 (第9・22区)

A F-21グリッドを中心に位置する。大半を第106・107号溝跡に切られるほか、西北部には第349号住居跡が乗っている。平面は軸長3.10m×4.25mの長方形に復元され、面積はおよそ13.18㎡となる。長軸方向はN-42°-Eを指す。

覆土は第349号住居跡構築の際の埋め戻しであり、床までの深さは約7cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は幅約10cm、深

第22図 第346・349号住居跡



さ約10cmで、検出範囲内においても部分的に途切れる。

カマド・柱穴・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第347号住居跡 (第8・23図)

A F-21グリッドを中心に位置する。床を第409号土壌、第199号井戸跡に掘り抜かれる。東側で重複するであろう第348号住居跡、第585号土壌との関係は不明である。遺構は壁溝と床面の遺存により、南西部分が確認されたに過ぎず、全体の規模や形状等は明らかとしない。

壁溝は検出範囲で幅約10cm、深さ約6cmを測る。部分的に観察し得た覆土は、自然堆積と思われる。

カマドは、北壁に残存する燃焼部のみを確認した。約73cm×88cmの楕円形で、深さは12cm程である。

柱穴と貯蔵穴は検出されなかった。

覆土中より3点の土師器片を出土したが、いずれも細片で図示するには至らなかった。

第348号住居跡 (第9・24図)

A F-22グリッドを中心に位置する。南側1/3程を第106・107号溝跡に切断されている。第347・353号住

居跡、第585号土壌、第199号井戸跡との重複関係は不明である。柱穴の位置から想定される規模は、軸長およそ5.10m×5.40m、面積約27.54㎡となる。長軸方向はおおよそN-58°-Wを指す。

床までの深さは5cm以下で、覆土は自然堆積と思われる。壁溝は検出範囲内で全周し、幅は12~20cm、深さは5~7cmを測る。床面はおおよそ平坦である。

柱穴は3本を検出した。位置的に見て主柱穴と考えられる。径37~54cm、深さ約18cmである。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

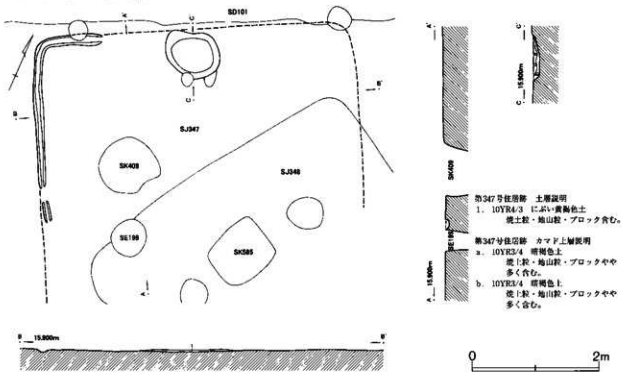
覆土中より土師器の髹などを出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

第349号住居跡 (第9・22図)

A F-21グリッドを中心に位置する。東隅部は第346号住居跡を埋め戻して床としている。平面は方形となるようだが、南東壁を第106・107号溝跡に切られるため、軸長は一辺が5.34mを測れるのみである。長軸方向はおおよそN-53°-Wを指す。

床までの深さは2cm程度、覆土は自然堆積であろう。壁溝は検出範囲で全周し、幅10~20cm、深さ約10

第23図 第347号住居跡



Eを指す。

床までの深さは約30cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁は概ね垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝はほぼ全周し、幅11~22cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁の東寄りに付設される。煙道は長さ40cm、幅30cmのごく浅いものである。燃焼部は約80cm

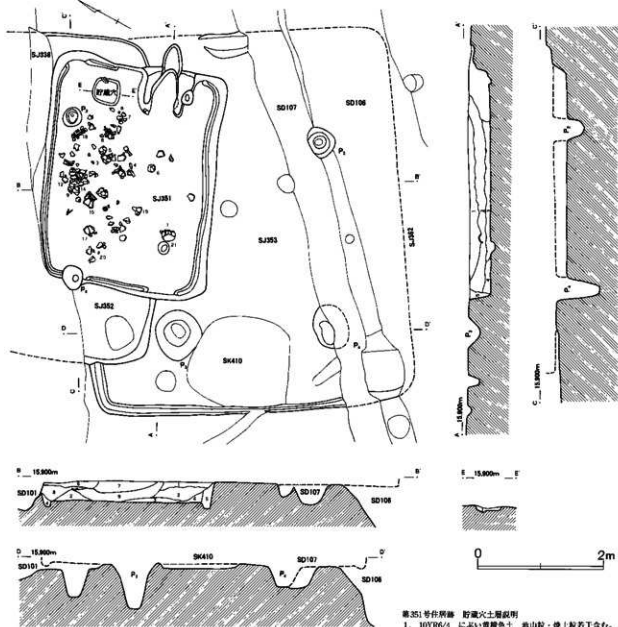
×43cmの楕円形で、床面からの深さはおよそ3cmである。火床面は平坦で、厚く灰層が形成されていた。

主柱穴と考えられる柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は北東壁の北寄りに備わる。上面は径40cm×43cmの方形を呈し、深さ約6cmと極めて浅い。

遺物の多くは住居跡の北半部、床面から10cm前後浮

第26図 第351・352・353号住居跡



第351号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR6/4 濃い黄緑色土 地山粒・炭屑若干含む。
 2. 10YR6/6 暗褐色土 地山粒・ブロック多く含む。
 3. 10YR6/3 暗褐色土 地山粒・ブロックや多く含む。
 4. 10YR4/4 暗褐色土 粘土ブロック混在。
 5. 10YR2/3 暗褐色土 炭土粒・炭化物粒。地山粒・ブロック含む。

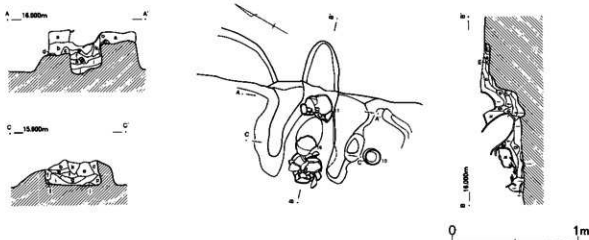
第351号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 黒褐色土 地山粒・炭化物粒含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・炭山ブロック。炭屑の塊土粒・炭化物粒含む。
 3. 10YR2/3 黒褐色土 粘土粒・炭化物粒混在。地山粒含む。
 4. 10YR5/4 濃い黄褐色土 地山粒・ブロック含む。壁面露土。
 5. 10YR4/6 暗褐色土 地山粒多く含む。壁面露土。

いた状態で出土した。また、カマドからは土師器の甕2個体と甕、右袖の脇からは腕が出土している。この

ほかの遺物では、白玉(第424図1)、土鏝(第424図9)などがある。

第27図 第351号住居跡カマド



第351号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/2 灰黄褐色土 土山段・燻量の炭化物を含む。
- b. 10YR4/2 に近い黄褐色土 土山段・粘土段・粘土ブロック含む。
- c. 25YR5/6 明赤褐色土 土山段。
- d. 10YR5/6 明黄褐色土 土山ブロック。
- e. 10YR5/4 に近い黄褐色土 土山ブロック・粘土段主体。
- f. 5YR5/6 橙褐色土 粘土段・天井崩壊上。
- g. 7.5YR5/1 暗灰色土 灰に粘土塊を含む。
- h. 7.5YR5/1 黒褐色土 灰に粘土塊を含む。

- i. 7.5YR2/1 黒色土 灰・炭化物を含む。灰燻。
- j. 10YR7/6 明黄褐色土 粘土ブロック含む。
- k. 10YR5/6 明黄褐色土 粘土ブロック主体。
- l. 2.5YR5/6 橙褐色土 土山の軽い粘土主体。
- m. 10YR5/6 明黄褐色土 土山段・ブロック主体。
- n. 10YR4/4 黄褐色土 土山段・粘土ブロック・炭化物を含む。
- o. 5YR5/6 橙褐色土 土山化したカマド燻。
- p. 10YR5/4 に近い黄褐色土 土山段・粘土段・ブロック含む。

第352号住居跡(第8・26図)

AE-22グリッドを中心に位置する。北側は2/3程を第101号溝跡に切られ、さらに、残存部も第351号住居跡に大きく掘り抜かれている。このため、検出はごく一部に限られ、全体の形状や規模は明らかでない。なお、第353号住居跡との重複関係は不明である。残存部から窺える東西の軸長は、およそ5.16mである。長軸方向はN-26°-Wを指す。

覆土を観察することは叶わなかったが、床までの深さは約8cmであった。壁の立ち上がりは緩やかで、壁溝は見られなかった。

柱穴は2本検出された。径30~34cm、深さ46~53cmを測り、ともに主柱穴と半断される。

カマド、貯蔵穴、遺物は検出されなかった。

第353号住居跡(第8・26図)

AE-22グリッドに位置する。南辺部を第106・107号溝に切断されるが、床面での検出であるため、第351・352号住居跡との重複関係は不明である。主柱穴の位置から想定される軸長は、およそ6.06m×5.22m

で、面積は31.63㎡となる。長軸方向はおおよそN-30°-Wを指し、全体が方形を呈すものと思われる。

壁溝は東・西辺で部分的に確認された。幅11~23cm、深さ約8cmである。

主柱穴は3本が検出された。径46~76cm、深さ32~70cmである。

カマド・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

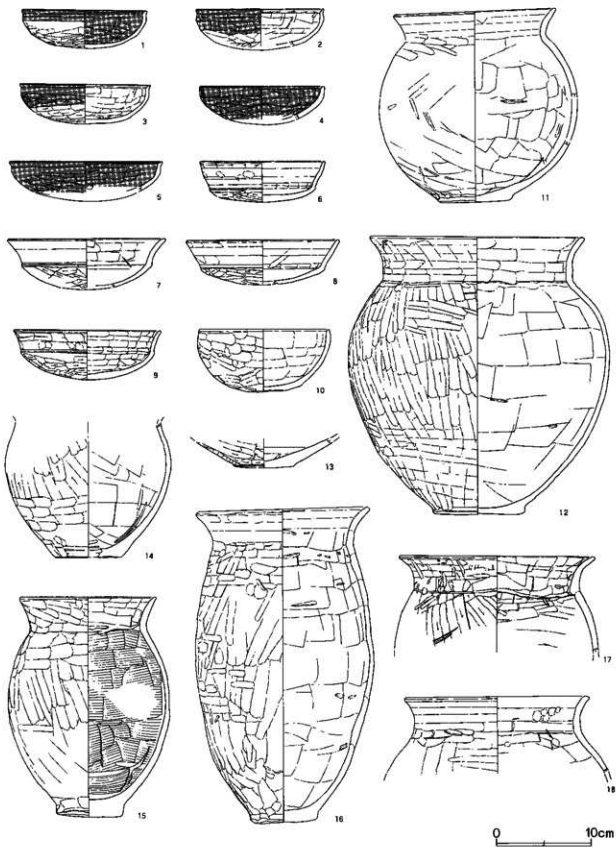
第354号住居跡(第9・31図)

AI-21グリッドを中心に位置する。中央部で重複する第108号掘立柱建物跡との新旧関係は、これを確認できなかった。平面は軸長3.68m×4.20mの方形を呈し、面積は15.46㎡を測る。主軸方向はおおよそN-21°-Wを指す。

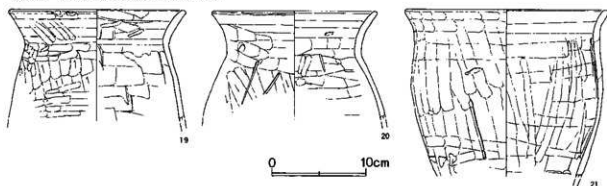
床までの深さは約4cmで、覆土は自然堆積と思われる。壁溝はほぼ全周し、幅約15cm、深さは約2cmである。床面は概ね平坦ながら、さほど硬く締まっていたりはなかった。

カマドは北西壁の中央部、やや西寄りに位置する。燃焼部は約78cm×50cmの楕円形で、床面からの深さは

第28图 第351号住居跡出土遺物(1)



第29図 第351号住居跡出土遺物(2)



第7表 第351号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.5	4.1		粗(W, C, R)	良	黒 褐	50	比全形 赤彩
2	坏	(13.8)	(4.1)		粗(W, R)	良	赤 褐	破片	赤彩
3	坏	14.0	4.2		粗(W, R)	良	黒 褐	60	
4	坏	(13.4)	(3.6)		細(W, B, R)	良	にぶい 橙	20	全面赤彩
5	坏	(16.4)	(3.9)		細(W)	良	にぶい 赤褐	25	赤彩
6	坏	(13.4)	4.3		細(W, B)	普	橙	70	
7	坏	(17.0)	(5.2)		細(W, B, R)	良	橙	破片	
8	坏	(16.5)	(4.9)		粗(W, B)	普	橙	30	
9	坏	15.8	5.4		粗(W, B, R)	良	明 赤 褐	95	
10	碗	14.0	6.7	3.3	粗(W)	良	赤 褐	100	
11	壺	(17.4)	20.5	7.6	粗(B, C)	良	にぶい 黄橙	60	
12	壺	22.8	29.4	8.3	粗(W, C, 片)	良	にぶい 橙	80	黒斑
13	壺		(3.1)	(6.4)	微(W, B)	普	橙	破片	
14	甕	(14.0)	(7.0)		疎(W, C, R, 片)	普	橙	破片	
15	甕	14.7	23.2	7.1	粗(W, C, R, 片)	良	にぶい 橙	80	
16	甕	(18.7)	33.4	7.2	粗(W, C)	良	にぶい 褐	90	
17	甕	21.0	(10.2)		粗(W, B, C, R)	良	にぶい 橙	破片	
18	甕	19.8	(8.2)		粗(W, B)	良	にぶい 褐	破片	
19	甕	(18.9)	(11.8)		粗(W)	良	にぶい 橙	破片	
20	甕	(17.8)	(11.5)		(W)	良	にぶい 橙	破片	
21	甕	21.8	(18.4)		粗(W, R)	普	橙	50	

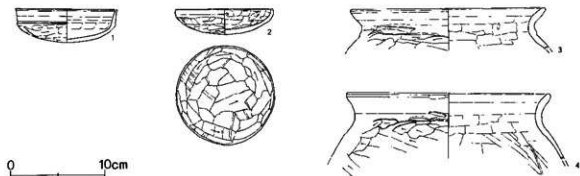
2.4cmとわずかに窪む。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径49cmの円形で、深さは約12cmである。

柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴中より、土師器の坏2点などが出土している。

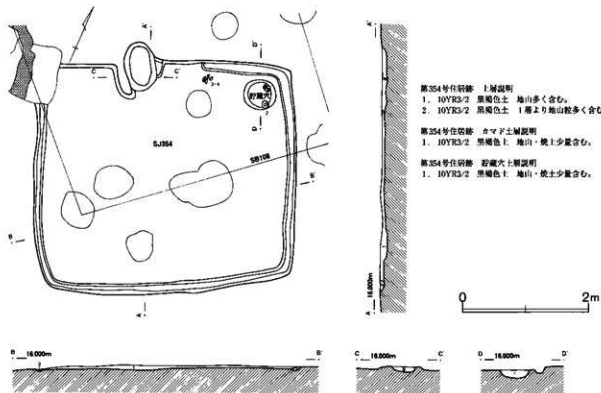
第30図 第354号住居跡出土遺物



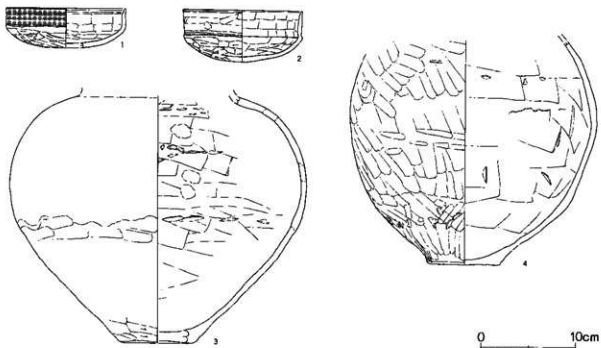
第8表 第354号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	3.6		細 (W, B, R)	普	桜	70	
2	坏	10.6	3.1		細 (W, B)	良	にぶい 桜	100	
3	甕	(21.0)	(5.3)		細 (W, B)	普	にぶい 桜	破片	
4	甕	(21.6)	(9.8)		(W, B, R)	普	にぶい 桜	破片	

第31図 第354号住居跡



第32図 第355号住居跡出土遺物



第355号住居跡 (第9・33図)

A I-20グリッドを中心に位置する。第357号住居跡の大部分を掘り抜き、中央部を第111号掘立柱建物跡に切られる。第107号掘立柱建物跡、153号井戸跡との重複関係は不明である。平面は軸長4.70m×4.91m

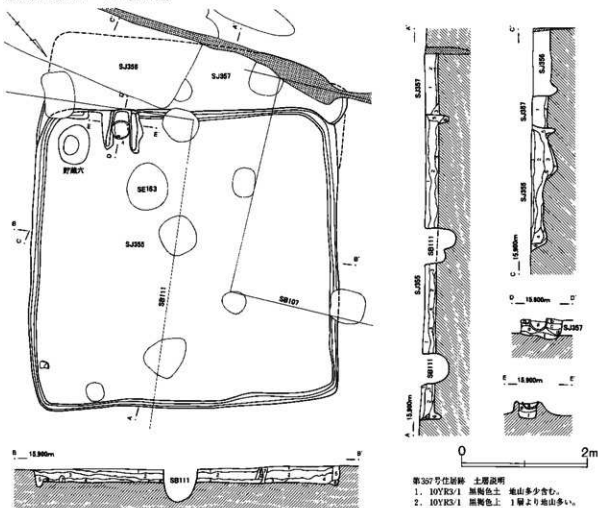
の方形で、面積は23.08㎡を測る。主軸方向はおおよそS-42°-Eを指す。

覆土は自然堆積を示し、深さは20~25cm程である。壁はほぼ垂直に立ち上がり床面は概ね平坦である。壁溝は幅10~20cm、深さ4~10cmできれいに全周する。

第9表 第355号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(128)	(42)		粗(W, C, R)	良	にぶい 橙	25	赤彩
2	坏	130	5.5		細(R)	良	橙	75	
3	壺		(26.2)	(7.4)	粗(W, B, C, 片)	普	にぶい 黄橙	破片	
4	壺		(23.8)	(7.8)	粗(W, B, C, R, 片)	普	橙	70	

第33図 第355・357号住居跡



第355号住居跡 土層説明

- 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土塊を含む。
- 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山・焼土大きく多く含む。
- 10YR3/1 黒褐色土 1層より更に地山大きく多い。焼土少ない。
- 10YR2/1 黒色土 焼土・炭化物多く含む。
- 10YR3/1 黒褐色土 2層よりやや炭化物多く含む。
- 10YR2/1 黒色土 4層より炭化物・焼土多い。
- 10YR3/6 黄褐色土 地山質土体ブロック。

第357号住居跡 キマド土層説明 (土色参照表)

- 黒褐色土 地山少量含む。設置された壁の中に流入した覆土。
- 黒褐色土 地山少量・焼土塊を含む。周辺からの流入土。
- 黒褐色土 2層より地山やや多く・焼土かなり多い。流入土。
- 黒褐色土 2層より地山・焼土大粒が多い。キマド土層・壁の崩壊流入。
- 黒褐色土 2層より地山少なく、焼土大粒で更に多い。流入土。
- 黒褐色土 2層と同じ。炭化物や含む。壁溝からの流入土。

カマドは南西壁のかなり南寄りに位置する。燃焼部は約70cm×36cmの長方形を呈し、火床面は床面よりわずかに低い。

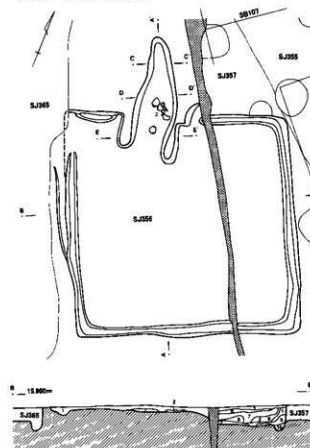
貯蔵穴はカマドの左脇、住居跡の南隅部に備わる。上面は径62cm×48cmの楕円形で、深さは約43cmを測る。柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド中より、土師器の壺や坏が出土している。

第356号住居跡（第9・34図）

A1-20グリッドを中心に位置する。北東隅部で第357号住居跡を掘り抜く。中央部には地震による亀裂が南北に走っており、床面は軟化したうえ、20cm前後の段差を生じている。平面は軸長3.50m×3.75mの方形で、面積は13.13㎡を測る。主軸方向はN-23°-W

第34図 第356号住居跡



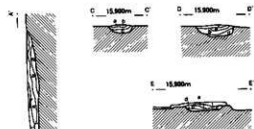
を指す。

床までの深さは亀裂の西側で約10cm、東側で30cm程度である。覆土は自然堆積と考えられるが、地震の影響からか、いくぶん乱れていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ただし、西壁は地震で崩壊したようで、地山との境界が不明瞭であった。壁厚はほぼ全周し、幅15～20cm、深さ6～10cmを測る。

カマドは北西壁の西寄りに位置する。燃焼部と煙道の区別がわずかわらなく、火床面から緩やかに立ち上がっていく。全体は溝状を呈し、長さ約190cm×幅69cmを測る。火床面は床から1cm程低い。

柱穴と貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマドの覆土より、土師器の坏と壺が出土している。



第356号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒少量、地層は粗土。地山土・粒多く含む。
2. 10YR5/4 濃い黄褐色土 地山土・粒多く含む。黄褐色土。
3. 10YR5/3 濃い黄褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・ブロック含む。
5. 10YR4/4 褐色土 焼土・ブロック・焼土粒含む。
6. 10YR4/4 褐色土 地山粒含む。
7. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・地山粒若干含む。
8. 5YR4/3 濃い黄褐色土 多量の焼土粒・炭化物粒・地山粒含む。
9. 7.5YR3/1 黒褐色土 炭化物・炭化物粒・焼土粒含む。
10. 10YR5/3 濃い黄褐色土 地山粒・ブロック含む。

第356号住居跡 カマド土層説明

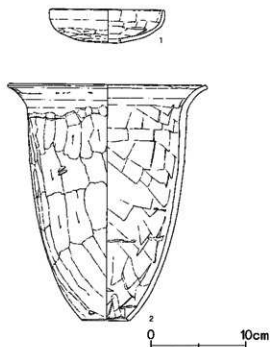
- a. 2.5YR5-6 明赤褐色土 焼土粒・ブロック多く、地山粒・ブロック少量。
- b. 2.5YR3-2 暗赤褐色土 焼土粒・地山粒含む。
- c. 7.5YR4-3 褐色土 地山粒・ブロックや多い。カマド底面貼り土。
- d. 10YR2-6 明黄褐色土 地山粒・ブロック・砂質土含む。天井張り土。



第10表 第356号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.1	3.6		細(W, B)	普通	にぶい黄橙	80	
2	瓶	(21.0)	(24.9)	(5.2)	粗(W, C)	普通	にぶい黄橙	40	

第35図 第356号住居跡出土遺物



第357号住居跡 (第9・33図)

A I - 20 グリッドを中心に位置する。大半を第355・356号住居跡に掘り抜かれるほか、南西壁に沿って地震による亀裂が走っている。このため、全体の規模や形状、施設等については明らかとしない。軸長を想定しうるのは一方向のみであり、それはおよそ4.80mとなる。北を指準とした時の軸方向は、およそN-30°-Wを指す。

床までの深さは25cm前後で、覆土は第355号住居跡構築時の埋め戻しと考えられる。壁の遺存はわずかで、壁溝は確認できなかった。床面はおお平坦である。

遺物は土師器の細片1点と、図示した須恵器の蓋破片のみで、ともに覆土中からの出土である。

第36図 第357号住居跡出土遺物



第11表 第357号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器	20.0	(2.8)		粗(W)	良	灰白	破片	

第358号住居跡 (第9・37図)

A F - 22 グリッドを中心に位置する。第101号掘立柱建物跡、第149号井戸跡と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は四辺がいくぶん膨らむ方形を呈し、軸長4.30m×4.40m、面積18.92㎡を測る。主軸方向はおおよそS-23°-Eを指す。

床までの深さは5~10cm、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは急で、床面は西から東へやや傾斜する。壁溝はおお全周し、幅は約15cm、深さは4cm程度である。

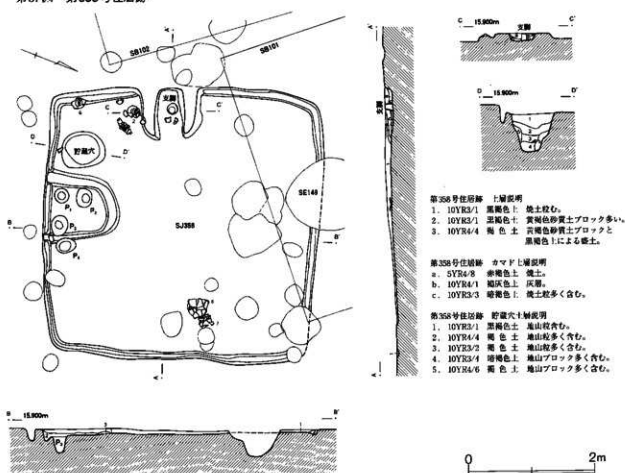
カマドは西壁中央部、わずかに南寄りにも備わる。燃焼部は約84cm×49cmの長方形で、火床面には灰層が形成されていた。床面からの深さは約3cmを測り、中央部には地山の黄褐色土を用いた、支脚が造り付けられていた。

貯蔵穴は南隅部に穿たれる。上面は径57cm×66cmの円形を呈し、深さ59cmを測る。

この他、入り口状の施設を南壁中央部で検出した。この施設は床面に地山土を貼り付け、U字状に突堤を巡らせたもので、ビット4本を伴う。突堤は外径120cm×103cm、幅10~23cm、高さ5~10cmで、内部は床面よりも柔らかい。また、ビットは3本が内部、1本が外部に穿たれている。直径は23~29cm、深さは10~30cmである。

遺物は東壁寄りの床面上より、土師器の甕と甔が、またカマドとその南側の覆土より、高坏や甕などが出土している。

第37図 第358号住居跡



第12表 第358号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	(5.1)		粗(W, B, R片)	良	明赤褐	40	
2	高坏	17.4	(6.9)		粗(W, B, R片)	普	明赤褐	脚部60	赤影
3	高坏		(2.8)		粗(W, B, R片)	普	橙	破片	赤影
4	高坏		(1.7)	(8.0)	細(W, B)	良	浅黄橙	破片	赤影
5	高坏		(6.3)	(10.9)	粗(W, 片)	良	にぶい橙	脚部60	赤影
6	甕	(17.0)	(8.0)		細(W, B)	良	黒褐	破片	
7	甕	(16.7)	(15.7)		粗(W, B, C, R)	良	にぶい黄褐	30	
8	瓶	(22.8)	26.0	8.5	粗(W, B, C)	良	にぶい黄橙	70	

第359号住居跡 (第9・39図)

A F-22グリッドに位置する。第106号溝跡、第100・101・102号掘立柱建物跡、419号土塊、148号井戸跡と重複するものの、壁溝での確認であったため、これらとの新旧関係は明らかとし得なかった。その壁溝も部分的な検出であり、軸長の判明するのは東西の3.90mに限られる。長軸方向はおよそN-18°-Wを

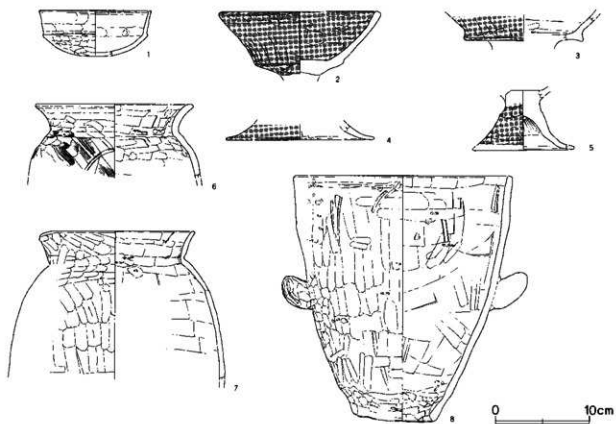
指す。

検出した壁溝は幅12~22cm、深さ4~6cmを測る。床面も表土掘削時に、削平してしまっただけと思われる。

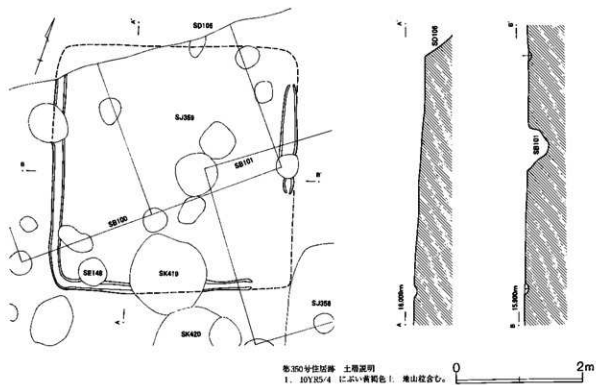
カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

壁溝中より土器器の破片を少量出土したが、いずれも微小であるため、図示することは叶わなかった。

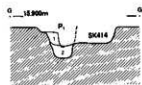
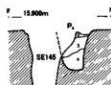
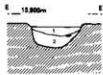
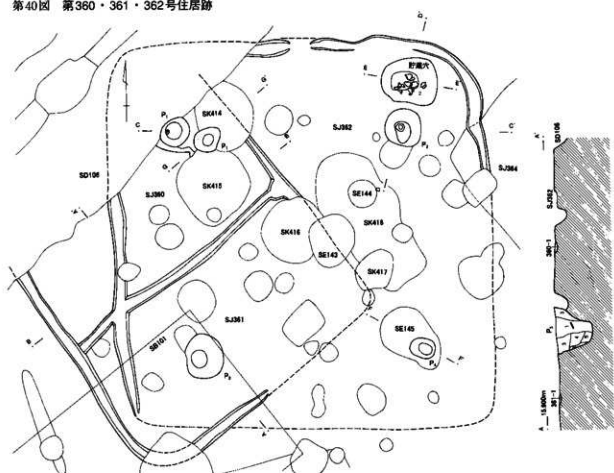
第38图 第358号住居跡出土遺物



第39图 第359号住居跡



第359号住居跡 土層説明
 1. 10V.85/4 に灰・黄褐色土。堆土粒含む。



第360号住居跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒含む。

第360号住居跡 柱穴上層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・粘土粒含む。
2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒・粘土粒含む。

第361号住居跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒含む。

第362号住居跡 土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒豊富・地山粒含む。

第362号住居跡 野焼穴上層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒多く含む。
2. 10YR3/1 深黄褐色土 炭化物・粘土粒含む。

第362号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒多く含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒多く含む。
5. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。
6. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山土や多く含む。

第360・361号住居跡 (第9・40図)

A F-20グリッドを中心に位置する。第361号住居跡は、第360号住居跡の拡張とも考えられるが、両住居跡ともに壁溝での検出であったため、その関係は明らかとし得ない。また、第414号土壌に切られることは確認できたものの、第362号住居跡、第101号掘立柱建物跡、第106号溝跡、第415・416・417号土壌、第143号井戸跡との重複関係は不明である。軸長を測れるのは第360号住居跡の一方のみであり、それはおよそ4.42mとなる。平面は第360号住居跡が方形、第361号住居跡が長方形を呈するのではなからうか。長軸方向は、ともにN-36°-Wをほぼ指す。

検出された両住居跡の壁溝は、幅約18cm、深さ約4cmである。床面は削平してしまったものと思われる。

柱穴は1本検出された。径40cm、深さ40cmで、第360号住居跡の主柱穴と考えられる。

いずれの住居跡とも、カマド・貯蔵穴、および遺物の検出はなかった。

第362号住居跡 (第9・40図)

A F-22グリッドを中心に位置する。第364号住居跡、第145号井戸跡に切られるが、壁溝での部分的な確認であるため、第360・361号住居跡、第101号掘立柱建物跡、第106号溝跡、第415・416・417号土壌、第143号井戸跡との重複関係は明確とし得なかった。柱穴の位置から見て、全体は方形を呈するものと思われる。また、想定される軸長は、およそ6.18m×6.16mで、面積は38.07㎡となる。長軸方向はほぼN-Sを指す。

壁溝は検出範囲で幅12~25cm、深さ約7cmを測る。

カマドは北壁の中央部、壁溝の途切れる部分に位置

第13表 第362号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.1)	(4.8)		細 (W,B,R)	青	にぶい 橙	20	
2	瓶	(18.4)	33.4		粗 (W)	青	にぶい 橙	40	

第363号住居跡 (第9・42図)

A F-23グリッドを中心に位置する。東側は調査区外となるため、全体の規模は不明である。西壁から中央部を第364号住居跡、第146・147・152号井戸跡に大

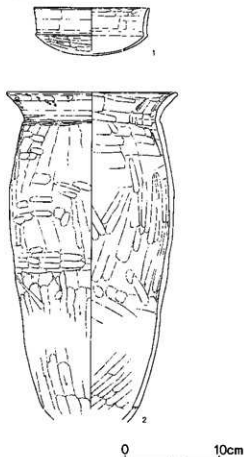
するかも思われるが、燃焼部などはまったく検出できなかった。

柱穴は主柱穴4本が検出されている。径36~66cm、深さ42~59cmである。うち、2本では柱痕が観察された。

貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径70cm×90cmの方形を呈し、深さは38cmを測る。

遺物は貯蔵穴の覆土中より、土師器の甕が出土している。

第41図 第362号住居跡出土遺物



きく切られる。軸長を測れるのは南北の一方のみで、およそ6.85mである。平面は隅丸方形のようである。長軸方向はおよそN-19°-Wを指す。

壁溝での検出であったため、覆土や床面は観察でき

なかった。壁溝は検出範囲で全周し、幅約20cm、深さ7~12cmを測る。

柱穴は1本検出された。径39cm、深さ35cmである。

貯蔵穴は北西隅部に備わる。上面は径53cm×70cmの長方形を呈し、深さは35cmを測る。

カマド、および遺物は検出されなかった。

第364号住居跡 (第9・42図)

A F-23グリッドに位置する。西隅部で第362号住居跡を、東半部で第363号住居跡をそれぞれ切る。逆に、北東壁を第147号井戸跡、南東壁を第146号井戸跡

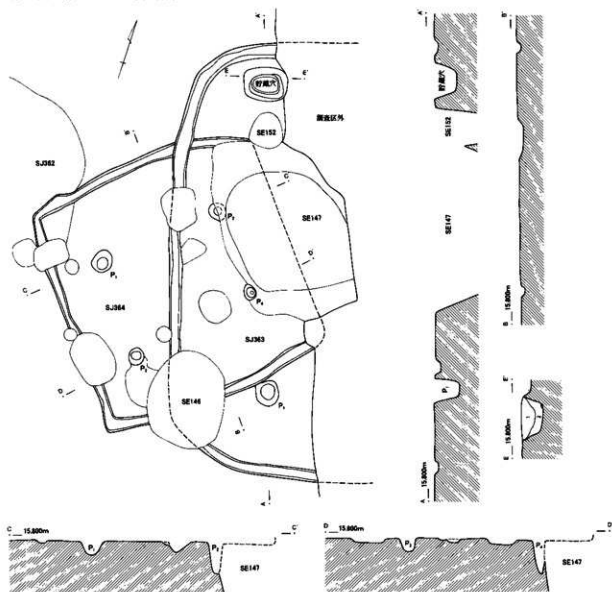
第42図 第363・364号住居跡

にそれぞれ切断される。柱穴の位置から想定できる軸長は、およそ4.03m×3.83mで、面積は15.43㎡となる。全体は方形を呈し、長軸方向はおよそN-39°-Wを指す。

やはり、壁溝での検出であったため、覆土や床面は観察できなかった。壁溝は検出範囲で全周し、幅約18cm、深さ約10cmを測る。

柱穴は主柱穴4本が検出された。径23~32cm、深さ19~52cmである。

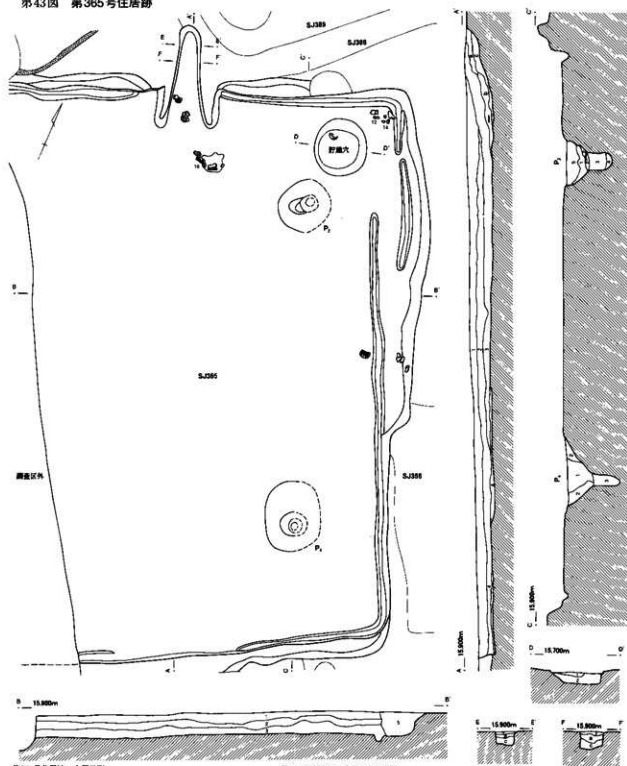
カマド・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。



第363号住居跡 貯蔵穴1層説明
 1. 10YR3/1 黒褐色: 焼土が多く含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色: 地山ブロックが多く含む。

0 2m

第43図 第365号住居跡



第365号住居跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山少ない。
3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山多く含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山多く含む。
5. 10YR3/1 暗褐色土 1層に地山ブロック多く含む。他に腐落土。

第365号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/3 黒褐色土 地山少量、焼土多く含む。天井の敷居土。
- b. 10YR2/3 黒褐色土 a層より地山・焼土多く含む。a層の二次堆積。
- c. 10YR2/3 黒褐色土 a層より地山多く、炭水化物含む。
使用面下の灰層含む評定からの流入。

第365号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。

第365号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR6/8 明黄褐色土 地山主体。黒褐色土・焼土少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山多・焼土多少含む。
3. 10YR6/8 明黄褐色土 地山主体。
4. 10YR6/2 灰黄褐色土 3層よりやや明るく粘土質。
5. 10YR3/1 黒褐色土 2層より地山粒径多く含む。

第365号住居跡 (第9・43図)

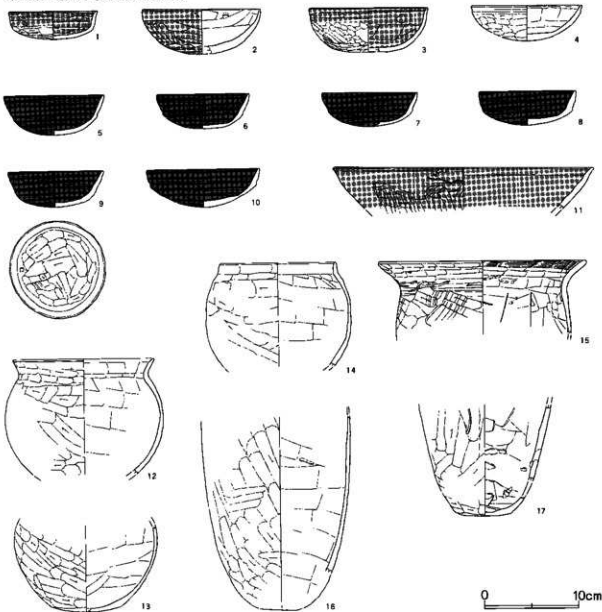
A I - 20グリッドを中心に位置し、東壁の一部は第369号住居跡を切る。西側は調査区外となり、全体の規模は明らかとし得ないが、南北の軸長約9.00mを測る大型の住居跡である。平面は主柱穴の位置からして、ほぼ方形を呈すものと考えられる。主軸方向はおよそN-23°-Wを指す。

床までの深さは25~40cm程で、覆土はきれいな自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、東壁の北端は地震の影響で大きく崩壊していた。この部分

では覆土も乱れ、壁との境界も不明瞭であった。床面はほぼ平坦ながら、やはり地震のために軟化し、砂質となっていた。壁溝は検出範囲ではほぼ全周し、幅10~20cm、深さ約9cmを測る。

カマドは北壁に設けられる。方形の住居跡と想定できれば、その位置はやや東寄りということになる。然焼部は煙道と明確な区分がつかず、緩やかに立ち上っていく。火床面も床面とはほぼ同一高で、特に赤焼した部分も観察できなかった。全体は167cm×43cmの溝状となり、確認面からの深さは約27cmを測る。

第44図 第365号住居跡出土遺物



検出された2本の柱穴は、位置的に見て主柱穴と思われる。径82~96cm、深さ74~85cmである。

貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径90cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。

遺物はカマド中、およびその前面より土師器の甕、貯蔵穴より坏などが出土している。いずれも床面からは、わずかに浮いた状態であった。

第14表 第365号住居跡出土遺物観察表

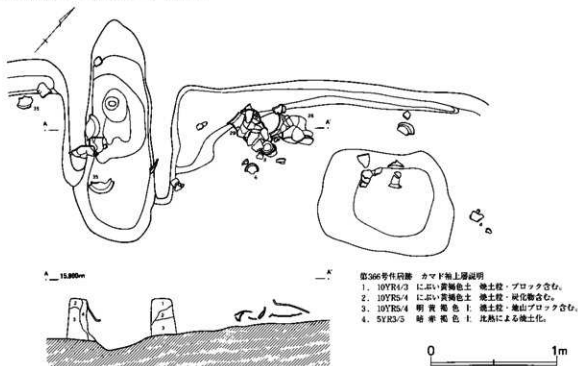
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	9.5	3.1		細(W, R, C, R)	良	にぶい 橙	100	比金型 赤彩
2	坏	(12.8)	(4.7)		粗(W, B, C)	普	にぶい 黄橙	50	赤彩
3	坏	13.0	(5.1)		細(C, F)	良	にぶい 褐	30	赤彩
4	坏	12.0	4.0		細(W, B)	普	橙	70	
5	坏	10.8	4.2		細(W, B, C, F)	良	にぶい 橙	90	内外黒色処理
6	坏	10.0	(3.8)		微(W, B)	良	灰 黄 褐	70	内外黒色処理
7	坏	10.3	(3.8)		微(W, B)	普	浅 黄 橙	55	内外黒色処理
8	坏	10.5	(3.6)		細(W, B)	良	灰 白	75	内外黒色処理
9	坏	10.3	3.8		微(W, B)	良	浅 黄 橙	100	内外黒色処理
10	坏	(12.2)	4.0		微(W, B)	良	灰 白	50	内外黒色処理
11	高 坏	(28.0)	(4.4)		粗(C)	良	明 赤 褐	破片	赤彩
12	甕	(15.0)	(12.3)		細(W, B, R)	普	にぶい 橙	破片	
13	甕		(9.2)	(7.5)	細(W, B, F)	普	にぶい 橙	破片	
14	甕	(12.4)	(11.1)		微(W, B, R)	普	にぶい 橙	破片	
15	甕	22.4	(7.8)		細(B)	普	にぶい 橙	口辺部 90	
16	甕		(20.3)		微(B)	普	橙	30	
17	甕		(11.8)	(5.7)	細(W, B)	良	にぶい 褐	破片	

第366号住居跡 (第9・45・46図)

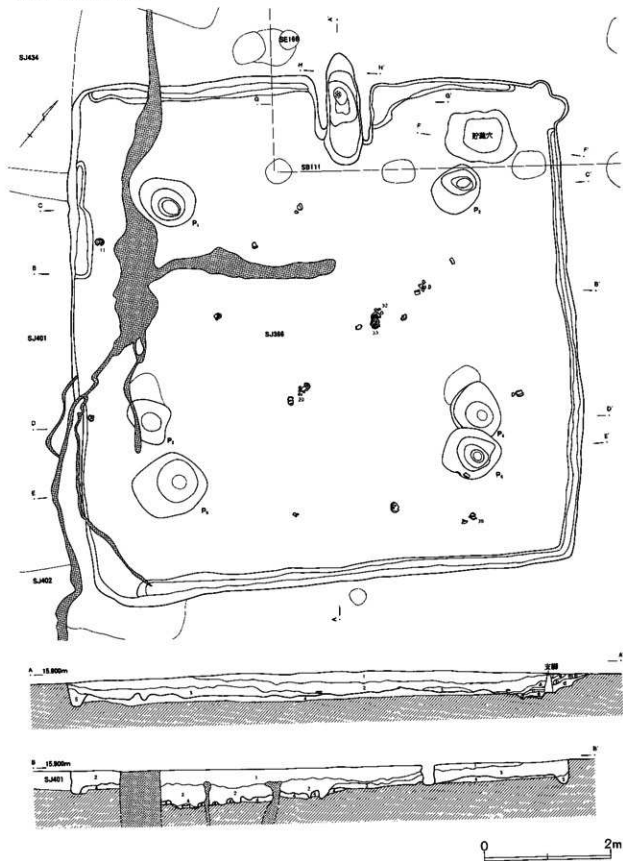
A J-21グリッドを中心に位置する。南西部で第401号住居跡を切るが、第402号住居跡、第111号掘立

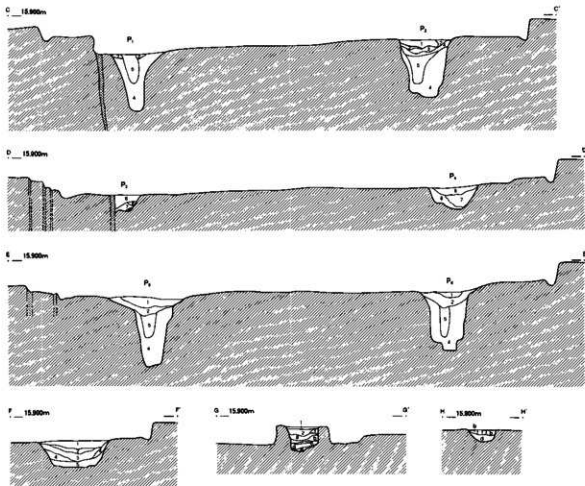
柱建物跡との重複関係は不明である。また、住居跡の西側には、地震の亀裂が走り、床面に段差を生じさせている。平面は軸長7.98m×8.10mの方形を呈し、面

第45図 第366号住居跡カマド・貯蔵穴



第46图 第366号住居跡





第366号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・炭化物粒・粘土ブロック・少量の焼山粒含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・焼土ブロックやや多く、焼山粒含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼山粒・ブロック多く含む。貼り床状。

第366号住居跡 柱穴土層説明

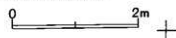
1. 10YR5/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒やや多く含む。
3. 10YR2/2 暗褐色土 炭化物・炭化物粒多く含む。焼土粒含む。
4. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・ブロック多く含む。
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼山土主体。焼土・炭化物粒含む。
6. 10YR3/3 暗褐色土 第1に近似。焼土粒・炭化物粒含む。
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼山粒含む。
8. 10YR6/4 にぶい黄褐色土 焼山粒・ブロック含む。

第366号住居跡 竪穴土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒深在。
2. 10YR3/2 暗褐色土 炭化物粒・灰・焼土粒含む。
3. 10YR4/2 褐色土 砂質焼山土混入。焼土粒若干含む。
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 第3層より砂質の焼山土主体。
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性のある焼山土に焼土粒含む。

第366号住居跡 カマド土層説明

- a. 5YR5/6 明赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック主体。
- b. 5YR4/6 赤褐色土 焼土粒主体。
- c. 5YR4/4 黒褐色土 炭化物・灰主体。
- d. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土粒多く含む。
- e. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 焼土粒主体。
- f. 5YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土粒やや多く含む。



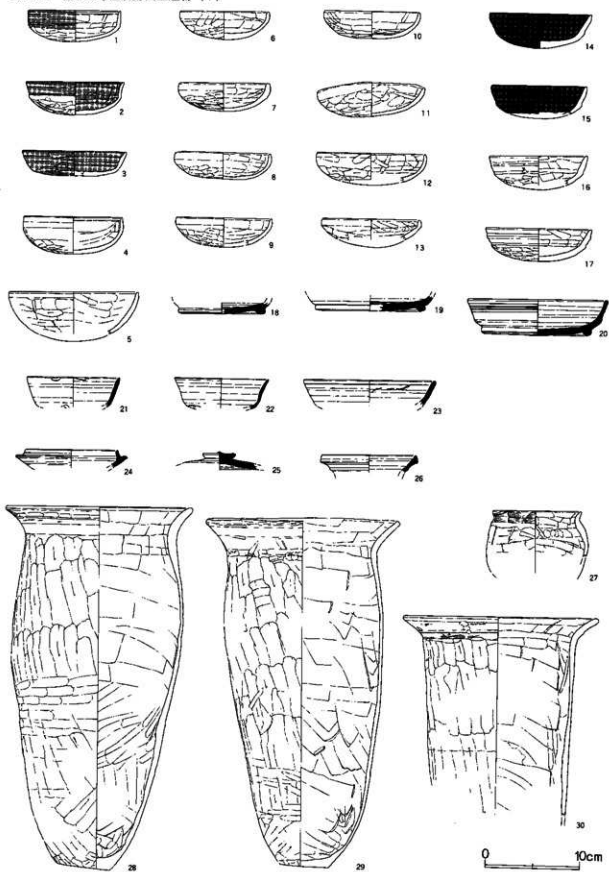
積は64.64㎡を測る。主軸方向はおよそN-39°-Wを指す。

覆土は自然堆積で、床までの深さは50cm程である。しかし、床は地震のため東から西へ傾斜し、亀裂を境に20cm程高まる。西半部の貼り床は軟化し、床面は乱れていた。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は南西壁以外ではほぼ全周する。その幅は15~30cm、深さは6~10cmである。床面には貼り床が施されている。

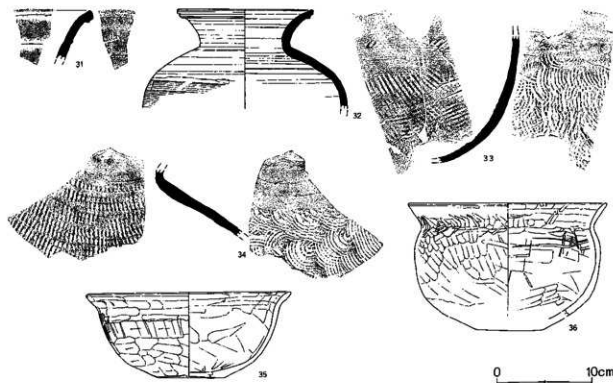
カマドは北西壁中央、やや北寄りに備わる。燃焼部は178cm×54cmの楕円形で、わずかに煙道が遺存していた。火床面は床より7cm程低く、貼り床は施されない。

柱穴は6本検出された。P₁・P₂・P₅・P₆の径は82~100cm、深さ89~108cm、P₃・P₄の径は60~82cm、深さ26~36cmである。P₃・P₄は柱痕が観察できず、住居拡張前(P₆はP₄を切り込んでいる。)の主柱穴と

第47図 第386号住居跡出土遺物(1)



第48図 第366号住居跡出土遺物(2)



も思われるが、埋め戻しや貼り床で覆ったような様子は観察できなかった。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径77cm×105cmの方形様を呈し、深さは41cmを測る。

遺物は床面より、土師器の坏・鉢・甕、手捏ね(第426図10・11・13)、白玉(第424図2～4)、鉄製の刀子

(第428図26)が、支柱穴のP6からは馬形と思しき滑石製の模造品(第425図13)が、それぞれ出土している。

また、覆土中位からは蓋・坏・高台付坏など、いずれも破片ではあるが、湖西産をはじめとする須恵器が多く検出されている。

第15表 第366号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.0	3.3		粗(W, R, F)	良	橙	95	比企型 赤彩
2	坏	10.5	3.5		粗(B, C, R)	良	明赤 褐	75	比企型 赤彩
3	坏	(11.0)	(2.1)		細(W, R, F)	良	にぶい 橙	25	内外赤彩
4	坏	(10.7)	4.0		粗(W, B, C, R)	良	にぶい 橙	35	比企型
5	坏	(13.8)	(4.5)		細(W, B)	普	灰 白	破片	
6	坏	(9.8)	3.1		微(W, B)	普	橙	80	
7	坏	(9.8)	2.9		粗(W, B, C)	普	にぶい 橙	75	
8	坏	10.2	2.8		細(W, B)	普	橙	95	
9	坏	(10.4)	(2.9)		粗(W, B)	普	にぶい 橙	25	
10	坏	(10.2)	2.9		細(W, B, F)	普	橙	50	
11	坏	10.4	3.6		微(W, B)	普	橙	100	
12	坏	(11.6)	(3.1)		細(W, B, C)	普	橙	30	
13	坏	(10.6)	(2.2)		粗(W, B, R)	普	橙	破片	
14	坏	11.0	3.2		微(W, B)	普	灰 白	100	内外黒色処理
15	坏	(10.4)	(3.0)		微(W, B)	普	灰 白	30	内外黒色処理
16	坏	(10.6)	(3.2)		細(W, B)	良	橙	30	
17	坏	11.4	3.5		微(W, B)	普	にぶい 橙	90	

第16表 第366号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
18	須恵器高台付坏	(9.4)	(1.2)		微(W)	普	灰	破片	秋間
19	須恵器高台付坏	(11.8)	(1.7)		微(W)	良	灰	破片	秋間
20	須恵器高台付坏	15.1	3.3	10.5	細(F)	良	灰	白	70 湖西 胎土分析 No 21
21	須恵器坏	(10.0)	(3.2)		微(W, F)	良	灰	白	破片 未野
22	須恵器坏	(10.2)	(3.2)		細(W)	良	灰	灰	破片 未野
23	須恵器高台付坏?	(13.8)	(2.8)		微(W, F)	良	灰	白	破片 秋間
24	須恵器坏	(9.8)	(1.9)		細(W)	良	灰	灰	破片 未野
25	須恵器盖		(2.0)		微(W)	良	灰	白	破片 湖西 自然軸(裏面)
26	須恵器壶	(10.0)	(1.9)		微(W)	良	灰	灰	破片 湖西
27	壶	(9.6)	(6.6)		粗(C, R)	良	赤	褐	40
28	甕	20.0	38.5	6.8	粗(W, B, R)	良	丹	橙	80
29	甕	20.3	37.0	5.2	粗(W, B, C, R)	良	にぶい	橙	90
30	甕	21.0	(20.8)		粗(W, R, F)	良	丹	橙	65
31	須恵器甕		(5.1)		粗(W)	良	灰	灰	破片 未野 蓋とセットか
32	須恵器甕	(14.6)	(10.5)		細(W, B, F)	良	灰	白	20 秋間? 33と同一個体
33	須恵器甕		(13.7)		細(W, B, F)	良	灰	白	破片 秋間? 32と同一個体
34	須恵器甕		(6.4)		細(W)	良	灰	灰	破片 未野
35	鉢	(22.1)	9.0	(7.0)	細(W, C, R)	良	丹	橙	55
36	鉢	(21.1)	(12.0)		粗(W, B, C, F, 片)	良	にぶい	橙	20

第367号住居跡(第9・49図)

AG-23グリッドを中心に位置する。ほぼ床面での検出であったため、住居跡内に掘り込まれた第151号井戸跡との新旧関係は明らかと心得なかった。平面は

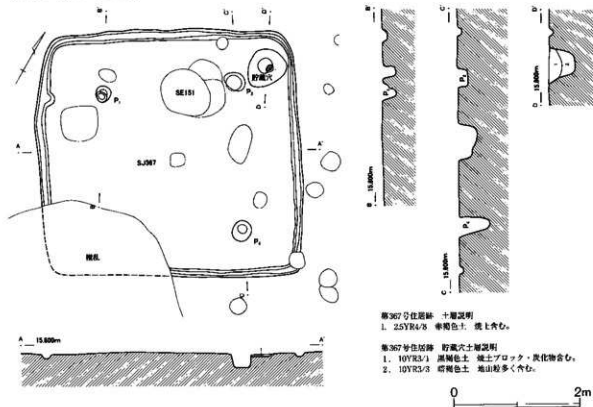
軸長3.94m×4.25mの方形で、面積は約16.75㎡である。

長軸方向はおよそN-59°-Eを指す。

壁溝はほぼ全周し、幅約15cm、深さ約7cmを測る。

床面はほぼ平坦である。

第49図 第367号住居跡



柱穴は3本検出された。位置的に見て、ともに主柱穴であると思われる。径24~31cm、深さ16~49cmである。

カマドは確認できなかったものの、東壁中央部にわずかに観察された覆土は焼土を含んでいた。さらにここは周用の床よりもやや窪んでいたことから、燃焼部の存在が考慮される。

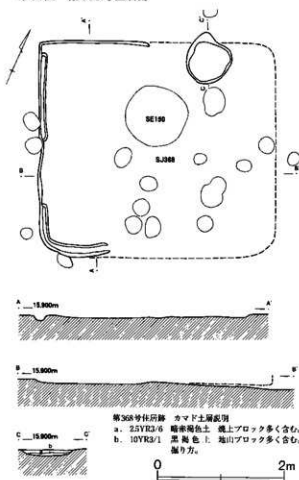
貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径62cm×55cmの円形様を呈し、深さは42cmを測る。

遺物は土師器の柄が1点、貯蔵穴の中位より出土している。

第17表 第367号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	柄	11.1	5.8		粗 (C, R)	良	橙	95	赤彩

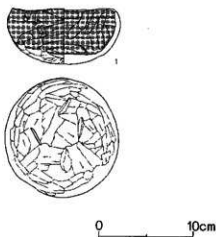
第51図 第368号住居跡



第368号住居跡 (第9・51図)

AG-22グリッドを中心に位置する。ほとんど床面

第50図 第367号住居跡出土遺物



での検出であったため、第150号井戸跡との重複関係は明らかでない。平面は方形を呈するものと思われるが、軸長は南北が3.43mと測れるのみで、全体の規模は不明である。長軸方向はおよそN-25°-Wを指す。

東側は削平してしまっていたが、床面はほぼ平坦である。壁溝は幅8~18cm、深さ約8cmを測る。

カマドは北壁中央より北東寄りに位置するものと思われる。残存する燃焼部は、83cm×74cmの不整な円形で、確認面からの深さ18cmを測る。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

図示し得る遺物の出土はなかった。

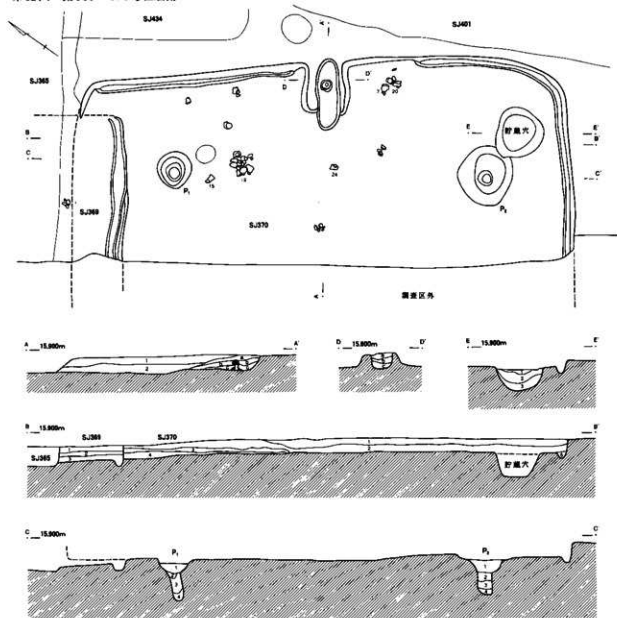
第369号住居跡 (第9・52図)

AJ-20グリッドに位置する。第370号住居跡を切って構築されているが、大半を第365号住居跡に掘り抜かれる他、南西部は調査区外となっている。このため、南東壁の一部を検出したに過ぎず、全体の規模や形状、施設等についてはまったく不明である。

床までの深さは20cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。検出した壁溝は幅15~25cm、深さ約10cmを測る。

遺物は床よりやや浮いた状態で、須恵器の提振片、土師器片が出土している。

第52図 第369・370号住居跡



第369号住居跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR2/1 黒褐色土 1層より地山少量混入。
3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山少量混入。

第370号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山・焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 1層より地山多い。
3. 10YR3/2 黒褐色土 1層に焼土・炭化物少量混入したもの。
4. 10YR3/2 黒褐色土 3層に地山ブロックが混入したもの。
5. 10YR3/2 黒褐色土 1層に地山ブロック少量混入したもの。

第370号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/2 黒褐色土 地山少量・焼土多く含む。
- b. 10YR2/2 黒褐色土 a層より焼土多い。
- c. 10YR3/1 黒褐色土 灰と炭化物の混入。

第370号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土多く、炭化物少量含む。
2. 25YR5/6 黄褐色土 地山土俵、焼土微量含む。
3. 25YR5/6 黄褐色土 2層より地山多い。
4. 25YR5/6 黄褐色土 2層よりやや暗色。

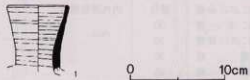
第370号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。

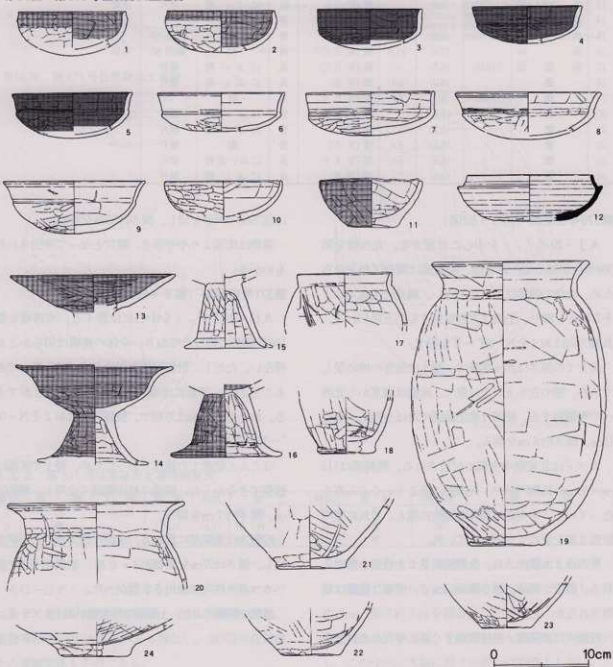
第18表 第369号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器提瓶	(6.6)	(7.1)		瀬	良	灰白	破片	

第53図 第369号住居跡出土遺物



第54図 第370号住居跡出土遺物



第19表 第370号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.6)	(3.9)		粗(W, R)	良	にぶい赤褐	破片	赤彩
2	坏	11.5	(4.3)		細(W, B, C)	良	明赤褐	70	赤彩
3	坏	(12.8)	(4.1)		細(W, B)	良	灰褐	20	内外黒色処理
4	坏	(11.8)	(3.9)		細(W, B, F)	普	褐灰	破片	内外黒色処理
5	坏	(11.2)	(3.7)		微(W, B)	良	にぶい赤褐	破片	内外黒色処理
6	坏	(14.0)	(4.1)		微(W, B)	良	にぶい橙	30	
7	坏	13.8	(4.8)		微(W, B)	普	にぶい黄橙	70	
8	坏	(15.6)	(4.3)		細(W, B, C, R)	普	赤橙	20	
9	坏	(15.0)	(5.6)		粗(W, R, F)	良	明褐	65	
10	坏	(12.6)	(4.2)		細(W, B)	普	にぶい橙	50	
11	碗	11.1	4.9	5.1	粗(W)	良	にぶい橙	95	外面赤彩
12	須恵器 坏	(13.2)	(4.9)		粗(W)	良	褐灰	25	
13	高 坏	(17.8)	(3.9)		粗(F)	良	にぶい橙	破片	赤彩
14	高 坏	16.9			微(W, C, R, F)	普	橙	75	赤彩
15	高 坏		(7.9)		微(W, B)	普	橙	脚部70	
16	高 坏		(7.8)	11.9	細(W, B, C)	良	橙	脚部80	赤彩
17	短 頸 壺	(10.0)	(5.7)		粗(W, B, C)	良	にぶい橙	破片	
18	甕		(6.0)	(5.8)	細(W, B)	良	にぶい橙	破片	
19	甕	(17.0)	30.1	8.2	粗(W, B, 片)	良	橙	75	
20	甕	(19.0)	(8.6)		粗(W, F, 片)	普	にぶい橙	破片	
21	甕		(6.7)	(7.7)	細(W)	普	にぶい橙	破片	
22	甕		(5.1)	6.4	微(W, 片)	普	橙	破片	
23	甕		(4.8)	(5.4)	粗(W, R, F)	良	にぶい黄橙	破片	
24	壺		(3.9)	7.7	細(W, B)	良	にぶい橙	破片	

第370号住居跡 (第9・52図)

A J-20グリッドを中心に位置する。北西壁を第369号住居跡に切られる他、南西部は調査区外となるため、全体の規模は明らかでない。軸長は南北でおよそ7.85mを測り、平面は方形を呈すものと思われる。長軸方向はおよそN-58°-Eを指す。

床までの深さは20cm前後で、覆土は故意の埋め戻しである。壁の立ち上がりは急で、床面は南東から北西へやや傾斜する。壁溝は検出範囲ではほぼ全周し、幅約18cm、深さ約8cmを測る。

カマドは北東壁中央部に付設される。燃焼部は113cm×38cmの長楕円形で、火床面は床よりいくぶん高くなっている。中央には高杯を逆位に据え、これに甕の底部2個を重ねて支脚としている。

柱穴は2本検出され、位置的に見て主柱穴と考えられる。径57~86cm、深さ58~63cmで、明確な柱痕は観察されなかった。

貯蔵穴は東隅部、主柱穴のすぐ脇に穿たれる。上面

は径75cmの円形を呈し、深さは33cmを測る。

遺物は床面よりやや浮き、破片となって検出されたものが多い。

第371号住居跡 (第9・55図)

A G-21グリッドを中心に位置する。南西壁を第106号溝跡に切られており、全体の規模は明らかとしない。ただし、計測可能な軸の長さが約2.75mであることから、非常に小型の住居跡と言いうことができる。おそらく平面は方形で、長軸方向はおよそN-50°-Eとなる。

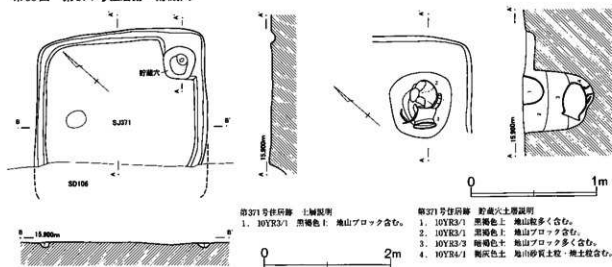
ほとんど壁溝での確認であったため、覆土や床面は観察できなかった。壁溝は検出範囲で全周し、幅約19cm、深さ約7cmを測る。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径50cmの円形状を呈し、深さは57cmを測る。

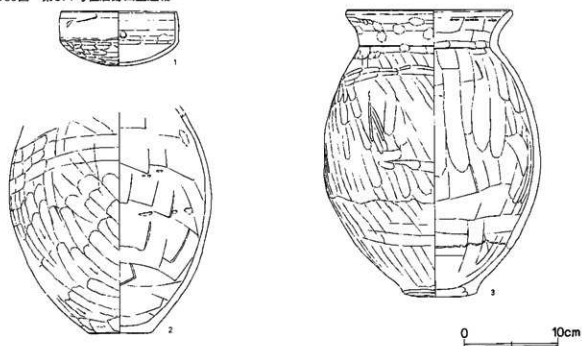
カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴より、土器の坏や甕が出土している。

第55図 第371号住居跡・貯蔵穴



第56図 第371号住居跡出土遺物



第20表 第371号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(12.5)	5.8		粗 (W, B, R)	善	橙	55	
2	甕		(23.3)	(6.8)	粗 (W, C)	良	橙	50	
3	甕	18.0	30.2	7.6	細 (W, B)	良	橙	85	

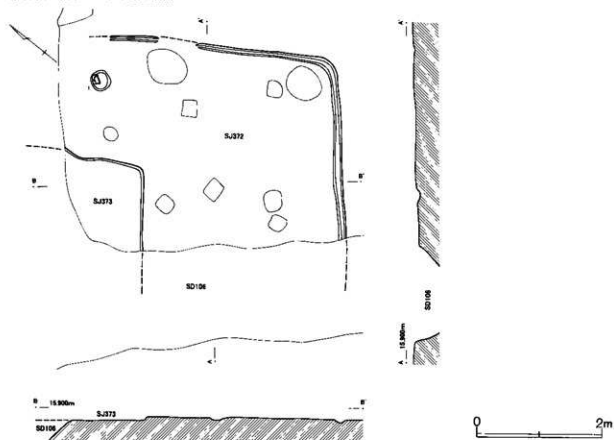
第372号住居跡 (第9・57図)

AG-21グリッドに位置する。北西から南西にかけて大きく第106号溝跡に切られ、全体の規模や形状、施設等については明らかとしない。第373号住居跡との重複関係も不明である。

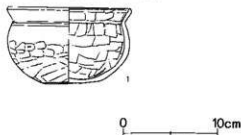
壁溝の遺存による確認であったため覆土と床はまったく観察できなかった。壁溝は検出範囲で全局し、幅約10cm、深さ約3cmを測る。

遺物は小穴中より、土師器の碗を出土している。但し、この小穴が本跡に伴うか否かは判然としない。

第57図 第372・373号住居跡



第58図 第372号住居跡出土遺物



第373号住居跡 (第9・57図)

AG-21グリッドに位置する。その大部分を第106号溝跡に切られ、東隅のごく一部を確認したにすぎない。故に、全体の規模や形状、施設等については一切不明である。第372号住居跡よりもいくぶん深く構築されるが、新旧関係は明らかとし得なかった。遺物はまったく出土していない。

第21表 第372号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
1	碗	(13.3)	8.3	6.0	黄 (W, B)	良	にぶい橙	75	

第374号住居跡 (第9・59図)

AH-23グリッドを中心に位置する。西半部は攪乱坑により、大きく破壊されている。平面は軸長2.95m×3.24mの方形で、面積は約9.56㎡を測る。長軸方向はおおよそN-28°-Wを指す。

覆土は自然堆積で、床までの深さは5~10cm程度である。

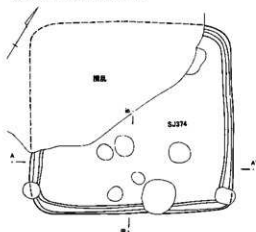
壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は中央部がわずかに高まる。壁溝は検出範囲で全周し、幅15cm、深さ5cm前後である。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。遺物は覆土中より、土師器の坏や甕が少量出土している。いずれも小片であるため、図示できたものは甕1点のみである。

第22表 第374号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(22.0)	(6.5)		麻(W, B, C, R)	昏	明赤褐	45	

第59回 第374号住居跡



第374号住居跡 土層説明
 1. 10YR3/2 黄褐色土 地山ブロック・焼土を含む。
 2. 10YR3/4 暗褐色土 地山较多を含む。



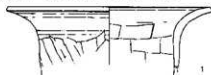
第375号住居跡 (第9・62回)

AG-24グリッドを中心に位置する。北東の壁溝と貯蔵穴、および主柱穴が検出できたにとどまる。壁溝と柱穴の位置から想定し得る軸長は、およそ4.36m×4.63mで、面積は約20.19㎡となる。全体は方形を呈すものと思われるが東隅は丸みが強い。長軸方向はおよそN-50°-Wを指す。

壁溝は幅約13cm、深さ3~7cmを測る。

床部分には多くのピットが検出された。しかし、確實に伴うものは4本の主柱穴のみであり他はいずれも小型で浅い。主柱穴は径39~49cm、深さ13~66cmである。柱痕は観察されなかった。

第60回 第374号住居跡出土遺物



貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径90cm×60cmの不整形で、深さは30cmを測る。

カマド、遺物は検出されなかった。

第376号住居跡 (第9・63回)

AG-19グリッドを中心に位置する。南西壁で第282号住居跡を切るが、第297号住居跡との重複関係は確認できなかった。北西側は第101号溝跡に大きく掘り抜かれているため、全体の規模は明らかとしない。軸長はおよそ4.10mで、平面は方形を呈すものと思われる。長軸方向はおよそN-34°-Wを指す。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積を示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は中央部がやや高まる。壁溝は検出範囲で全周し、幅13~25cm、深さ8~13cmを測る。

柱穴は径45cm、深さ18cmのものが1本検出された。位置的・規模的に見て、主柱穴とは断定しかねる。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土器器の坏や甕が少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示し得たのは1点のみである。

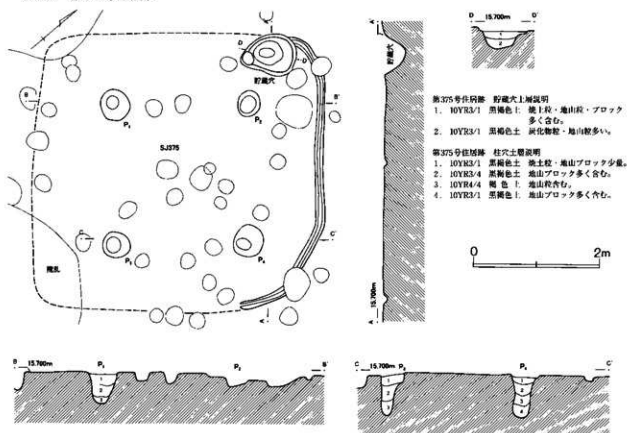
第61回 第376号住居跡出土遺物



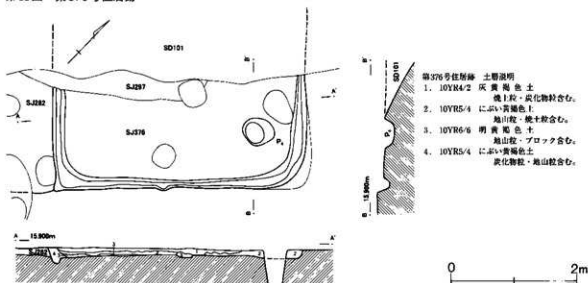
第23表 第376号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	(4.0)		絹(W, B, 片)	良	にぶい 橙	25	赤彩

第62図 第375号住居跡



第63図 第376号住居跡



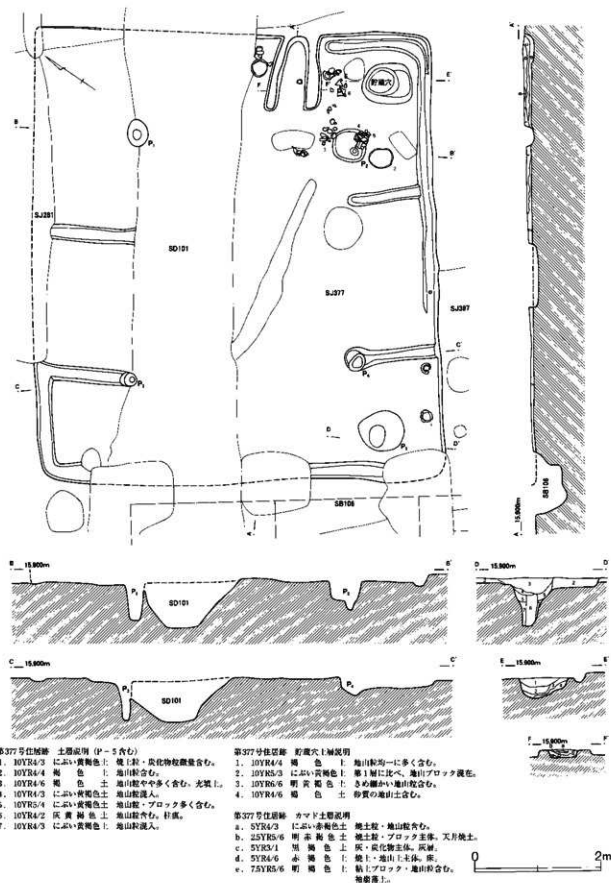
第377号住居跡 (第9・64図)

AG-19グリッドを中心に位置する。西隅部を第284号住居跡として調査したが、その後、同一の住居跡であることが判明した。『築道下遺跡Ⅱ』の一部(P238~241、P514の遺構図と本文)では第284号住居跡の

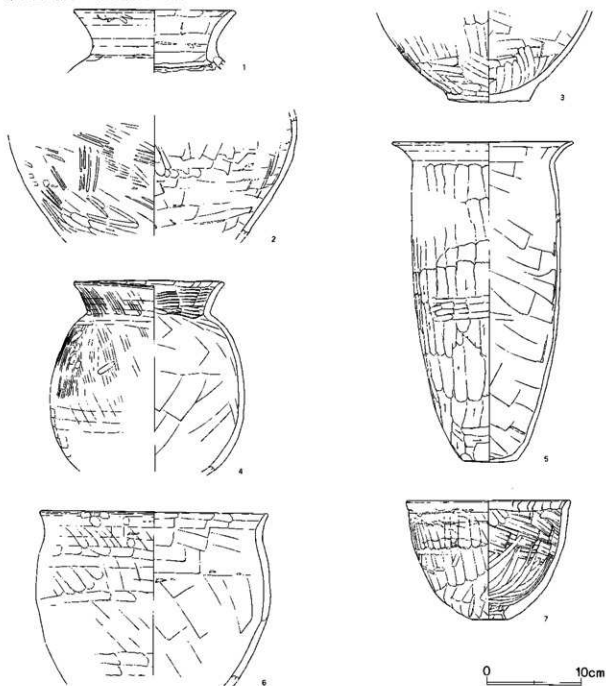
ままになっているが、これを第377号住居跡に改め、前番号は欠番として頂きたい。また、第280号住居跡についても、欠番とされたい。

南隅部は第379号住居跡を切り、北西壁を第281号住居跡、南西壁を第106号掘立建物跡、それぞれに切

第64図 第377号住居跡



第65図 第377号住居跡出土遺物



第24表 第377号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(17.5)	6.8		微 (W, B)	良	にぶい橙	破片	
2	壺		(12.7)		粗 (W, B, R 片)	良	にぶい黄橙	破片	
3	壺		(7.9)	8.1	難 (W, B 片)	良	にぶい橙	破片	
4	甕	162	(20.0)		粗 (W, B, C, R)	普	にぶい黄橙	60	
5	甕	(19.5)	(33.9)	5.9	粗 (W, B, C, R)	普	橙	60	
6	瓶	(24.5)	(17.8)		細 (W, B, R, F)	良	にぶい黄橙	40	
7	瓶	17.1	12.6	4.7	細 (W, B, R)	良	にぶい橙	70	

られる。さらに、中央部を第101号溝跡が縦断し、住居跡を大きく二つに分断している。平面は軸長7.04m×6.55mの方形を呈し、面積は46.11㎡を測る。主軸方向はおおよそN-60°-Eを指す。

床までの深さは5~15cmで、覆土は自然堆積を示していた。

壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ平坦である。壁溝は幅約25cm、深さ約6cmを測る。北西および南東の壁からは、間仕切り状の浅い溝が平行して掘られている。

カマドは北東壁の東寄りに備わる。燃焼部は123cm×47cmの楕円形で、火床面は床面とはほぼ同一高である。柱穴は主柱穴4本検出された。径25~51cm、深さ30

~60cmである。この他、南隅にも柱穴が1本検出されたが、本跡を掘り込むものようである。

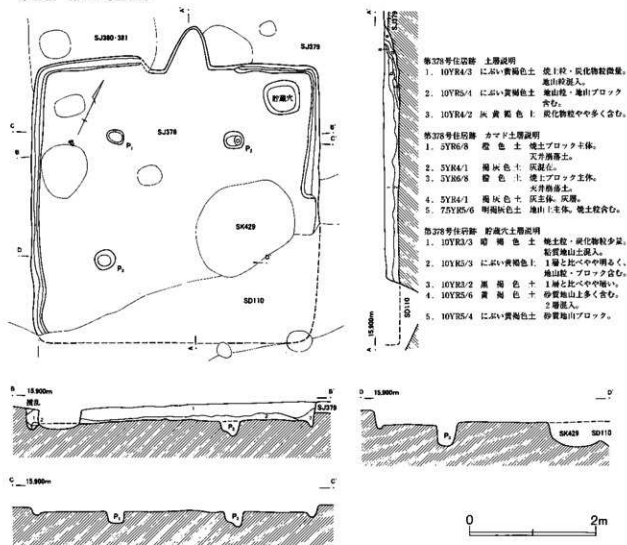
貯蔵穴は東隅部に穿たれる。上面は径63cm×81cmの隅丸方形で、深さは31cmを測る。

遺物は東隅部の床面上を中心に、土師器の壺・甕・瓶・ミニチュアの櫃(第426図3)などが出土している。

第378号住居跡 (第9・66図)

AH-19グリッドを中心に位置する。北半部は第379号住居跡を掘り抜き、南東部は第110号溝跡に切断される。第380号住居跡、第429号土壇との重複関係は明らかにできなかった。柱穴の位置から想定できる軸長は、おおよそ4.50m×4.60mで、面積は約20.70㎡となる。全体は方形を呈し、主軸方向はおおよそN-30°-

第66図 第378号住居跡



Wを指す。

床までの深さは20~25cmで、覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は検出範囲で全周し、幅約18cm、深さ12~14cmを測る。

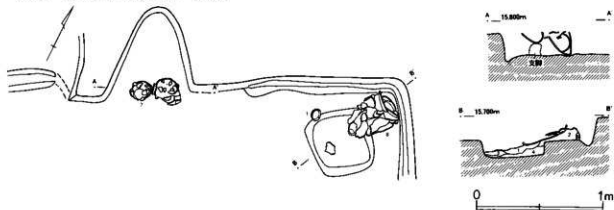
カマドは北西壁のほぼ中央に設けられる。火床面は床面よりわずかに窪み、中央に地山の黄褐色土で支脚が造り付けられる。袖は両側ともに検出できなかった。

3本検出された柱穴は、位置的に見て主柱穴と思われる。東部に予想されるP4は、第429号土壇と重複するため検出できなかった。3本は径23~32cm、深さ23~32cmである。

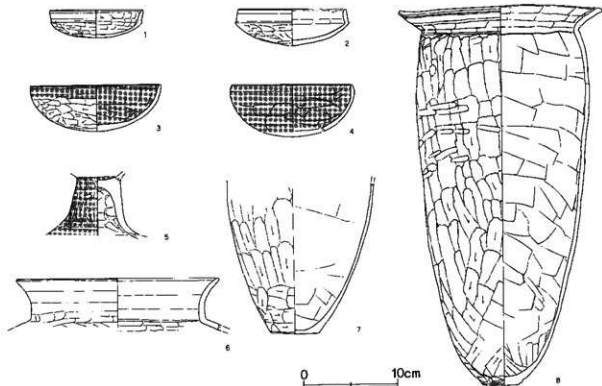
貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径53cm×58cmの隅丸方形を呈し、深さは13cmを測る。

遺物はカマドや貯蔵穴周辺より、土師器の坏や甕、鉄製の鎌(第427図1)が出土している。

第67図 第378号住居跡カマド・貯蔵穴



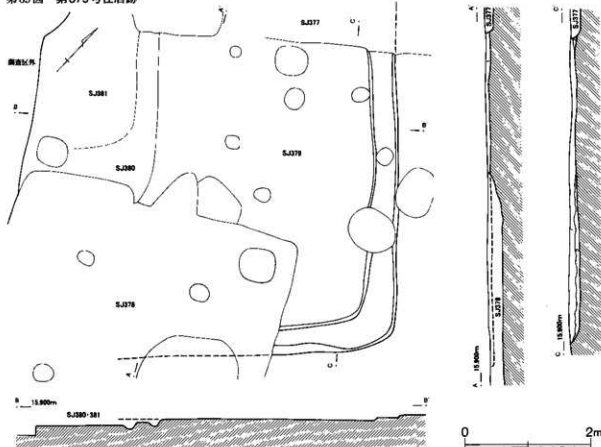
第68図 第378号住居跡出土遺物



第25表 第378号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.1	3.0		粗 (W, B, C)	良	赤 橙	100	
2	坏	(12.2)	(4.8)		細 (W, B)	普	橙	30	
3	坏	14.0	5.0		粗 (W, B, C, F)	良	にぶい 橙	90	赤彩
4	坏	(13.0)	5.0		細 (W, B)	普	にぶい 橙	破片	赤彩
5	高 坏	(6.1)	(6.1)		細 (W, B, C, R, 片)	良	橙	脚部 50	
6	変 壺	(21.8)	(5.8)		粗 (W, B, C, R)	普	にぶい 橙	破片	
7	壺	(15.9)	(15.9)		細 (W)	良	にぶい 橙	30	
8	壺	22.0	40.3	5.2 (4.0)	粗 (W, C, R)	普	橙	80	

第69図 第379号住居跡



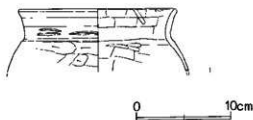
第379号住居跡 土層説明

1. 10YR8/3 にぶい赤褐色土 焼土粒・堆山粒混雑含む。
2. 10YR8/4 製 色 土 堆山粒・ブロック含む。

第379号住居跡（第9・69図）

AH-19グリッドに位置する。北側を第377号住居跡、南側を第378号住居跡に切られる。また、西側も第380・381号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。このように、他遺構との重複が広範であるため、規模や形状については明確とし得なかった。

第70図 第379号住居跡出土遺物



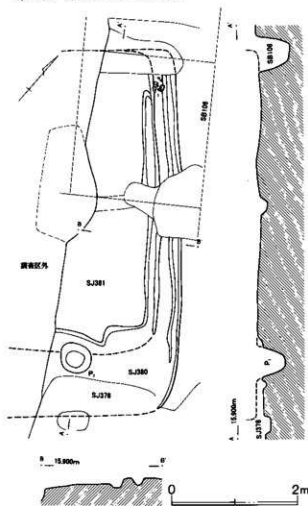
第26表 第379号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(17.0)	(6.7)		細 (W, B)	普	橙	破片	

床までの深さは7~18cm程で、壁下に幅39~57cmの低い段が巡る。2軒の重複かとも思われたが、土層断面にそのような様子は観察できなかった。覆土はほとんど地山質であることから、故意の埋め戻しと考えられる。

壁溝・カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

第71図 第380・381号住居跡



第27表 第381号住居跡出土遺物観察表

番号	部 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成 色 調	残存率	備 考
1	壺	(152)	(129)		細 (W, B)	昏 におい橙	20	

第382号住居跡 (第9・74図)

AG-20グリッドを中心に位置する。南東壁で第386号住居跡を切り、南東部を第383号住居跡、中央部を第104号掘立柱建物跡と第110号溝跡、カマド脇を第426号土壇、北東壁を第154号井戸跡にそれぞれ切られる。全体は軸長7.95m×8.05mの方形で、面積は64.00

遺物は覆土中より、土師器の破片が少量出土したのみである。

第380・381号住居跡 (第9・71図)

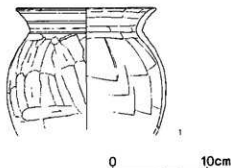
AH-19グリッドを中心に位置する。壁溝の遺存による検出であったため、相互の重複関係は不明である。2軒は第106号掘立柱建物跡に切られるが、第378・379号住居跡との重複関係は確認できなかった。また、西側は大きく調査区外に出ており、全体の規模や形状は明らかとしない。検出状況から想定される軸長は、第380号住居跡が約5.80m、第381号住居跡は約4.80mである。長軸方向はともにN-38°-Wを指す。壁溝は幅15~20cm、深さ約10cmを測る。

柱穴は第380号住居跡で1本が検出された。径47cm、深さ45cmで、支柱穴と考えられる。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は第381号住居跡の壁溝より、土師器の壺破片1点が出土したのみである。

第72図 第381号住居跡出土遺物



を測る大型の住居跡である。主軸方向はおよそN-30°-Wを指す。

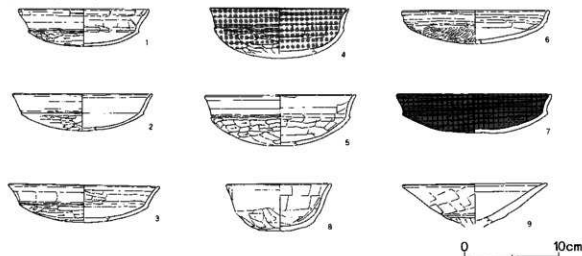
床までの深さは20~40cmで、覆土は自然堆積を示す。床は掘り方に黄褐色土を貼って床面としており、わずかに東から西へ傾斜する。壁溝は検出範囲で全周し、幅15~25cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北西壁中央よりやや北寄りに備わる。燃焼部は70cm×43cmを測る円形の掘り込みで、火床面の床面からの深さは約10cmである。燃焼部のやや奥には、黄褐色土を用いた造り付けの支脚が転倒していた。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径33~62cm、深さ32~70cmである。

貯蔵穴は北隅部に設けられる。上面は径73cm×100

第73図 第382号住居跡出土遺物



第28表 第382号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	成径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)	4.0		細 (W, B)	良	橙	75	
2	坏	(15.0)	(4.0)		微 (W, B)	善	にぶい 橙	破片	
3	坏	16.2	(3.9)		粗 (W, B, R)	良	橙	30	
4	坏	(15.0)	(4.8)		細 (W, B, C, R)	良	赤 鳩	20	赤彩
5	坏	(16.3)	(5.5)		微 (W, B)	良	にぶい 黄橙	35	
6	坏	(15.9)	(3.5)		微 (W, B)	良	にぶい 橙	40	
7	坏	16.6	(4.2)		細 (W, B)	良	灰 褐	55	内外黒色処理
8	椀	(11.1)	5.0		細 (W, C, 片)	良	にぶい 橙	60	やや重む
9	高 坏	(15.6)	(4.2)		粗 (W, B, C, R)	善	橙	破片	

第383号住居跡 (第9・76図)

AH-20グリッドを中心に位置する。住居全体で第382・386号住居跡を切り、逆に北西部を第110号溝跡、床を第104号掘立柱建物跡に切られる。平面は軸長5.44m×5.50mの方形で、面積は29.92㎡を測る。主軸方向はおおよそN-61°-Eを指す。

覆土は自然堆積を示すものの、地震の亀裂がこれを分断してズレを生じさせている。床までの深さは20~35cm程であるが、やはり、亀裂を境に大きく段差を生じている。床面は掘り込んだ第386号住居跡の覆土に、

cmの隅丸方形を呈し、深さ47cmを測る。

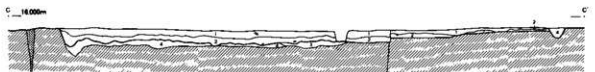
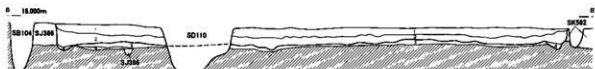
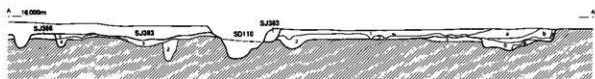
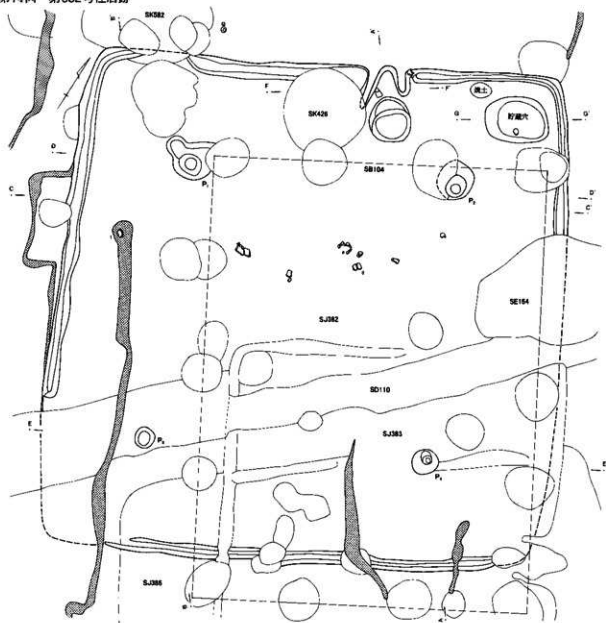
遺物は住居跡中央部、床面よりわずかに浮いた状態で出土している。いずれも破片で、土師器の坏や壺、須恵器の蓋や坏、白玉(第425図5~7)などがある。また貯蔵穴からは、ミニチュアの壺(第426図7)が見出されている。

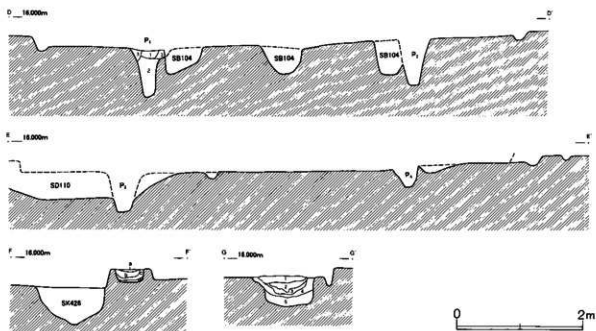
地山の黄褐色土を貼ったものである。地震の床面への影響は、段差の他、北東から南西への全体的な傾斜をもたらしている。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は幅10~25cm、深さ8~18cmでおおむね全周する。

カマドは北東壁の中央部、やや東寄りに付設される。燃焼部は90cm×54cmで、床からの深さは約10cmを測る。中央には、地山を用いた支脚が造り付けられていた。

柱穴は主柱穴が3本検出された。径34~56cmの円形で、深さは30~36cmである。本来は4本になるものと思われるが、1本は第104号掘立柱建物跡の柱穴に掘

第74图 第382号住居跡





第382号住居跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒と炭化物粒若干含む。堆山粒混入。
2. 10YR3/4 に近い黄褐色土 1層に比べ焼土粒・炭化物粒やや多い。
3. 10YR6/6 明黄褐色土 堆山粒・堆山ブロック混入。腐り跡。
4. 10YR6/6 明黄褐色土 堆山粒・堆山ブロック含む。炭化物粒・焼土粒若干混入。

第382号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒均一にやや多く含む。
3. 7.5YR5/8 明褐色土 焼土粒・焼土ブロック主体。
4. 7.5YR4/1 暗灰色土 灰・炭化物・炭化物粒主体。
5. 10YR5/4 に近い黄褐色土 堆山粒・堆山土に焼土粒混入。

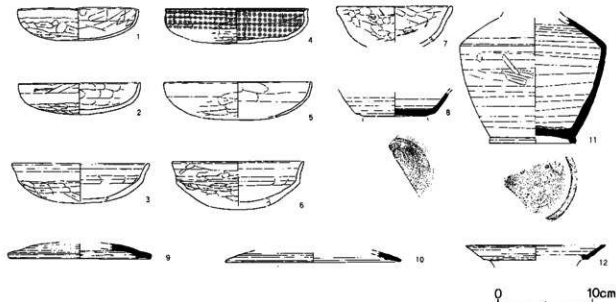
第382号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/3 に近い黄褐色土 堆山粒・焼土粒含む。
- b. 2.5YR5/6 明赤褐色土 焼土ブロック・柱主体。
- c. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
- d. 10YR3/2 黒褐色土 土層に石灰。しまりややつ。
- e. 10YR4/2 灰黄褐色土 堆山粒含む。

第382号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 小型未溶化堆山ブロックで主構成。光頭土。
2. 10YR3/3 暗褐色土 未溶化堆山・焼土・炭化物各粒少量含む。柱状。
3. 10YR3/4 暗褐色土 砂質堆山ブロック主体。

第75図 第383号住居跡出土遺物

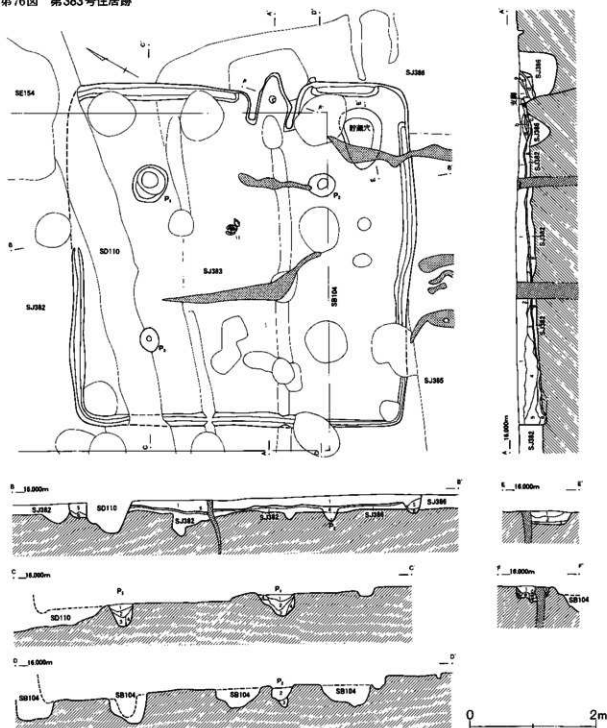


り抜かれたようである。

貯蔵穴は西隅部に穿たれる。上面は径約60cm×90cmの楕円形で、深さは22cmを測る。

遺物は覆土中より土師器の杯・高坏、須恵器の長頸瓶や蓋のほか、手捏ね(第426図14)などが出土している。

第76図 第383号住居跡



第383号住居跡 1層説明

1. 10YR2/3 赤褐色土 未溶化地山段・焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/3 赤褐色土 1層基本、焼土粒・ブロック多く含む。
3. 10YR2/4 暗褐色土 溶化進行した地山ブロックに4層が入る。
4. 10YR2/3 黒褐色土 1層基本、溶化進行地山段・ブロック・焼土粒含む。
5. 10YR2/3 赤褐色土 ほとんど1層と動土、動性層。
6. 10YR2/3 赤褐色土 4層上に溶化、地山は溶軟化。
7. 10YR5/4 褐色土 ほとんど溶化、均一化した地山。底の溶軟化土。
8. 10YR5/6 褐色土 未溶化地山ブロック上保。粘り厚。

第383号住居跡 貯蔵土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒含む。
2. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山粒多く含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山段・ブロック含む。

第383号住居跡 カマド1層説明

- a. 10YR6/3 暗褐色土 地山粒・ブロック・焼土粒含む。天井残層上。
- b. 10YR5/6 褐色土 粘質地山ブロック。天井残層上。
- c. 10YR3/2 暗褐色土 5層の地山段・焼土粒、6層の灰含む。
- d. 10YR2/3 黒褐色土 灰土ブロック層を含む。灰層。
- e. 10YR4/2 暗褐色土 褐色粘質土ブロック。支障の根詰め層。
- f. 10YR3/2 暗褐色土 灰・土の溶軟化上。

第383号住居跡 柱土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山粒含む。
2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭化物粒やや多く含む。
3. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山粒・ブロック含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・ブロックやや多く含む。

第29表 第383号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.0 (13.2)	(3.4)		粗(W, B)	黄	橙	95	
2	坏	(14.8)	(4.2)		粗(W, B, R)	浅黄	橙	25	赤彩
3	坏	(15.3)	(3.9)		粗(W, C)	良	橙	60	
4	坏	(16.0)	(3.8)		細(W, B, F)	良	橙	20	
5	坏	(14.2)	(4.7)		細(W, B)	良	橙	20	
6	碗	(12.4)	(3.8)		粗(W, 片)	良	橙	30	南比企
8	須恵器 坏	(15.4)	(1.7)	(6.8)	粗(針)	良	灰	30	伏間
9	須恵器 壺		(1.1)	(19.0)	粗	良	灰	破片	未野
10	須恵器 壺		(1.3)	(9.4)	粗	良	黄	灰	90
11	須恵器 壺		(1.7)	(15.0)	粗	良	灰	破片	不明

第384号住居跡 欠番

第385号住居跡 (第9・77図)

AH-20グリッドを中心に位置する。南西壁で第388号住居跡と第430号土壇を切り、北部を第386号住居跡、南隅部を第387号住居跡、東隅部を第471号土壇にそれぞれ切られる。さらに、北半部には地震の亀裂が多く走り、壁や床を破壊している。第107・108・109号掘立建物跡との重複関係は確認できなかった。平面は軸長6.40m×6.37mの方形で、面積は約40.77㎡を測る。長軸方向はおよそN-49°-Eを指す。

床までの深さは30~40cm程で、覆土は壁際自然堆積が認められるものの、大半は人為的埋戻しである。壁の立ち上がりは概ね垂直ながら、北東壁は地震のため崩落している。壁溝は幅10~25cm、深さ8~18cmで、やはり北東壁は亀裂のため破壊されている。北

第30表 第385号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.9)	(5.2)		細(W, B, R)	良	浅黄	橙	55
2	坏	(12.6)	(4.3)		細(W, B)	普	橙	70	
3	坏	(12.1)	(4.7)		粗(W, B, R)	普	橙	50	
4	坏	(13.0)	(4.6)		細(W, B, R)	良	橙	30	赤彩
5	坏	15.4	4.8		粗(F)	良	橙	95	
6	坏	(15.2)	(3.5)		粗(W, B, R)	普	灰	褐	破片
7	坏	(15.0)	(5.8)		粗(W, B, R)	普	橙	橙	50
8	坏	(12.3)	(5.0)		微(W)	良	橙	橙	40
9	碗	(10.0)	(4.5)		微(W, B)	普	浅黄	橙	破片
10	碗	(12.4)	(6.9)		粗(W, C, 片)	良	にぶい	黄橙	40
11	鉢	(23.4)	(11.5)		粗(W, R, F)	普	灰	白	70
12	壺	(21.4)	(7.9)		粗(W, R, 片)	普	橙	橙	破片
13	壺		(4.0)	10.0	粗(W, R, 片)	普	にぶい	黄橙	破片
14	壺	(16.8)	(17.1)		微(W, B, 片)	良	にぶい	橙	30
15	壺	(18.6)	(13.0)		粗(W, R)	普	橙	橙	30
16	壺	19.4	(8.8)		粗(W, C, 片)	普	にぶい	橙	破片
17	壺	(19.8)	(9.0)		粗(W, B, R, F)	普	にぶい	橙	破片
18	壺	(18.2)	(9.6)		粗(W, B)	良	にぶい	橙	破片
19	壺		(4.0)	(8.4)	粗(W, R, 片)	普	橙	橙	破片

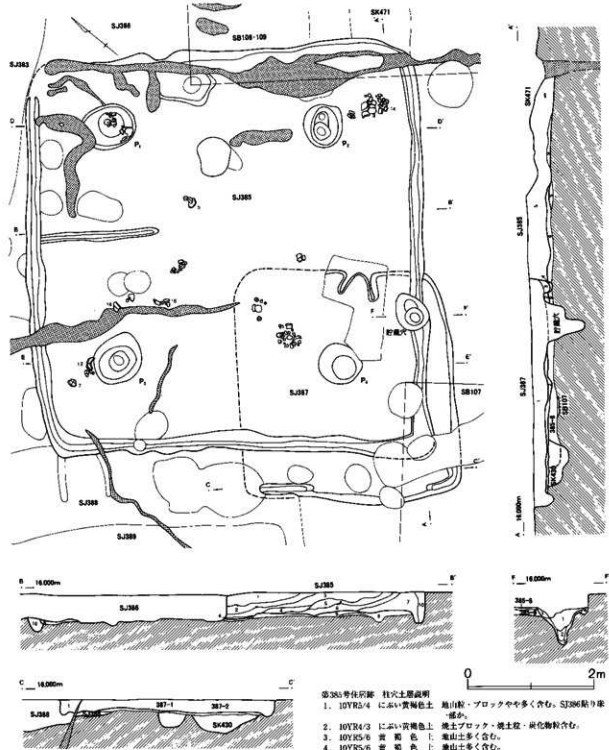
西壁には1条、間仕切り状の溝が派生する。床は黄褐色の地山土で貼り床が施されるが、これも地震の影響で凹凸を生じている。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径63~78cm、深さ40~60cmを測る。柱真はいずれも観察されず、一部には第386号住居跡の貼り床が見られた。このことから、柱は抜き取られた可能性が高い。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。地震による破壊や遺存する壁溝の状態から推せば、カマドは北東壁に付設されていたと思われる。

遺物は床面上およびP1中より土師器の坏・碗・壺・甕・手捏ね(第426図6)、白玉(第424図8)、鎌(第427図4)などが出土している。また、剣形模造品(第425図1・2)を図示したが、その帰属は本跡なのか、第387号住居跡なのか明らかにできなかった。

第77図 第385・387号住居跡・カマド



第385号住居跡 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山殻・白色土を含む。
2. 10YR4/2 灰 黄褐色土 地土殻・炭化物を含む。
3. 10YR2/1 暗 褐色土 地山殻多く、地土殻・炭化物を含む。
人為的埋めし。
4. 10YR4/4 褐色土 地土殻・炭化物が多く含む。
5. 10YR4/4 褐色土 地山殻多く含む。
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 3層に比べ薄い。地山殻・地土殻を含む。
7. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを含む。やや硬い。
8. 10YR5/6 黄 褐色土 地山殻・地山ブロック。若干の焼土殻を含む。断り座。
9. 10YR5/6 黄 褐色土 地山土主体。
10. 10YR2/3 暗 褐色土 地山殻を含む。礫の土止め裏側。

第385号住居跡 柱穴土層説明

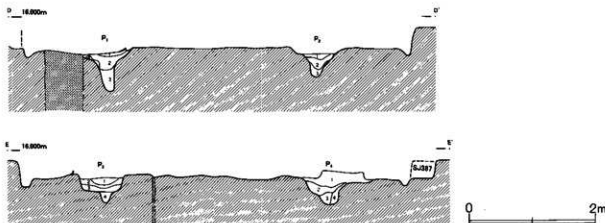
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山殻・ブロックやヤが多く含む。SJ386断り座
部分。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地土ブロック・地土殻・炭化物を含む。
3. 10YR5/6 黄 褐色土 1. 地山土多く含む。
4. 10YR5/6 黄 褐色土 1. 地山土多く含む。

第387号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 炭土殻・炭化物を含む。
2. 10YR5/6 黄褐色土 地山土主体。断り座。
3. 10YR3/3 暗褐色土 1層に近似。地山殻濃縮層。焼土殻・炭化物を含む。
4. 10YR4/6 褐色土 ほとんど地山。礫の形状化土層。

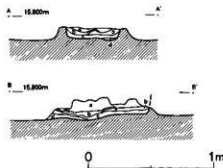
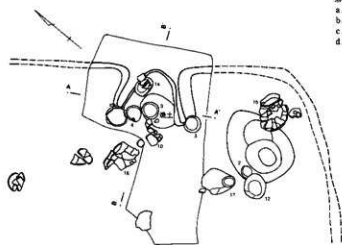
第387号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/4 暗 褐色土 溶化進行した地山殻・地土・炭化物を含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 全体に地山屑。
3. 10YR4/6 褐色土 上ほとんど地山。礫の形状化土層。
4. 10YR2/3 暗 褐色土 1. 層に近似。地山殻濃縮層。焼土・炭化物を含む。



第387号住居跡 カマド土層説明

- a. 5YR4/6 赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック多く含む。
 b. 5YR4/4 に近い赤褐色土：焼土ブロック若干含む。灰混入する。
 c. 5YR4/3 に近い赤褐色土：b層よりやや細かい。焼土粒・ブロック含む。
 d. 10YR3/4 暗褐色土：炭屑を含む。



第386号住居跡 (第9・80図)

AH-20グリッドを中心に位置する。南隅部で第385号住居跡を切り、北西部を第382・383号住居跡、第104号掘立柱建物跡に切られる。東隅部に重複する第108・109号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。平面は軸長8.00m×8.00mの方形で、面積は約64.00㎡を測る。主軸方向はおよそN-50°-Eを指す。

中央付近を地震の亀裂が緩筋も横切り、これを境に床は段差を生じている。このため、床までの深さは15~45cmと一定しない。覆土は地山の黄褐色土を主体とするが、埋め戻された様子は特に顕えなかつた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は検出範囲で全周し、幅15~30cm、深さ8~10cmを測る。床面は概ね平坦であったようだが、上述のように、地震により東から西

へ徐々に下がっている。

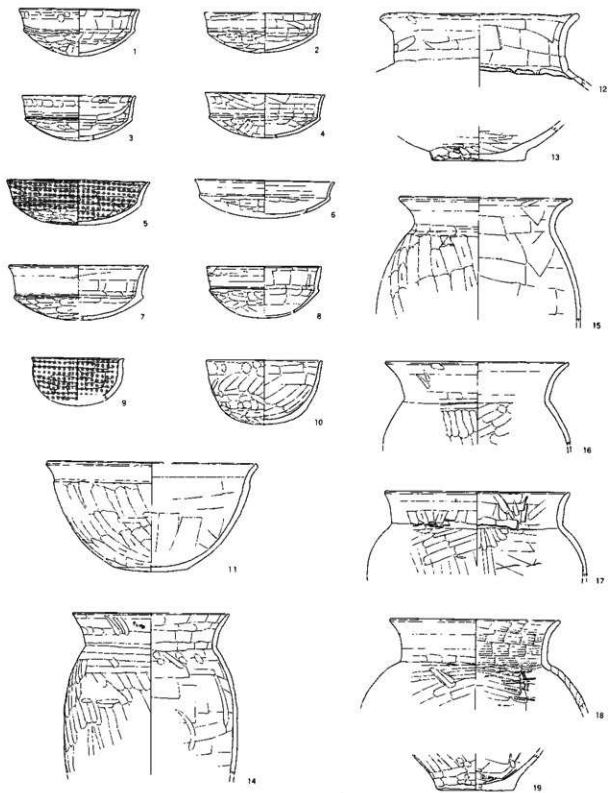
カマドは北東壁の中央部、わずかに東寄りに設けられる。燃焼部は84cm×47cmの楕円形で、奥部は一段高い煙道が取り付く。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径35~55cm、深さ24~71cmである。

貯蔵穴は北西の壁際、カマドを挟んで対象位置に2基備わっている。南の貯蔵穴Aはカマドと東隅部の中間に位置し、径82cm×100cm、深さ58cmを測る。貯蔵穴Bはカマドと北隅部の中間に位置し、径84cm×120cm、深さ60cmを測る。

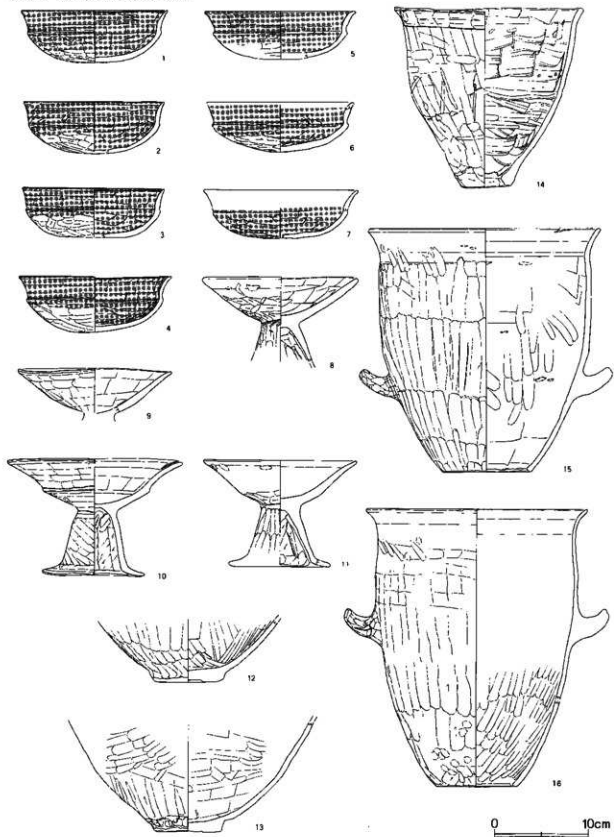
遺物は北隅部に坏、2点の瓶が集中して見出されたほか、覆土より、坏・高坏・壺・甗、土製丸玉(第423図1)などが出土している。

第78图 第385号住居跡出土遺物

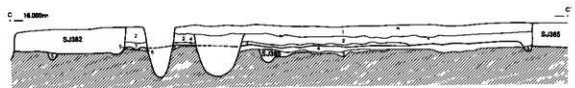
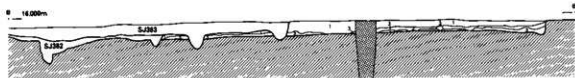
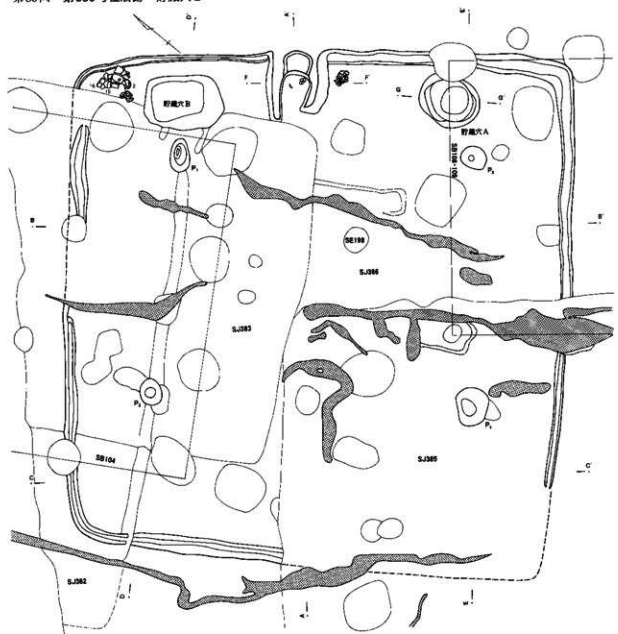


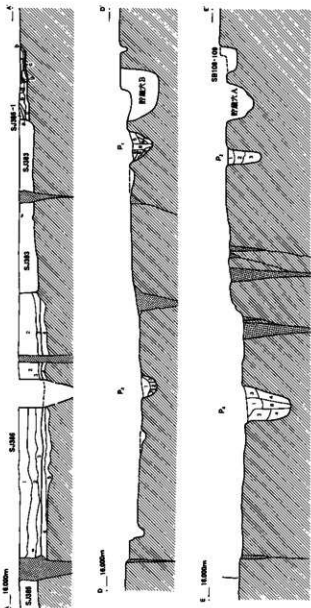
0 10cm

第79图 第386号住居跡出土遺物



第80回 第386号住居跡・貯蔵穴B





第286号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗 褐色 土 溶化進行した、地山粒・小型ブロック・焼土粒若干含む。
2. 10YR3/4 暗 褐色 土 1層基準、地山粒・焼土粒小なり多い。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山粒・ブロック主体、焼土粒微量。
4. 10YR5/6 黄 褐色 土 砂質赤褐色地山ブロック主体、粘り厚。
5. 10YR3/4 暗 褐色 土 地山粒・ブロック多量、焼土粒微量。

第286号住居跡 柱穴土層説明

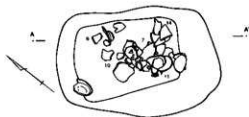
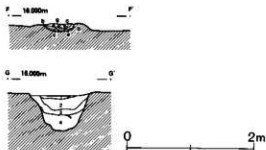
1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒・炭化物粒若干・地山粒含む。
2. 10YR4/4 暗 褐色 土 1層に比べ地山粒・ブロック多く含む。
3. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山粒・ブロック均一に含む。光塊土。
4. 10YR5/6 黄 褐色 土 地山粒多く含む。光塊土。
5. 10YR3/3 暗 褐色 土 溶化進行粘質地山ブロック多く含む。光塊土。
6. 10YR3/3 暗 褐色 土 5層に準ずるがより大型のブロック、光塊土。
7. 10YR3/4 暗 褐色 土 溶化地山ブロック主体、光塊土。
8. 10YR2/3 暗 褐色 土 地山粒・焼土粒微量含む。粘質。

第286号住居跡 貯蔵穴A土層説明

1. 10YR4/4 暗 褐色 土 焼土粒・地山粒含む。
2. 10YR5/4 に近い黄褐色土 焼土粒・地山ブロック多く含む。
3. 10YR4/4 暗 褐色 土 地山ブロック多く含む。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土に地山ブロック混在。

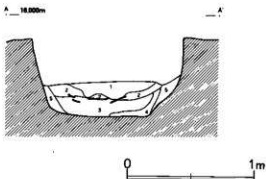
第286号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/4 暗 褐色 土 粘質地山ブロック、火井層再土。
- b. 10YR3/3 暗 褐色 土 5層・焼土ブロック。火井層再土。
- c. 10YR3/2 暗 褐色 土 焼土ブロックに炭化物少量、灰層。
- d. 10YR2/4 暗 褐色 土 溶化進行地山粒・小型ブロック・焼土粒若干含む。
- e. 10YR4/3 に近い黄褐色土 架設されていた壁内の堆積土。灰黄色早質粘土。
- f. 10YR3/4 暗 褐色 土 溶化進行地山粒・小型ブロック・焼土粒若干含む。
- g. 10YR4/6 暗 褐色 土 5層の支脚が位上化した焼土物。灰色粘土。周囲は焼土化。
- h. 10YR5/2 灰 黄 褐色 土 湿り付けの支脚。



第286号住居跡 貯蔵穴B土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山粒・焼土粒若干含む。
2. 10YR4/2 灰 黄 褐色 土 腐葉土粒・炭化物粒多く含む。
3. 10YR5/2 灰 黄 褐色 土 焼土粒・炭化物混入。灰主体。
4. 10YR6/6 暗 黄 褐色 土 地山粒・ブロック含む。
5. 10YR6/6 暗 黄 褐色 土 砂質地山土主体。



第31表 第386号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.8)	(5.4)		粗(W, C, R)	良	橙	65	赤彩
2	坏	(15.0)	(5.4)		粗(W, R)	良	橙	35	赤彩
3	坏	(15.2)	(5.3)		粗(W, B, C, R)	良	にぶい黄橙	50	赤彩
4	坏	(16.4)	(6.0)		粗(W, B, C)	良	にぶい黄橙	95	赤彩
5	坏	(16.2)	(5.1)		粗(W, R)	普	橙	20	赤彩
6	坏		(5.7)		粗(W, B, C, R)	良	橙	50	赤彩
7	坏		(3.3)		粗(W, B, C, R)	良	橙	40	赤彩
8	高	坏	(16.9)	(9.1)	細(W, B)	良	橙	80	
9	高	坏	(16.5)	(4.7)	礫(W, B, C, R)	普	橙	坏落 75	
10	高	坏	(18.8)	(12.1)	(11.0) 微(W, B)	良	にぶい橙	65	
11	高	坏	(16.5)	(11.1)	粗(W, C, R)	良	橙	40	
12	甕		(6.6)	7.7	粗(W, B, R, F)	良	にぶい橙	破片	
13	甕		(11.8)	7.2	礫(W, B, C, R)	普	橙	破片	
14	甌	(20.2)	(19.0)	5.2	粗(W, C)	良	にぶい橙	90	
15	甌	(24.9)	(25.6)	(9.5)	粗(W, B, R, F)	良	橙	30	
16	甌	(23.7)	(29.5)	(9.1)	粗(W, B, R)	良	にぶい橙	25	

第387号住居跡 (第9・77回)

AI-20グリッドを中心に位置する。ほとんどが第385号住居跡の覆土を切り込んで構築されていたため、床面の大半は、これを調査時に掘り抜いてしまった。また、西隅部は第388号住居跡を、南隅部は第107号掘立柱建物跡と第430号土壇を、それぞれ切る。土層断面の観察知見を援用すれば、全体は軸長3.57m×3.50mの方形で、面積は約12.50㎡となる。主軸方向はおよそN-50°-Eを指す。

床までの深さは20cm前後、覆土は故意の埋め戻しのようである。壁は垂直に立ち上がり、壁溝が部分的に巡る。床面はほぼ平坦で、地山黄褐色土を用いた貼り

床が施される。

カマドは北東壁中央よりやや東寄りに位置する。短く造り付けられた袖が「ハ」字状に開き、両端部には甕が逆位に据えられる。燃焼部は42cm×41cmの楕円状で、火床面は床面とはほぼ同一高である。奥寄りに高坏の脚部を転用した支脚が置かれていた。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径48cm×60cmの不整形円形を呈し、深さは85cmを測る。

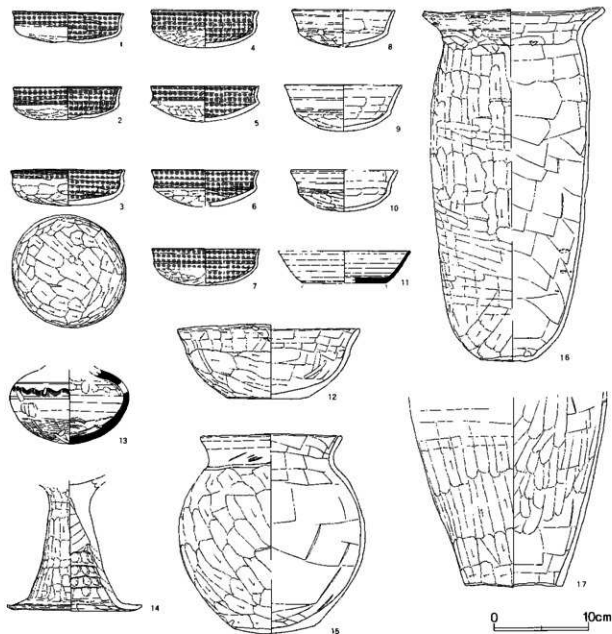
柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド中から土師器の坏や甕、その周囲の床から坏・鉢・甕・甌などが出土している。また、北隅部の覆土中からは、坏や石製紡錘車(第421回1~3)、

第32表 第387号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	(4.5)		粗(W, B, C)	良	にぶい橙	50	赤彩
2	坏	11.6	3.7		礫(W, B, C)	良	橙	100	赤彩
3	坏	12.3	3.8		細(W, B, R)	良	にぶい黄橙	100	赤彩
4	坏	11.5	4.1		粗(W, C)	良	にぶい橙	95	赤彩
5	坏	(11.6)	4.1		粗(W, C, F)	普	にぶい橙	75	赤彩
6	坏	(12.5)	(3.8)		礫(W, C)	良	にぶい黄橙	30	赤彩
7	坏	(11.5)	4.0		粗(W, B, C)	普	にぶい橙	40	赤彩
8	坏	(11.0)	(4.2)		粗(R)	普	にぶい橙	45	
9	坏	12.6	5.0		微(W, R)	普	にぶい黄橙	95	
10	坏	(11.5)	(4.3)		粗(W, B, F)	普	赤	55	
11	須恵器	坏	(14.3)	(3.5)	(8.9) 粗	良	灰	30	未野
12	鉢	19.6	7.5	8.9	微(W, B)	良		100	
13	須恵器	甌	(7.9)		微(W)	良	灰	35	群馬?
14	高	坏	(14.4)	(13.9)	粗(W, B, C, F)	良	橙	脚部 95	
15	甕	15.2	20.8	8.9	粗(W, B, R)	普	にぶい黄橙	90	
16	甕	19.6	37.7	5.0	粗(W, C)	良	にぶい黄橙	85	
17	甌		(20.0)	10.3	粗(W, C, R)	普	浅黄橙	45	

第81図 第387号住居跡出土遺物



白玉(第424図9~11)などがまとまって検出された。なお、砥石を1点図示した(第420図2)が、第388号住居跡と一括で取り上げたため、その帰属は明らかでない。

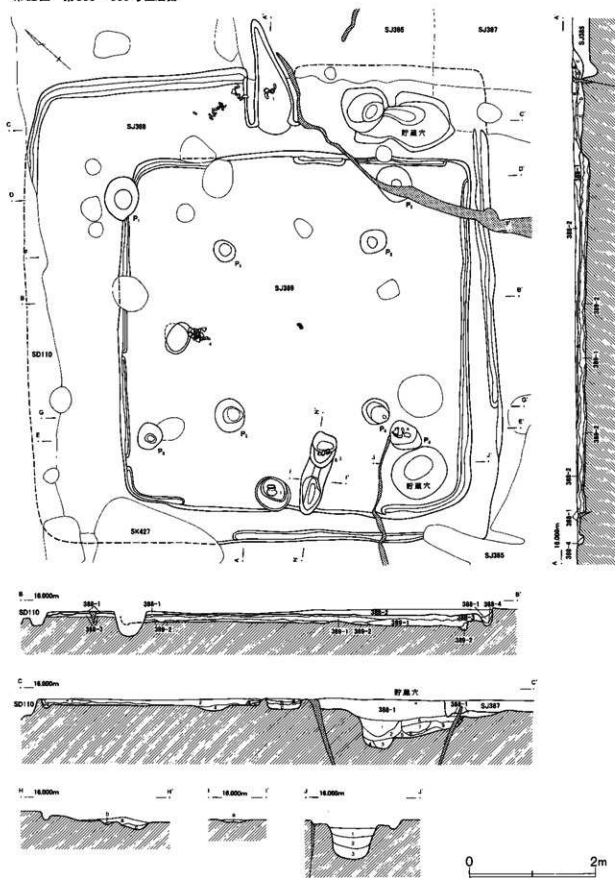
第388号住居跡 (第9・82図)

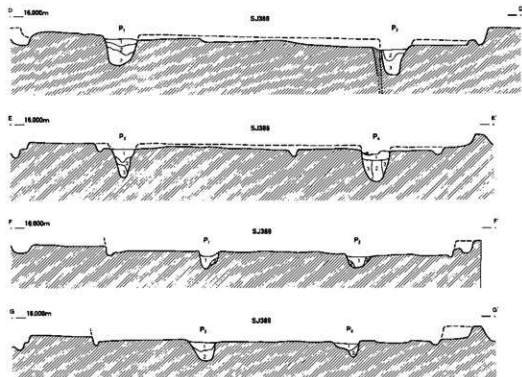
A I-20グリッドを中心に位置する。第389号住居跡を人為的に埋め戻し、ほぼ同一方向に完全に覆って構築される。第389号住居跡の覆土が単一で、支柱穴に柱痕の観察されなかったことを勘案すれば、拡張の

行なわれた結果と見て大過ないと思われる。東隅部は第387号住居跡に、北西壁は第110号溝跡に切られる。第427号土壌との重複関係は明らかとし得なかった。平面は軸長7.55m×7.40mの方形で、面積は約55.87㎡を測る。床までの深さは10cm前後で、主軸方向はおよそN-49°-Eを指す。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積を示す。壁溝は検出範囲では南隅部以外で見られ、幅12~27cm、深さ約7cmを測る。床は砂質の地山ブロックを

第82图 第388・389号住居跡





第388号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質堆山粒・焼土粒多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 1層に準ずるが色濃縮く、混有物は微細で僅少。
3. 10YR4/4 褐色土 砂質堆山の小型ブロック主体、粘り床。
4. 10YR4/6 褐色土 ほとんど堆山、硬・床の溶軟化土。

第388号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/4 暗褐色土 焼加熱堆山粒・焼土粒多く含む(下層の影響)。
- b. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多く含む。天井崩落土。
- c. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物微量含む。灰層。

第388号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 堆山粒やや多く、焼土粒微量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 堆山粒・ブロック1層より多く含む。
3. 10YR3/4 にぶい黄褐色土 粘質土多く含む。
4. 10YR6/6 明黄褐色土 堆山土に焼土粒混入。
5. 10YR6/6 明黄褐色土 堆山土・焼土粒混入。
6. 10YR4/4 褐色土 堆山粒混入、焼土粒若干含む。
7. 10YR3/4 にぶい黄褐色土 堆山土多く含む。
8. 10YR4/4 褐色土 水持の粘土混入。
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 7層に比べ堆山ブロック大きい。

第388号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/1 褐灰色土 灰・砂質堆山ブロック含む。焼土粒・堆山節若く混入。
2. 10YR3/2 黒褐色土 焼土塊・炭化物粒・灰・堆山粒含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 堆山土多く混入。

第389号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質堆山粒・ブロック多く、焼土・炭化物微量含む。S286構築時の構成戻し。
2. 10YR4/6 褐色土 ほとんど堆山、床の溶軟化土。

第389号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 堆山粒・ブロック、焼土粒含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 堆山粒・ブロック含む。1層に近厚。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 堆山砂質堆山ブロック多く含む。

第389号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘質堆山粒・ブロック含む。
2. 10YR4/4 褐色土 1層に比べやや明るい。

第389号住居跡 カマド土層説明

- a. 5YR4/2 灰褐色土 焼土粒・炭含む。
- b. 5YR4/4 赤褐色土 焼土ブロック主体。
- c. 5YR3/1 黒褐色土 灰土体。



主体とする貼り床で、西から東へわずかに傾斜する。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられる。燃焼部は187cm×59cmで、煙道と一体となって立ち上がる。

柱穴は主柱穴4本が検出された。径39~60cm、深さ47~55cmである。このうち、P2は地震の亀裂で壊されていた。

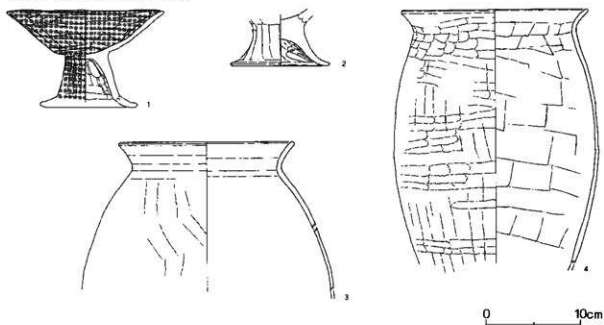
第33表 第388号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色澤	残存率	備考
1	高台	19.2	(10.0)		粗(W, B, C)	良	明赤褐	75	赤彩
2	付壺		(5.5)	(10.7)	粗(W, C)	良	赤褐	脚部75	
3	壺	(18.8)	(16.0)		纏(R, 片)	并	にぶい黄橙	破片	
4	差	20.0	(28.3)		纏(R, 片)	劣	橙	35	

貯蔵穴は東隅部に穿たれる。やはり地震のために壁が崩落したようで、極めて不整形な形状であった。上面は径182cm×70cm、深さ約30~50cmを測る。

遺物は土師器の高坏・甕のほか、白玉(第424図12)、滑石製の堅筒形模造品?(第425図9)、有孔円板(第425図10)などが出土している。

第83図 第388号住居跡出土遺物



第389号住居跡 (第9・82図)

A I-20グリッドを中心に位置する。第388号住居跡は、本跡を埋め戻しての構築である。カマドの位置は180°異なっているが、上述のように、本跡を拡張したものが第388号住居跡と考えられる。平面は軸長5.70m×5.62mの方形で、面積は30.03㎡を測る。主軸方向はおおよそS-50°-Wを指す。

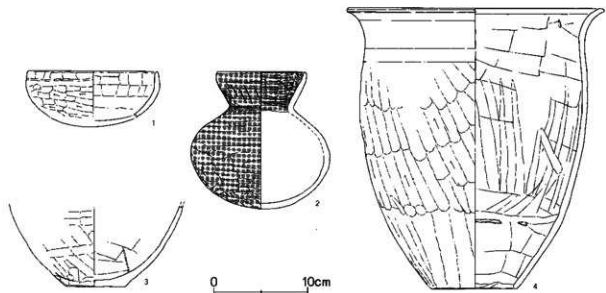
覆土はほとんど人為的な埋め戻しで、第388号住居

跡の床が乗っている。幅10~20cm、深さ約5cmで巡る壁溝は、部分的に途切れる。床面は西から東へわずかに傾斜する。

カマドは不明確ながら、南西壁の中央に、焼土を多く含む掘り込みを検出した。袖は遺存しなかったが、燃焼部と考えられる。全体は134cm×38cmの溝状で、火床面は凹凸が激しい。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径33~47cm、深

第84図 第389号住居跡出土遺物



第34表 第389号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	(14.0)	(5.0)		粗 (W, B, R)	并	橙	20	赤彩
2	壺 (柑)	9.3	14.5		粗 (W)	良	橙	100	
3	甕		(8.7)	6.3	靡 (W, 片)	普	橙	破片	
4	瓶	(27.6)	29.6	9.0	靡 (W, R, 片)	良	橙	45	

さ17~28cmで、柱痕は観察されなかった。おそらくは、第388号住居跡構築時、抜き取られたものと思われる。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径90cmの円形で、深さ50cmを測る。

遺物はカマドより土師器の坏、小穴中より埴型壺、主柱穴より甕などを出土している。

第390号住居跡 欠番

第391号住居跡 (第9・85図)

AG-24グリッドを中心に位置する。検出したのは西壁部のみであり、大半は東側の調査区外となる。このため、全体の規模や形状、施設等については明らかとし得ない。軸長は、南北がおよそ4.50mである。

ほぼ床面での検出であったため、覆土は観察できなかった。壁溝は幅約20cm、深さ約10cmを測る。床面はほぼ平坦である。

遺物は古墳時代後期の土師器がわずかに出土したにすぎない。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

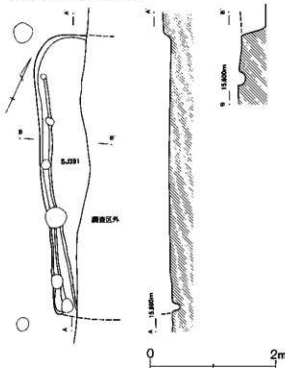
第392・393・394号住居跡 (第9・86図)

AH-23グリッドを中心に位置する。3軒は遺存する壁溝により、その南側が確認されたのみである。故に、各々の規模や形状、施設等は明らかでない。また、第396号住居跡、第105号掘立柱建物跡との重複関係も不明である。西側は大きく攪乱されている。

3軒は同一方向に、しかも入れ籠状となっていることから、拡張乃至、縮小の関係にあるとも考えられる。第393・394号住居跡間の新旧関係は把握できないが、第392号住居跡の壁溝は第393・394号住居跡の壁溝、および主柱穴を切っていることが観察された。

軸長はいずれも東西のみが測れるに過ぎず、第392号住居跡は約4.78m、第393号住居跡は約5.73m、第

第85図 第391号住居跡



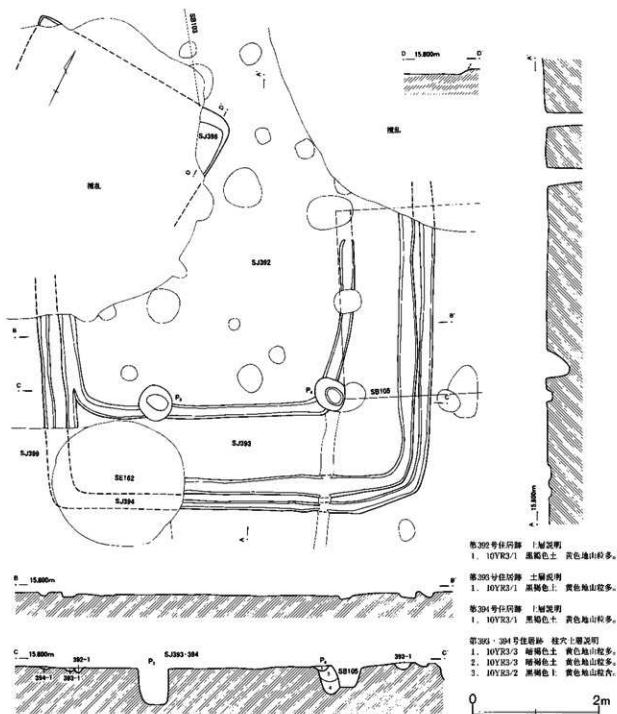
394号住居跡は約6.40mである。長軸方向は3軒ともにおよそN-27°-Wとなる。

壁溝は検出範囲で全周し、幅は15~25cm、深さは5~10cmである。第393号住居跡のそれは、他の2軒に比していくぶん幅が広い。

柱穴は2本検出された。位置的に見て第393・394号住居跡の主柱穴と思われるが、いずれの住居跡に属するかは明らかとし得なかった。大きさは径48~54cm、深さ47~56cmである。

カマド・貯蔵穴は、3軒ともに検出されなかった。遺物はすべて壁溝中からの出土である。図示したものの他は、各住居跡とも微細な破片が数点のみであった。

第86図 第392・393・394・396号住居跡



第395号住居跡（第9・87図）

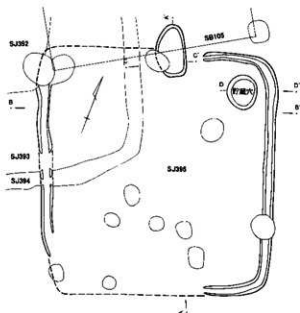
AH-24グリッドを中心に位置する。北辺を第105号掘立柱建物跡に切られるが、床面での検出であったため、北西で重複する第393・394号住居跡との関係は明らかでない。平面は軸長3.87m×3.70mの方形で、面積は14.32㎡を測る。主軸方向はおおよそN-20°-W

を指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝は幅約15cm、深さ3~5cmである。

カマドは北西壁の中央部、わずかに東寄りに付設される。燃焼部は83cm×48cmの楕円形で、深さ約12cmを測る。袖は検出できなかった。

第87図 第395号住居跡



貯蔵穴は東隅部に備わる。直径50cm程の円形で、深さは約12cmである。

柱穴は検出されなかった。

遺物は壁溝中より古墳時代後期の土師器片3点を出土したが、細片のため図示できなかった。

第396号住居跡 (第9・86図)

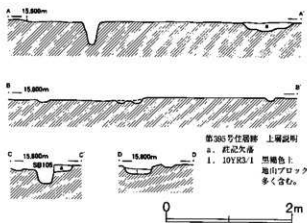
AH-23グリッドに位置する。大半を覆乱坑により破壊されており、検出できたのは北東・北西隅のごく一部のみである。このため、方形の住居跡であったことは想定できるものの、全体の規模や施設等についてはまったく不明である。軸長は残存した二つの隅部から、東西およそ3.54mが推測できる。

遺物の出土は認められなかった。

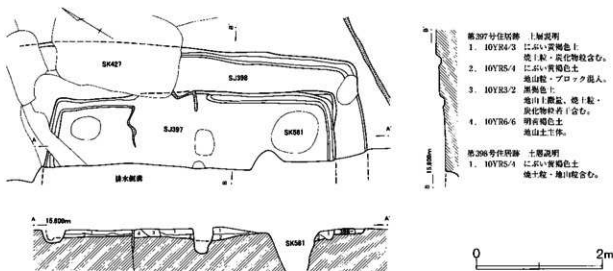
第397・398号住居跡 (第9・88図)

A I-19グリッドに位置する。2軒は入れ籠状に重複する住居跡で、覆土の観察からは、縮小がなされたものと半断できる。第581号土塊に切られるが、第427号土塊との重複関係は確認できなかった。南西部は大半が調査区外となるため、全体の規模や形状、施設等については不明である。軸長を測れるのは第397号住居跡の一方のみであり、それはおよそ4.65mを測る。長軸方向はともに、ほぼN-30°-Wを指す。

床までの深さは10~20cm程である。第398号住居跡の覆土は構築の際の埋め戻し、第397号住居跡のそれ



第88図 第397・398号住居跡



は自然堆積を示す。

両住居跡ともに、壁溝は部分的に途切れる。第397号住居跡では幅約15cm、深さ約3cmを測る。第398号住居跡では幅約20cm、深さ約5cmを測る。第397号住居跡の床面は、地震の影響で段差や凹凸を生じている。

遺物は覆土中からの出土で、土製模造品(白?第426図4)、白玉(第424図13)などがある。但し、いずれの住居跡に伴うものかは明確にし得なかった。

第399号住居跡 (第9・89図)

A1-23グリッドを中心に位置する。ほとんど床面での検出であったため、第393・394号住居跡、第432号土塊、第162号井戸跡との重複関係は確認できなかった。平面は軸長3.46m×3.67mの方形で、面積は12.70m²を測る。主軸方向はおおよそS-65°-Wを指す。

床までの深さは5cm程で、わずかに遺存した覆土は自然堆積を示す。壁溝は検出範囲で全周し、幅約15cm、深さ約5cmを測る。床面はほぼ平坦で、一部が火を受け焼土化していた。

カマドは南西壁の中央部、ごくわずかに南寄りに設けられる。燃焼部は70cm×30cmの楕円形となり、火床面はほぼ床面と同一高である。

貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径60cm×50cmの円形で、深さ38cmを測る。

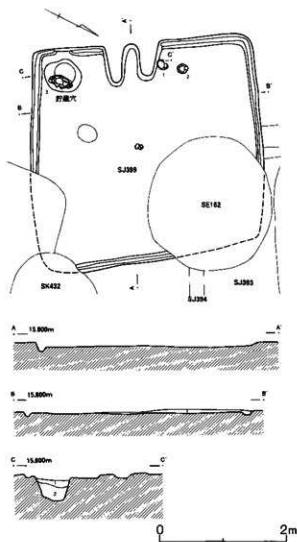
柱穴は検出されなかった。

遺物は、カマド右袖の床より土師器の坏2点、貯蔵穴底部より甕をそれぞれ出土している。

第400号住居跡 (第9・91図)

A1-24グリッドを中心に位置する。北東隅部を第419号住居跡、第431号土塊に掘り抜かれる。ほとんど床面での検出であったため、第414号住居跡、第432号土塊、第158・159・160・161・164号井戸跡との重複関

第89図 第399号住居跡



第399号住居跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土・炭化物多く含む。

第399号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物少し含む。

2. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物・黄色粘土多量含む。

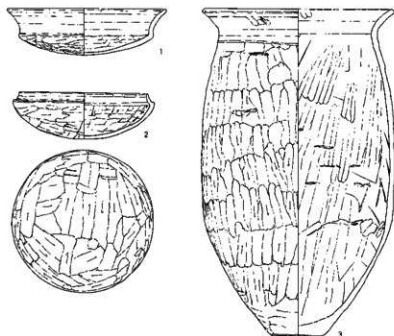
係は確認できなかった。平面は軸長4.26m×4.65mの方形を呈し、面積は19.81m²を測る。長軸方向はほぼN-Sを指す。

壁溝は幅約12cm、深さ2~3cmではほぼ全周する。床

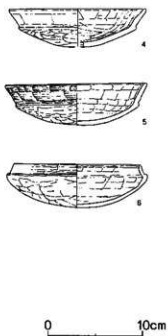
第35表 第399・400号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	L1径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(17.1)	5.0		粗(W, R)	良	にぶい黄橙	55	
2	坏	13.7	4.9		微(W, B)	良	褐灰	100	
3	甕	(20.7)	34.6	5.5	粗(W, B, R)	普	にぶい赤褐	40	
4	坏	(14.7)	(4.1)		微(W, B)	良	明赤褐	25	
5	坏	15.2	4.3		粗(W, B)	良	浅黄橙	75	
6	坏	(13.6)	4.6		微(W, B)	良	明赤褐	70	

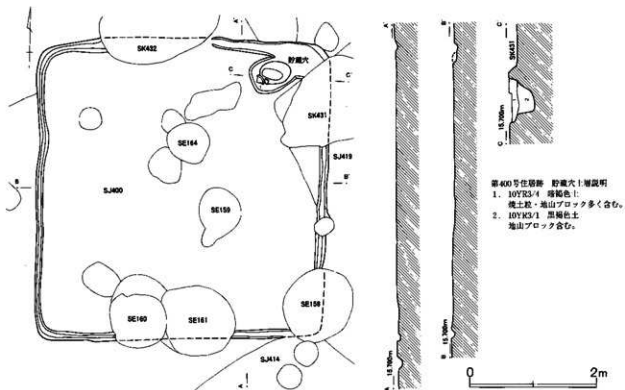
SJ399



SJ400



第91図 第400号住居跡



面は概ね平坦である。

貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径35cm×48cmの楕円形で、深さ38cmを測る。

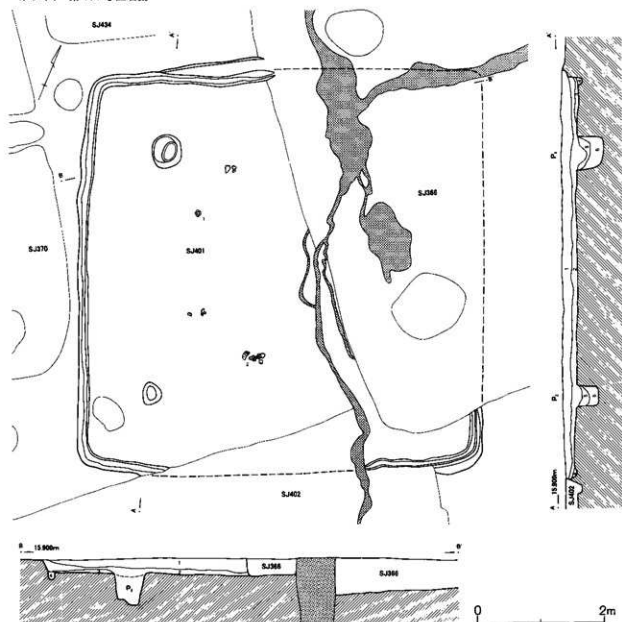
カマドと柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴の肩部より、土師器の坏を出土している。

第401号住居跡 (第9・92図)

A J-21グリッドを中心に位置する。東側を第366号住居跡、南壁を第402号住居跡に大きく切られる。さらに、中央部には地震による亀裂が走り、床に段差を生じている。平面は軸長6.40m×6.50mの方形を呈し、面積は41.60㎡を測る。長軸方向はおおよそN-25°-Wを指す。

床までの深さは25cm程で、覆土は人為的な埋め戻し
第92図 第401号住居跡



第401号住居跡 土層説明 (柱穴含む)

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、泥1少量含む。やや砂質。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層に地山が多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 2層より更に地山多く含む。製り方光織土。

4. 10YR2/1 黒褐色土 3層よりやや地山多く含む。
5. 2.5YR3/2 黒褐色土 1層より地山多い。
6. 2.5YR3/2 黒褐色土 1層より更に地山多し。

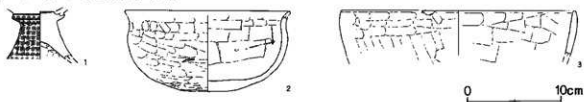
である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は南から北へわずかに傾斜する。壁溝は検出範囲ではほぼ全周し、幅15~20cm、深さ5~12cmを測る。

検出された2本の柱穴は、位置的に見て支柱穴と考えられる。径33~50cm、深さ35~40cmである。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は少量ながら、床面上より土器の高杯や鉢などを出土している。

第93図 第401号住居跡出土遺物



第36表 第401号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高鉢		(5.1)		粗 (W, C, P)	良	橙	破片	赤彩
2	鉢		(8.1)		粗 (W, B, R)	良	橙	30	
3	版	(25.0)	(4.9)		粗 (W, R)	普	橙	破片	

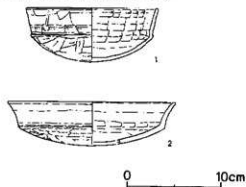
第402号住居跡 (第9・10・95図)

AK-21グリッドを中心に位置する。第406号住居跡埋没後の構築で、北西部でも第401号住居跡を切る。床や壁の一部は第404・405・445号土壌に切られるが、第366・418・440号住居跡、第484・486号土壌、第172号井戸跡との重複関係は明らかとし得なかった。また、中央部には第111号溝跡が縦断する。重複が激しく、軸長は一辺で約7.00mが測れるのみである。主軸方向はおよそS-51°-Wを指す。

床までの深さは20cm程で、覆土は自然堆積と思われる。壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ平坦である。西側に検出された壁溝は、幅約20cm、深さ約10cmを測る。

カマドは南西壁の南寄りに設けられる。燃焼部は73cm×40cmで、火床面は床からわずかに立ち上る。

第94図 第402号住居跡出土遺物



柱穴と貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の坏のほか、鉄製の不明製品(第428図20)などが出土している。

第37表 第402号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(18.0)	(4.5)		微 (W, B)	普	灰白	25	小針型
2	坏	(14.0)	5.7		微 (W, B)	良	明赤褐	50	

第403号住居跡 (第9・96図)

AI-23グリッドを中心に位置する。平面は方形を呈するものと思われるが、南側のみの検出であるため、全体の規模や施設等は明らかとし得ない。西側で重複する第404号住居跡との関係も、これを確認することはできなかった。軸長は東西が約3.10mで、深さは2~10cm程である。軸方向はおよそN-30°-Wを指す。

覆土は自然堆積を示し、壁溝は見られない。床面は北へ向かって浅くなり、途中で確認面となってしまう。

カマド・柱穴・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第404号住居跡 (第9・98図)

AH-22グリッドを中心に位置する。第403・405・420号住居跡と重複するものの、それぞれの新旧関係は確認できなかった。全体は軸長3.18m×3.80mの隅

第95図 第402・406号住居跡



第402号住居跡 上層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物やや多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山粒未風化。

第406号住居跡 上層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層に炭化物多く含む層。

第402号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/1 黒褐色土 地山少量・焼土多く含む。カマド内底上。
- b. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。カマド壁面、周壁の柱上。
- c. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。



丸長方形を呈し、面積は約12.08㎡を測る。主軸方向はおおよそN-21°-Wである。

床までの深さは5cm程度で、覆土は自然堆積を示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁溝は見られない。床面は南西から北東へわずかに傾斜する。

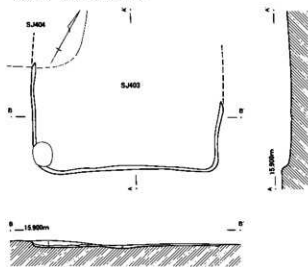
カマドは北西壁の中央に備わる。燃焼部は68cm×53

cmの円形で、火床面はほぼ平坦である。

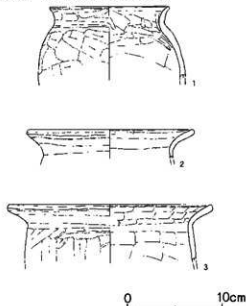
柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマドとその周辺より、土器の坏や甕片が出土している。図示したものを以外は、いずれも細片であった。

第96図 第403号住居跡



第97図 第404号住居跡出土遺物



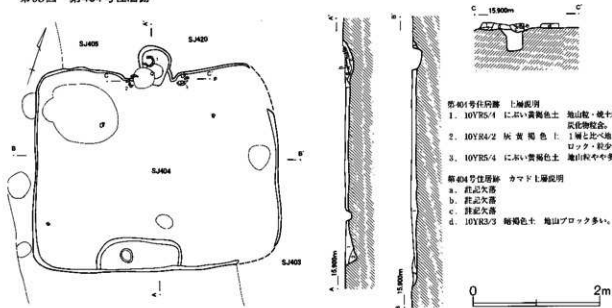
第403号住居跡 新築式土層説明

1. 10YR3/1 赤褐色土 地山ブロック少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。

第38表 第404号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(12.9)	(7.8)		細(W, B)	良	明赤褐	破片	
2	甕	(18.0)	(3.2)		細(W, B)	普	橙	破片	
3	甕	(22.0)	(6.1)		粗(W, H, R, F)	普	橙	破片	

第98図 第404号住居跡



- 第404号住居跡 土層説明
1. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山配・硬土粒・炭化物を含む。
 2. 10YR4/2 灰黄褐色土 1層と比べ地山ブロック・炭少量。
 3. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山配やや多。

第404号住居跡 カマド土層説明

- a. 北窓穴部
- b. 北窓穴部
- c. 北窓穴部
- d. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多い。

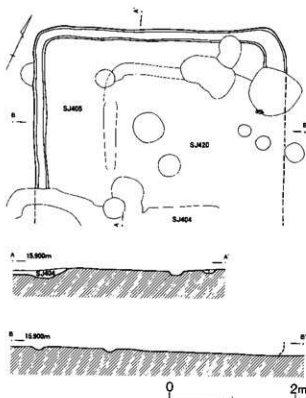
第405号住居跡 (第9・99図)

AH-22グリッドを中心に位置する。部分的な壁溝の検出であり、第404・420号住居跡との重複関係は明らかでない。全体は方形を呈すると思われる、東西の軸長は約4.05m、軸方向はおよそN-25°-Wを測る。

検出範囲で全周する壁溝は、幅20~30cm、深さ約4cmである。

カマド・柱穴・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第99図 第405号住居跡



第405号住居跡 土層説明

1. 10YR5/4 におよび黄褐色土 地田畵や多く含む。

第406号住居跡 (第9・10・95図)

AK-21グリッドに位置する。第402号住居跡、第445号土壇に切られ、中央部を第111号溝跡が切断する。また、地震の影響からか、亀裂の東側は壁の検出が叶わなかった。このように、遺存状態は極めて悪く、全体の規模や形状は明らかとし得なかった。但し、平面は方形を呈するものと思われ、深さは20cm程である。軸方向はおおよそN-60°-Eが測れる。

床までの深さは最大20cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁溝は見られず、床面はおぼ平坦である。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は土師器の小片を数点出土したのみで、図示するには至らなかった。

第39表 第408号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(16.0)	(4.1)		粗 (W. C. R)	焙	橙	破片	

第407・408号住居跡 (第9・101図)

A I-24グリッドを中心に位置する。東側は半分ほどが調査区外となり、検出部には第112号掘立柱建物跡が大きく切りこんでいる。2軒は入れ籠状に重複し、南東壁は共有する。このことから推して、第408号住居跡は、第407号住居跡を拡張したものと考えることができる。南東壁をそのまま利用し、壁溝の深さも変わらないことからすれば、床もそのまま利用されたようである。故に、第407号住居跡は壁溝のみの検出となった。

南北方向の軸長は第407号住居跡が約5.10m、第408号住居跡が約5.90mである。平面はいずれも方形を呈するようで、長軸方向はおおよそN-30°-Wを指す。

第408号住居跡は、床までの深さが8cm前後で、覆土は自然堆積と思われる。壁溝は第408号住居跡の北西壁を除いて見られ、幅約18cm、深さ約5cmを測る。床面はおぼ平坦である。

柱穴は共に2本が検出された。第407号住居跡では径約42cm、深さ28~53cm、第408号住居跡では径約45cm、深さ約20cmである。

カマドは北西壁で、袖の一部を検出したにとどまる。

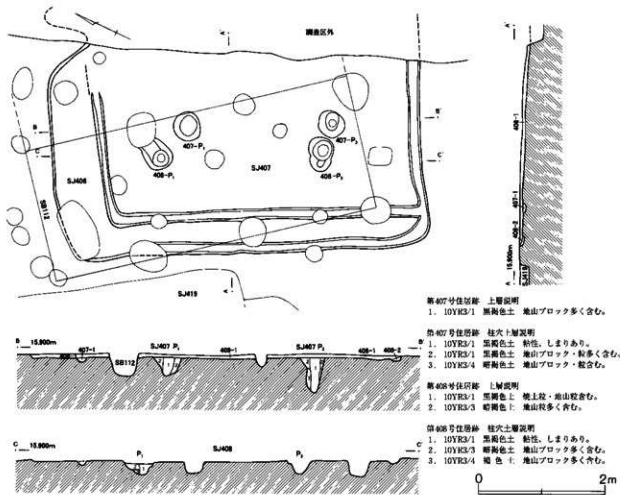
貯蔵穴はいずれの住居跡からも検出されなかった。

遺物は第408号住居跡覆土中より、土師器の坏破片が5点出土したのみである。いずれも細片のため図示し得たのは1点にすぎない。

第100図 第408号住居跡出土遺物



第101図 第407・408号住居跡



第409号住居跡 (第9・102図)

AH-22グリッドを中心に位置する。西側で第415号住居跡を広範に掘り抜き、南西部を第410号住居跡、中央部を106号溝跡に大きく切断される。軸長を測れるのは一方のみで、それはおよそ5.23mを測る。平面は(長)方形を呈すものと思われ、主軸方向はおおよそN-65°-Eを指す。

床までの深さは15~20cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。部分的に確認された壁溝は、幅約20cm、深さ約4cmである。

カマドは北東壁(中央?)に設けられる。燃焼部は74cm×48cmの長方形で、火床面は床面とはほぼ同一高である。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマド、および覆土中より少量が出土しているが、いずれも小片であり、図示するには至らなかった。土師器と須恵器の坏や甕が見られる。

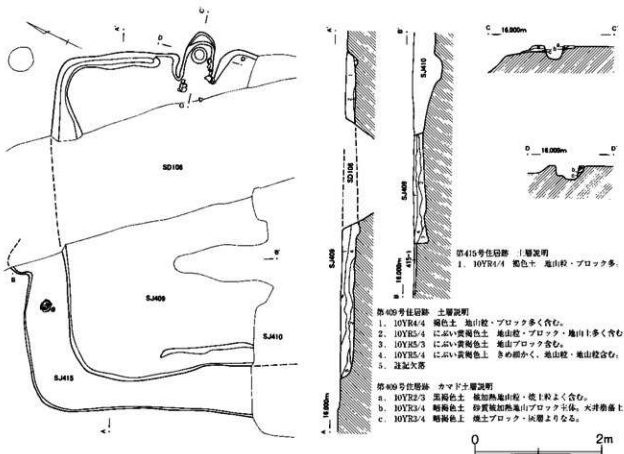
第410号住居跡 (第9・104図)

AH-22グリッドを中心に位置する。北西辺で第409・415号住居跡、南東辺で第411号住居跡を切り、北隅部を第106号溝跡、南隅部を第433号土壇に切られる。平面は軸長5.22m×6.17mの長方形で、面積は32.21㎡を測る。主軸方向はおおよそN-25°-Wを指す。

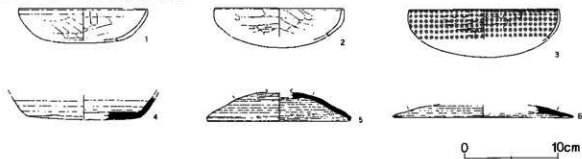
床までの深さは約25cm、覆土は自然堆積を示す。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。床は2枚検出された。住居自体の拡張や縮小は認められず、床のみが嵩上げされている。壁溝は検出範囲で全周し、幅約16cm、深さ10~12cmを測る。

カマドは北西壁の中央、やや西寄りに設けられる。

第102図 第409・415号住居跡



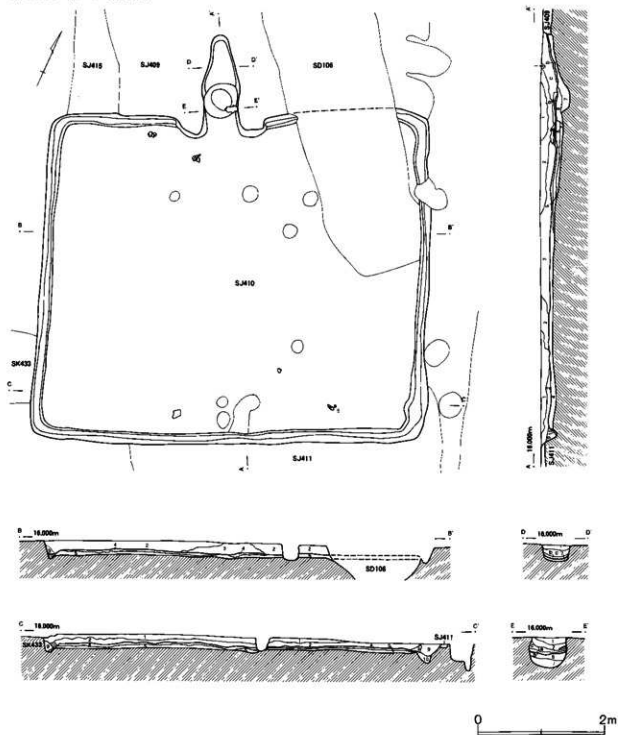
第103図 第410号住居跡出土遺物



第40表 第410号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	焼痕	残存率	備考
1	坏	(13.8)	(3.5)		粗 (W, B)	普	におい煙	破片		
2	坏	(14.0)	(2.9)		粗 (W, B, F)	普	におい煙	破片		
3	坏	(13.8)	(3.4)		粗 (W, B, C)	明	赤 繩	破片		赤彩
4	須忠器 坏		(2.6)	(11.8)	粗 (W)	普	良	破片		末野
5	須忠器 壺		(3.1)	(15.2)	粗 (F)	良	灰	破片	40	湖西
6	須忠器 壺		(1.3)	(19.4)	粗 (F)	普	灰	破片		末野

第104図 第410号住居跡



第410号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行した地山粒少量・焼土粒散在含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 本跡化小型地山ブロック多く・焼土粒少量含む。
灰層の埋め戻し、ないしは他處採掘面跡の積土だろう。
3. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行地山粒・小型少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック主体、2次住居跡。
5. 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土層、2次住居床。
6. 10YR2/3 黒褐色土 カマド灰かき出し後充填。5層上に溶化進行地山ブロック含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土 カマド灰かき出し後充填。5層基本。粘質地山ブロック含む。

8. 10YR3/4 暗褐色土 カマド灰かき出し後充填。6層基本。
褐色土ブロックよりなる。
9. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行地山粒含む。2次住居土。
10. 10YR4/6 褐色土 ほとんど地山、壁の曲成化。2次住居土。

第410号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/3 暗褐色土 加熟地山ブロック・焼土ブロック含む。天井崩落土。
- b. 10YR3/1 黒褐色土 焼灰層。焼土少量・炭化物含む。
- c. 25YR4/8 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロックからなる。大井・壁の崩落塊。

当初の燃焼部には床と同様、黄褐色土を貼って嵩上げしている。後次の燃焼部と煙道は明確な区別がなく、163cm×57cmの溝状となる。火床面は床面より5cmほど窪み、緩やかに立ち上がっていく。軸は両側ともに短い。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はいずれも破片で、土師器の坏、須恵器の坏や蓋が少量出土している。

第411号住居跡 (第9・105図)

A1-22グリッドを中心に位置する。北西辺を第410号住居跡、南部を第114号獨立柱建物跡に切られる。第434号土塼との重複関係は不明である。軸長を測れるのは一方のみであるが、もう一方を柱穴の位置から想定すれば、それは約4.80m×3.75m、面積お

よそ18.00㎡となる。全体は長方形で、長軸方向はおよそN-30°-Wを指す。

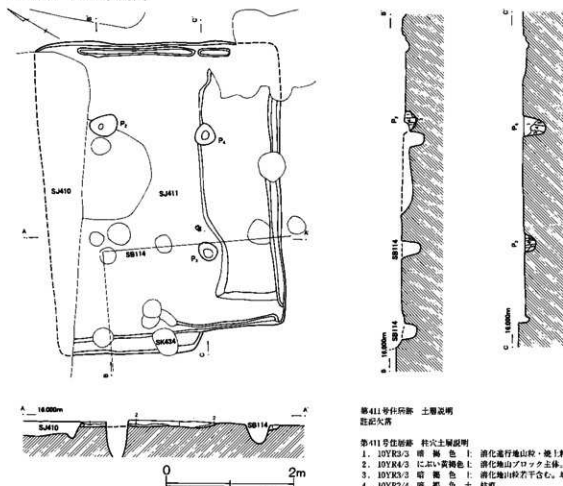
床までの深さは約10cm、覆土は自然堆積のようである。床面はおおむね平坦ながら、南東辺はベッド状に一段高まっている。壁溝は検出範囲ではほぼ全周し、幅10~20cm、深さ約5cmを測る。

3本検出された柱穴は、位置的に見て主柱穴と思われる。大きさは径29~38cm、深さ18~36cmで、柱痕が観察された。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は掲載した須恵器の坏の他、土師器の甕などが出土している。いずれも微細な破片であり、図示し得なかった。

第105図 第411号住居跡



第411号住居跡 土層説明
階記火溝

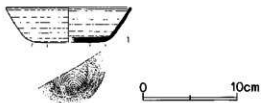
第411号住居跡 柱穴土層説明

1. 10Y R3/3 暗褐色土：溝化堆積地山砂・焼土粒含む。
2. 10Y R4/3 におい黄褐色土：溝化地山ブロック土体。
3. 10Y R3/3 暗褐色土：溝化堆積砂若干含む。早一期。
4. 10Y R3/4 暗褐色土：柱痕。

第41表 第411号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 環	(13.4)	(3.7)	(7.4)	(針)	良	灰	30	南北金

第106図 第411号住居跡出土遺物



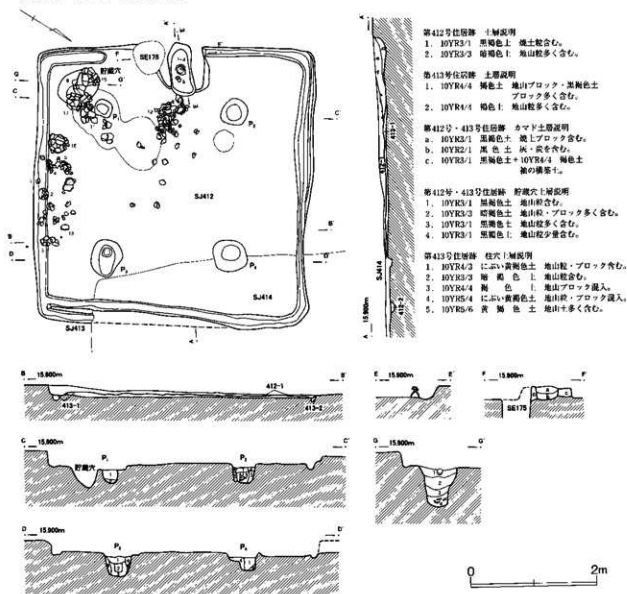
第412・413号住居跡 (第10・107図)

A J-23グリッドを中心に位置する。北隅部を第414号住居跡に切れ、第175号井戸跡を切る。2軒の

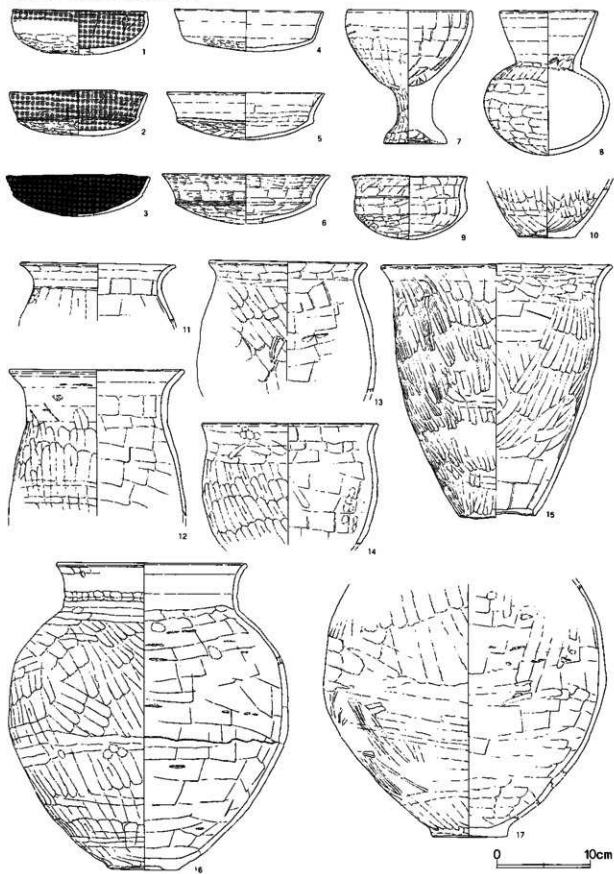
重複として処理したが、ほぼ同一規模のまま、床を嵩上げただけの住居と考えられる。改築は、四壁をわずかに狭め、壁溝が埋められたにとどまる。改築後の第412号住居跡は、平面が台形状となり、軸長は4.25m×4.38m、面積は18.62㎡を測る。第413号住居跡はやや広く、軸長4.40m×4.38m、面積は19.27㎡である。主軸方向はおよそS-61°-Wを指す。

床までの深さは第413号住居跡で約8cm、第412号住

第107図 第412・413号住居跡



第108図 第412号住居跡出土遺物



第42表 第412号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	145	4.8		粗(W, C)	普	灰黄褐	85	赤彩
2	坏	143	4.6		粗(C)	良	明褐灰	100	赤彩
3	坏	154	4.1		微(W)	良	明赤褐	70	内外黒色処理
4	坏	(164)	4.4		細(W)	普	浅黄橙	100	
5	坏	168	5.0		粗(W, B, R)	普	にぶい黄橙	55	
6	坏	(180)	(5.2)		微(W, B)	良	浅黄橙	40	小針型
7	脚付碗	135	14.2		濼(W, B, R, F)	良	にぶい橙	75	転用支脚
8	壺(増)	105	15.3		濼(W, 片)	普	橙	100	
9	碗	123	6.7		細(W, B, R, F)	良	浅黄橙	100	
10	甕		(5.6)	6.0	粗(W, B)	良	にぶい橙	破片	13と同一か
11	甕	(167)	(6.2)		濼(W, 片)	普	橙	破片	
12	甕	(188)	(15.6)		粗(W)	良	橙	破片	
13	甕	(170)	(14.0)		粗(W, B, R)	良	橙	破片	10と同一か
14	甕	(190)	(12.9)		粗(W, 片)	普	にぶい橙	破片	
15	甌	249	26.6	8.0	粗(片)	普	橙	95	
16	壺	(206)	(32.4)	8.0	濼(W, 片)	普	にぶい橙	60	
17	壺		(26.8)	8.0	濼(W, F, 片)	良	にぶい橙	65	

居跡はここに約4cm厚の混合土が貼られる。床面はともにはほぼ平坦で、第412号住居跡の覆土は自然堆積のようである。壁溝はほぼ全周し、幅10~20cm、深さ7~8cmを測る。

カマドは南西壁ほぼ中央に付設される。燃焼部は87cm×38cmの楕円形で、火床面に嵩上げされた様子は窺えない。中央部には高坏を逆位に据え、これを支脚としている。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径23~65cm、深さ26~32cmである。

貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径52cm×66cmの楕円形を呈し、深さは64cmを測る。

おそらく、カマド・主柱(穴)・貯蔵穴は、第413号住居跡のものをそのまま利用したと考えられる。

遺物は住居跡の南半部、特にカマドや貯蔵穴周辺からの出土が多い。大半は床面上に押しつぶされた状態で、土器の坏・脚付碗・増型の壺・甕・甌などが見出された。

第414号住居跡(第9・10・109図)

A I-24グリッドを中心に位置する。南壁部で第412・413号住居跡を切るものの、第437号住居跡、第158・165号井戸跡との重複関係は確認できなかった。

平面はいくぶん四辺の張る方形で、軸長5.25m×5.22m、面積27.41㎡を測る。主軸方向はおおよそN-52°-Eを指す。

床までの深さは5cm程で、覆土は薄いながらも自然堆積である。床面はほぼ平坦であり、土が張られたような様子は窺えなかった。全周する壁溝は幅約20cm、深さ6cm前後である。

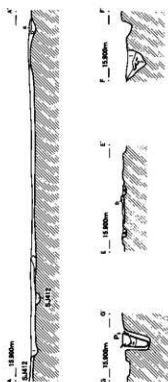
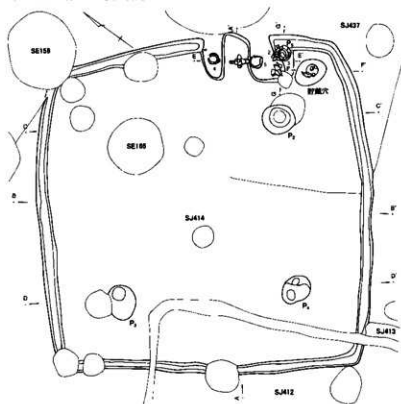
カマドは北東壁の東寄りに設けられる。燃焼部は76cm×43cmで、火床面は床から5cm程隆む。両袖には芯材として、甕の上半部が伏せられていた。

柱穴は3本の主柱穴が検出された。径40~62cm、深さ20~50cmである。また、カマドの右袖跡には、長胴甕を埋設したビット状の掘り込みが検出されている。径25cm、深さ42cmである。長胴甕の口には小型甕が乗っていた。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径54cm×48cmの楕円形で、深さは30cmを測る。

遺物はカマドから貯蔵穴にかけて、集中して出土した。4と5は両袖の芯材となっていた甕、3は右袖跡の小穴に埋置されていた長胴甕、2はその上に乗る小型甕である。

第109図 第414号住居跡



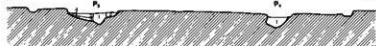
B 15,900mm



C 15,900mm



D 15,900mm



第414号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック多く含む。

第414号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/4 黒色土 磁土粒多く含む。
- b. 10YR5/1 黒灰色土 灰・炭多く含む。

第414号住居跡 野風穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 磁土粒多く含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 地山ブロック含む。

第414号住居跡 柱穴土層説明

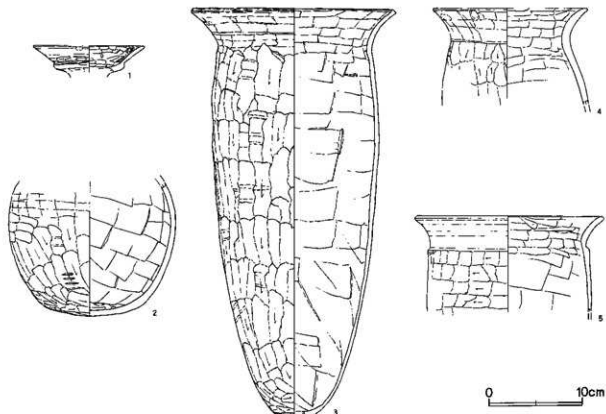
1. 10YR5/6 黄褐色土 地山ブロック混入。
2. 10YR4/4 黒色土 地山粒混入。
3. 10YR4/6 黒色土 地山粒含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 黄土土体。

0 2m

第43表 第414号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高 甕 坏	(12.0)	(2.9)		細 (W, B)	良	灰 黄 褐	破片	
2	甕		(14.3)		粗 (W, F)	良	にぶい 橙	70	
3	甕	21.5	43.2	4.5	微 (W, B)	良	橙	85	
4	甕	(16.6)	(10.7)		細 (W, B)	良	浅 黄 橙	破片	
5	甕	20.3	(10.2)		粗 (W, R, C)	普	浅 黄 橙	破片	

第110図 第414号住居跡出土遺物



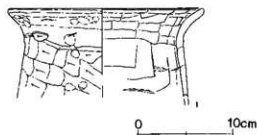
第415号住居跡 (第9・102図)

AH-22グリッドを中心に位置する。ほぼ床面での確認である上、遺構の大部分は第409・410号住居跡、第106号溝跡に掘り抜かれる。検出したのは西隅部とカマドの一部のみであり、全体の規模や形状、施設等については明らかとしない。壁とカマドから推せば、主軸方向はおよそN-25°-Wとなる。

床面はほぼ平坦で、壁溝は見られない。

カマドはごく部分的ではあるが、北西壁に燃焼部が検出された。袖などは確認できなかった。

第111図 第415号住居跡出土遺物



遺物はカマド付近の床面より、甕の破片が出土している。

第44表 第415号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	IJ	径	部 高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	壺	(21.8)	(9.5)			紅 (W, B)	焼成	色調	残存率	備 考

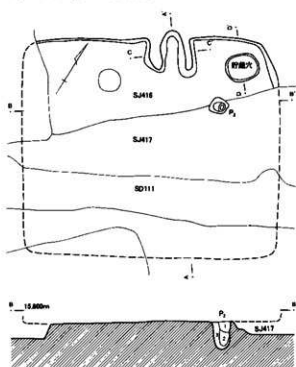
第416号住居跡 (第9・112図)

AJ-21グリッドを中心に位置する。東南の大部分は、第417号住居跡の覆土を掘り込んで構築される。また、そこを第111号溝跡に切られるため、平面での確認は困難であった。全体は長方形となるようで、断

面観察で得られた主軸の長さおよそ3.45mである。主軸方向はおよそN-38°-Wを指す。

床までの深さは5cm程で、覆土は自然堆積である。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁溝は見られない。床面はほぼ平坦で、構築に際し、特に第417号住居跡を

第112図 第416号住居跡



埋め戻したり、床が貼られた様子は窺えない。

カマドは北西壁の中央部、やや東寄りに位置するようである。燃焼部は74cm×38cmの楕円形を呈し、火床面は床面とはほぼ同一高である。

柱穴は1本のみ検出された。主柱穴と考えると良く、径27cm、深さ43cmである。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径44cm×53cmの隅丸長方形で、深さは17cmを測る。

遺物の出土は見られなかった。

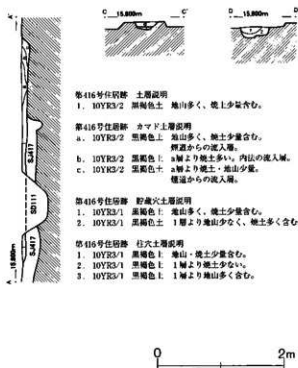
第417号住居跡 (第9・10・114図)

A K-22グリッドを中心に位置する。東側を第416・418・421号住居跡に切れ、北西辺の床は第111号溝跡に掘り抜かれる。平面は軸長7.25m×7.00mの方形を呈し、面積は50.75㎡を測る。長軸方向はおおよそN-41°-Wを指す。

床までの深さは15cm前後、覆土は自然堆積を示す。

第45表 第417号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	(3.8)		微(W, B)	青			破片
2	甕		(6.0)	(6.8)	濃(W, R, 片)	良	にぶい黄緑		破片



第416号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。

第416号住居跡 カマド土層説明

a. 10YR3/2 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。

貯蔵からの混入層。

b. 10YR3/2 黒褐色土 a層より焼土多い、内法の混入層。

c. 10YR3/2 黒褐色土 a層より焼土・地山少量。

樋道からの混入層。

第416号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。

2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山少なく、焼土多く含む。

第416号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。

2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より焼土少ない。

3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山多く含む。

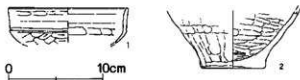
壁の立ち上がりは急で、床面は南から北へわずかに傾斜する。壁溝は北東から北西壁にかけて備わり、幅10~25cm、深さ約5cmを測る。

検出された2本の柱穴は、位置的に見て主柱穴と考えられる。径22~26cm、深さ14~21cmで、柱痕は観察されなかった。

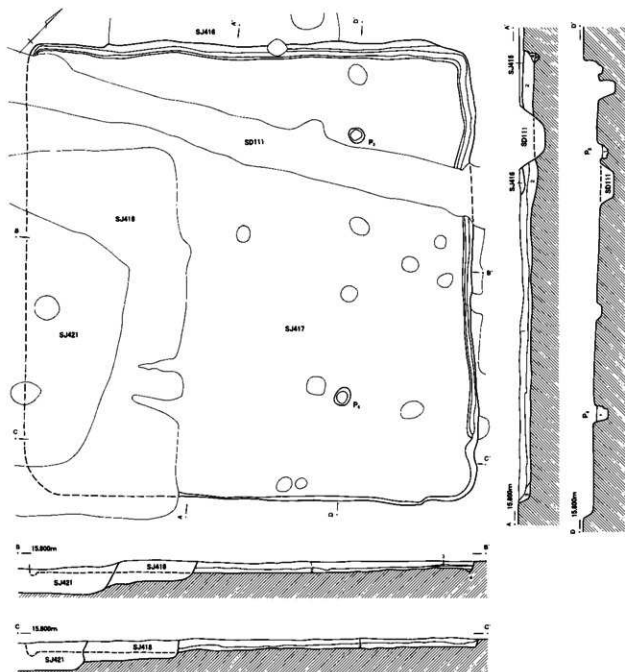
カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は砥石(第420図7)のほか、土師器の甕や坏の破片が少量出土している。

第113図 第417号住居跡出土遺物



第114図 第417号住居跡



第417号住居跡 土層説明

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。 | 3. 10YR3/2 黒褐色土 1層より地山多く大きい、やや未風化。 |
| 2. 10YR3/2 黒褐色土 1層より地山多く大きい、風化良好。 | 4. 10YR3/2 黒褐色土 1層より要に地山多く大きい、やや未風化。 |
| 5. 10YR3/2 黒褐色土 1層より焼も地山多く大きい、未風化。 | |

第417号住居跡 柱穴土層説明

- | |
|----------------------------|
| 1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。 |
|----------------------------|

第418号住居跡 (第10・115図)

AK-21グリッドを中心に位置する。東・西で第417・446号住居跡をそれぞれ切り、中央部は第421号住居跡に掘り抜かれる。さらに、北西壁の一部は第

440号住居跡のカマドに切られる。平面は軸長5.85m × 5.73mの方形を呈し、面積は33.52㎡を測る。主軸方向はおよそN-47°-Eを指す。

床までの深さは30cm程で、覆土は自然堆積を示す。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の内部には第421号住居跡が完全に重なっているため、床の多くは失われている。残存部を見る限り、張り床は施されず、ほぼ平坦であった。全周する壁溝は幅15~20cm、深さ約4cmを測る。

カマドは北東壁の東寄りに付設される。燃焼部は90cm×46cmの長方形で、火床面は床面とはほぼ同一高であ

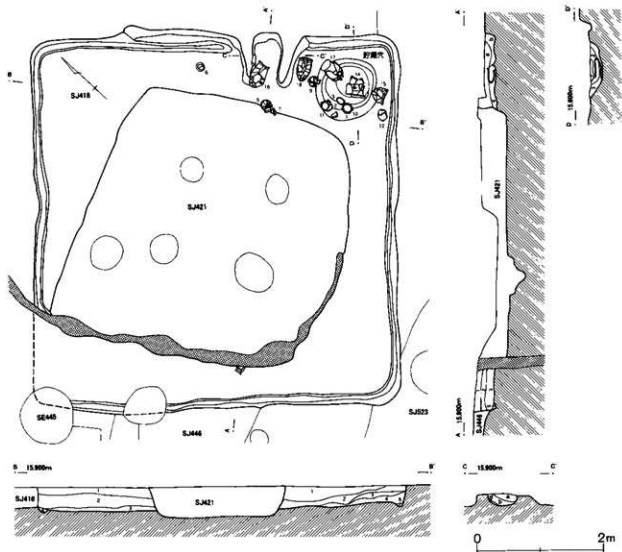
る。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径95cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマドと貯蔵穴を中心に、土器の坏・甕・甑、須恵器の坏蓋、碧玉製の管玉(第422図1)などがまとまって出土している。

第115図 第418号住居跡



第418号住居跡 土壁説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、炭土少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山多く、焼土少量含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。
5. 10YR2/1 黒褐色土 地山多く含む。

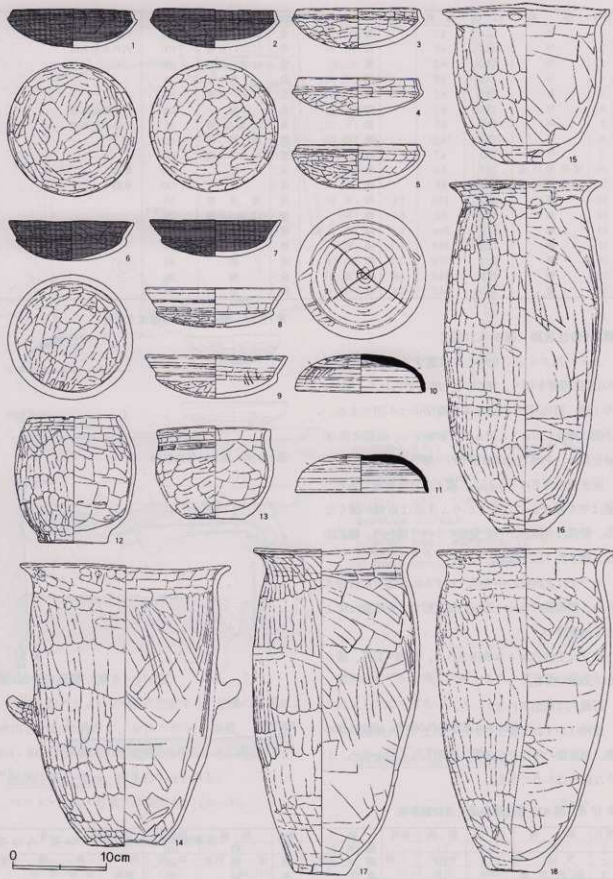
第419号住居跡 カマド土壁説明

- a. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物少量含む。瓦刃からの流入。
- b. 10YR3/1 黒褐色土 a層より焼土多く含む。内法の流入。
- c. 10YR3/1 黒褐色土 a層より地山やや多く含む。瓦刃と内法の流入。
- d. 10YR3/1 黒褐色土 黒色灰土層。

第418号住居跡 貯蔵穴土壁説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土・炭化物多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山・焼土少量含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 2層より焼土少ない含む。

第116图 第418号住居跡出土遺物



第46表 第418号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.6	4.1		微 (W, B)	良	にぶい 橙	100	内外黒色処理
2	坏	12.7	4.0		細 (W, B)	普	にぶい 黄橙	100	内外黒色処理
3	坏	13.0	4.2		粗 (C, R)	良	にぶい 黄橙	100	
4	坏	(13.0)	4.0		細 (W, R)	良	橙	30	
5	坏	13.0	4.1		粗 (C, 針)	良	にぶい 黄橙	90	
6	坏	13.4	4.2		細 (W, B)	良	橙	100	内外黒色処理
7	坏	14.0	3.9		微 (W, B)	良	にぶい 橙	95	内外黒色処理
8	坏	(15.0)	(4.2)		粗 (W, C)	普	浅 黄 橙	40	
9	坏	15.3	4.7		粗 (C, F)	普	にぶい 橙	100	
10	須恵器 坏 蓋	13.7	4.0		粗 (F)	良	灰	100	群馬
11	須恵器 坏 蓋	14.2	4.0		細 (F)	良	灰	100	秋田
12	甕	9.8	13.6	7.4	細 (W, R)	良	浅 黄 橙	95	
13	鉢	12.2	9.5	6.4	粗 (W)	普	にぶい 橙	70	
14	甕	21.5	29.6	8.3	礫 (W, B, R)	普	浅 黄 橙	95	
15	甕	18.0	16.3	4.0	礫 (W)	普	橙	90	
16	甕	16.4	37.0	5.0	細 (R, F)	良	橙	95	
17	甕	17.9	34.6	5.6	粗 (W)	良	橙	95	
18	甕	19.0	34.3	5.8	粗 (W)	良	橙	90	

第419号住居跡 (第9・119図)

A I-24グリッドを中心に位置する。西隅部で第400号住居跡を切り、第436号土壌に切られる。第431号土壌、第163号井戸跡との重複関係は不明である。平面は軸長4.20m×4.30mの方形を呈し、面積は18.06㎡を測る。主軸方向はおおよそN-30°-Wを指す。

床までの深さは5~15cm、覆土は自然堆積である。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は東側が深くなる。壁溝は北隅部から北東壁にかけて備わり、幅約20cm、深さ約4cmを測る。

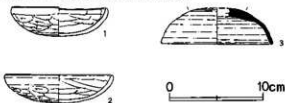
カマドは北西壁の中央部、わずかに北寄りに付設される。燃焼部は75cm×39cmの長方形で、火床面は床より6cm程深い。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径19~37cm、深さ30~53cmである。

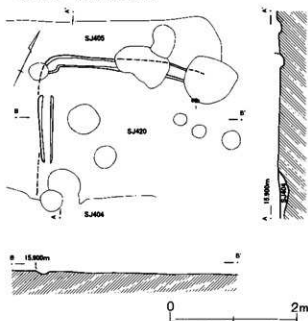
貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はいずれも覆土中からの出土で、土師器の坏や甕、須恵器の坏などがある。図示したものを含め、小さな破片ばかりである。

第117図 第419号住居跡出土土物



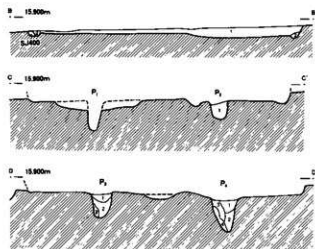
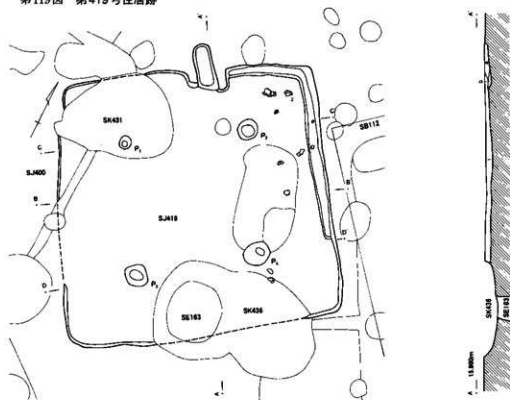
第118図 第420号住居跡



第47表 第419号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	10.0	3.1		細 (W, B)	普	橙	100	
2	坏	11.6	3.0		細 (W, B)	普	橙	65	
3	須恵器 甕	(12.0)	(4.8)		細 (F)	良	灰	25	関西

第119図 第419号住居跡



第419号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼山ブロック・黒褐色土粒多く含む。
2. 10YR2/1 黒褐色土 焼山粒含む。

第419号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/6 褐色土 焼土粒多く含む。
- b. 10YK3/3 暗褐色土 焼土粒・灰含む。

第419号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YK2/1 黒褐色土 焼山粒多く含む。
2. 10YK3/1 黒褐色土 焼山ブロック多く含む。
3. 10YR4/4 褐色土 焼山ブロック多く含む。
4. 10YR2/4 暗褐色土 焼山ブロック含む。



第420号住居跡 (第9・118図)

AH-22グリッドを中心に位置する。壁溝の一部が検出されたに過ぎず、全体の形状や規模、また第404・405号住居跡との重複関係は明らかとしない。

壁溝は幅15~20cm、深さ約5cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はわずかに残る床面上より、須恵器の蓋片を1点出土したにすぎない。

第120図 第420号住居跡出土遺物



第48表 第420号住居跡出土遺物観察表

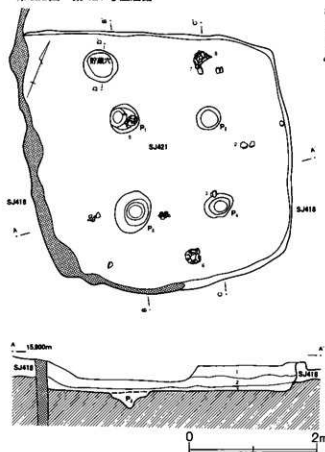
番号	器種	口径	口径	高さ	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器蓋	(17.2)	(2.2)			細 (F)	普通	灰白	破片	瀬河

第421号住居跡 (第10・121図)

AK-21グリッドを中心に位置する。第417・418・446号住居跡を切る。西壁に沿うようにして地震に伴う亀裂が走る。平面は覆土中の構築である上、地震のためにいくぶん乱れるが、軸長およそ4.20m×4.10mの方形を呈し、面積は17.22㎡を測る。長軸方向はおよそN-27°-Wを指す。

確認面から床までの深さは25~40cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁はおおむね垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は見られない。

第121図 第421号住居跡

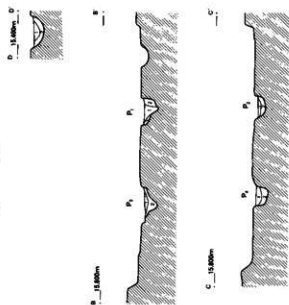


柱穴は4本の主柱穴が検出された。径38~61cm、深さ16~26cmである。柱穴間はかなり狭く、他住居跡に比して異質な印象である。

貯蔵穴は北壁沿いの西寄り、円形に穿たれた掘り込みが該当すると思われるが、貯蔵穴としては隅部から離れすぎた感がある。掘り込みの上面は径50cm、深さは20cmである。

カマドは検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の坏・壺・甕・瓶などが出土している。



第421号住居跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 堆山・焼土少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 堆山・焼土多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 堆山未風化で多く、焼土やや少ない。

第421号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 堆山多く、焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より堆山少ない。

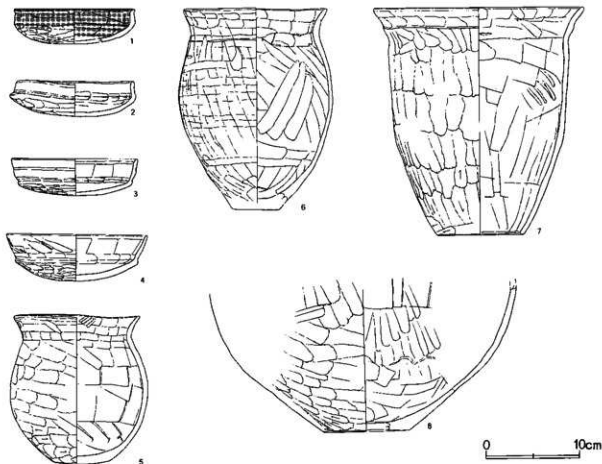
第421号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 堆山多量・焼土少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 1層より炭化物多量含まれる。

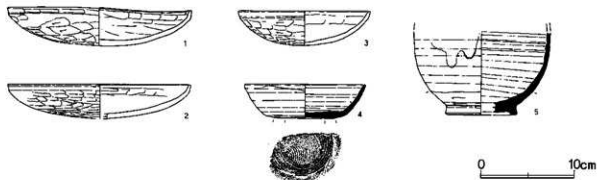
第49表 第421号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.9	(3.5)		粗 (W, C)	良	にぶい黄橙	70	比企型 赤彩
2	坏	12.6	3.8		粗 (W, B)	良	橙	80	
3	坏	13.5	4.0		微 (W, B)	良	灰 白	60	
4	坏	(15.4)	4.9		微 (W, B)	普	橙	70	
5	甕	13.5	15.8	6.0	細 (W, P)	普	橙	90	
6	甕	15.4	(20.8)		粗 (C, R)	普	橙	80	
7	甕	(22.7)	23.9	(9.2)	粗 (W, C)	普	橙	45	
8	壺		(15.1)	(9.6)	粗 (W, C)	普	にぶい 橙		破片

第122图 第421号住居跡出土遺物



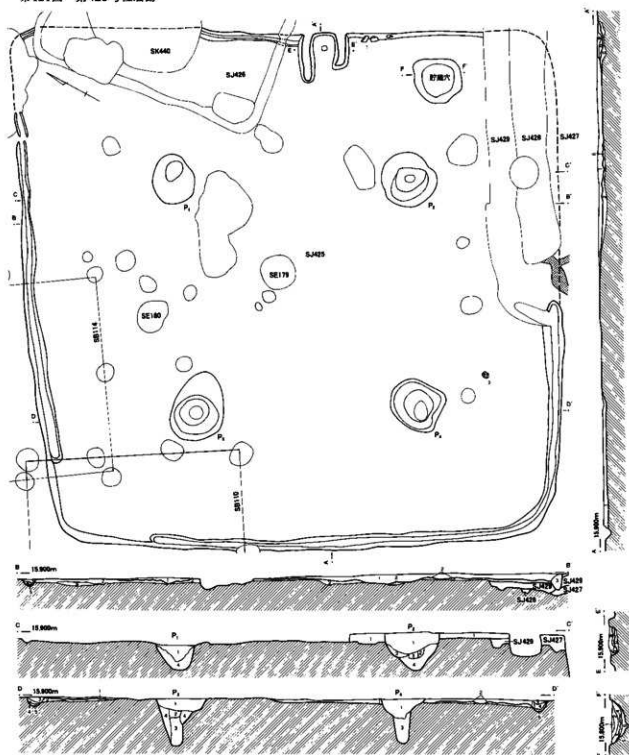
第123图 第425号住居跡出土遺物



第50表 第425号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口徑	器高	底徑	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	19.7	4.1		細 (W, B)	良	橙	80	
2	坏	(19.6)	(3.2)		細 (W, B)	良	橙	30	
3	坏	(14.4)	(3.7)		粗 (W, B, R)	普	橙	30	
4	須恵器 坏	(13.0)	(3.7)	(6.4)	(針)	良	灰 白	30	南比全
5	須恵器 密		(8.7)	(7.6)	細 (F)	良	灰 白	破片	秋岡小洞西 胎土分析 No. 12

第124図 第425号住居跡



第425号住居跡 土層説明 (上色観察写真)

1. 焼土粒・炭化物粒若干混在。
2. 地山粒・砂質灰赤土、地山ブロック混入。盛り来。
3. 新質土と地山ブロック含む。
4. 3層に比べ地山粒均 にかむ。
5. 地山粒・地山ブロック混入。
6. 地山土主体。

第425号住居跡 カマド土層説明

1. SYR5/6 明 赤 褐色 土 焼土粒・ブロック・灰赤。灰赤・硬質粘土。
2. SYR5/4 におい赤褐色土 焼土粒・灰赤含む。灰層。
3. SYR4/3 におい赤褐色土 焼土粒・灰赤若干・地山粒含む。3張り方。

第425号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色 土 1層に比べ、地山粒やや多い。
3. 10YR5/3 におい黄褐色土 1層やや薄かく、地山粒含む。
4. 10YR6/6 明 黄 褐色 土 地山粒・ブロック含む。

第425号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/2 出褐色土 地山粒・粘上ブロック少量。
2. 10YR3/3 暗褐色土 1層に近似的、やや明るい。
3. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山粒多く含む。
4. 10YR2/4 暗褐色土 3層に近似的だが、暗い。
5. 10YR6/4 におい黄褐色土 地山粒・粘上ブロック含む。

0 2m

第422～424号住居跡 欠番

第425号住居跡 (第9・124図)

A I-22グリッドを中心に位置する。東隅部で第427・428・429号住居跡を切り、北隅部を第426号住居跡、第440号土壌に切られる。西隅部の第110・114号掘立柱建物跡、床面上の第179・180号井戸跡との重複関係は確認できなかった。軸長8.16m×8.50m、面積69.36㎡を測る大型の住居跡である。主軸方向はおおよそN-61°-Eを指す。

床までの深さは5～15cm程で、覆土は自然堆積と思われる。床は前面に貼り床が施され、中央部がやや高まる。壁溝は西隅部を除いて全周し、幅15～30cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁のやや東寄りに設けられる。燃焼部は80cm×49cmの長方形で、火床部はやはり地山土が貼られている。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径72～95cm、深さ40～74cmである。上部の覆土が乱れていることから、柱は抜き取られたものと考えられる。

貯蔵穴はカマドと東隅部の中間に備わる。上面は径74cm×70cmの不整形形で、深さは29cmを測る。

遺物は土師器の坏や須恵器の坏・壺のほか、鉄製の棒状品(第428図21)などが出土している。

第426号住居跡 (9・125図)

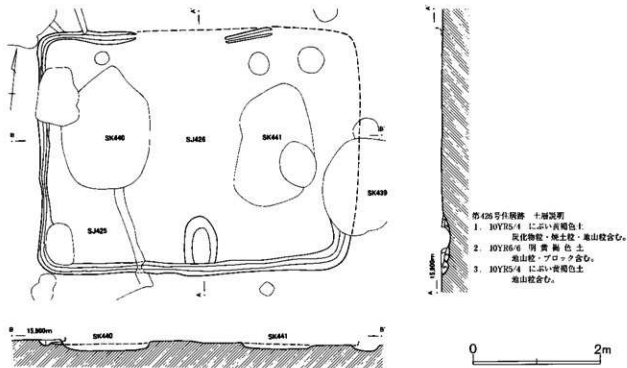
A I-23グリッドに位置する。西辺部で第425号住居跡を切り、第441号土壌に切られる。ほとんど床面での検出であったため、第439・440号土壌との重複関係や、北東部の壁溝は確認できなかった。平面は軸長3.82m×5.00mの長方形で、面積は19.10㎡となる。主軸方向はおおよそN-8°-Wを指す。

わずかに観察し得た覆土は、特に埋め戻された様子などは窺えなかった。壁溝は幅15～30cm、深さ約10cmを測る。床面は南から北へわずかに傾斜する。

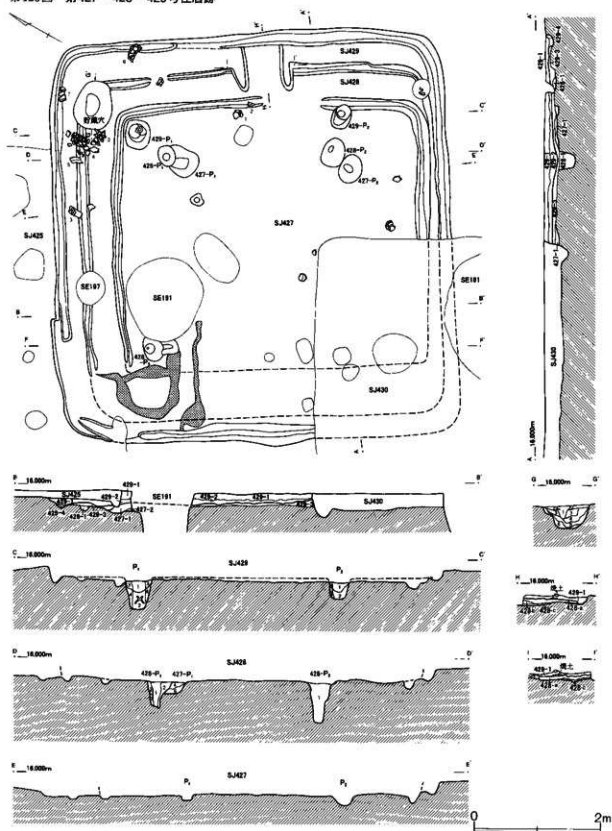
南壁中央部に検出された楕円形の掘り込みは、当初、カマドの燃焼部かとも思われたが、焼土や炭化物も少なく、底面もまったく焼けていなかった。

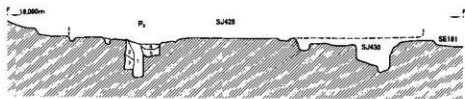
柱穴・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第125図 第426号住居跡



第126图 第427·428·429号住居跡





第427号住居跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・ブロック含む。
2. 10YR4/6 褐色土 地山土主体。

第428号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒含む。

第429号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR5/3 暗褐色土 土中のやや粗かく、焼土粒若干含む。
- b. 10YR4/4 褐色土 土中土粒含む。地山粒混入。
- c. 10YR6/6 明黄褐色土 地山土混入。

第429号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山粒、若干の焼土・炭化物粒を含む。
2. 10YR4/4 褐色土 土層に比べ地山粒多く含む。
3. 10YR5/3 に近い黄褐色土 地山土多く含む。
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 土層より地山ブロック多く含む。
5. 10YR6/6 明黄褐色土 地山ブロック多く含む。

第429号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山粒・地山ブロック・焼土粒を含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 土層に比べ硬い。
3. 10YR6/6 明黄褐色土 地山粒・地山ブロック多く含む。貼り床。
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 焼土粒を含む。地山粒混入。

第429号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒・焼土ブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 土層に比べ、地山粒が少ない。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 土層に比べ、地山粒多く含む。
5. 2.5YR4/6 オリーブ褐色土 4層に比べ、粘土ブロック含む。
6. 2.5YR6/6 明黄褐色土 粘土ブロックを含む。

第429号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山粒多く、焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR4/4 褐色土 焼土・炭化物粒を含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 土層に近似的だが、やや明るい。
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山土をやや多く含む。

第427・428・429号住居跡 (第9・10・126図)

A J-23グリッドを中心に位置する。3軒はきれいな入れ籠状となって検出された。覆土の観察からは、第427号住居跡→第428号住居跡→第429号住居跡へと、順次拡張されたものと理解される。南隅を第430号住居跡に切られる他、床を第181・191号井戸跡に掘り抜かれる。

第427号住居跡は軸長4.30m×5.10m、面積21.93㎡、第428号住居跡は軸長5.50m×5.80m、面積31.90㎡、第429号住居跡は軸長6.50m×6.40m、面積41.60㎡をそれぞれ測る。主軸方向はともにN-60°-Eを指す。

床までの深さは、最も新しい第429号住居跡が約20cmである。第427・428号住居跡の覆土は新住居構築の際の埋め戻しで、第429号住居跡のそれは自然堆積である。

壁溝は第427・428号住居跡の南西壁を除き、いずれもほぼ全周する。幅は15~20cm、深さは4~8cmである。第429号住居跡の床は貼り床で、概ね平坦である。第427・428号住居跡の床もほぼ平坦ながら、拡張の際に掘り下げられた可能性がある。

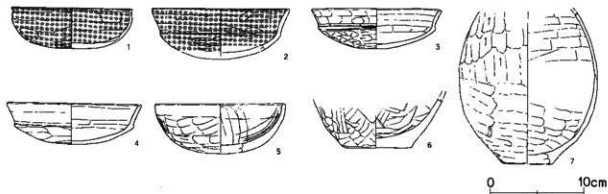
カマドは第428号住居跡の北東壁、ほぼ中央に検出された。先端部は第429号住居跡の壁溝に切られるが、壁までは達していなかったと考えられる。残存する燃焼部は73cm×65cmで、火床面は床面よりやや高まる。他の2軒からは、カマド自体の検出はなかった。しかしながら、第427号住居跡の壁溝は北東壁の中央が途切れており、ここにカマドが位置した可能性がある。また、第429号住居跡のカマドは壁溝の状況から推して、第430号住居跡に切られた南西壁に位置したと思われる。

主柱穴は第427号住居跡で2本(径17~42cm、深さ8~14cm)、第428号住居跡では3本(径40~53cm、深さ30~60cm)、第429号住居跡は2本(径34~42cm、深さ32~50cm)検出された。

貯蔵穴は第429号住居跡の北隅部に検出された。上面は径76cm×60cmの楕円形を呈し、深さは36cmを測る。

遺物の大半は、第429号住居跡の覆土中から出土した。土器器の坏・高坏・甕・瓶、滑石製の剣形模造品?(第425図4)などが図示できた。また、第427号住居跡からも坏や甕が出土している。

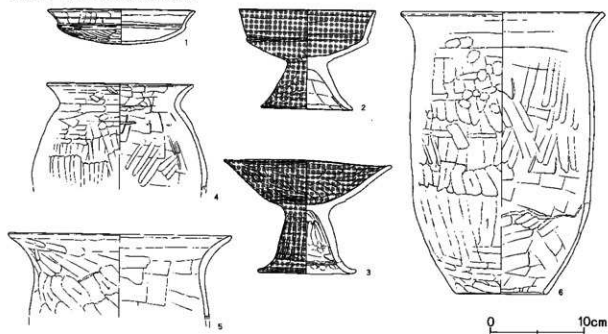
第127图 第427号住居跡出土遺物



第51表 第427号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.0	4.3		粗 (C)	普	明 赤 褐	65	比企型 赤彩
2	坏	(14.8)	(4.6)		細 (W)	良	にぶい 橙	破片	赤彩
3	坏	13.9	4.3		微 (W, B)	普	橙	80	
4	坏	15.0	4.4		微 (W, B)	普	橙	30	
5	碗	(14.0)	(5.2)		微 (W, B)	普	明 赤 褐	25	
6	甕		(5.3)	7.2	微 (W)	良	にぶい 黄 橙	底部片	底郡木葉痕
7	甕		(16.1)	5.3	粗 (片)	普	にぶい 橙	45	

第128图 第429号住居跡出土遺物



第52表 第429号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	15.8	3.2		粗 (W, B, R)	良	明 赤 褐	90	
2	高坏	(14.6)	(10.5)	(10.0)	粗 (C, F)	良	赤 橙	60	赤彩
3	高坏	17.0	12.1	10.1	微 (W, B)	良	明 赤 褐	90	赤彩
4	甕	15.6	(11.2)		粗 (C, F)	普	橙	破片	
5	瓶	(24.0)	(8.8)		粗 (W, B)	普	浅 黄 橙	破片	
6	瓶	(21.9)	29.7	(9.7)	粗 (W, R)	普	橙	20	

第430号住居跡 (第10・130図)

A J-23グリッドを中心に位置する。北隅部で第427・428・429号住居跡を、南隅部で第431号住居跡をそれぞれ切る。逆に床の一部は、第181号井戸跡に掘り抜かれる。全体は軸長5.60m×5.65mの方形で、面積は31.64㎡を測る。主軸方向はおおよそS-62°-Wを指す。

床までの深さは30~40cm、覆土は自然堆積を示す。壁は垂直に立ち上がり、床面はおおよそ平坦である。壁溝は全周し、幅約25cm、深さ約10cmを測る。

カマドは南西壁のやや南寄りに設けられる。煙道は長さ82cm、幅18cmのトンネル状に掘り抜かれ、端部はビット状の立ち上がりとなる。燃焼部は80cm×62cmの

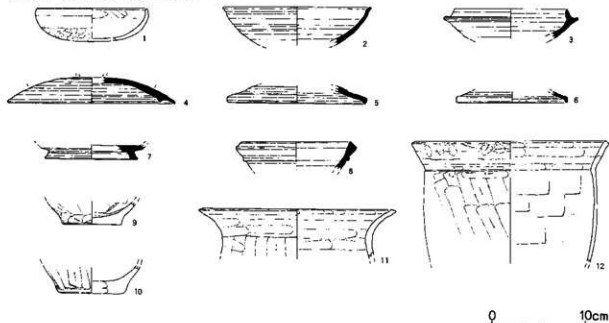
楕円形で、焚き口部は足場状の窪みとなる。火床面はこれより4cm程低く、灰が厚く堆積していた。

柱穴は3本検出されており、位置的に見て主柱穴と思われる。径30~67cm、深さ26~45cmである。なお、東部に予想されるPは、第181号井戸跡に破壊されてしまったようである。

貯蔵穴はカマド右袖に隣接して備わる。上面は径37cm×60cmの長方形を呈し、深さは46cmを測る。

遺物はカマドの袖の上や、煙道の底面などから、土師器の坏や甕、須恵器の蓋环、鉄製の不明製品(第428図23・30)などが出土している。いずれも小さな破片であり、図示できたものは少ない。

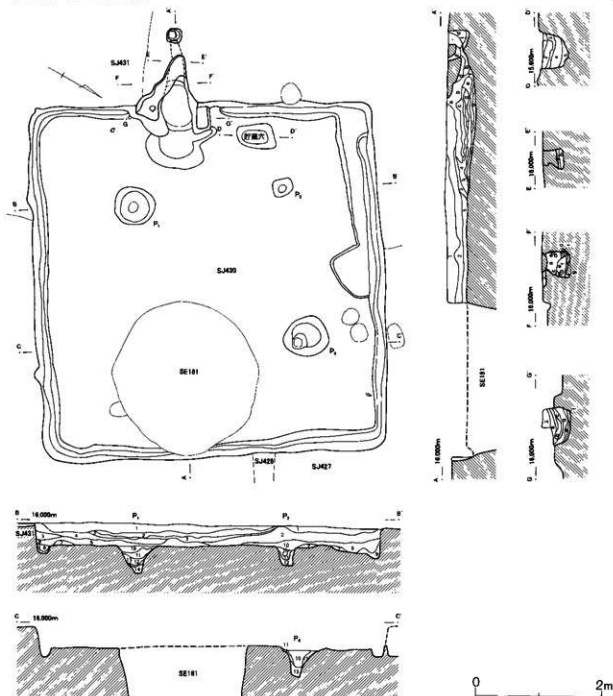
第129図 第430号住居跡出土遺物



第53表 第430号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.7)	(3.4)		粗(W, B)	良	にぶい 橙	破片	南北企 胎土分析 No 13 内外面自然釉付着
2	須恵器 坏	(15.9)	(4.1)		細(F)	良	灰	破片	
3	須恵器 坏	(12.0)	(3.2)		微(F, 針)	良	灰 白	破片	
4	須恵器 蓋	(17.9)	(2.7)		粗(F)	良	灰 白	25	
5	須恵器 蓋	(14.6)	(1.9)		微(F)	良	灰 白	破片	
6	須恵器 甕	(11.8)	(1.2)		粗(F)	良	灰	破片	
7	須恵器 壺		(1.6)	(10.0)	粗(W, F)	良	灰 白	破片	
8	須恵器 壺	(11.6)	(3.0)		粗(F)	良	灰 白	破片	
9	甕		(2.5)	(6.2)	雑(R)	普	にぶい 橙	破片	
10	甕		(3.0)	(7.0)	粗(W, R)	普	にぶい 橙	破片	
11	甕	(21.1)	(5.3)		雑(W, B, R)	普	にぶい 橙	破片	
12	甕	(20.4)	(12.9)		粗(W, R)	普	にぶい 黄橙	破片	

第130図 第430号住居跡



第430号住居跡 上層説明 (柱穴含む)

1. 10YR4/2 灰 褐色土 焼土粒・炭化物粒含み、均一に地山粒混入。
2. 10YR5/6 黄 褐色土 1層より地山粒多く、地山ブロック混入。
3. 10YR4/6 暗 褐色土 2層に準ずるが、地山粒・ブロック少なく開解的。
4. 10YR3/4 暗 褐色土 1層より地山少ない。焼土粒微量含む。
5. 10YR3/2 黒 褐色土 地山粒・地山ブロック含む。
6. 10YR3/2 暗 褐色土 2層と5層の中間。地山粒・ブロック若干含む。
7. 10YR5/8 明 黄褐色土 地山主体。
8. 10YR3/3 暗 褐色土 5層に近似するが、やや明るい。
9. 10YR4/4 暗 褐色土 はほとんど地山、壁・底の管状化、赤褐色土層。
10. 10YR4/4 黄 褐色土 地山粒・焼土粒含む。
11. 10YR3/4 暗 褐色土 地山粒・焼土・炭化物粒含む。
12. 10YR5/4 に近い黄褐色土 砂質地山土混入。
13. 2.5YR5/6 明 赤 褐色土 焼土層主体。カマド焼土混入。
14. 10YR3/3 に近い黄褐色土 砂質地山混入。

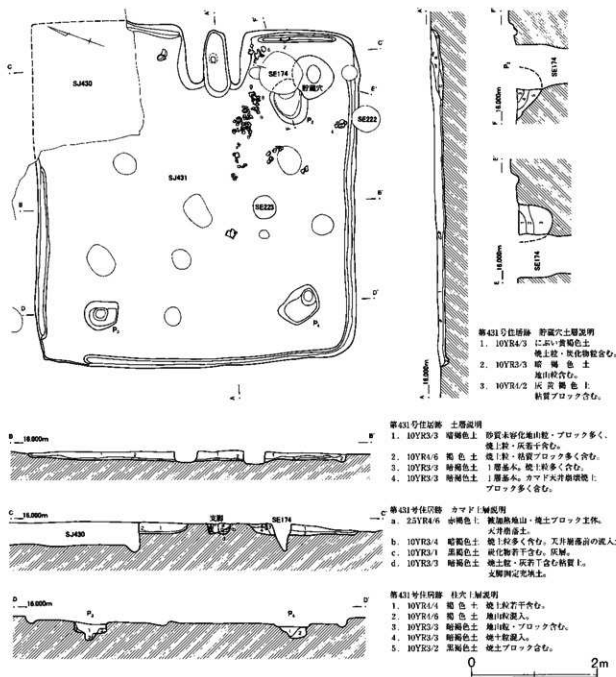
第430号住居跡 カマド(解説)

- a. 10YR4/4 暗 褐色土 砂質地山ブロック主体。管化未進行。
- b. 10YR4/4 暗 褐色土 断面はaと同じ。ブロックやや小さく焼土粒微量含む。
- c. 10YR3/3 暗 褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。自然埋積。
- d. 10YR3/3 暗 褐色土 c層に似る。焼土若干含むが厚。均。
- e. 2.5YR4/6 赤 褐色土 焼土・堆積地山ブロック主体。天井・壁の崩落1。
- f. 10YR4/1 黒 褐色土 焼土ブロック若干含むが1aとcより単純な層。(二次的)
- g. 10YR3/1 黒 褐色土 炭化物多く含む灰層。(1次前)

第430号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/1 黒 褐色土 焼土粒・砂質地山ブロック含む。
2. 10YR6/4 に近い黄褐色土 砂質地山主体。
3. 5YR5/6 明 赤 褐色土 焼土層・焼土粒・炭化物粒主体。
4. 10YR6/4 に近い黄褐色土 2層に近似。砂質土層。
5. 10YR6/4 に近い黄褐色土 4層より砂質土のしまり強い。

第131図 第431号住居跡



第431号住居跡 (第10・131図)

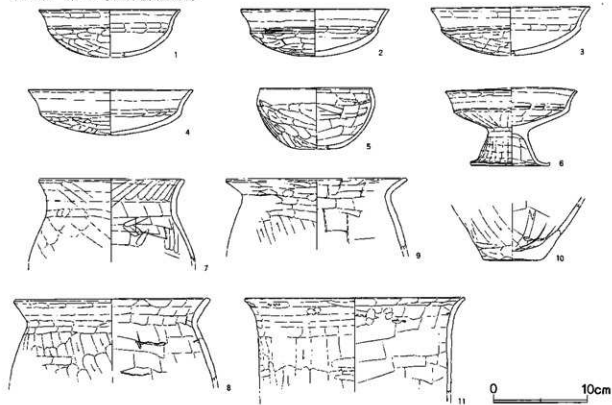
AK-24グリッドを中心に位置する。北隅部を第430号住居跡、貯蔵穴と主柱穴の一部を第174号井戸跡に切られる。第222・223号井戸跡との重複関係は確認できなかった。全体は軸長5.40m×5.08mの方形で、面積は27.43㎡を測る。主軸方向はおよそN-68°-Eを指す。

床までの深さは15cm前後、覆土は自然堆積を示すようである。

壁の立ち上がりは急で、床面は中央部が微かに窪む。壁溝は東西の隅部を除いて全周する。幅は約15cm、深さは約4cmである。

カマドは北東壁の中央、やや東寄りに付設される。燃焼部は107cm×40cmの楕円形で、火床面は床より2.4

第132図 第431号住居跡出土遺物



第54表 第431号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.2)	(5.1)		粗 (W, R)	赤	橙	25	
2	坏	16.0	5.1		微 (W, B)	赤	浅黄橙	80	小針型
3	坏	(17.0)	(5.2)		微 (W, B)	赤	浅黄橙	50	小針型
4	坏	(17.6)	4.9		微 (W, B)	赤	浅黄橙	40	小針型
5	碗	(12.0)	(6.3)		粗 (片)	赤	橙	25	
6	高坏	14.2	8.2	(8.2)	微 (W, B)	赤	浅黄橙	90	小針型
7	甕	(15.6)	(8.8)		粗 (B, R)	赤	黄橙	破片	
8	甕	(21.0)	(8.9)		粗 (W, 片)	赤	にぶい橙	破片	
9	甕	(18.6)	(7.4)		粗 (W, 片)	赤	にぶい橙	破片	
10	甕		(6.1)	6.0	粗 (W, R, 片)	赤	にぶい橙	破片	
11	甕	(23.6)	(10.1)		粗 (W, R, 片)	赤	にぶい黄橙	破片	

cm深い。その中心部には、地山を用いた支脚が造り付けられていた。

検出された3本の柱穴は、その配置から見て主柱穴と考えられる。径48~58cm、深さ22~40cmである。主柱穴としては浅いため、北部に予想されるP1は、第430号住居跡に切られてしまったようである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径60cmの円形を呈し、深さは54cmを測る。

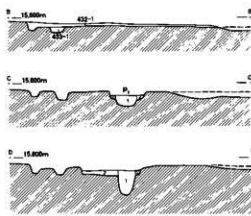
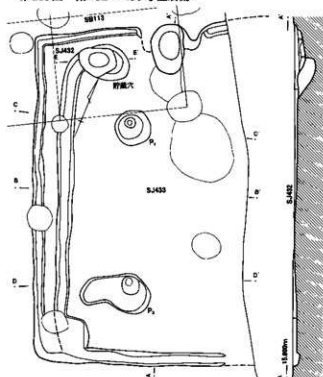
遺物はカマドの前面部を主体に、土師器の坏・高坏・甕などが出土している。いずれも床からは浮いた状

態で、細かい破片となって見出された。

第432・433号住居跡 (第10・133図)

A J-25グリッドに位置する。東側は調査区外となるため、ともに全体の規模や施設については明らかでない。両住居跡は一边を共有する入れ籠状の重複で、第433号住居跡の覆土は人為的な埋め戻しと判断される。このことから2軒は、第433号→第432号と拡張が行われた住居跡と考えられる。南北の軸長は第432号住居跡が約5.40m、第433号住居跡が5.00mである。ともに全体は方形を呈するものと思われ、主軸方向は

第133図 第432・433号住居跡



第432号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

1. 10Y7R3/1 黒褐色土 地山ブロック多。
2. 10Y7R4/6 紫褐色土 焼土粒多。
3. 10Y7R4/3 濃い黄褐色土 焼土粒・灰片。

第433号住居跡 土層説明

1. 10Y7R3/2 紫褐色土 地山ブロック・粒多。

第432号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10Y7R3/1 紫褐色土 焼土粒多い。
2. 10Y7R3/3 紫褐色土 地山ブロック多い。

第433号住居跡 柱穴土層説明

1. 10Y7R3/1 紫褐色土 地山・焼土粒含む。
2. 10Y7R3/4 紫褐色土 地山ブロック多。



第55表 第432号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.8)	(3.5)		粗 (W, B, R)	赤	にぶい黄緑	破片	

およそN-24°-Wを指す。

第432号住居跡の床までの深さは6cm程で、覆土は自然堆積である。2軒の床は同一面に検出されたが、拡張時に掘り下げが行なわれたか否かは明らかでない。確認した床面は、住居中央がやや高まる。壁溝は第432号住居跡で幅約15cm、深さ約5cm、第433号住居跡で幅約25cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁に設けられる。燃焼部は80cm×49cmの楕円形で、床面より約8cmの深さに火床面が形成される。第433号住居跡のカマドは不明である。

第432号住居跡の貯蔵穴は、東隣部で第433号住居跡の壁溝を切り込んでいた。上面は径56cm×82cmの楕円形を呈し、深さは44cmを測る。第433号住居跡の貯蔵穴は不明である。

柱穴はいずれの住居跡からも検出されなかった。

遺物は第432号住居跡の覆土より、土器器の坏1点が出土したにすぎない。

第134図 第432号住居跡出土遺物



第434号住居跡 (第9・135図)

A J-20グリッドに位置する。第356・365号住居跡との重複関係は確認できなかった。平面は軸長3.23m×3.18mの方形で、面積は10.27㎡を測る。長軸方向はおよそN-33°-Wを指す。

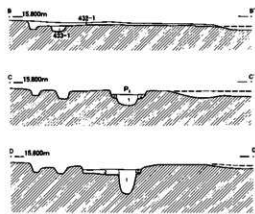
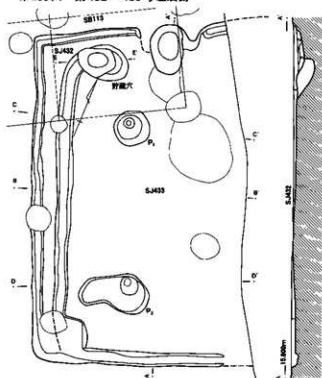
床までの深さは6cm程度で、覆土は自然堆積のようである。壁溝は見られず、床面は南東から北西へわずかに傾斜する。

柱穴は2本検出された。主柱穴のようだが、壁に寄り過ぎる感がある。径約36cm、深さ約35cmである。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、須恵器壺の破片1点を検出したのみである。

第133図 第432・433号住居跡



- 第432号住居跡 土層説明 (カマドを含む)
1. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック多。
 2. 10YR4/6 暗褐色土 土土多。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 土土段・灰合。
- 第433号住居跡 土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック・較多。
- 第432号住居跡 貯蔵穴土層説明
1. 10YR3/1 黒褐色土
 2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多い。
- 第433号住居跡 柱穴土層説明
1. 10YR3/1 黒褐色土 地山段・粘土段含む。
 2. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック多い。

第55表 第432号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.8)	(3.5)		粗 (W, B, R)	青	にぶい黄褐色	破片	

およそN-24°-Wを指す。

第432号住居跡の床までの深さは6cm程で、覆土は自然堆積である。2軒の床は同一面に検出されたが、拡張時に掘り下げが行なわれたか否かは明らかでない。確認した床面は、住居中央がやや高まる。壁溝は第432号住居跡で幅約15cm、深さ約5cm、第433号住居跡で幅約25cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁に設けられる。燃焼部は180cm×49cmの楕円形で、床面より約8cmの深さに火床面が形成される。第433号住居跡のカマドは不明である。

第432号住居跡の貯蔵穴は、東隅部で第433号住居跡の壁溝を切り込んでいた。上面は径56cm×82cmの楕円形を呈し、深さは44cmを測る。第433号住居跡の貯蔵穴は不明である。

柱穴はいずれの住居跡からも検出されなかった。

遺物は第432号住居跡の覆土より、土師器の坏1点が出土したにすぎない。

第134図 第432号住居跡出土遺物



第434号住居跡 (第9・135図)

A J-20グリッドに位置する。第356・365号住居跡との重複関係は確認できなかった。平面は軸長3.23m×3.18mの方形で、面積は10.27㎡を測る。長軸方向はおよそN-33°-Wを指す。

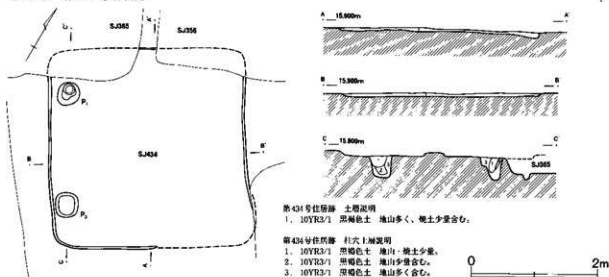
床までの深さは6cm程度で、覆土は自然堆積のようである。壁溝は見られず、床面は南東から北西へわずかに傾斜する。

柱穴は2本検出された。主柱穴のようだが、壁に寄り過ぎる感がある。径約36cm、深さ約35cmである。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、須惠器壺の破片1点を検出したのみである。

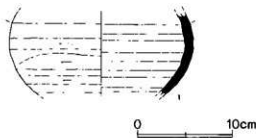
第135図 第434号住居跡



第56表 第434号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	須臾器	壺	(9.0)		緻 (R, F)		香 灰	破片	

第136図 第434号住居跡出土遺物



第435号住居跡 (第10・137図)

A J-24グリッドを中心に位置する。ほとんど壁溝での確認であったため、第414・436・437号住居跡との重複関係は明らかとし得なかった。しかも、北東壁の一部が検出できたに過ぎず、全体の規模や形状、施設等についてはまったく不明である。

壁溝は幅約15cm、深さ約6cmを測る。

遺物は壁溝中より少量出土した。古墳時代後期の土師器片であるが、微細な破片のため図示できなかった。

第436号住居跡 (第10・137図)

A J-24グリッドに位置する。南西部で第442号住居跡を掘り抜くが、東南壁を第439号住居跡、床の一部を第442号土壌や第169号井戸跡に切られる。北隅部で重複する第435号住居跡との関係は確認できなかった。全体は軸長4.95m×5.37mの方形で、面積は26.58㎡を測る。主軸方向はおおよそN-29°-Wを指す。

床までの深さは15cm前後、覆土は人為的な埋め戻しである。床面は概ね平坦ながら、北東辺は全体的に一段低くなる。壁溝は一部を除いて全周する。幅約20cm、深さ約8cmである。

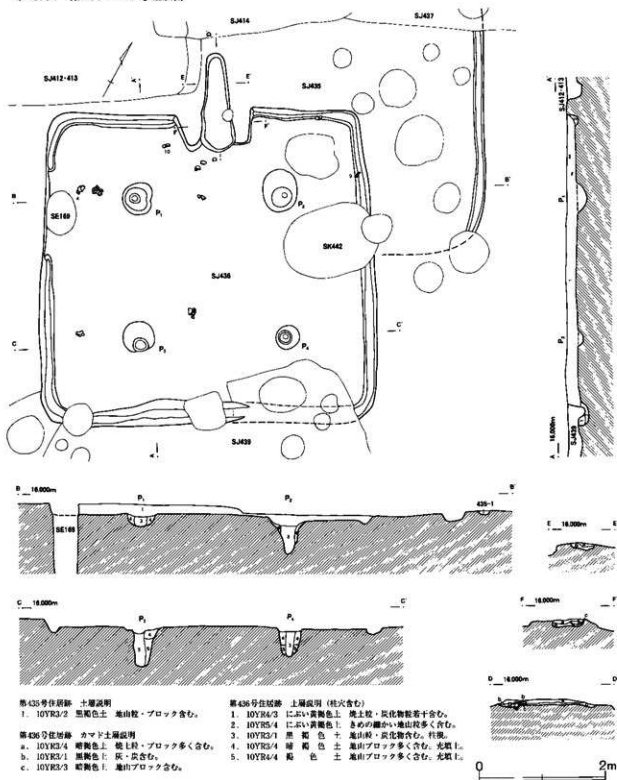
カマドは北西壁のおおむね中央に設けられる。燃焼部は154cm×50cmで、煙道と一体となっている。火床面は平坦で、薄く灰が堆積する。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径37~60cm、深さ20~60cmである。P1はかなり浅いが、4本ともに柱痕が観察された。

貯蔵穴は検出されなかった。北隅部に図示した落ち込みは、きわめて浅い皿状の窪みである。

遺物は床面上に散らばって出土した。いずれも破片で、土師器の坏・鉢・甕などが見られる。

第137図 第435・436号住居跡



第435号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 崖山粒・ブロック含む。

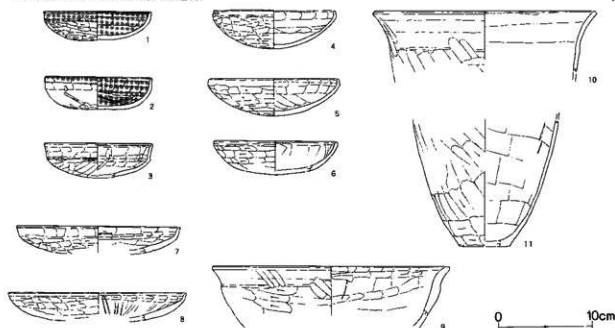
第436号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/4 暗褐色土 焼土粒・ブロック多く含む。
- b. 10YR2/1 黒褐色土 灰・炭含む。
- c. 10YR3/3 暗褐色土 崖山ブロック含む。

第436号住居跡 土層説明 (柱穴含む)

- 1. 10YR4/3 におい黄褐色土 焼土粒・炭化物散在含む。
- 2. 10YR5/4 におい黄褐色土 きめの細かい崖山粒多く含む。
- 3. 10YR2/1 黒褐色土 崖山粒・炭化物含む。柱状。
- 4. 10YR2/4 暗褐色土 崖山ブロック多く含む。光輝土。
- 5. 10YR4/4 暗褐色土 崖山ブロック多く含む。光輝土。

第138図 第436号住居跡出土遺物



第57表 第436号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.5	3.2		粗 (C, R)	當	浅黄橙	95	比企型 赤彩
2	坏	(11.5)	3.3		粗 (W, C, R)	良	橙	50	比企型 赤彩
3	坏	11.6	3.7		微 (W)	良	にぶい橙	55	内外黒色処理
4	坏	12.9	4.1		細 (W, B)	普	橙	60	
5	坏	(13.8)	(3.9)		微 (W, B)	良	橙	30	
6	坏	(13.2)	(3.2)		微 (W, B)	普	橙	破片	
7	坏	(17.5)	2.9		確 (C)	良	にぶい橙	破片	
8	坏	(19.0)	(2.9)		微 (W, B)	普	橙	破片	
9	鉢	(25.4)	(5.3)		確 (W, R, 片)	普	にぶい橙	破片	
10	碗	(24.0)	(6.6)		細 (W, B)	普	にぶい橙	破片	
11	甕	(13.5)	(5.2)		微 (W, B)	普	橙	破片	

第437号住居跡 (第10・139図)

A I-24グリッドを中心に位置する。ほぼ床面での検出であり、第414・419号住居跡、第136・158号井戸跡との重複関係は把握できなかった。軸長の測れるのは一方向のみであるが、柱穴の位置からもう一方を想定すると、全体は約5.30m×5.30m、面積およそ28.09㎡の方形となる。長軸方向はおよそN-24°-Wを指す。

床面は中央部が窪む他、北東から南西へも傾斜する。壁溝は幅12~40cm、深さ約7cmを測る。

柱穴は主柱穴4本が検出された。径50~63cm、深さ24~36cmである。P₂以外には柱痕が観察された。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

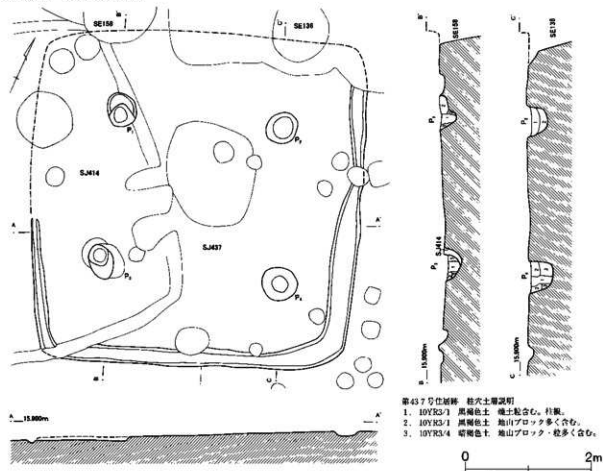
遺物はすべて壁溝中からの出土で、内面に暗文の施された土師器の坏・甕など5点である。但し、いづれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。このほか、鉄製の鎌(第427図5)が1点検出されている。

第438号住居跡 (第10・140図)

A I-25グリッドを中心に位置する。大半は東側の調査区外になり、南西の一角が検出できたにとどまる。故に、全体は方形と推測されるものの、規模や施設等については明らかでない。南西の軸長はおよそ4.00mで、軸方向はN-25°-Wを指す。

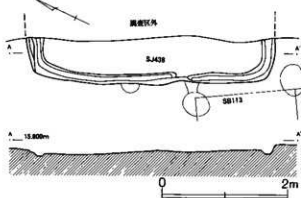
ほとんど床面での検出であったため、覆土は観察できなかった。その床面は、南から北へわずかに傾斜す

第139図 第437号住居跡



第437号住居跡 柱穴土層説明
 1. 10YR3/1 黒褐色土 礫土配合む。柱眼。
 2. 10YR3/1 黒褐色土 胎山ブロック多く含む。
 3. 10YR3/4 暗褐色土 胎山ブロック・粒多く含む。

第140図 第438号住居跡



る。壁溝は検出範囲でほぼ全周し、幅約15cm、深さ約5cmを測る。

古墳時代後期の坏4片が壁溝中より出土したが、微細な破片のため図示し得なかった。

第439号住居跡 (第10・141図)

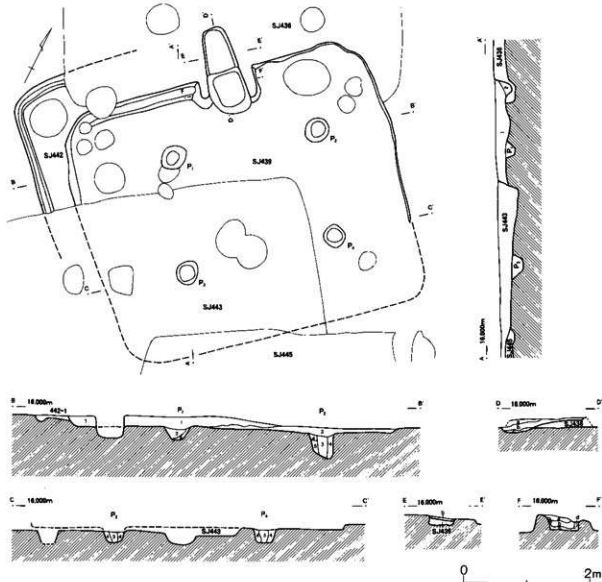
A J-24グリッドを中心に位置する。北西壁で第436号住居跡を切る他、第442号住居跡を広範に掘り抜く。反対に、南側は第443号住居跡に大きく切り取られる。第445号住居跡との重複関係は確認できなかった。東隅部が床面での検出であったため、主軸長は不明である。いま、これを柱穴の位置から推定するならば、住居跡の規模は約4.20m×5.24m、面積およそ22.01㎡となる。主軸方向はほぼN-40°-Wを指す。

床までの深さは5~15cm、覆土は人為的な埋め戻しである。第443号住居跡の構築に伴うものと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は南西から北東に向けてやや傾斜する。壁溝は北西壁の一部に検出された。幅約23cm、深さ約8cmを測る。

カマドは北西壁中央、やや北寄りに営まれる。煙道は長さ71cm、幅48cmで、底面は燃焼部から緩やかに立ち上がる。燃焼部は70cm×62cmの方形で、火床面は床より5cm程低い。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径34~37cm、深さ18~40cmを測り、3本に柱痕が観察された。貯蔵穴は検出されなかった。図示した2個体の甕はカマド中より出土した。

第141図 第439・442号住居跡



第439号住居跡 カマド土層説明

- a. 5YR3/4 暗赤褐色土 焼土粒・ブロック多く含む。
- b. 5YR3/1 に近い赤褐色土 焼土粒・地山粒含み、炭化物粒混入。
- c. 7.5YR4/2 灰褐色土 土層に比べ焼土粒やや少ない。
- d. 7.5YR5/4 に近い褐色土 地山粒含む、粘質黄土。

第442号住居跡 土層説明

- 1. 10YR6/4 に近い黄褐色土 地山粒・ブロックやや多く含む。
- 2. 土配穴底
- 3. 土配穴底

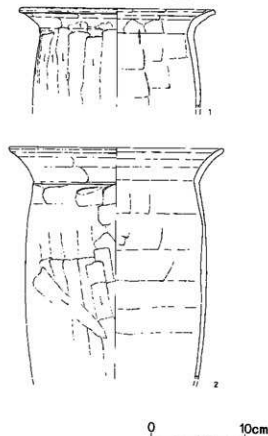
第439号住居跡 土層説明 (柱穴含む)

- 1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・焼土ブロックやや多く、炭化物粒・地山粒含む。
- 2. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山粒・炭化物粒若干含み、地山ブロック混入。
- 3. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・地山粒含む。柱痕。
- 4. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多く含む。光沢土。
- 5. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。

第58表 第439号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	J径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(20.5)	(10.4)		粗 (W, B, R)	普通	灰褐色	破片	
2	甕	(22.9)	(24.4)		細 (B)	良好	にぶい橙	破片	

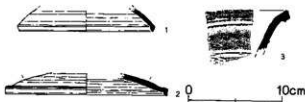
第142図 第439号住居跡出土遺物



第440号住居跡 (第10・144図)

AK-21グリッドに位置する。カマドの煙道で第418号住居跡を切り、南隅部を第112号溝跡に切られる。第402・446号住居跡、第444・484・486号土城、第445号井戸跡との重複関係は確認できなかった。全体は軸長3.90m×3.30mの方形を呈し、面積は12.87㎡を測る。主軸方向はおおよそN-53°-Eを指す。

第143図 第440号住居跡出土遺物



第59表 第440号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 甕	(13.7)	(2.4)		細 (F)	良	灰 白	破片	
2	須恵器 蓋	(17.7)	(2.2)		細 (W, F)	良	灰 白	破片	自然軸付者
3	須恵器 甕		(4.4)		細 (F, 針)	良	灰	破片	南比金

床までの深さは15cm前後、覆土は自然堆積を示す。床面はおおよそ平坦で、壁溝は見られない。

カマドは北東壁のやや東寄りに付設される。煙道は長さ102cm、幅39cmで緩やかに立ち上がる。燃焼部は38cm×47cmの方形で、灰層や焼土ブロックなどはほとんど見られない。火床面は平坦で、焼けた様子はあまり窺えない。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径40cm×35cmの不整形円で、深さは12cmと浅い。

遺物は土器器の甕や須恵器の蓋・甕が、カマドの覆土などから数点出土した。いずれも細かい破片であり、3点を図示し得たにすぎない。

第441号住居跡 (第9・10・145・146)

AJ-22グリッドを中心に位置する。他住居跡との重複はないが、中央部を第111号溝跡に掘り抜かれる。全体は軸長4.45m×4.34mの方形で、面積は19.31㎡を測る。主軸方向はおおよそN-48°-Eを指す。

床までの深さは最大15cm、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は北から南へわずかに傾斜する。壁溝はおおむね全周し、幅16~32cm、深さ6~10cmを測る。

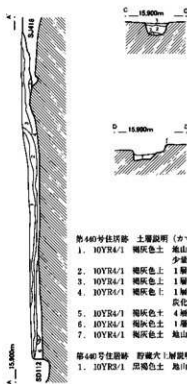
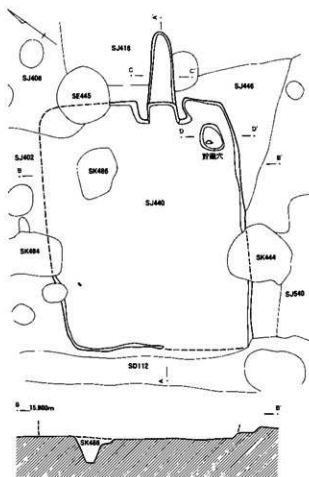
カマドは北東壁のほぼ中央に設けられる。右袖は攪乱を受け明瞭ではないが、燃焼部は38cm×28cmの長方形で、火床面はおおよそ平坦である。

柱穴は4本の主柱穴が検出された。径29~35cm、深さ42~44cmで、柱痕は観察できなかった。また南東の壁際でも、土塊状の浅い掘り込み(P)が検出された。径約60cm、深さ約20cmである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径67cmの方形を呈し、深さは42cmを測る。

遺物は貯蔵穴からカマド周辺にかつ、多量に出土している。いずれも床面から貯蔵穴上層に見出されたが、すべて押し潰されたような状態であった。

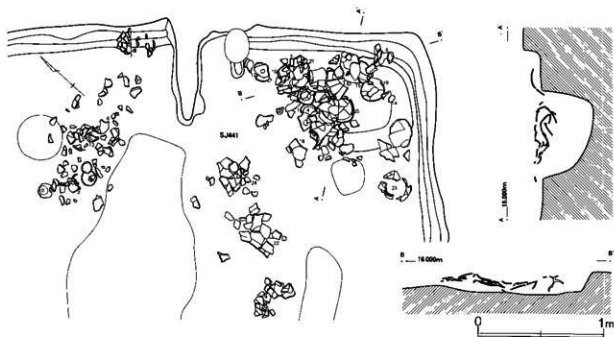
第144図 第440号住居跡



- 第440号住居跡 土層説明 (カマド含む)
1. 10YR4/1 褐色色土 地山多少、礫土・炭化物少量含む。
 2. 10YR4/1 褐色色土 1層より地山多い。
 3. 10YR4/1 褐色色土 1層より地山少ない。
 4. 10YR4/1 褐色色土 1層より礫も地山少なく炭化物多い。
 5. 10YR4/1 褐色色土 4層より炭化物少ない。
 6. 10YR4/1 褐色色土 1層より地山最も多い。
 7. 10YR4/1 褐色色土 地山・礫1少含む。
- 第440号住居跡 貯蔵穴土層説明
1. 10YR3/1 赤褐色土 地山・礫1少含む。

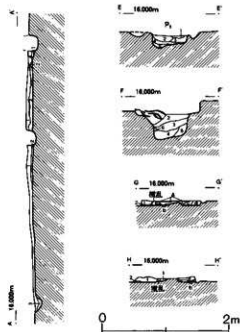
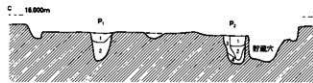
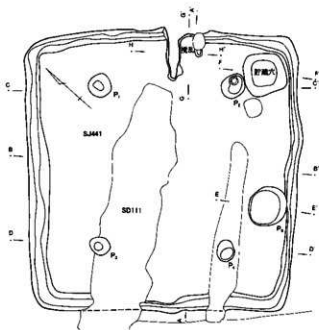
0 2m

第145図 第441号住居跡カマド・貯蔵穴



0 1m

第146図 第441号住居跡



第441号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒含む。
3. 10YR6/6 明黄褐色土 地山粒やや多く含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 地山ブロック含む。

第441号住居跡 竃土層説明

- a. 25YR5/6 明黄褐色土 焼土粒・ブロック多く含む。
- b. 10YR6/2 灰黄褐色土 粘土ブロック含む。
- c. 7.5YR3/4 にぶい褐色土 黄白色粘土ブロック含む。
- d. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物粒・焼土粒含む。

第441号住居跡 野蔵穴土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・地山粒含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山粒含む。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質粘土主体で、焼土粒含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 砂質粘土主体。
5. 10YR6/6 明黄褐色土 土きのやや粗く、しまりあり。
6. 10YR6/6 明黄褐色土 5層に近。ややしまりあり。

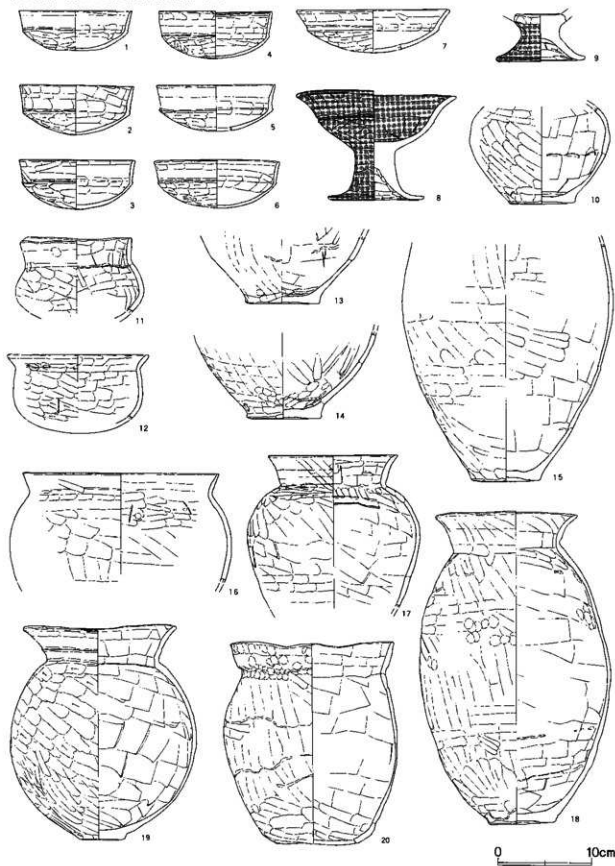
第441号住居跡 竃土層説明

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山粒多く含む。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山土・砂質土含む。
4. 10YR4/4 褐色土 地山粒含む。
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 砂質地山土含む。

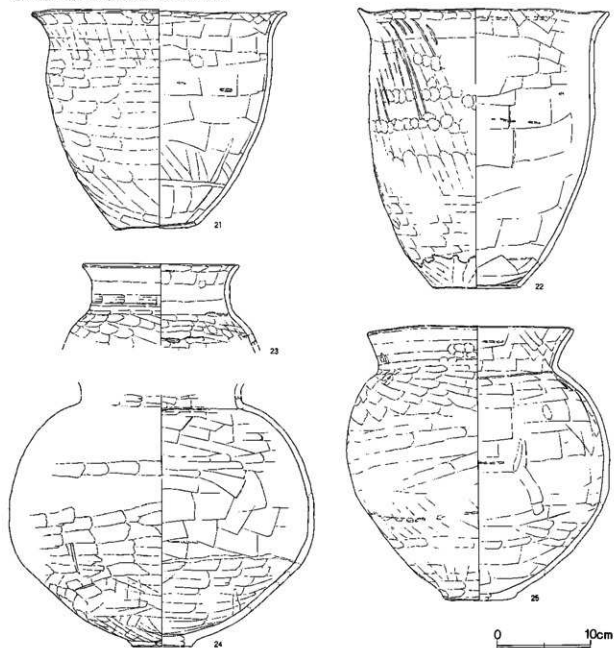
第60表 第441号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	120	(4.3)		細(W, B)	普	橙	40	
2	坏	122	5.3		粗(W, B, R)	普	橙	100	
3	坏	(12.4)	5.0		細(W, B, R)	普	橙	55	
4	坏	122	5.1		粗(W, C, R)	普	橙	90	
5	坏	(12.8)	(4.9)		細(W, B, R, F)	普	橙	破片	
6	坏	(13.6)	5.1		微(W, B)	普	橙	60	
7	坏	(16.4)	(4.4)		細(W, R)	普	橙	破片	
8	高支	17.3	11.6	(10.6)	礫(W, 片)	良	にぶい橙	90	赤彩
9	支		9.5		粗(W)	良	にぶい黄橙	脚部75	赤彩 高坏の転用
10	甕		(10.4)	7.1	礫(W, R, 片)	普	橙	40	
11	鉢	(12.1)	(8.0)		粗(W, 片)	普	橙	70	
12	鉢	(15.0)	(7.0)		粗(W, 片)	普	橙	破片	
13	甕		(7.2)	7.9	粗(片)	普	橙	破片	
14	甕		(9.1)	8.0	礫(W, 片)	普	橙	破片	

第147图 第441号住居跡出土遺物(1)



第148図 第441号住居跡出土遺物(2)



第61表 第441号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
15	甕		(25.1)	7.3	礫(W, 片)	劣	明赤褐	40	
16	甕	(21.0)	(11.7)		粗(W, R, 片)	劣	赤褐	破片	
17	甕	(14.0)	(16.2)		粗(W, 片)	劣	褐	破片	
18	甕	15.4	(33.3)	12.2	礫(W, 片)	劣	にぶい	投	90
19	壺	(15.8)	22.8	4.4	粗(W, B)	劣	にぶい	投	90
20	瓶	17.6	21.3	(8.7)	粗(W, R, 片)	劣	にぶい	投	70
21	瓶	27.4	23.4	9.0	礫(W, C, 片)	劣	褐		100
22	瓶	(27.0)	29.7	9.1	粗(W, R, 片)	劣	赤褐		70
23	壺	(16.8)	(8.6)		粗(W, R, F)	劣	にぶい	投	破片
24	壺		(26.8)	(6.5)	礫(W, F)	劣	明赤褐		40
25	壺	22.2	29.1	7.5	礫(W, R, 片)	劣	にぶい	投	85

第442号住居跡 (第10・142図)

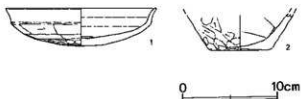
A J-24グリッドを中心に位置する。西隅部のごく一部が検出されたのみで、大部分は第436・439・443号住居跡に切られる。このため、全体の規模や形状、施設等についてはまったく不明である。

床までの深さは6cm程度で、覆土は故意に埋め戻されたものようである。壁溝は幅約16cm、深さ約3cmを測る。

遺物は覆土中より、甕や杯の破片を8点出土したの

みである。微細な破片がほとんどで、図示できたものは少ない。

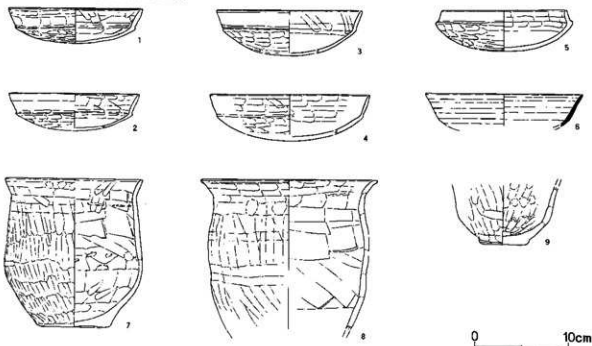
第149図 第442号住居跡出土遺物



第62表 第443号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(16.0)	4.0		雑 (W, R, F)	昏	にぶい橙	60	
2	甕		(3.8)	6.7	雑 (W, R, 片)	昏	にぶい黄橙	破片	

第150図 第443号住居跡出土遺物



第63表 第443号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(14.4)	3.8		微 (R)	良	にぶい黄橙	45	
2	杯	(14.0)	(3.7)		細 (R)	良	橙	破片	
3	杯	(15.6)	(4.5)		微 (W, B)	昏	橙	35	
4	杯	(17.2)	(4.2)		微 (W, B)	昏	橙	破片	
5	杯	(13.5)	4.4		粗 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	65	
6	須臾器 杯	(17.0)	(3.4)		粗 (W)	良	灰	破片	金井窓
7	甕	(14.5)	15.8	7.8	粗 (W, 片)	良	にぶい橙	70	
8	甕	(18.7)	(15.9)		粗 (W, C, R)	昏	にぶい橙	20	
9	甕		(6.6)	5.0	粗 (W, 片)	昏	にぶい橙	破片	

第443号住居跡 (第10・151図)

AK-24グリッドを中心に位置する。北側で第439・442号住居跡を東側で第444・445号住居跡をそれぞれ切る。全体は軸長5.44m×5.66mの方形を呈し、面積は約30.79㎡を測る。主軸方向はおよそS-54°-Wを指す。

床までの深さは15~25cm、覆土は単一ながら自然堆積である。床は第445号住居跡の覆土部分のみに貼り床を施している。床面は南から北へ向けて傾斜する。壁溝は北東壁以外におおぼ全周し、幅20~25cm、深さ約

3cmを測る。

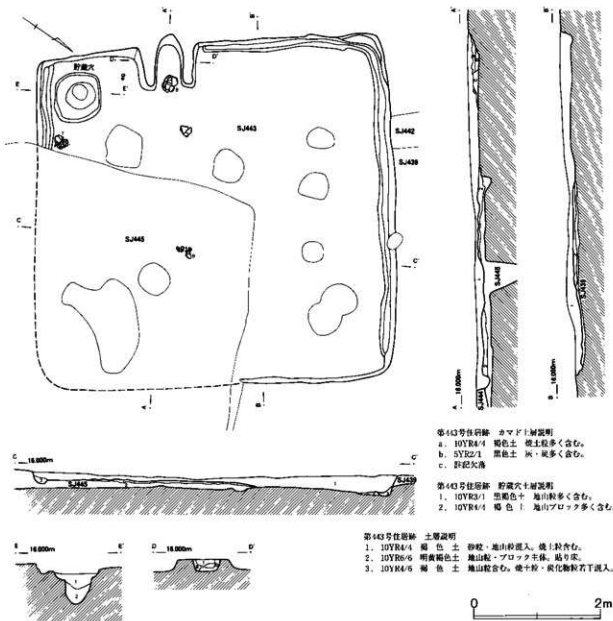
カマドは南西壁の南寄りに設けられる。燃焼部は96cm×44cmの楕円形で、火床面は床からわずかに窪む。

貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径86cmの方形だが、内部は径50cm程の円形となる。床面からの深さは52cmを測る。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマドより土器器の甕、貯蔵穴脇より坏と小型甕、覆土より滑石製の有孔円板未製品(第425図11)、* 磁石(第420図6)などが出土している。

第151図 第443号住居跡



第443号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR6/4 褐色土 礎土粒多く含む。
- b. 5YR2/1 黒色土 灰・炭多く含む。
- c. 貯蔵穴溝

第443号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/1 黒褐色土 地山礫多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。

第443号住居跡 土層説明

1. 10YR6/4 褐色土 砂粒・地山礫混入。炭粒を含む。
2. 10YR5/6 暗褐色土 地山礫・ブロック主軸。粘り床。
3. 10YR4/6 褐色土 地山礫を含む。燻土粒・炭化物粒若干混入。

0 2m

第444号住居跡 (第10・152図)

AK-25グリッドを中心に位置する。ほぼ第445号住居跡の上に、その覆土(自然堆積)を掘り込んで構築される。西隅部は第443号住居跡に切られるが、北隅の第178号井戸跡との重複関係は確認できなかった。全体は軸長4.70m×5.76mの長方形で、面積は27.07㎡を測る。主軸方向はおよそN-29°-Wを指す。

床までの深さは10~15cm程で、覆土は人為的な埋め戻しと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかで、壁溝は見られない。床面はおおむね平坦で、貼り床は観察でき

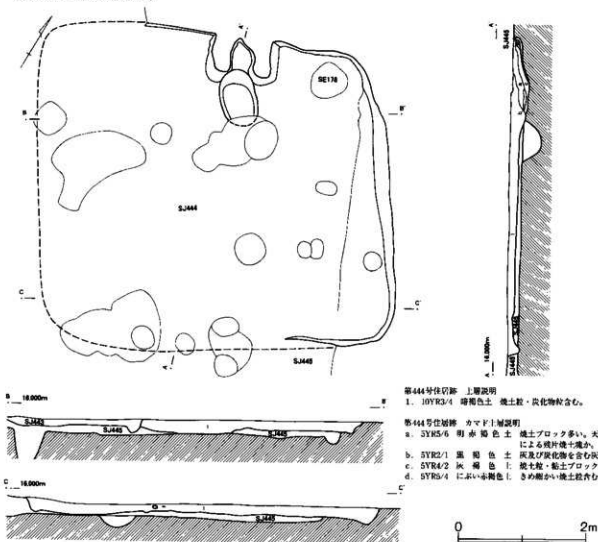
なかった。

カマドは北西壁の中央部、やや北寄りに設けられる。煙道は長さ50cm、幅40cmでほぼ垂直に立ち上がり、燃焼部は二段になり、焚き口部は足場状の窪みとなる。手前の楕円形の部分は92cm×58cmで、床からの深さ7.5cmを測る。

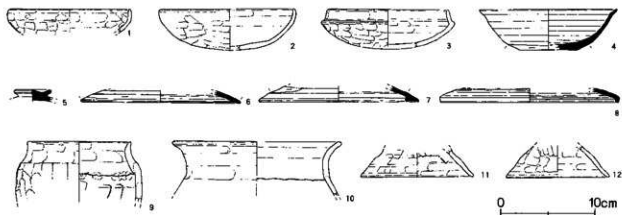
柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏や蓋、鉄製の不明製品(第428図33)などが出土している。

第152図 第444号住居跡



第153図 第444号住居跡出土遺物



第64表 第444号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	(2.5)		粗(W, B)	善	橙	破片	
2	坏	(14.8)	(4.3)		粗(W, B, R)	善	にぶい橙	50	
3	坏	(12.7)	(4.0)		粗(W, R, F)	善	にぶい黄橙	破片	
4	須忠器 坏	(14.5)	4.3	(6.1)	細(B, F)	善	黄 灰	40	湘西 胎土分析 No. 14
5	須忠器 壺	4.0	1.3		微(F)	良	灰 白	破片	
6	須忠器 壺			(17.0)	微(F)	良	灰	破片	群馬?
7	須忠器 壺			(16.9)	微(F)	良	灰 白	破片	湘西
8	須忠器 壺	(18.8)	(1.5)		微(F)	良	灰 白	破片	群馬
9	壺	(11.0)	(6.4)		粗(W, B, R, 片)	良	にぶい黄橙	破片	
10	壺	17.9	(5.7)		粗(W, B, R)	悪	橙	破片	
11	台付 壺	(3.0)	(11.9)		粗(W, B, R)	良	にぶい橙	破片	
12	台付 壺		(3.4)	(10.9)	粗(W, B, R)	良	にぶい橙	破片	

第445号住居跡 (第10・154図)

AK-24グリッドを中心に位置する。埋没後、第443・444号住居跡に大きく切られる他、南東部も第121号掘立柱建物跡に切り込まれる。北隅の第178号井戸跡との重複関係は確認できなかった。全体は軸長6.58m×6.60mの方形で、面積は43.43㎡を測る。主軸方向はおよそN-62°-Eを指す。

床までの深さは15cm前後で、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は中央部がいくぶん高まる。壁溝は幅25~30cm、深さ約7cmを測り、部分的に途切れる。

カマドは北東壁をかなり南に寄った、東隅部の近くに設けられる。燃焼部は104cm×38cmの細長いもので、火床面は床よりわずかに低く、灰層が形成されていた。

柱穴は主柱穴4本が検出された。径38~70cm、深さ50~60cmで、2本で柱痕が観察された。

貯蔵穴は東隅部でカマドに隣接して備わる。上面は径70cmの円形を呈し、深さは58cmを測る。

遺物はカマド中より土師器の坏が出土した他、貯蔵穴や東隅部の壁際より小型壺や壺などが見出されている。

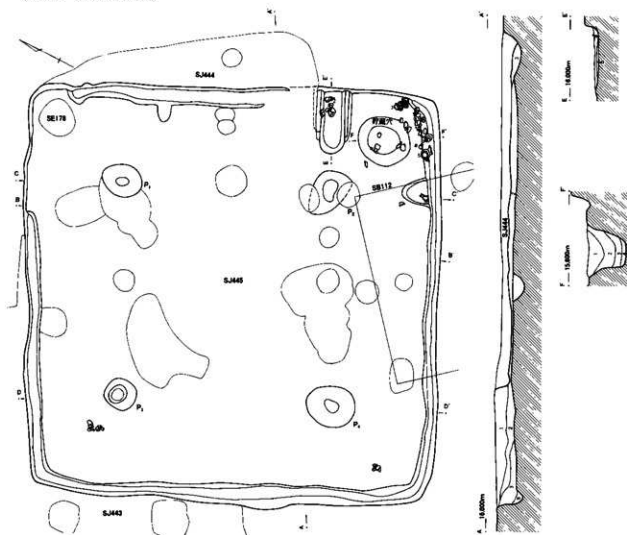
第446号住居跡 (第10・156図)

AK-21グリッドに位置する。そのほとんどを第418・421・440号住居跡、第445号井戸跡に掘り抜かれており、南壁と床のごく一部が検出されたに過ぎない。このため、全体の規模や形状、施設等については明らかとし得ない。

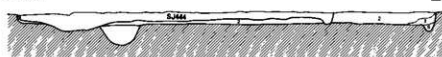
床までの深さは17cm程度、壁溝は見られない。床面はほぼ平坦である。

遺物は覆土より、ミニチュアの容器(壺?)と手捏ね(第426図12・15)が出土している。

第154図 第445号住居跡

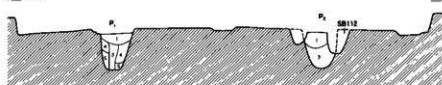


B 16,000m



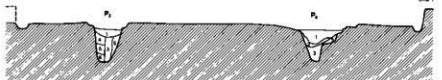
■ 第445号住居跡 土層説明
 1. 30YR4/4 褐色土 海山砂・炭化物混入。
 2. 30YR5/4 に2-3%炭褐色土 海山砂・ブロック多。
 3. 30YR6/6 褐色土 海山砂・ブロック多。
 4. 5YR5/6 明赤褐色土 焼土粒多。
 5. 30YR6/6 明赤褐色土 海山砂・ブロック多。

C 16,000m



□ 第445号住居跡 カマド土層説明
 a. 30YR3/1 焼成土 焼土粒を多く含む灰状。
 b. 30YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック多。
 焼土粒混入。

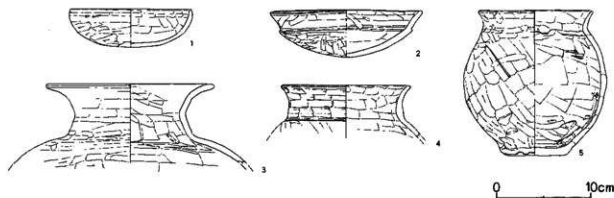
D 16,000m



■ 第445号住居跡 柱穴土層説明
 1. 30YR3/4 暗褐色土 海山ブロック多、焼土粒多。
 2. 30YR2/1 暗色土 灰多、海山ブロック多。
 3. 30YR2/2 暗褐色土 海山ブロック多、柱状。
 4. 30YR2/3 暗褐色土 海山砂多。
 5. 30YR2/1 暗褐色土 海山ブロック多。



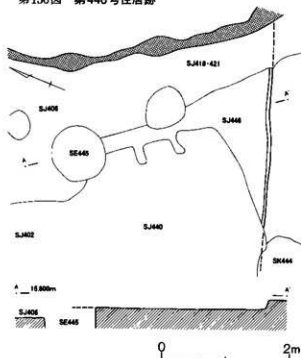
第155図 第445号住居跡出土遺物



第65表 第445号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	4.1		微 (W, B)	良	橙	30	
2	坏	16.2	(5.2)		細 (W, B, R)	良	にぶい橙	90	
3	壺	(18.0)	(8.5)		粗 (W, B, R)	良	橙	破片	
4	壺	(13.8)	(5.6)		粗 (W, R)	良	橙	破片	
5	壺	(12.3)	15.1	7.0	雑 (W, 片)	普	にぶい橙	95	

第156図 第446号住居跡



第447・448・449号住居跡 (第10・157図)

A J-25グリッドを中心に位置する。3軒は同一方向に入れ籠状の重複となっており、旧住居を順次埋め戻して構築されている。このことから推して、3軒は第447号住居跡→第448号住居跡→第449号住居跡へと、次第に拡張を行なった過程を示すものと判断される。

南西部では第449・450号住居跡を切るが、第115号掘立柱建物跡、第176・177号井戸跡との重複関係は確認できなかった。また、東側の大部分は調査区外になり、3軒ともに全体の規模や形状、施設等については明らかとし得ない。長軸方向はおよそN-40°-Wで一致する。

(第447号住居跡)

床までの深さは確認面より約20cmで、覆土は混合土による埋め戻しである。壁溝は検出範囲で全周し、幅約28cm、深さ約10cmを測る。床面はほぼ平坦である。

柱穴は支柱穴が1本検出された。径76cm、深さ73cmである。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は埋め土より、土師器の壺や坏が破片出土している。いずれも微細な破片で、図示できたものは3点のみである。

(第448号住居跡)

拡張に際し、第447号住居跡を10cm程埋め戻して床としている。覆土は第449号住居跡構築時の貼り床のみである。壁溝は幅10~20cm、深さ約8cmで、一部で途切れる。

柱穴は支柱穴が2本検出された。第449号住居跡も

第66表 第447号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	(3.2)		細 (W, R)	良	にぶい橙	破片	
2	甕		(6.6)	(7.8)	縹 (W, R)	良	橙	破片	
3	瓶	(23.9)	(9.9)		縹 (W, R)	青	にぶい黄橙	破片	

第67表 第448号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 壺		(1.7)	(8.7)	細 (F)	良	灰 白	破片	湖西

と考えられる。

こうした点からすれば、ここでの拡張は完全な建て換えてではなく、床や壁などの補修程度であったと推測される。

カマド・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第450号住居跡 (第10・157図)

AK-25グリッドを中心に位置する。南の隅部が検出できたのみで、大部分は次第に拡張される第447・448・449号住居跡に切り取られる。そのため、全体の規模や形状、施設等については明らかとし得ない。第115号掘立柱建物跡、第446号土壌との重複関係は確認できなかった。

床までの深さは5cm程で、検出部の床面は平坦である。壁溝は幅15~20cm、深さ約5cmを測る。

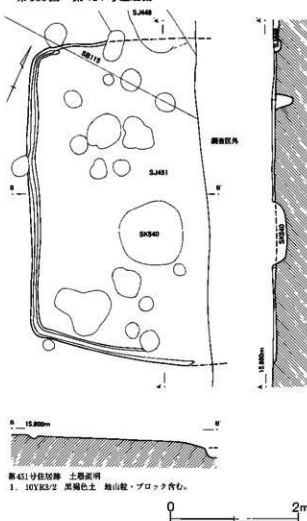
遺物の出土は認められなかった。

第451号住居跡 (第10・160図)

AK-26グリッドを中心に位置する。東半部は調査区外になり、北壁を第448号住居跡が切り、住居跡内を第540号土壌が掘り抜く。北辺で重複する、第115号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。南北の軸長はおよそ5.00mで、長軸方向はほぼN-25°-Wを指す。

床までの深さは2~6cm程度で、覆土は自然堆積のようである。床面は中央部がやや高まるものの、全体的に見れば、西から東へわずかに傾斜している。壁溝は検出範囲内で全周し、幅約10~15cm、深さ約6cmを測る。

第160図 第451号住居跡

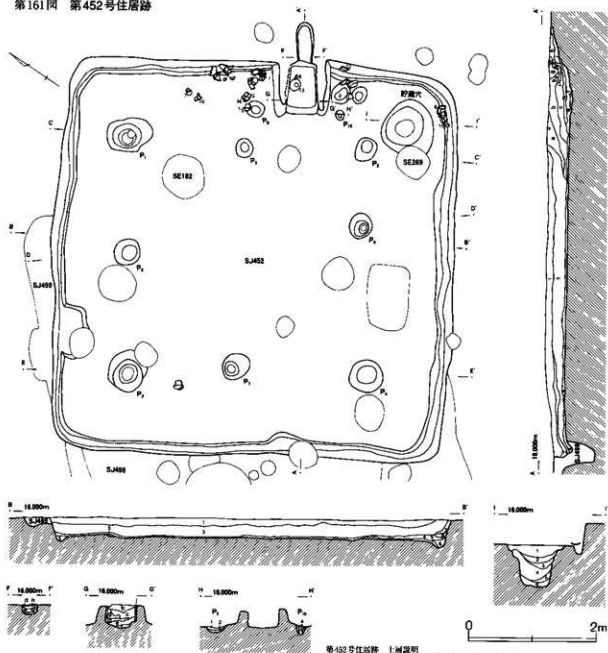


第451号住居跡 土層説明
1. 10YR3/2 灰褐色土 掘り穴・ブロック含む。

カマド、柱穴、貯蔵穴などは検出されなかった。

遺物は覆土より数点の土師器片を出土した。古墳時代末の坏や甕であるが、いずれも微小な破片であり、図示するには至らなかった。

第161図 第452号住居跡



第452号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒若干・粘質ブロック含む。
2. 10YR4/4 黒褐色土 地山粒・ブロック多く含む。
3. 10YR4/6 黒褐色土 2層に近似。地山ブロックやや多く含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 炭化物粒・灰・焼土粒含む。
5. 10YR5/4 黒褐色土 地山粒・ブロック主体。
6. 10YR5/4 黒褐色土 きめ細かく、地山粒含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土 きめ細かく、焼土・地山粒若干含む。
8. 10YR4/4 黒褐色土 3層に近似。地山粒含む。

第452号住居跡 カマド七層点別

- a. 10YR5/2 灰黄褐色土 焼土粒・地山粒若干含む。
- b. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山粒多く、焼土粒・炭化物粒含む、3層に近似。
- c. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・灰・炭化物含む。
- d. 2.5YR5/6 明赤褐色土 地山ブロック主体。天井の崩落土。
- e. 2.5YR7/1 黄灰色土 灰主体。
- f. 2.5YR2/1 黒色土 炭化物主体。
- g. 10YR5/2 灰黄褐色土 3層に近似。
- h. 10YR6/4 に近い黄緑褐色土 焼土の多い天井崩落土と考えられる。焼土。
- i. 10YR4/1 暗灰色土 焼土粒・炭化物粒含む。
- j. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土した粘りけ粘土。

第452号住居跡 土層説明

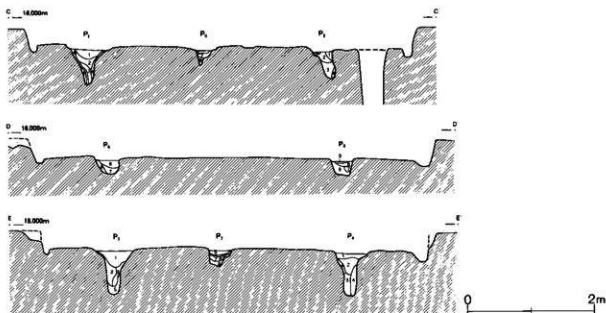
1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・粘土粒含む。
2. 10YR5/4 に近い黄褐色土 粘質塊土を含む。焼土ブロック若干含む。
3. 10YR4/4 暗褐色土 地山ブロック含む。2層とは異なる。
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 やや粗粒。地山粒・ブロック含む。
5. 10YR4/1 暗褐色土 3層に近似するがやや粗粒。地山ブロック含む。
6. 10YR6/6 明黄褐色土 4層より粘質。地山土主体。

第452号住居跡 柱穴 (P4-1~8) 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒多く、地山ブロック含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒混入。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山粒を含む。
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 炭化物・炭化物粒多く含む。
5. 10YR5/6 黄褐色土 地山土多く混入。
6. 10YR3/2 暗褐色土 炭化物・炭化物粒混入。
7. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒多く含む。
8. 10YR5/4 に近い黄褐色土 砂質地山粒混入。
9. 10YR3/3 に近い黄褐色土 地山粒多く含む。炭化物粒混入。

第452号住居跡 P4 9・10土層説明

1. 10YR4/1 暗灰色土 灰主体。
2. 10YR4/1 暗灰色土 炭化物粒含む。
3. 10YR4/1 暗灰色土 灰少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土 地山土主体。



第452号住居跡 (第10・161図)

AK-24グリッドを中心に位置する。西半部で第498・499号住居跡を大きく切る。住居跡内の第269号井戸跡も本跡が切れるが、第182号井戸跡との新旧関係は確認できなかった。全体は軸長6.26m×6.44mの方形を呈し、面積は40.31㎡を測る。主軸方向はおよそN-59°-Eを指す。

床までの深さは20~30cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は全周し、幅約15~30cm、深さ約10cmを測る。

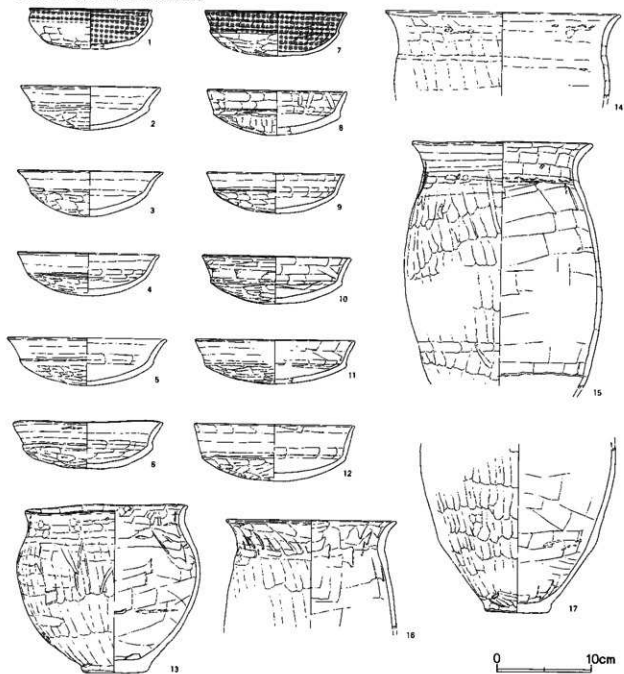
カマドは北東壁の中央部、やや南東寄りに設けられる。壁道は長さ64cm、幅24cmの溝状で、底面は緩やかに立ち上がる。燃焼部は84×50cmのきれいな長方形に造られ、火床面には厚く灰が堆積していた。その左壁の際には、土師器の甕が伏せ置かれていた。

柱穴は主柱穴4本、支柱穴4本が検出された。主柱穴は径35~60cm、深さ46~70cmで、かなり隅部寄りに配される。支柱穴は径30~40cm、深さ27cmで、各主柱穴の中間に穿たれる。主柱穴に比して規模は小さく、掘り込みも浅い。さらに、カマド焼き口部の両脇に

第68表 第452号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(132)	4.3		粗 (W, C)	良	橙	40	比命型 赤彩
2	坏	(14.7)	4.6		理 (R)	良	橙	45	
3	坏	(15.6)	4.9		細 (W, B)	良	橙	65	
4	坏	15.2	4.6		微 (W, B)	青	橙	80	
5	坏	(17.2)	5.0		微 (W, B)	青	にぶい 橙	破片	小針型
6	坏	16.0	5.0		粗 (R)	青	橙	80	
7	坏	15.3	4.8		粗 (R)	良	橙	65	赤彩
8	坏	15.0	(4.7)		微 (W, B)	良	橙	60	
9	坏	(14.4)	4.3		粗 (R)	青	にぶい 橙	50	
10	坏	(16.1)	4.9		微 (W, B)	良	橙	60	
11	坏	17.1	(4.6)		微 (W, B)	青	浅黄 橙	50	
12	坏	(17.8)	6.1		微 (W, B)	青	橙	45	
13	蓋	17.4	17.7	6.9	粗 (W, C)	良	橙	100	
14	甕	(25.0)	(8.9)		粗 (W, 片)	青	橙	破片	
15	甕	19.2	(26.0)		粗 (W, 片)	良	橙	70	
16	甕	(18.1)	(11.6)		粗 (W, R, 片)	青	橙	破片	
17	甕		(18.2)	6.6	粗 (W)	良	橙	30	

第162図 第452号住居跡出土遺物



も、小さなビットが穿たれていた。柱穴か否かは判然としないが、カマドにかかわるものであろう。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径85cmの円形を呈し、深さは64cmを測る。

遺物はカマドを中心に、土師器の坏や甕、白玉(第42図14)、鉄製の不明製品(第428図18)などが出土している。

第453号住居跡 欠番

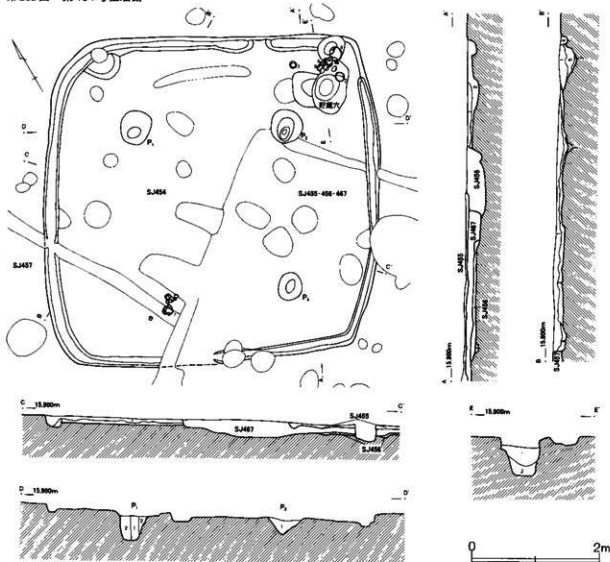
第454号住居跡 (第10・163図)

A L-25グリッドを中心に位置する。南半部を第455・456・467号住居跡に切られる。全体は軸長5.40m×5.20mの四辺の張る方形で、面積は28.08㎡を測る。長軸方向はおよそN-61°-Wを指す。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積と思われる。床面は西から東へやや傾斜する上、全体に凹凸が激しい。壁溝はおおぼ全周し、幅約20cm、深さ約8cmを測る。

柱穴は3本検出された。位置的に見て主柱穴と考え

第163図 第454号住居跡



第454号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行小地山粒多く、焼土粒微量含む。
2. 10YR2/4 暗褐色土 溶化進行地山粒・ブロック多く含む。
3. 10YR4/4 褐色土 ほとんど地山。床の溶軟化層。
4. 10YR2/2 黒褐色土 全体に地山母岩。
5. 10YR2/3 黒褐色土 1層基本。焼土・炭化物多く含む。

第454号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒微量含む。柱穴。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・粒多く含む。光沢1。

第454号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く、焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土ブロック少量含む。

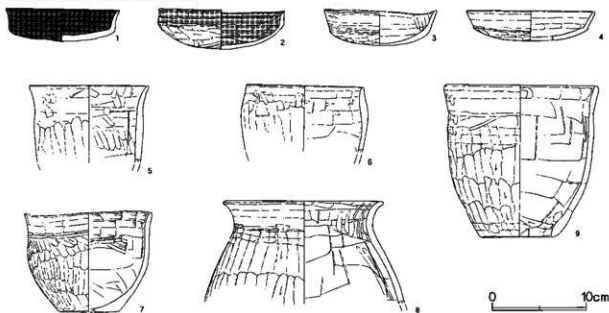
られる。大きさは、径38～52cm、深さ24～33cmである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。径83×54cm、深さ58cmの円筒状である。

カマドは検出されなかったものの、北東で壁溝の途切れる部分では、糞土や炭化物を多く含む土層が観察された。あるいは、カマドは故意に破壊されたものかもしれない。

遺物は貯蔵穴の肩部より土師器の坏・小型甕・壺などが出土している。

第164図 第454号住居跡出土遺物



第69表 第454号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	122	3.6		粗 (W. B. R)	良	にぶい赤褐	50	内外黒色処理
2	坏	135	4.3		細 (W. C. R)	良	橙	100	赤彩
3	坏	120	3.9		粗 (W. B. R)	良	橙	100	
4	坏	(13.6)	3.4		微 (W. B)	普	にぶい黄橙	25	
5	甕	(12.8)	(8.3)		粗 (W. R)	良	橙	破片	
6	甕	(12.6)	(7.0)		微 (W. B)	良	にぶい黄橙	25	
7	甕	13.6	10.7	(6.8)	微 (W. B)	良	橙	90	
8	甕	(16.8)	(11.7)		粗 (W. R. 針)	良	にぶい黄橙	破片	南比全
9	甕	(16.4)	(16.1)	(7.5)	微 (W. 針)	普	にぶい黄橙	50	南比全

第455号住居跡 (第10・165図)

AL-25グリッドに位置する。第454・456・467号住居跡埋没後に構築される。大部分はそれらの覆土中となるため、平面上検出できたのはごく一部である。土層の断面観察より推定される軸長は、5.50m×3.70m、面積はおおよそ20.35㎡となる。全体は長方形を呈するようで、長軸方向はおおよそN-45°-Eを指す。

床までの深さは6cm程で、覆土は自然堆積である。床面はほぼ平坦で、部分的に貼り床が観察された。壁溝は検出範囲内で幅約18cm、深さは3cm程度である。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は第456号住居跡と一緒に一括で取り上げてしまったため、識別ができなかった。

第456号住居跡 (第10・167図)

AL-25グリッドに位置する。北西部で第454・457

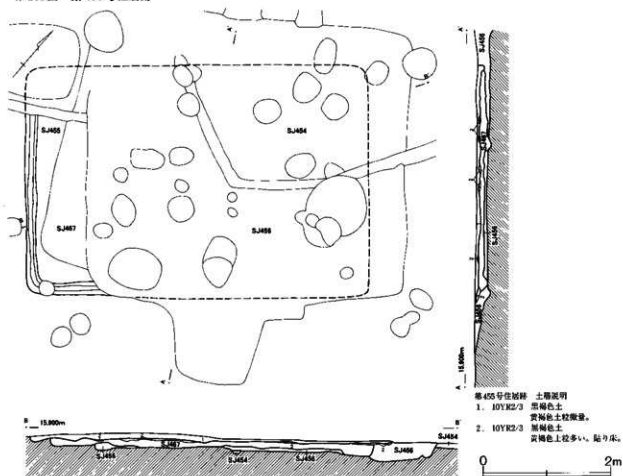
号住居跡を切り、埋め戻されて第467号住居跡が、さらに第455号住居跡が構築される。全体は軸長4.50m×5.15mの方形となり、南東壁に張り出し部を持つ。面積はこの入り口状施設を含め、おおよそ24.80㎡を測る。主軸方向は概ねN-38°-Wを指す。

床までの深さは5~10cm程で、覆土は第467号住居跡構築に伴う、人為的埋め戻しと考えられる。壁の立ち上がりはいくぶん緩やかで、床面は南から北へわずかに傾斜する。壁溝は検出範囲内ではほぼ全周し、幅約15~20cm、深さは約5cmを測る。

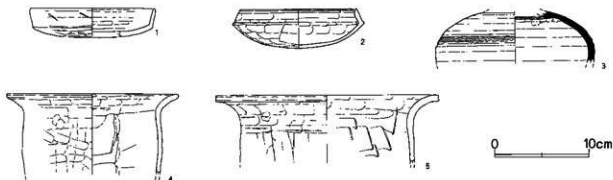
入り口状施設はちょうどカマドの対面、南東壁のやや西寄りに備わる。1.20m×1.35mの台形で、床より一段高く、壁溝を備える。

カマドは北西壁中央、わずかに西寄りに付設される。煙道は長さおおよそ92cm、幅50cmでほぼ垂直に立ち

第165图 第455号住居跡



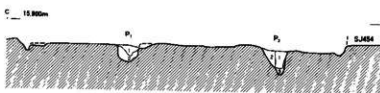
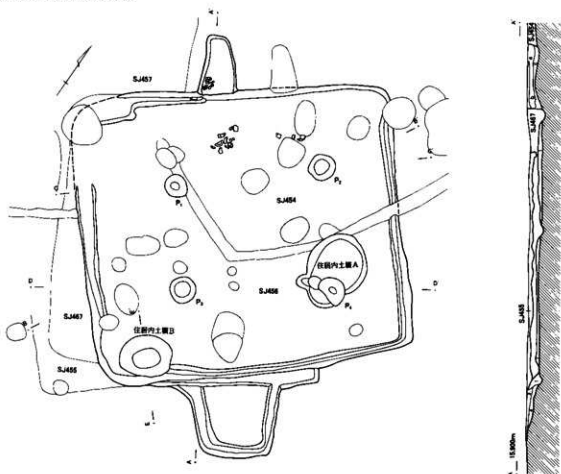
第166图 第456号住居跡出土遺物



第70表 第456号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.4	3.4		細 (W, R)	良	明赤褐	破片	群馬 胎土分析 No.15
2	坏	(12.3)	(4.1)		粗 (R)	良	青 にぶい黄橙	40	
3	須恵器 甌		(5.6)		細 (P)	良	灰	破片	
4	甕	18.4	8.6		細 (W, B, R)	良	橙	破片	
5	甕	(23.7)	(7.3)		粗 (W, R)	善	にぶい橙	破片	

第167図 第456号住居跡



第456号住居跡 1層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを多く含む。人為的堆積層。
2. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土の混入は少ない。人為的堆積層。
3. 10YR3/1 黒褐色土 2層に近似。
4. 10YR3/1 黒褐色土 1層に近似。

第456号住居跡 住居内土壇1層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 灰化物少量含む。
2. 10YR4/6 褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。

第456号住居跡 カマド1層説明

- a. 10YR2/3 黒褐色土 オマド天井部の崩落か。
- b. 10YR2/3 黒褐色土 焼土多く含む。カマド建造部への流入土。
- c. 10YR3/2 黒褐色土 オマド盛り方。

第456号住居跡 住穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒。粘重。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。充填土。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。柱抜き取り後の流入土。

上がる。然焼部は第467号住居跡構築時に破壊された
 ようで、袖などは検出されなかった。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径34~42cm、深さ
 26~37cmを測る。P₂では柱痕が観察されたもの、
 他は主柱を抜き取られたようである。

また、住居跡内には2基の土壇が存在する。土壇B
 は貯蔵穴の可能性もあるが、土壇Aについては性格不
 明である。

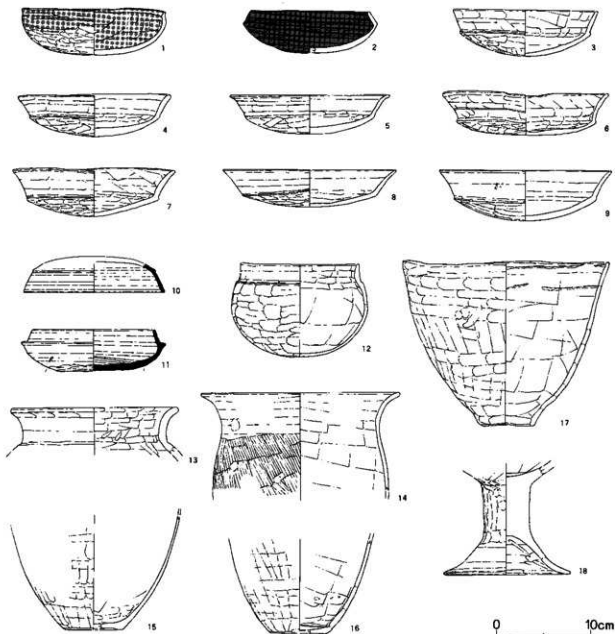
遺物は土師器の坏・甕、須恵器の罎などが少量出土

している。但し、第455号住居跡と混じてしまっ
 ており、識別できなかった。

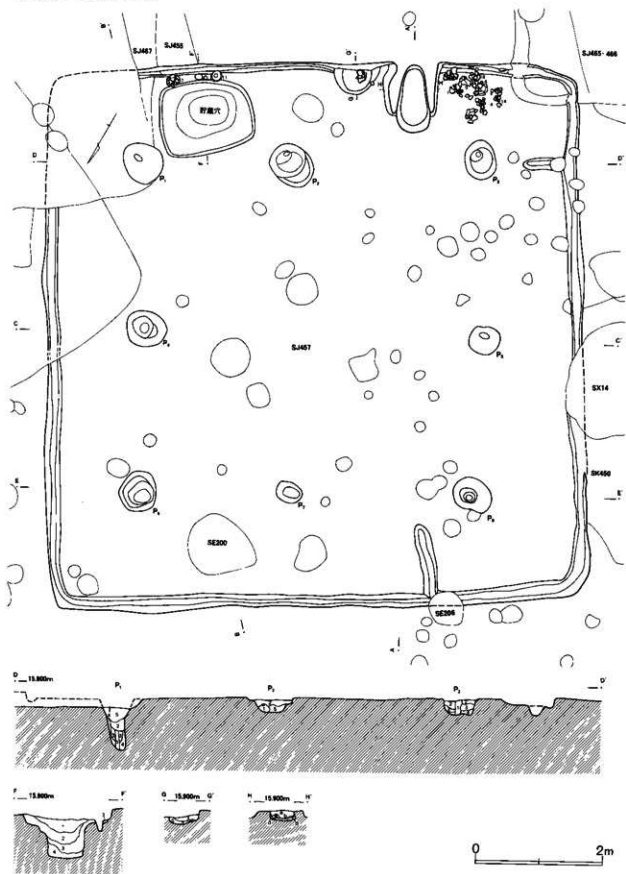
第457号住居跡 (第10・169図)

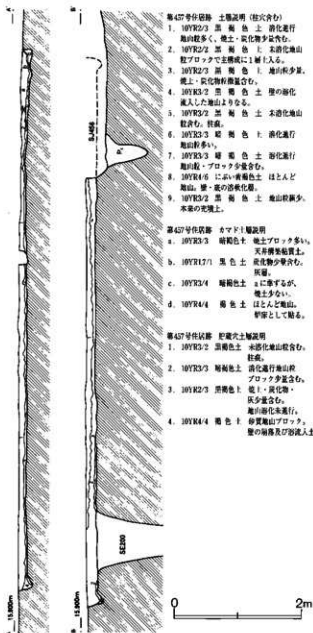
A L-25グリッドを中心に位置する。東隅部を第
 455・456号住居跡に、南隅部を第465号住居跡に、南
 西壁の一部を第450号土壇、第14号性格不明遺構にそ
 れぞれ掘り抜かれる。第200号井戸跡埋没後の構築で
 あるが、第467号住居跡、第206号井戸跡との重複関係
 は確認できなかった。全体は軸長8.60m×8.54mの方

第168図 第457号住居跡出土遺物



第169图 第457号住居跡





形を呈し、面積は73.44㎡を測る。長軸方向はほぼS-30°-Eを指す。

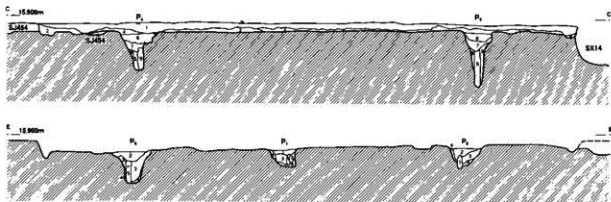
床までの深さは10~15cm程で、覆土は自然堆積を示す。壁の立ち上がりは概ね垂直であり、床面は中央部がわずかに高まる。壁溝は全周し、幅約10~30cm、深さ約8cmを測る。2箇所に間仕切り状の浅い溝が取り付く。

カマドは南東壁の南隅寄りに設けられる。燃焼部は径86cm×42cmの楕円形で、火床面は壁に向けてやや傾斜する。床面からの深さは、3.5cm程ある。

柱穴は8本検出された。径35~66cm、深さ22~80cmを測る。四隅のものに比べ、中間になるものは規模が小さい。

貯蔵穴は東の隅部ではなく、一つ分西に寄った壁際へ備わる。おそらく、主柱穴との兼ね合いからと思われる。上面は径117cm×150cmの長方形で、深さは51cmを測る。

遺物はカマド右袖筋の床面、および貯蔵穴と壁の間を中心に、土師器の杯・小型甕・甕・台付甕・壺・甌、須恵器の蓋・坏などが出土している。



第71表 第457号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	15.4	4.7		礫(C)	良	橙	95	赤彩
2	坏	12.7	4.4		礫(W)	良	橙	70	外面黒色処理
3	坏	15.7	4.7		粗(C)	良	にぶい 橙	65	
4	坏	16.4	4.5		微(W, B)	良	橙	100	小針型
5	坏	(17.0)	4.6		礫(W, B, R)	普	橙	40	小針型
6	坏	17.9	4.3		微(W, B)	良	橙	75	小針型
7	坏	17.4	4.9		微(W, B)	普	浅黄 橙	90	小針型
8	坏	(18.4)	4.7		微(W, B)	普	浅黄 橙	35	小針型
9	坏	(19.0)	4.7		微(W, B)	良	にぶい黄 橙	30	小針型
10	須恵器 坏 蓋	14.9	(3.7)		粗(W)	良	灰	破片	
11	須恵器 坏	13.1	4.4		粗(W)	良	灰	100	
12	鉢	(12.7)	9.8		礫(W, B, R)	良	橙	65	
13	壺	(18.0)	(4.6)		粗(W, C)	良	にぶい 橙	破片	
14	甕	(21.2)	(10.4)		礫(W, 片)	良	橙	破片	15と同一個体か
15	甕		(13.1)	(6.6)	礫(W, 片)	良	にぶい黄 橙	破片	14と同一個体か
16	甕		(10.0)	(6.0)	粗(W, B)	普	明赤 褐	破片	
17	瓶	22.0	17.4	6.1	礫(W, 片)	普	にぶい黄 橙	50	
18	台 甕		(12.0)	(13.6)	粗(W, C, 片)	普	明赤 褐	脚部 70	

第458号住居跡(第10・171図)

AL-26グリッドに位置する。東壁部分は調査区外となる。このため、軸長は一方が約2.56mを測れるに過ぎない。ただ、検出状態からすれば、全体は横長の長方形となろう。主軸方向はおよそN-26°-Wを指す。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は幅約15cm、深さ7cmで全周する。

カマドは北壁の東隅部付近に位置する。燃焼部は径77cm×49cmの楕円形で、火床面は床より5cm程深くなる。煙道は燃焼部から段をなして設けられ、長さ62

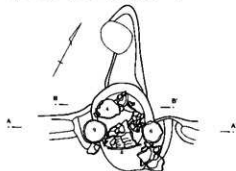
cm、幅24cmを測る。両袖には芯材として、藁が逆位に据え置かれていた。

貯蔵穴は二箇所検出されている。いずれも土壌状であり、貯蔵穴と断定するにはやや心許ない。貯蔵穴Aは東側壁の中央付近に穿たれ、上面は径63cmの円形で、深さは約10cmを測る。貯蔵穴Bは南隅部に掘り込まれ、上面は径61cmの円形で、深さは約20cmを測る。

柱穴は検出されなかった。

遺物もカマドや貯蔵穴A、および南東の壁際に土師器の坏・甕・甔などがまとまって検出された。また、東側の床面には、滑石製の剣形模造品4点(第452図5~8)が散在していた。

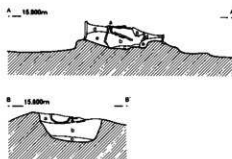
第170図 第458号住居跡カマド



第458号住居跡 カマド土層説明

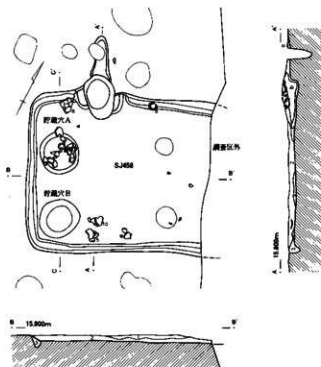
a. 10YR3/2 黒褐色土 カマド内腔部に流入。
b. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土が少量含む。カマド外壁部の裏面。

c. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・炭化物含む。
d. 10YR2/1 黒色土 白色粘土が少量含む。
e. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土が少量含む。



0 1m

第171図 第458号住居跡



- 第458号住居跡 土層説明
1. 10YR4/2 灰黄褐色土 灰褐色粘質土をブロック状に含む。
 2. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。
 3. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。

- 第458号住居跡 貯蔵穴土層説明
1. 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/6黄褐色土との混色。
 2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒・黄褐色土粒少量。
 3. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒・黄褐色土粒少量含む。
 4. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多く含む。



第459号住居跡 (第10・172図)

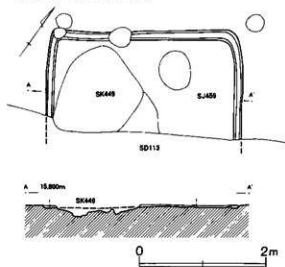
AM-26グリッドに位置する。南側を第113・114号溝跡に、また床面の西半部を第449号土壇に切られる。軸長を測れるのは一方のみで、長さ約3.14mである。全体は方形を呈するものと思われ、主軸方向はおよそN-33°-Wを指す。

床までの深さは2cm程度で、わずかに観察し得た覆土は自然堆積のようである。床面の状態は良くないが、遺存部分は概ね平坦である。壁溝は検出部分では全周しており、幅約13cm、深さ約3cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

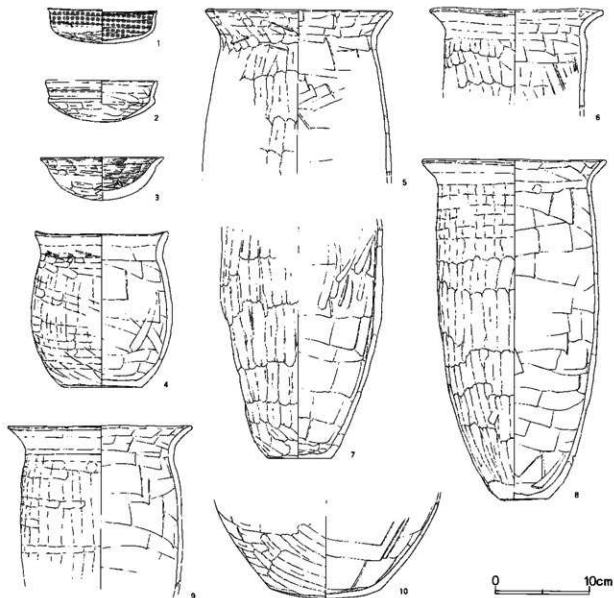
遺物は覆土中より、土師器の坏と甕片が各1片出土したのみである。ともに微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第172図 第459号住居跡



- 第459号住居跡 土層説明
1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。

第173図 第458号住居跡出土遺物



第72表 第458号住居跡出土遺物観察表

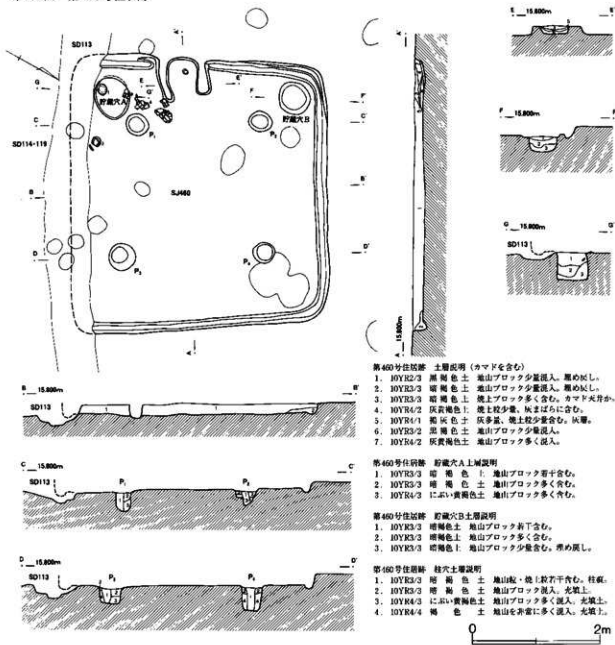
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.7	3.7		粗 (W, C)	青	にぶい 橙	100	比企型 赤彩
2	坏	(12.0)	(4.1)		微 (W, B)	青	橙	30	
3	坏	(13.5)	4.5		微 (W, B)	赤	灰	55	北総地域?
4	甕	(13.9)	16.6	(8.8)	粗 (W, C)	青	橙	50	
5	甕	(20.0)	(17.5)		細 (W)	青	にぶい黄橙	破片	
6	甕	18.5	10.6		粗 (W, C)	青	橙	30	
7	甕		(25.3)	6.8	粗 (W, C)	良	明 赤 陶	50	
8	甕	19.7	35.9	5.4	粗 (W, C)	青	橙	95	
9	甕	19.7	(17.4)		粗 (W, C)	青	橙	60	
10	甕		(10.0)	11.8	粗 (W, R)	青	にぶい 橙	30	

第460号住居跡 (第10・174図)

AM-25グリッドを中心に位置する。南西の壁を第113号溝跡に切られる。一方の軸長を柱穴の位置から

想定すると、全体は4.34m×4.08mの方形で、面積はおよそ17.71㎡となる。主軸方向はほぼS-60°-Wである。

第174図 第460号住居跡



床までの深さは16cm程で、覆土は人為的な埋め戻しを示している。壁の立ち上がりは急で、床面は緩やかな凹凸を生じている。壁溝は検出部分において全周し、幅約15~20cm、深さ約6cmを測る。

カマドは南西壁の中央、やや南隅寄りに設けられる。燃焼部は径74cm×47cmの楕円形で、火床面は床よりわずかに窪む。中央部の奥壁寄りには、地山土を用いた支脚が造り付けられていた。

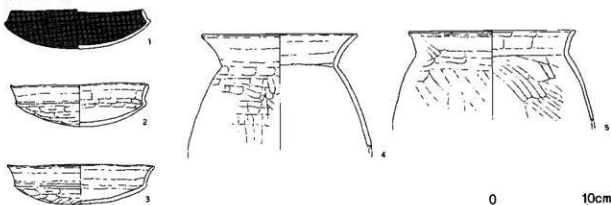
柱穴は4本の主柱穴が検出されている。径30~40

cm、深さ24~30cmを測り、いずれも柱痕が観察された。

貯蔵穴は2基検出した。南隅部に備わる貯蔵穴Aは、上面が径60cmの楕円形で、深さは44cm、西隅部に備わる貯蔵穴Bは、上面が径50cmの円形で、深さは25cmを測る。相互の関係は不明ながら、住居跡とともに埋め戻されている。

遺物は貯蔵穴Aの周辺床面上より、土師器の坏や甕がまとまって出土している。

第175図 第460号住居跡出土遺物



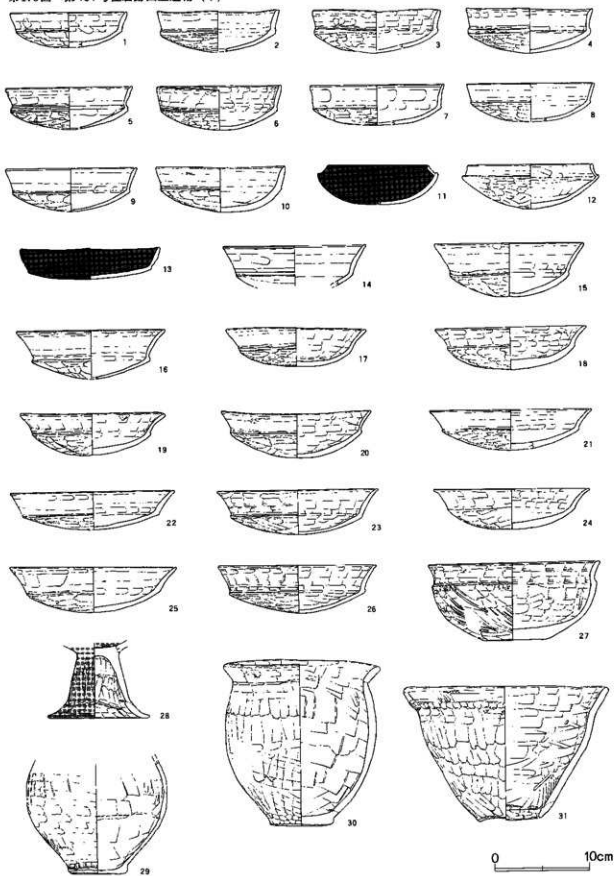
第73表 第460号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	14.2	4.3		微(W, B)	良	明赤褐	90	内外黒色処理
2	坏	14.8	4.4		微(W)	普	橙	100	
3	坏	15.8	4.3		微(W, B)	普	橙	90	
4	甕	(16.6)	(12.2)		粗(W, C, 片)	普	にぶい橙	破片	
5	甕	(17.8)	(9.7)		粗(W, C)	普	にぶい橙	破片	

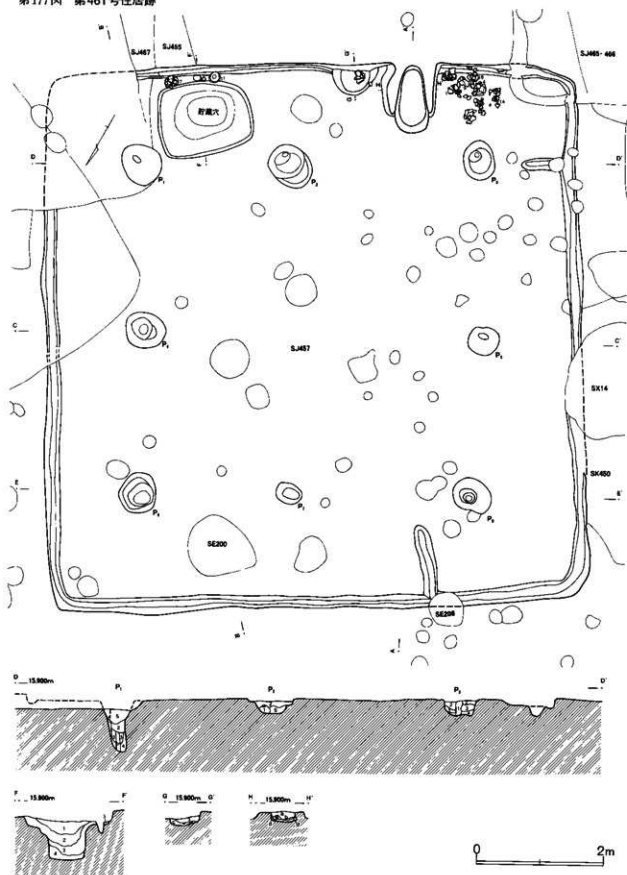
第74表 第461号住居跡出土遺物観察表

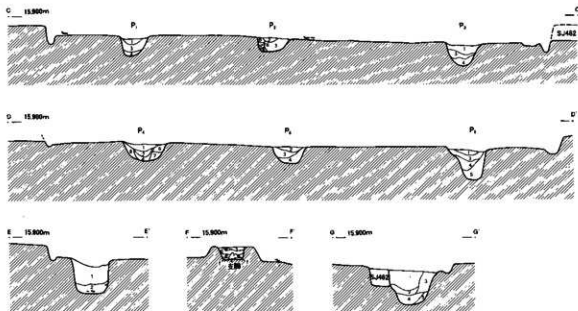
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.5)	3.7		細(W, R)	普	橙	20	内外黒色処理
2	坏	13.2	4.5		粗(C, R)	普	橙	95	
3	坏	14.8	(4.9)		細(W, B)	良	橙	65	
4	坏	14.6	4.8		粗(W, R)	良	橙	85	
5	坏	(13.6)	(4.4)		粗(W, B, R)	良	にぶい橙	50	
6	坏	13.3	4.8		細(W, B, R)	良	橙	100	
7	坏	(14.3)	(4.2)		細(W, R)	良	にぶい橙	50	
8	坏	(13.8)	(4.1)		細(W, B, R)	普	橙	30	
9	坏	14.3	4.7		粗(W, R, F)	普	橙	70	
10	坏	14.0	4.9		粗(W, B, R)	普	橙	100	
11	坏	(11.0)	4.2		微(W)	良	にぶい黄褐	45	内外黒色処理
12	坏	(13.2)	4.8		粗(R)	普	橙	30	
13	坏	15.2	3.5		粗(W, B, R)	良	にぶい橙	100	
14	坏	(15.3)	(4.3)		微(W, R)	普	にぶい橙	破片	
15	坏	(16.2)	5.8		微(W, B)	普	浅黄橙	35	
16	坏	(16.4)	(5.2)		微(W)	普	明赤褐	30	
17	坏	15.3	4.2		粗(R)	普	橙	100	
18	坏	(16.3)	4.6		微(W, B)	普	浅黄橙	70	
19	坏	15.6	4.6		細(W, B, R)	普	にぶい黄橙	90	
20	坏	16.2	5.0		粗(W, B, R)	普	橙	95	
21	坏	(17.4)	(4.2)		微(W, B)	良	橙	30	
22	坏	(17.7)	3.9		微(W, B)	普	にぶい黄橙	45	
23	坏	(17.6)	4.8		微(W, B)	普	にぶい黄橙	60	
24	坏	(16.8)	4.3		微(W, B)	普	橙	50	
25	坏	18.0	4.9		微(W, B)	普	橙	70	
26	坏	17.1	5.2		微(W, B)	普	にぶい黄橙	80	
27	钵	18.4	5.5	6.6	微(W, B)	良	浅黄橙	65	赤彩
28	高坏	(8.1)	(12.0)	(12.0)	細(W, B, R)	良	橙	脚部70	
29	甕	(12.1)	(6.8)	(6.8)	粗(W, C, 片)	普	橙	40	
30	甕	16.9	17.7	6.7	粗(W, C, R, 片)	普	にぶい黄橙	85	
31	瓶	22.0	14.3	6.6	粗(W, R)	良	にぶい黄橙	95	
32	瓶	(24.8)	31.5	(10.0)	細(W)	普	にぶい橙	65	
33	壺	(28.7)	(32.7)	8.1	粗(W, 片)	普	にぶい黄橙	20	

第176图 第461号住居跡出土遺物(1)



第177号 第461号住居跡





第461号住居跡 土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 堆山ブロック多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック若干、焼土粒・炭化物粒多く含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック、焼土粒・炭化物粒少量。
4. 10YR3/2 暗褐色土 堆山ブロック雲状に多く含む。
5. 10YR3/2 暗褐色土 堆山ブロック少量含む。
6. 10YR2/4 暗褐色土 焼土ブロック多く、焼土粒・炭化物粒少量含む。
7. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物等状に含む。焼土粒少量。
8. 10YR3/3 暗褐色土 炭多量・焼土粒・堆山ブロック少量含む。

第468号住居跡 カマド土層説明

- a. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土粒・炭化物粒多く含む。
- b. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土粒・炭化物粒若干、灰まばらに少量含む。
- c. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土ブロック雲状に多く含む。不片層。
- d. 7.5YR4/1 暗褐色土 炭多量を含む。灰層。
- e. 7.5YR4/1 暗褐色土 焼土粒少量。炭化物少しつけた感じで含む。
土層より純度高い灰層。
- f. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・堆山ブロック少量含む。
- g. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック多く含む。掘り方。

第461号住居跡 住居内土層1土層説明

1. 10YR5/3 に近い黄褐色土 堆山ブロック赤帯に多く含む。堀め戻しか。
2. 10YR5/3 に近い黄褐色土 堆山ブロック多く、焼土粒若干含む。
炭化物が少量とけ込む。

第461号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 堆山ブロック多く、炭化物粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 堆山ブロック・炭化物粒少量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 堆山ブロック・炭化物粒・焼土粒少量含む。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 堆山ブロック多く、炭化物粒少量含む。
5. 10YR4/4 褐色土 堆山ブロック多く含む。堆山よりふかふかしている。
6. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土ブロック散入。灰層下。
7. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土ブロック多く掘入。支取上。
8. 10YR4/4 褐色土 堆山塊成。焼土粒・炭化物粒若干掘入。光取上。

第461号住居跡 住居内土層2土層説明

1. 10YR2/2 栗褐色土 堆山ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/2 栗褐色土 堆山ブロック多く、焼土粒・炭化物粒若干含む。
3. 10YR3/1 暗褐色土 堆山ブロック若干含む。
4. 10YR3/2 暗褐色土 堆山ブロック多く含む。
5. 10YR4/4 褐色土 堆山ブロック赤帯に多く含む。



第461号住居跡 (第10・177図)

AL-24グリッドを中心に位置する。第462号住居跡を切り、東隅部を第465・466号住居跡に、東壁の一部を第14号性格不明遺構に各々切られる。また、住居跡内に第499・500・501・502号土塊、第205号井戸跡が掘り込まれているが、重複関係は不明である。全体は軸長8.25m×8.15mの方形で、面積は67.24㎡を測る。主軸方向はおおよそS-32°-Eを指す。

床までの深さは20~25cm程、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は東から西へ向けていくぶん傾斜する。全周する壁溝は幅6~30cm、深さ4~18cmである。

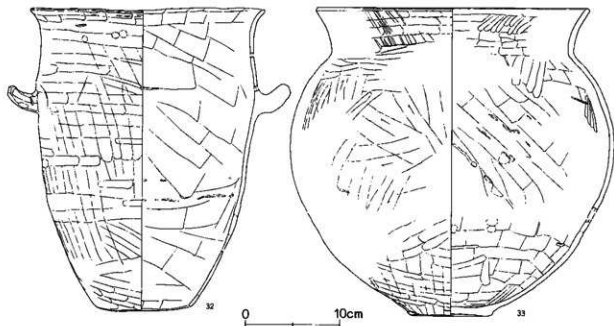
カマドは南東壁の中央に付設される。燃焼部は径95cm×43cmの長方形を呈し、火床面はほぼ平坦である。中央部には地山土を用いた支脚が造り付けられ、焚き口部はわずかに足場状の窪みが認められる。

柱穴は6本の主柱穴が検出された。径43~63cm、深さ22~48cmを測り、柱痕は観察できなかった。

貯蔵穴は明確にできなかったものの、2基の住居跡内土塊が壁際の対象位置に検出された。東壁際の土塊1は径82cm×62cmの方形で、深さは54cm。西壁際の土塊2は径105cmの円形で、深さは62cmである。覆土はともに住居廃絶以前の埋め戻しである。

遺物は特設集中するような傾向はなく、床面全体に

第178図 第461号住居跡出土遺物(2)



散在していた。カマドの焼き口部に壺・甕・瓶が見出されたほか、鉄製の刀子(第427図12)も1点出土している。

本住居跡で特筆されることは、北東の第457号住居跡とはほぼ同一規模で、しかも主軸方向を揃えて隣接するということである。出土遺物の時期もほぼ一致するようであることから、極めて密接な関係を持つものと考えられる。同時に使用されていた住居とした場合、両者の間隔が1mにも満たないことは、その上屋の構造が問題となろう。壁立ち、あるいは棟割りであったのだろうか。

第462号住居跡(第10・180図)

AM-23グリッドを中心に位置する。東側の半分近くを第461号住居跡に掘り抜かれる。また、北隅部には第473号住居跡が重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。東西の軸長を主柱穴の位置から想定すると、全体は約5.80m×5.80mの方形で、面積は約33.64㎡となる。主軸方向はおよそN-32°-Wを指す。

床までの深さは15cm前後、覆土は自然堆積を示す。ほぼ垂直に立ち上がる壁には、壁溝が伴う。検出部分では全周し、幅約15~30cm、深さ5~10cmを測る。床

面は硬く締まっており、多少の凹凸があるがほぼ平坦である。床面上には焼土ブロックや炭化材が散乱しており、住居が火災で焼失したことを窺わせている。

カマドは北東壁の中央に設けられる。燃焼部は径104cm×50cmと細長く、火床面は床よりわずかに高まる。

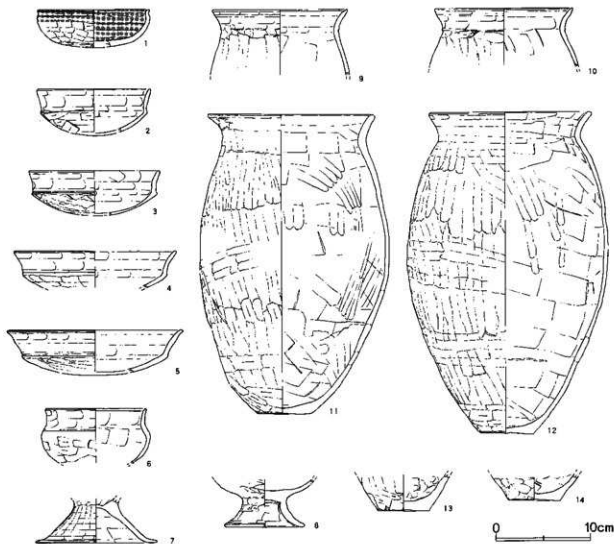
柱穴は主柱穴4本が検出された。径33~55cm、深さ24~74cmを測る。3本には柱痕が観察できたが、いずれも10cm未満の細いものである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径112cm×80cmの不整な円形で、床からの深さは56cmを測る。さらに、貯蔵穴の南側には浅い土壌が隣接して穿たれる。径45cm×70cmの楕円形で、深さは18cmである。

また、南東壁の中央部には、三日月状の突堤と二つの小穴が検出された。ちょうどカマドの対面となり、入り口にかかわる施設と考えられる。突堤は土山主体土を床に貼ったもので、3cm程の高さ有する。小穴には柱痕は観察されなかったが、覆土は良く締まった人為的な充填である。

カマド焼き口部に土師器の壺2個体が押し潰された状態で見出されたほかには、遺物の出土は少なかった。

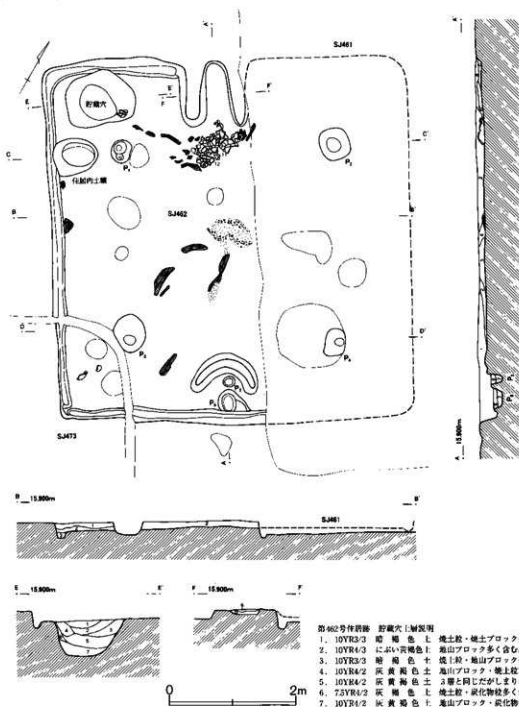
第179図 第462号住居跡出土遺物



第75表 第462号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	(4.0)		粗 (W, C, R)	良	褐灰	25	赤彩
2	坏	(12.1)	(4.6)		礫 (W, R)	良	にぶい橙	40	
3	坏	(13.9)	(4.7)		細 (B, R)	良	橙	40	
4	坏	(17.9)	(3.9)		細 (B, R)	普	浅黄橙	20	
5	坏	(18.7)	(4.5)		粗 (B, R)	普	橙	25	
6	坏	(10.7)	(5.8)		細 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	20	
7	台			(4.7)		粗 (B, R)	普	橙	脚部 30
8	高	(5.1)	(8.5)		細 (B, R)	普	にぶい黄橙	20	
9	甕	(14.5)	(7.0)		礫 (W, R)	良	にぶい黄橙	破片	
10	甕	(14.7)	(6.3)		礫 (W, R)	良	にぶい黄橙	破片	
11	甕	18.0	31.8	5.8	礫 (W, C)	普	にぶい黄橙	80	
12	甕	17.5	34.2	5.8	粗 (R)	普	にぶい黄橙	90	
13	甕	(3.9)	5.5		礫 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	破片	
14	甕	(2.9)	5.5		礫 (W, R)	良	にぶい褐	破片	

第180图 第462号住居跡



第462号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 堆山ブロック少量、焼土粒・炭化物粒多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
4. 10YR4/1 褐色土 灰・炭化物多く含む。大気時の崩落。
5. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土ブロック・炭化物粒多く含む。大気時の崩落。

第462号住居跡 カマド土層説明

- a. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック多く含む。天井の崩落。
- b. 7.5YR4/1 褐色土 炭化物が灰褐色にとけ込む。焼土粒多く含む。灰層。
- c. 10YR4/2 灰褐色土 堆山ブロック多く混入。崩り方。

第462号住居跡 貯蔵穴土層説明

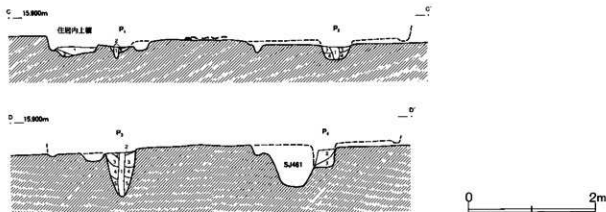
1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 堆山ブロック多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・堆山ブロック少量含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 堆山ブロック・焼土粒若干含む。
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 3層と同じだがしまり合い。
6. 7.5YR4/2 灰褐色土 焼土粒・炭化物粒多く含む。
7. 10YR4/2 灰黄褐色土 堆山ブロック・炭化物多く含む。

第462号住居跡 住居内土層土層説明

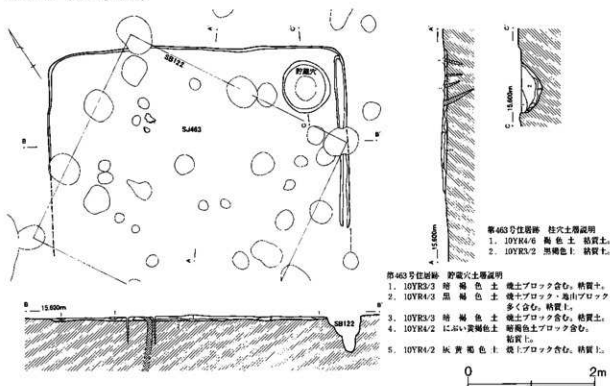
1. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック・焼土粒非常に多く、炭化物少量含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 堆山ブロック非常に多く、焼土粒・炭化物若干含む。

第462号住居跡 柱土層説明

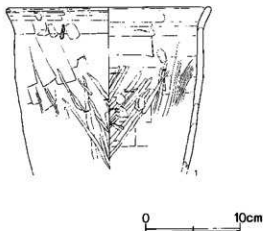
1. 10YR3/3 暗褐色土 堆山粒・焼土粒少量含む。柱壁。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 堆山ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 堆山ブロック多く混入。光面土。
4. 10YR4/4 褐色土 堆山非常に多く含む。光面土。
5. 10YR3/4 にぶい黄褐色土 堆山非常に多く含む。光面土。
6. 10YR2/3 暗褐色土 堆山粒・焼土粒少量含む。
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 堆山ブロック多く含む。



第181図 第463号住居跡



第182図 第463号住居跡出土遺物



第463号住居跡 (第11・181図)

AN-27グリッドを中心に位置する。壁や床を第122号掘立柱建物跡に広く切られる。確認時、南西の床を削平してしまったため、全体の規模は明らかとしない。軸長の一方は約4.78mであり、平面は方形を呈すものと思われる。長軸方向はおよそN-35°-Eを指す。

床までの深さは最大7cm程で、覆土は自然堆積のようである。床面はほぼ平坦であるが、第122号掘立柱建物跡の柱穴や、多くの小穴に掘り抜かれている。南

第76表 第463号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	瓶	(22.0)	(17.1)		黄(W,B,C,R片)	良	にぶい 橙	破片	

東の壁下に検出された壁溝は、幅約15cm、深さ約5cmを測る。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径80cmの円形で、床からの深さは33cmを測る。

カマド、柱穴は検出されなかった。

遺物は少なく、床より土師器の瓶1点が出土したにとどまる。

第464号住居跡 (第11・183回)

AN-26グリッドに位置する。東隅に第577号土壁が掘り込まれているが、ほとんど床面での検出であったため、新旧関係は確認できなかった。全体は軸長3.45m×3.60mの方形で、面積は12.42㎡を測る。長軸方向はおおよそN-50°-Wを指す。

わずかに観察できた覆土は、自然堆積のようであ

る。住居跡の北寄りには地震に伴う亀裂が走り、床面はこれを境に段差を生じている。壁溝は西半部において検出された。幅約13cm、深さは約5cmである。

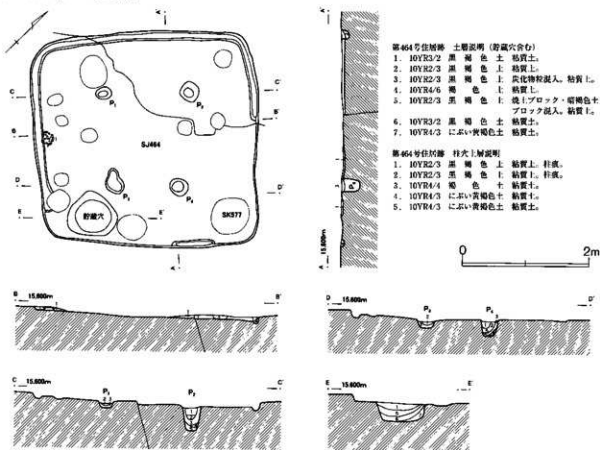
貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径65×80cmの不整円形で、深さは28cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径21~32cm、深さ8~39cmである。北東側の2本に対し、南西側の2本は極めて浅い。また、地震の影響からか、4本の配置はやや不規則である。

カマドは検出されなかった。

遺物は南西の壁際より土師器の小型壺が検出された以外は、微細な破片ばかりであった。

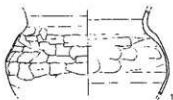
第183回 第464号住居跡



第77表 第464号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕		(9.1)		粗 (B, R)	良	にぶい橙	40	

第184図 第464号住居跡出土遺物



0 10cm

4.50mの方形で、面積は18.77㎡を測る。長軸方向はほぼN-20°-Wを指す。

床までの深さは10~18cm程で、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は大半を第466号住居跡に掘り抜かれる。壁溝はおおよそ全周しており、幅約13~18cm、深さ約6cmを測る。

貯蔵穴は西隅部に備わる。上面は径57cmの不整形円で、床からの深さは23cmを測る。

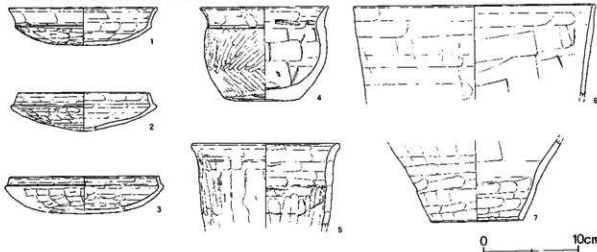
カマド、柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴の下層より、土師器の坏や小型甕などが出土している。

第465号住居跡 (第10・186図)

AM-24グリッドを中心に位置する。全体で第466号住居跡を、北西壁で第457・461号住居跡をそれぞれ切る。東側で第117号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は明らかとし得なかった。平面は軸長4.17m×

第185図 第465号住居跡出土遺物



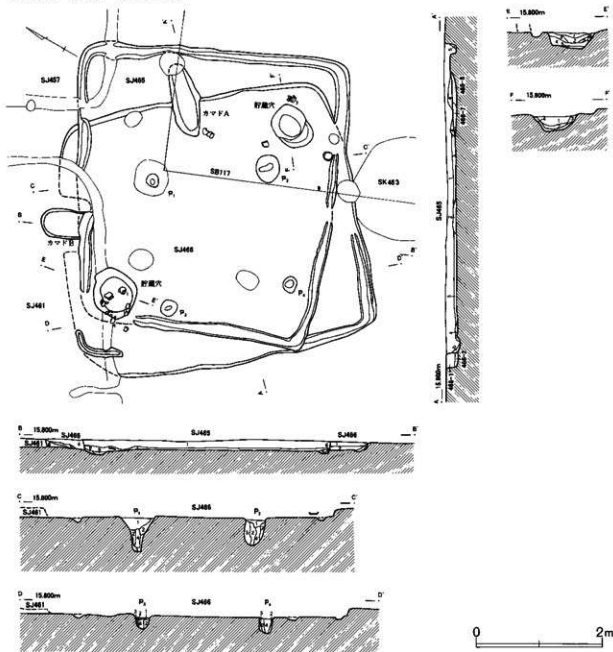
0 10cm

第78表 第465号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.8)	4.0		細 (B, R)	善	にぶい橙	60	
2	坏	(13.9)	(4.0)		細 (B, R)	良	にぶい橙	20	
3	坏	(16.0)	(3.7)		細 (B, R)	善	橙	破片	
4	鉢	13.8	10.0	7.9	粗 (W, B, R)	良	にぶい橙	70	
5	瓶	(15.6)		(9.0)	縹 (W, C, R, 片)	良	にぶい赤褐	20	
6	瓶		(25.9)	9.7	細 (B, R)	善	にぶい黄橙	破片	
7	瓶		(8.6)	9.7	細 (B, R)	善	にぶい黄橙	破片	

第79表 第466号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(15.9)	(11.6)		粗 (W, B, R)	善	橙	破片	
2	坏	(15.1)	(3.5)		細 (W, R)	善	橙	20	
3	坏	13.3	3.7		粗 (W, R)	善	橙	90	
4	坏	(13.9)	(3.8)		細 (W, B, R)	善	にぶい黄橙	20	



第465号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 焼土较多く含む。炭化物の薄い層がある。
3. 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色・黄灰色柱土層状に入る。焼土少量含む。一部炭化物のまとまりあり。
4. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック状に入る。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山の崩れ。
6. 10YR2/3 黒褐色土 3層には12Y対じ。

第466号住居跡 土層説明 (カマドBを含む)

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 黄褐色土層状に入る。炭化物少量含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む。炭化物少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山の崩れ。
4. 10YR3/1 黄褐色土 栗色土ベースに焼土ブロック多く、炭化物少量含む。
5. 10YR2/2 暗褐色土 炭化物少量含む。
6. 10YR2/1 暗褐色土 炭化物少量含む。
7. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量含む。
8. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量含む。

第465号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/4 黒褐色土 炭化物含む。焼土ブロック少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック含む。
3. 10YR2/3 暗褐色土 焼土少量含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 褐色土層状を含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土多く含む。
6. 10YR4/4 褐色土 砂っぽい褐色土ブロック。

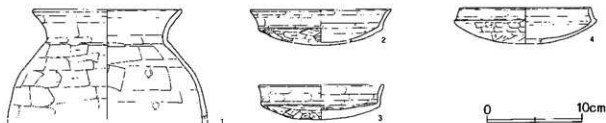
第466号住居跡 柱土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 腐化した地山を全体に含む。焼土層を含む。
2. 10YR4/6 褐色土 ほとんど地山。光沢土。
3. 10YR4/6 褐色土 硬の溶軟化層。
4. 10YR3/3 暗褐色土 焼土少量含む。全体に地山混入する。柱腐。

第466号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 灰帯在地山層・焼土・炭化物较多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 崩れ込んだ地山の影で黄色味帯び。
3. 10YR3/4 暗褐色土 2層基本。砂質大型地山ブロック多く含む。
4. 10YR4/6 褐色土 ほとんど地山。硬・溶の溶軟化層。

第187図 第466号住居跡出土遺物



第466号住居跡 (第10・186図)

AM-24グリッドを中心に位置する。第465号住居跡に大部分を切られる。東側で第117号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。全体は軸長4.75m×4.05mの方形を呈し、面積は19.24㎡を測る。後設のカマドAを基準にすれば、主軸方向はおおよそN-34°-Wとなる。

床までの深さは10~18cmで、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は北から南へ向けて傾斜する。壁溝は南と西の隅部に検出した。幅約10~20cm、深さ約4cmである。

カマドは2基検出された。カマドAは北西壁中央に設けられる。燃焼部は径63cm×48cmと細長く、袖は検出されなかった。カマドBは北東壁中央に付設され

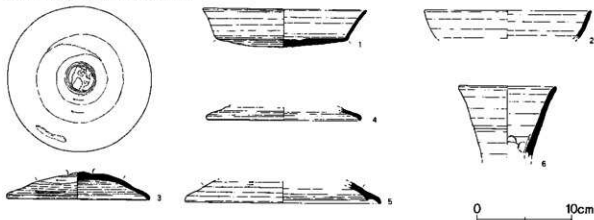
る。第461号住居跡の覆土に掘り込まれていたため、燃焼部の一部が確認できたにすぎない。その燃焼部は径120cm×44cmで、火床面はほぼ平坦で、床よりわずかに高い。袖は検出できず、覆土も焼土や炭化物が特に多い訳ではない。両者の状態からすれば、カマドBが本来的なもので、カマドAは後に付け替えられたものと判断される。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径20~40cm、深さ18~55cmを測る。細いながらも、明瞭な柱痕が観察された。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径70cm×52cmの円形で、深さ24cmを測る。

遺物の出土は少なく、貯蔵穴周辺の床面より土器の壺や杯の破片が出土したのみである。

第188図 第467号住居跡出土遺物



第80表 第467号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 杯	17.7	4.1	14.2	粗 (W, C)	劣良	にぶい黄橙	80	太野
2	須恵器 杯	(17.8)	(3.0)		細 (F)	良	灰 白		東海
3	須恵器 壺	15.4	(3.0)		微 (F)	良	灰 白	ツマミ欠	秋田小浜西 転用観 胎土分析 No. 16
4	須恵器 壺	(16.5)	(1.4)		微 (F)	良	灰 白		洞西
5	須恵器 壺	(20.9)	(2.3)		粗 (W, F)	良	灰	破片	南比金
6	須恵器 壺	(10.3)	(7.2)		細 (W, F)	良	灰	破片	秋田

第467号住居跡 (第10・189図)

AL-25グリッドを中心に位置する。第456号住居跡(第454号住居跡を切る。)を埋め戻して構築される住居跡で、埋没後、覆土を第455号住居跡が埋り込む。第457号住居跡、第116号独立柱建物跡との重複関係は確認できなかった。平面的には南西の壁沿いを検出したにすぎないが、断面観察により、軸長約4.35m×4.37m、面積19.01㎡程の方形住居跡が想定できる。主軸方向はおよそN-38°-Wを指す。

床までの深さは約13cmで、覆土は自然堆積のようで

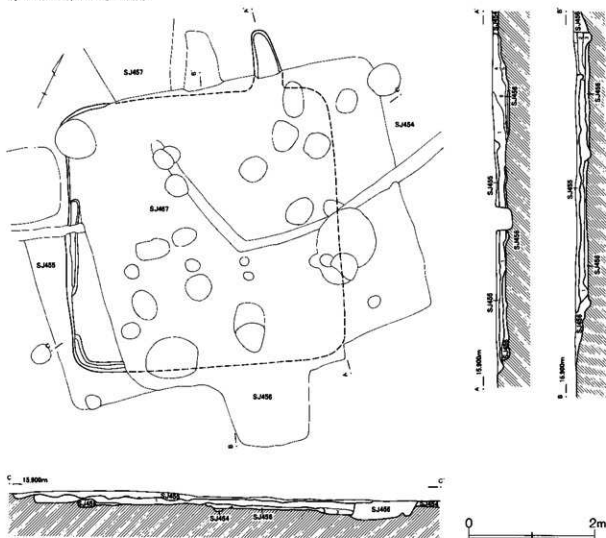
ある。断面に見る床面はほぼ平坦で、第456号住居跡の床を嵩上げするように土を貼って(埋め戻して)いる。検出した壁溝は幅約17cm、深さ約2cmである。

カマドは煙道部のみを検出にとどまる。位置的には北西壁の北隅部付近になるものと考えられるが、袖や燃焼部は判然としなかった。煙道は長さおよそ83cm、幅37cmである。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はいずれも覆土中からの出土で、須恵器の坏・蓋・壺などがある。

第189図 第467号住居跡



第467号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

1. 10YR2/1 黒色土 焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 1輪扉等、S.J.456カマド影響の焼土混入。
3. 10YR2/2 黒褐色土 壁溝への流入土。
4. 10YR1/1 黒褐色土 焼土粒・ブロック含む。天井根土層と混えられない。
5. 10YR2/1 黒色土 炭化物層。
6. 10YR3/1 黒褐色土 カマド埋り方。

第467号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 炭褐色土ブロック・粒多い。
3. 10YR3/4 暗褐色土 暗褐色土ブロックと黄褐色土の混合層。

第468号住居跡 (第11・190図)

AN-24グリッドを中心に位置する。そのほとんどを第469号住居跡に掘り抜かれるため、西側の壁を一部確認したにすぎない。さらに、残存部も第117号溝跡に大きく切られるため、全体の規模や形状、施設などはまったく不明である。

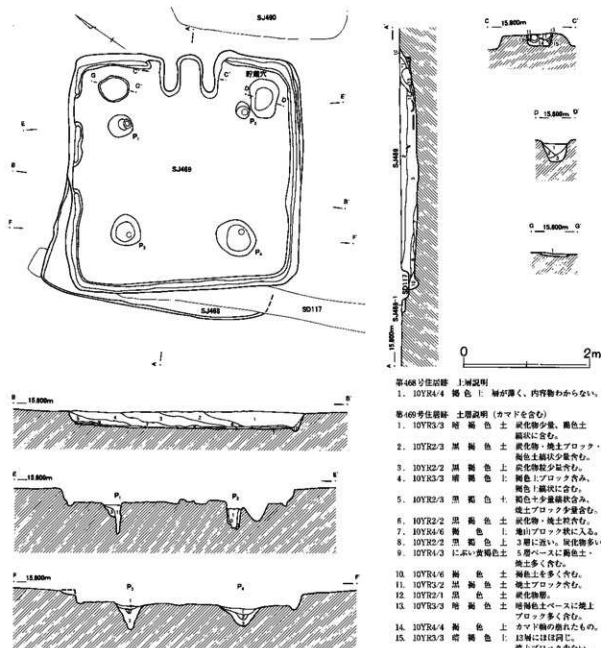
床までの深さは約6cmを測れるものの、覆土や床面の状態などは観察することも困難であった。

遺物も何ら出土していない。

第469号住居跡 (第11・190・192図)

AN-25グリッドを中心に位置する。第468号住居跡の大部分を破壊して構築される。全体土軸長3.80m

第190図 第468・469号住居跡



第468号住居跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 層が薄く、内容物わからない。

第469号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量、褐色土層状に含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック・褐色土層状少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量含む。
4. 10YK3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
5. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック少量含む。
6. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土を含む。
7. 10YR4/6 褐色土 堆山ブロック状に入る。
8. 10YR2/2 黒褐色土 3層に亘り、炭化物多い。
9. 10YR4/3 に近い黄褐色土 5層ベースに褐色土・焼土多く含む。
10. 10YR4/6 褐色土 褐色土多く含む。
11. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック含む。
12. 10YR2/1 黒褐色土 炭化物層。
13. 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土ベースに焼土ブロック多く含む。
14. 10YR4/4 褐色土 カマド跡の残ったもの。
15. 10YK3/3 暗褐色土 13層にはほぼ同じ。焼土ブロック少ない。

第469号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/2 黄褐色土 褐色土少量含む。
2. 10YR2/2 黄褐色土 焼土ブロック多く含む。柱穴。
3. 10YR4/1 褐色土 光線土。

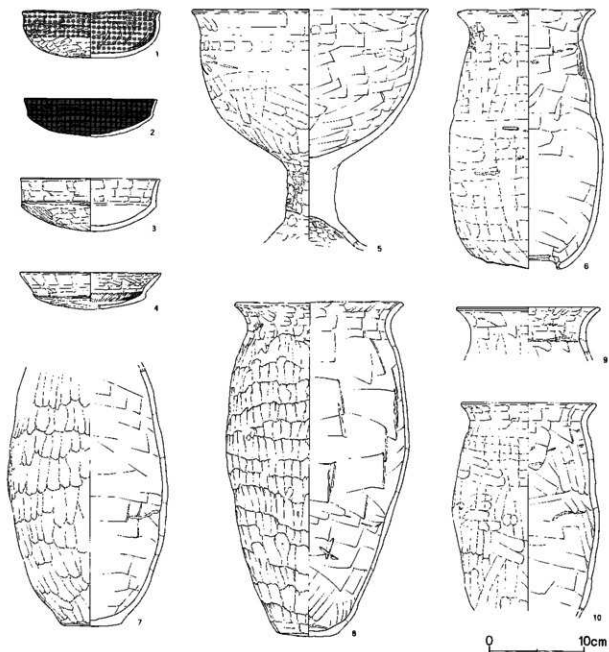
第469号住居跡 野竈穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む。
2. 10YK3/2 黒褐色土 褐色土ブロック少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック含む。大形土器片出。

第469号住居跡 P-5土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 土層に炭化物少量含む。

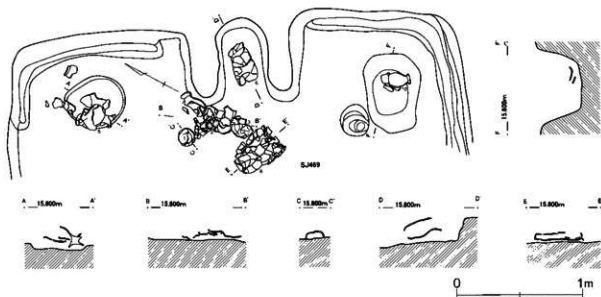
第191図 第469号住居跡出土遺物



第81表 第469号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	15.0	5.1		細 (W, F)	良	橙	90	比企型 赤彩
2	坏	14.3	4.1		微 (W, B)	良	明褐 灰	85	内外黑色処理
3	坏	15.0	5.7		細 (W, B)	良	橙	85	
4	台付 甕	15.3 (3.8)			粗 (R)	良	黄 橙	60	
5	甕	25.3	24.8		粗 (W, 片)	普	橙	90	
6	瓶	14.8	27.6	8.4	雑 (W, C, 片)	普	にぶい黄橙	90	甕の転用
7	甕		(27.3)	6.4	雑 (W, 片)	良	にぶい黄橙	70	
8	甕	18.2	35.4	6.5	粗 (W, C)	良	にぶい 橙	85	
9	甕	(15.4)	(5.1)		粗 (W, 片)	普	にぶい 橙	破片	
10	甕	14.5	22.0		雑 (W, R, 片)	良	にぶい黄橙	60	

第192図 第469号住居跡カマド・貯蔵穴



×3.75mの方形で、面積は14.25㎡を測る。主軸方向はおおよそN-58°-Eを指す。

床までの深さは28cm前後、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は四壁より中央に向けてわずかに傾斜し、全体が浅い皿状の窪みとなる。壁溝はほぼ全周しており、幅約20cm、深さ3~6cmを測る。

カマドは北東壁の中央に設けられる。燃焼部は径70cm×40cmの長方形で、火床面は床よりなだらかに立ち上がっていく。中央部には土師器の甔が横転し、焚き口部にも甔や坏が押し潰されたように出土している。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径25~60cm、深さ30~47cmを測る。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径60cm×40cmの方形様で、深さは32cmを測る。底部より長脚甔が出土している。また、北隅部にも楕円形の浅い窪みが見られ、中には台付甔が横転していた。カマド全面の床面上の遺物は土師器の坏・甔などである。

第470号住居跡 (第10・11・193図)

AN-25グリッドに位置する。西側を第471・493号住居跡に、また中央から北西壁の一部にかけて第547号土壇に切られる。全体は軸長3.10m×2.60mの長方

形で、面積は8.06㎡を測る。主軸方向はおおよそN-64°-Eを指す。

床までの深さは20cm前後で、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は概ね平坦である。検出部分で全周する壁溝は、幅約10~20cm、深さ約4cmを測る。

カマドは北東壁の中央に設けられる。燃焼部は径91cm×46cmの楕円形で、火床面までの深さは床から3cm程である。

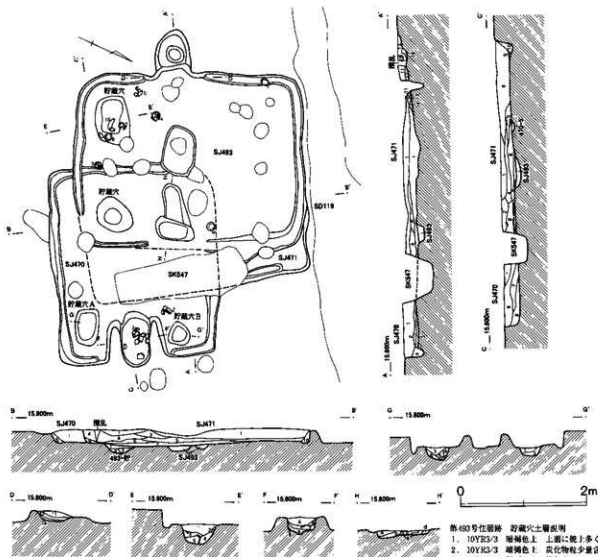
貯蔵穴はカマドの両脇に2基検出された。東隅部に備わる貯蔵穴Aは、上面が径57cm×37cmの長方形で、深さは約23cm、カマド北側に隣接する貯蔵穴Bは、上面が径35cmの不整形形で、深さは12cmである。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド内より、土師器の高坏・甔・甔が出土している。

第471・493号住居跡 (第10・11・193図)

AN-25グリッドを中心に位置する。第470号住居跡埋没後、これを大きく切って構築される。形は崩れてしまうものの、第471号住居跡は、第493号住居跡の北東壁を拡張したものと考えられる。なお、北東壁の一部は第547号土壇に切断されている。



第470号住居跡 貯蔵穴A・B土層説明

1. 10YR4/3 黒褐色土 暗褐色土と褐色土層に含む。
2. 10YR4/4 褐色土
3. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土
5. 10YR3/3 褐色土 3層と褐色土ブロック状に含む。炭化物粒少量含む。
6. 10YR4/4 褐色土 暗褐色土少量結核含む。
7. 10YR4/4 褐色土 4層より色調は暗い。

第471号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR4/6 褐色土 褐色土ブロック。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土結核多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土結核。炭化物粒少量含む。

第470号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

1. 10YR3/2 暗褐色土 炭化物・褐色土結核少量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒少量含む。
3. 10YR4/1 褐色土 褐色土ブロック。
4. 10YR2/2 暗褐色土 炭化物少量含む。
5. 10YR3/2 暗褐色土 1層に近づく。褐色土多く含む。
6. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土結核に。焼土・炭化物少量含む。
7. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック多く。褐色土ブロック少量含む。下層に炭化物の層は薄い。
8. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック。炭化物少量含む。
9. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック。焼土と見られる。

第471号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

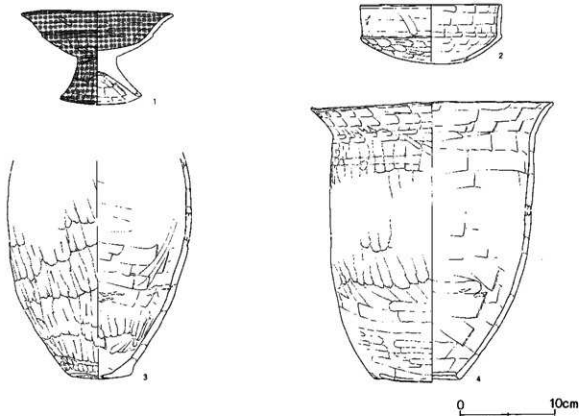
1. 10YR3/2 暗褐色土 炭化物・焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量・褐色土結核含む。
3. 10YR3/2 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む。
5. 10YR4/4 暗褐色土
6. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック多く含む。
8. 10YR2/1 暗褐色土 焼土ブロック。炭化物少量含む。
9. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック状に入る。
10. 10YR3/3 暗褐色土
11. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック含む。
12. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック多く含む。
13. 2.5YR3/3 暗褐色土 焼土粒のかたまり。
14. 10YR4/4 褐色土 焼土粒少量含む。
15. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土大粒ブロック。
16. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック。

第493号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック多く含む。炭化物を含む。
- b. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土・焼土・炭化物多く含む。
- c. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
- d. 10YR3/4 暗褐色土 3層とはほぼ同じ。
- e. 10YR3/4 褐色土 褐色土ブロック。

第493号住居跡 貯蔵穴土層説明
 1. 10YR3/3 暗褐色土 上層に焼土多く含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。
 3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック。

第194図 第470号住居跡出土遺物



第82表 第470号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高杯	(16.8)	(9.8)	(8.7)	埴(W, C, 片)	普通	にぶい橙	65	赤彩
2	坏	15.1	6.1		微(W)	明	赤褐	60	
3	甕		(23.0)	6.3	埴(W, C, 片)	普通	橙	40	
4	甕	26.1	(29.6)	9.0	埴(W, C, R)	普通	橙	50	

(第471号住居跡)

平面は軸長3.45m×3.80mの方形となり、面積は13.11㎡が増加する。主軸方向はおよそS-64°-Wである。

床までの深さは20cm程で、覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁および壁溝は、第493号住居跡のものをほぼ踏襲する。

カマドは南西壁の中央部、やや南寄りに付設される。燃焼部は径62cm×58cmで、床から続く火床面は、なだらかに立ち上がっていく。

小穴は幾つか検出されたが、柱穴と断定するには至らなかった。

貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径80cm×54cmの方形で、深さは31cmを測る。

遺物は貯蔵穴とその周辺より、赤彩された土器の坏4点などが出土しているほか、砥石(第420図13)が1点見出されている。

(第493号住居跡)

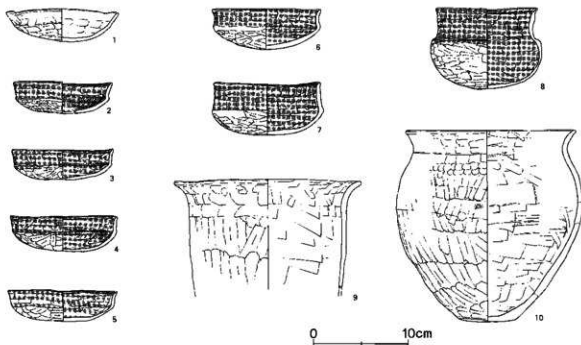
全体は軸長2.55m×3.68mの長方形で、面積は9.38㎡を測る。主軸方向はおよそN-64°-Eを指す。

第471号住居跡構築時、床面は一段掘り下げられたようである。壁溝は検出部分ではほぼ全周しており、拡張時に掘り直された可能性がある。幅約20cm、深さ3~6cmである。

カマドは第471号住居跡とは反対側、北東壁に設けられていたようである。拡張時に除去されたため、燃焼部のわずかな窪みを検出したのみである。

貯蔵穴は東隅部、カマドに隣接して備わる。上面は

第195図 第471号住居跡出土遺物



第83表 第471号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	12.0	3.3		細 (W, F)	普通	橙	75	
2	杯	10.6	3.2		細 (W, C, R)	良	にぶい 橙	95	比企型 赤彩
3	杯	10.9	3.3		粗 (W, C, R)	良	にぶい 橙	100	比企型 赤彩
4	杯	11.5	3.8		粗 (W, C, R)	良	にぶい 橙	100	比企型 赤彩
5	杯	11.7	3.1		粗 (C)	普通	にぶい 橙	65	比企型 赤彩
6	杯	11.8	4.4		粗 (W, C)	良	にぶい 橙	100	比企型 赤彩
7	杯	11.5	5.6		粗 (C, R)	良	にぶい 橙	100	比企型 赤彩
8	鉢	10.9	8.1		粗 (W, C, R)	良	にぶい 橙	100	赤彩
9	甕	(20.1)	(11.5)		粗 (W, C)	良	にぶい 橙	破片	
10	甕	(18.0)	20.3	6.1	細 (W, 片)	普通	にぶい 橙	50	

径60cm×46cmの楕円形で、第471号住居跡床面からの深さは5cmである。

遺物は砥石(第420図12)1点が出土したのみである。

第472号住居跡 (第11・196図)

AN-26グリッドを中心に位置する。床の一部を第225号井戸跡に掘り抜かれるが、第204・226号井戸跡との重複関係は確認できなかった。全体は軸長4.60m×4.70mの方形を呈し、面積は21.62㎡を測る。主軸方向はおよそS-62°-Wを指す。

床までの深さは25~30cm程で、覆土は上~中層は自然堆積、下層は人為的に戻しと考えられる。

壁はおおむね垂直に立ち上がり、床面はやや凹凸を生じている。全周する壁溝の幅は約12~22cm、深さは7~

12cmを測る。

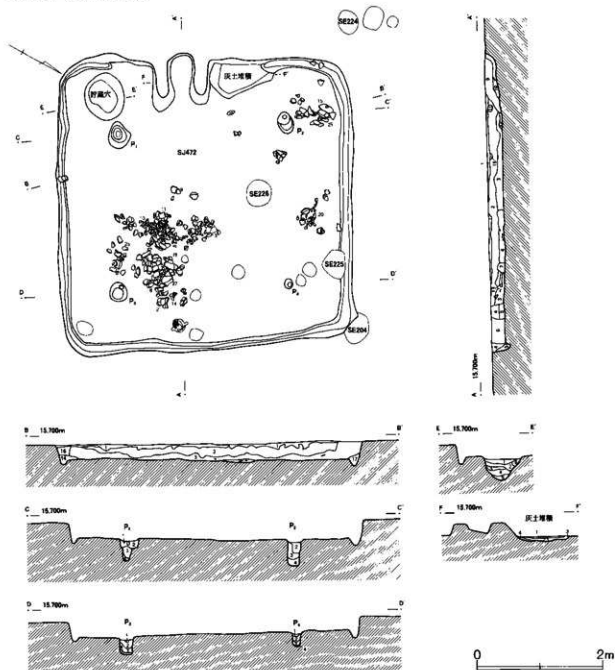
カマドは南西壁の南寄りに設けられる。燃焼部は径90cm×42cmの楕円形で、火床面は床より2cm程高まる。右袖の脇には浅い窪みがあり、多量の灰が詰まっていた。おそらくは、カマド内の灰を掻き出し、ここへ貯めたものと思われる。

柱穴は主柱穴が4本検出された。柱痕は不明確であり、径14~35cm、深さ22~42cmを測る。

貯蔵穴は南隅部に備わる。上面は径74cm×62cmの楕円形、床からの深さは38cmを測る。

遺物はカマドや貯蔵穴周辺、さらに覆土下層からも数多く出土している。土器器の杯・壺・甕・甎、ミニチュアの壺(第426図8)などが見られるが、その大半

第196図 第472号住居跡



第472号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 自然埋積層。
2. 10YR3/2 黒褐色土 部に粘土層が入る。
3. 10YR3/4 黒褐色土
4. 10YR3/2 黒褐色土 土器片を含む。
5. 10YR3/2 黒褐色土 土器片を含む。
6. 10YR3/1 黒褐色土
7. 10YR1.7/1 黒色土 焼土ブロックを含む。
8. 10YR2/1 黒色土
9. 10YR3/2 黒褐色土 カマド瓦片等の層層土。
10. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
11. 10YR2/2 黒褐色土 土器片を含む。
12. 10YR5/6 黄褐色土 土器片を含む。
13. 10YR4/6 褐色土
14. 10YR2/2 黒褐色土 壁の崩壊に伴う堆積。
15. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
16. 10YR3/2 黒褐色土 焼土を含む。
17. 10YR2/1 黒色土 壁の崩壊に伴う堆積。

第472号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘り強い。
 2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
 3. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土層層土層。
 4. 10YR4/4 褐色土 ほとんど海山からなる。
- 第472号住居跡 土層説明 (穴土層部分)
1. 10YR1.7/1 黒色土 焼土を含む。灰。
 2. 10YR1.7/1 黒色土 焼土ブロックを含む。灰。
 3. 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色土少量を含む。灰。
 4. 10YR4/4 褐色土 環状の階梯状部。

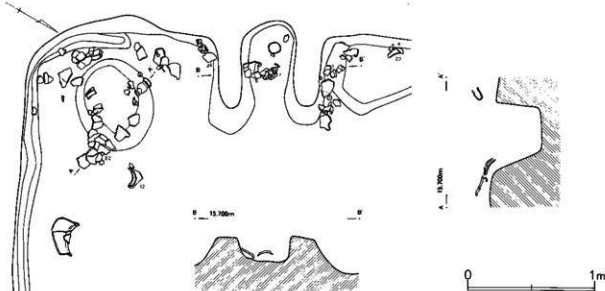
第472号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土を含む。
2. 10YR3/3 黒褐色土 焼土を含む。黄褐色土を含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 焼土を含む。
4. 10YR3/3 黒褐色土 粘性かなり強い。
5. 10YR4/3 褐色土 粘性かなり強い。
6. 10YR2/1 黒色土 焼土を含む。底部に土器片。

は破片となって散在していた。これらの土器は、覆土下層の埋め戻しに伴い、一括して投棄されたものと判断される。このほか、覆土からは白玉(第424図15)、

擦痕のある棒状礫(第417図5)が各1点見出されている。

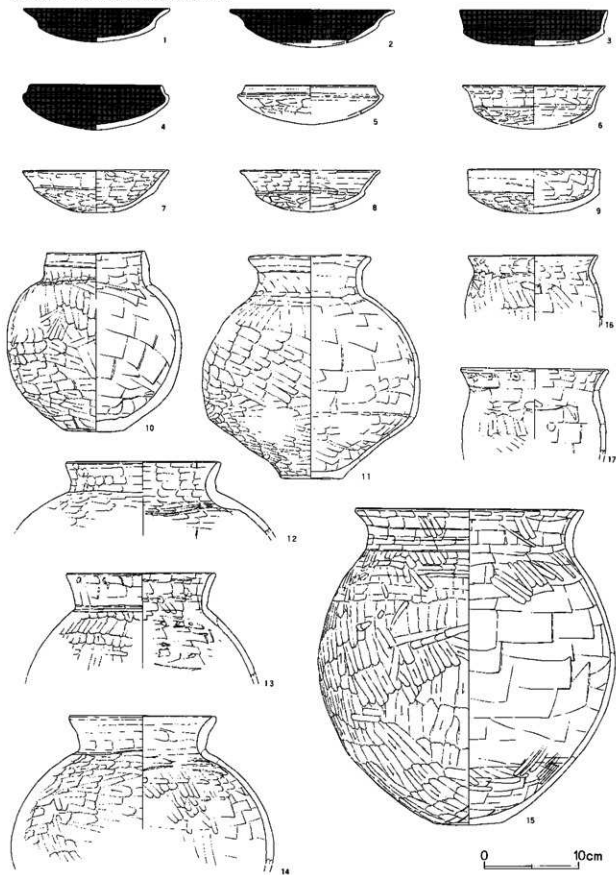
第197図 第472号住居跡カマド・貯蔵穴



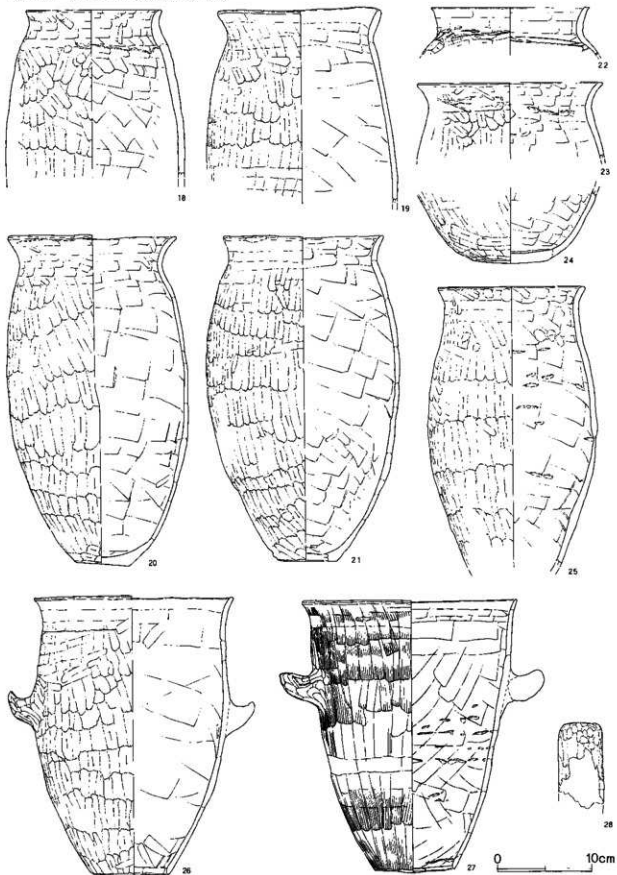
第84表 第472号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.8)	(3.6)		微(W, B)	良	にぶい黄褐	50	内外黒色処理
2	坏	(17.8)	(3.5)		微(W)	良	にぶい橙	35	内外黒色処理
3	坏	(16.0)	(3.6)		細(W, B)	普通	褐	10	内外黒色処理
4	坏	(14.2)	4.8		細(W, B)	良	黒褐	50	内外黒色処理
5	坏	(14.0)	(3.1)		粗(W, B, R)	普通	にぶい橙	10	
6	坏	(15.4)	(4.2)		微(W, B)	良	橙	25	
7	坏	(15.8)	(4.4)		微(W, B)	普通	にぶい黄橙	50	
8	坏	(15.1)	(4.2)		微(W)	普通	にぶい黄橙	30	
9	坏	(13.6)	4.4		微(W, B)	普通	橙	30	
10	壺	10.5	19.2	6.7	細(W, R)	良	橙	80	
11	壺	(12.8)	23.6	6.6	粗(W, C, 片)	普通	橙	55	
12	壺	(16.8)	(7.8)		粗(W, C, R)	良	橙	破片	
13	壺	(16.0)	(11.1)		粗(W, C, 片)	良	にぶい橙	破片	
14	壺	(15.8)	15.7		粗(C, R)	良	明赤褐	破片	
15	壺	24.6	33.5	(6.6)	粗(W, C, R)	普通	明赤褐	65	
16	甕	(16.0)	(7.1)		細(W, C, R)	良	にぶい橙	破片	
17	甕	(16.0)	(9.0)		細(W, B, C)	良	褐灰	破片	
18	甕	(14.6)	(17.8)		礫(W, 片)	普通	にぶい橙	破片	24と同一個体
19	甕	(17.6)	(20.4)		粗(W, C)	普通	にぶい黄橙	40	
20	甕	18.1	35.0	5.8	粗(W, R)	普通	明赤褐	60	
21	甕	(17.5)	(34.5)	6.2	粗(W, C)	良	橙	80	
22	甕	(17.0)	(5.2)		細(B, R)	良	褐灰	破片	
23	甕	(20.0)	(8.0)		礫(W, C)	普通	にぶい黄橙	破片	
24	甕		(8.0)	8.1	礫(W, 片)	普通	にぶい黄橙	破片	18と同一個体
25	甕	(15.8)	(29.6)		礫(W, C, 片)	普通	橙	40	
26	瓶	21.3	(29.4)	8.1	粗(W)	普通	にぶい橙	90	
27	瓶	23.2	28.4	8.2	粗(W, 片)	良	にぶい橙	95	
28	土製支脚	4.8	(9.2)		微(W)	良	にぶい橙	破片	

第198図 第472号住居跡出土遺物(1)



第199图 第472号住居跡出土遺物(2)



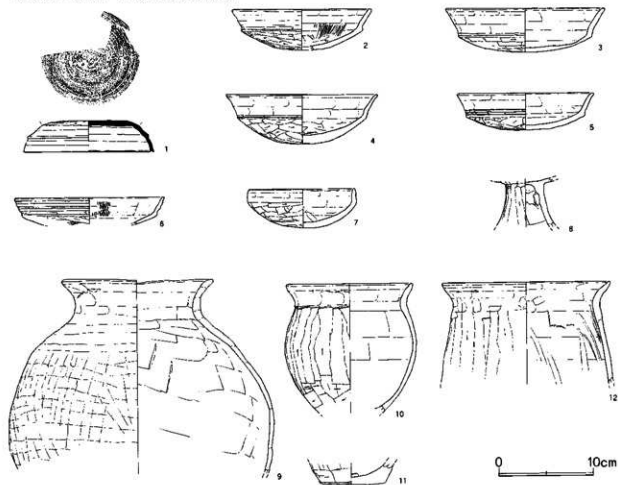
第473・474号住居跡（第10・201図）

AM-23グリッドを中心に位置する。南西部で第475・476・478号住居跡を切ることは確認できたが、北隅で重複する第462号住居跡との関係は、これを明らかとし得なかった。調査当初は1軒の住居跡と思われたが、南東壁と西隅部の内側に、平行するもう1条

の壁溝らしき溝を検出するにおよび、拡張の行なわれたものと判断した。

平面的には長方形の第473号住居跡から、方形の第474号住居跡への拡張であり、主軸方向はおよそN-35°-Wを指す。

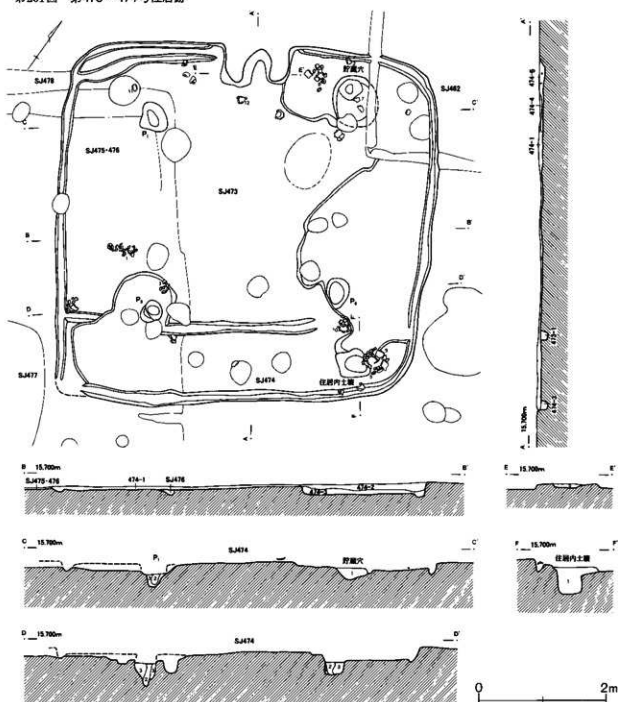
第200図 第473・474号住居跡出土遺物



第85表 第473・474号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考
1	須志器 坏 壺	(134)	3.3		細 (F)	良	灰	40	
2	坏	(149)	(4.3)		細 (W, B, R)	良	橙	50	
3	坏	(170)	4.7		細 (B, R)	良	灰 黄	40	
4	坏	(162)	5.2		細 (B, R)	普	橙	50	
5	坏	(146)	3.9		細 (W, B, R)	良	にぶい 橙	70	
6	坏	(159)	(2.9)		細 (W, R)	良	にぶい 橙	破片	
7	坏	11.8	4.1		細 (W, B, R)	良	橙	75	
8	高 坏		(5.2)		細 (B, R)	普	にぶい 橙	破片	
9	壺	16.3	(20.5)		雑 (W, 片)	普	橙	60	
10	壺	13.4	(13.7)		粗 (W, R)	普	にぶい 橙	80	
11	壺		(2.3)	(7.1)	雑 (W, B, R)	普	にぶい 橙	破片	
12	壺	(18.0)	(10.9)		雑 (W, R, 片)	良	にぶい 橙	破片	

第201図 第473・474号住居跡



第473号住居跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土粒多く含む。SJ474築造時の人為的埋め戻し。

第474号住居跡 土層説明 (カマドを含む)

1. 10YK3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。自然堆積層。
2. 10YK3/2 黒褐色土 1層と近似。地割れ落ち込み部に1層浅入か。
3. 10YR2/2 黒褐色土 2層と近似。黄褐色土ブロック多く含む。
4. 10YK3/3 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量。カマドへの埋入土。
5. 10YR2/1 黒色土 カマド炭化物層。焼土粒豊富。

第474号住居跡 貯蔵穴・柱穴土層説明

1. 10YK3/1 黒褐色土 貯蔵穴。黄褐色土ブロック・焼土ブロック少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 柱穴内底。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・粒多く含む。光沢上。

第474号住居跡 住居内土層土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。

(第473号住居跡)

規模は軸長4.60m×6.00m、面積27.60㎡である。

床面は拡張に際し、特に削られたり張られたりした様子は窺えない。壁溝は拡張に伴う埋め戻しはあるが、壁溝自体の規模はあまり変わらないようである。

カマドは拡張後もそのまま使用されたと思われる。しかし、主柱穴は拡張後のものようで、見合う位置での検出はなかった。また貯蔵穴については、拡張前からの付設か否かを確認できなかった。

(第474号住居跡)

北東と南西の壁はそのままに、北西と南東の壁を拡張する。拡張後の規模は軸長5.70m×6.00m、面積34.20㎡である。

東側に地震による段差が生じているため、床までの深さは5～15cmと一定しない。覆土は自然堆積で、地震の段差を除けば、床面は概ね平坦である。全周する壁溝は幅約10～18cm、深さ5～10cmを測る。

カマドは住居の拡張前、北西壁中央に設けられたものを利用している。燃焼部は径50cm×44cmの楕円形で、火床面は床面と同一高である。

柱穴は3本の主柱穴を検出した。その位置から見て、拡張後に掘られたものと思われる。大きさは、径33～44cm、深さ22～40cmである。いずれも柱痕が観察された。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は重複により不明瞭となるが、おおよそ径55cmの楕円形と思われる。深さは31cmを測る。

遺物は土師器の坏・甕・壺、須恵器の坏蓋、鉄製の不明製品(第428図19・22)などが、床面に散在していた。

第475・476号住居跡 (第10・202図)

AN-23グリッドを中心に位置する。南部で第477号住居跡を切る他、全体で第478号住居跡の大部分を掘り抜く。反対に、北隅付近には第473・474号住居跡に

大きく切り込まれる。また、住居跡内には第503号土塊が存在するが、新旧関係は確認できなかった。

これも当初は1軒の住居跡と思われたが、北西の壁溝が二重になり、その内側は埋め戻されていることから、拡張(壁と床の改修程度)が行なわれたものと判断した。ともに全体は方形を呈し、主軸方向はおおよそN-51°-Eを指す。

(第475号住居跡)

拡張前の第475号住居跡は、北西の壁溝が確認できたにとどまり、全体の規模は明らかとしない。その壁長は約6.73mである。床は拡張時、北半部を中心に掘り下げられている。カマドや主柱穴、貯蔵穴も独自には検出されなかった。拡張が改修程度のものであったとすれば、これらは引き続き使用されたと考えられる。

(第476号住居跡)

拡張後の第476号住居跡は、軸長7.10m×7.00m、面積49.70㎡を測る。

床までの深さは10cm前後、覆土はほとんど遺存しないが、自然堆積と思われる。床面は一旦掘り下げた第475号住居跡の床に、黄褐色土主体の貼り床を施している。おおよそ平坦で、硬く締まっている。壁溝はほぼ全周しており、幅約10～25cm、深さは約4cmを測る。

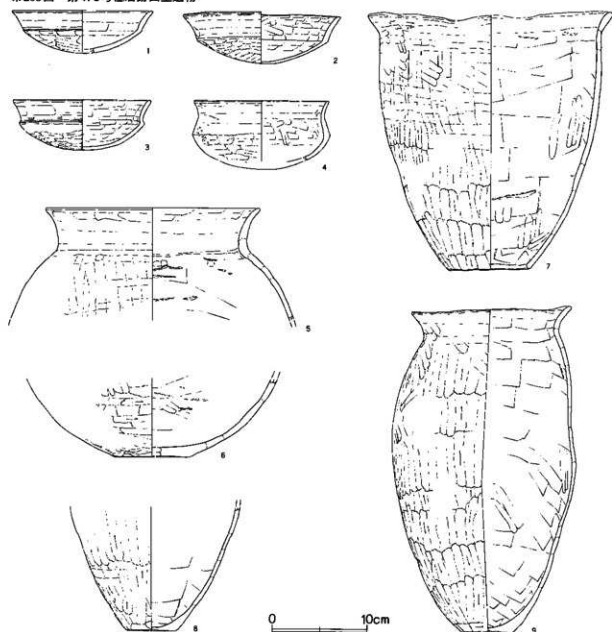
カマドは北東壁の東隅近くに設けられるが、左側は第474号住居跡に壊されていた。おそらく、燃焼部は長方形のものであったと推定される。

柱穴は主柱穴が4本検出された。大きさは径27～35cm、深さ17～43cmを測る。

貯蔵穴は東隅部、カマドに隣接して備わる。径58cm×102cmの円形で、深さは32cmを測る。

遺物は貯蔵穴周囲の床面より、土師器の坏・壺・甕・瓶、ミニチュアの壺(第426図9)などが出土している。いずれも押し潰されたような状態で、細かい破片となっていた。

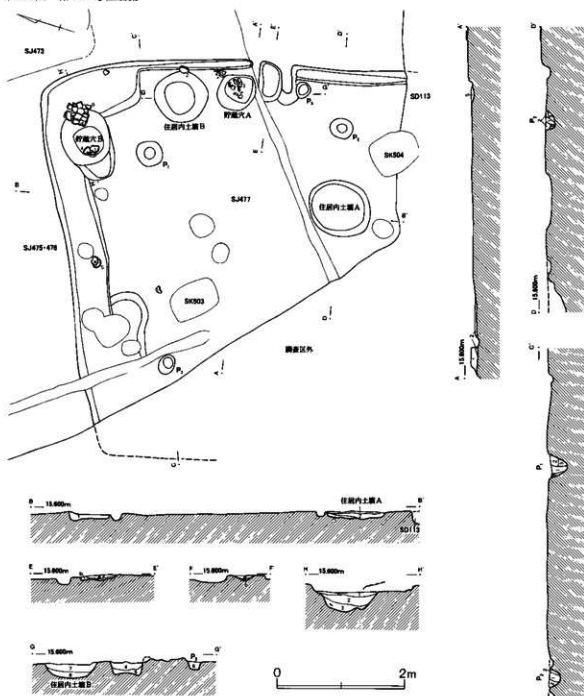
第203図 第476号住居跡出土遺物



第86表 第476号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.0)	(4.5)		微(W)	青	橙	30	
2	坏	16.8	5.1		微(W)	良	橙	95	内面採ける
3	坏	(14.4)	5.3		微(W, B)	良	橙	65	
4	碗	14.3	(6.3)		微(W, B)	良	浅黄橙	30	
5	壺	(22.6)	(12.0)		粗(W)	普通	橙	破片	6と同一個体
6	壺		(8.3)	(3.9)	粗(W)	普通	にぶい黄橙	破片	5と同一個体
7	甌	(25.6)	27.2	8.6	硬(W, C, 片)	普通	にぶい橙	60	
8	甌		(13.5)	5.3	硬(W, 片)	普通	にぶい黄橙	20	
9	甌	17.1	34.3	5.4	粗(W, 片)	良	にぶい橙	80	

第204図 第477号住居跡



第477号住居跡 土層説明 (土壇A含む)

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物多量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物上ブロック多く含む。人工的壁の戻し。
3. 10YR2/1 黒色土 炭化物多く含む。

第477号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/1 灰白色土 炭化物多量含む。
- b. 10YR4/6 褐色土 黄褐色土粒多く含む。縦り方。

第477号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 柱痕。
2. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物土粒・焼土粒少量含む。
3. 10YR4/6 褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。

第477号住居跡 貯蔵穴・P-5・住居内土壇土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒ブロック少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒ブロック多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒・炭化物土粒少量含む。
5. 10YR4/6 褐色土 炭化物多量・炭化物土粒多く含む。
6. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒多く含む。カマドの灰をかきだしたもので。
7. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒少量含む。
8. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物多量・炭化物土粒多い。

第477号住居跡 (第10・204図)

AN-23グリッドを中心に位置する。南側を第113号溝跡と第504号土壇に、北側を第475・476号住居跡にそれぞれ切られる。また、西部は調査区外となるため、規模などについては明らかと心得ない。全体はやや形が歪むもの、おおよそ方形になるものと考えられる。柱穴の位置から推定される東西の軸長は、およそ6.20mで、主軸方向はN-68°-Eとなる。

床までの深さは10cm前後であり、覆土は自然堆積と考えられる。床面は東から西へ向け、わずかに傾斜する。壁溝は幅約15~20cm、深さ約5cmであるが、北西壁では幅が3倍に拡大する。

主柱穴の位置から見ると、カマドは東壁の中央よりやや南に寄るようである。燃焼部は径60cm×38cmの楕

円形で、火床面は床から10cm程掘り込まれる。

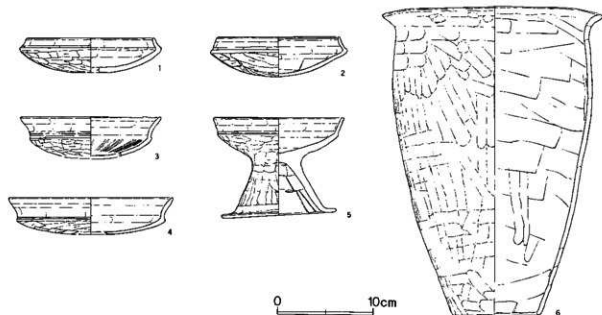
柱穴は主柱穴が3本検出された。径27~41cm、深さ15~29cmで、ともに柱痕が観察された。

貯蔵穴は2基検出した。カマド北側に隣接する貯蔵穴Aは、径55cmで深さは20cm、北東隅部に備わる貯蔵穴Bは、径115cm×80cmで深さは45cmをそれぞれ測る。

その他、床には2基の土壇が穿たれている。南側の土壇Aは、径約90cmで深さは12cm、カマド北側に隣接する土壇Bは、径82cmで深さは20cmである。覆土には人為的な埋め戻しが窺えることから、住居使用時には開口していなかったものと判断される。

遺物は貯蔵穴Aより土器の坏、貯蔵穴Bより坏2点と甗が出土している。

第205図 第477号住居跡出土土遺物



第87表 第477号住居跡出土土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.5)	3.6		細 (B, R)	善	にぶい黄橙	30	
2	坏	12.8	4.2		粗 (W, B, R)	良	橙	100	
3	坏	(14.9)	(4.2)		細 (W, B, R)	良	にぶい橙	20	
4	坏	(17.4)	(3.9)		細 (B, R)	青	灰にぶい白	25	
5	高坏	13.9	10.3	12.1	麁 (W, C, R)	良	にぶい橙	90	
6	甗	23.5	37.8	(8.9)	粗 (W, 片)	善	橙	75	

第478号住居跡 (第10・202図)

AM-23グリッドを中心に位置する。そのほとんどを第473・474・475・476号住居跡に切られており、わずかに北西壁の一部が確認できたにすぎない。このため、全体の規模や形状、施設等についてはまったく不明である。

床までの深さは約7cm、覆土は人為的な埋め戻しと考えられる。壁溝は検出部分で、幅約18cm、深さ約6cmである。

遺物の出土は認められなかった。

第479号住居跡 (第10・207図)

AN-23グリッドを中心に位置する。第480・489号住居跡を大きく掘り抜き、北西壁を第114号溝跡に切り取られる。南西は調査区外になり、全体の規模や形状については明らかでない。主柱穴の位置から想定さ

れる東西の軸長は約4.25mで、主軸方向はおおよそN-45°-Eを指す。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積を示す。床面はほぼ平坦で、壁溝は幅15~20cm、深さは約7cmを測る。

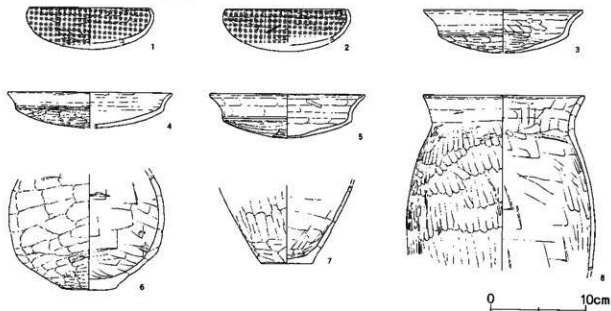
カマドは北東壁に付設される。主柱穴の位置から見ると、中央部からはやや北に寄っているようである。燃焼部は径70cm×43cmの長方形で、火床面は床とはほぼ同一高である。

柱穴は2本の主柱穴を確認した。大きさは、径17~24cm、深さ15~27cmである。

貯蔵穴は途中で貯蔵穴Aとしたものが該当する。上面は径76cm×60cmの円形で、深さは43cmを測る。

遺物は貯蔵穴周辺の床面上より、土器の坏や甕などが出土している。

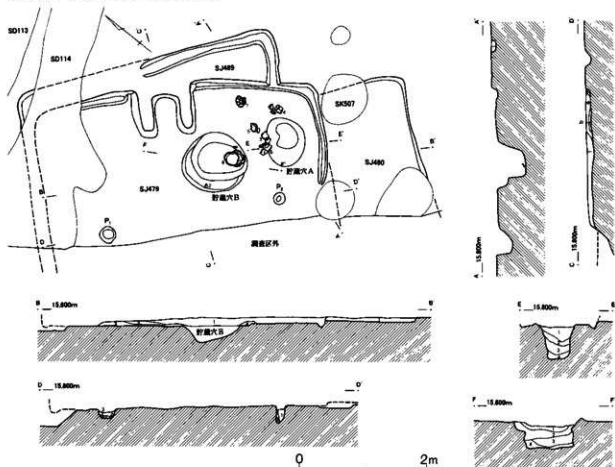
第206図 第479号住居跡出土遺物



第88表 第479号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	坏	(13.0)	(4.0)		微 (W, B)	青	浅 黄 橙	破片	此全形 赤彩 2と同一個体か 赤彩 1と同一個体か
2	坏	(13.0)	(3.6)		微 (W, B)	青	橙	破片	
3	坏	17.0	(4.6)		粗 (W, C)	良	橙	30	
4	坏	(17.6)	(3.8)		微 (W, B)	良	橙	40	
5	坏	(16.4)	(4.7)		粗 (B, R)	青	に ぶ い 橙	40	
6	壺		(12.3)	(6.0)	微 (W, B)	良	浅 黄 橙	45	
7	甕		(8.4)	5.4	粗 (W, 片)	良	に ぶ い 赤 褐	破片	8と同一個体か 7と同一個体か
8	甕	17.3	(18.6)		粗 (W, 片)	良	橙	50	

第207図 第479・480・489号住居跡



第479号住居跡 上層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土少量混入、炭土粒・炭化物少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土多く含む。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック多く、焼土粒少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

第479号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化物多く含む。
- b. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒多く含む。砂質土。
- c. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

第479号住居跡 貯蔵穴A土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土 焼土粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土 焼土粒・ブロック多く含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック多量含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土ブロック多く含む。

第479号住居跡 貯蔵穴B土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック非常に多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック若干含む。
3. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒・炭土粒少量含む。
4. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック多く含む。

第479・480号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。柱状。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土ブロック少量含む。充填土。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土ブロック非常に多く含む。充填土。

第480号住居跡 上層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄褐色土層状に入る。S.479構築物の埋め戻しと混ざる。

第480号住居跡 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒多く含む。

第480号住居跡 (第10・207図)

AO-23グリッドを中心位置する。北側を第479号住居跡に掘り抜かれ、南西は調査区外となる。東の隅部が確認できたに過ぎず、全体の規模や形状、施設などについては明らかとしない。なお、第489号住居跡と第507号土壌との重複関係は、確認することができなかった。

床までの深さは6cm前後で、覆土は第479号住居跡構築時の埋め戻しと考えられる。床面は平坦で、壁溝

は認められなかった。

カマドと柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴は、図中に貯蔵穴Bとしたものが該当しよう。確認は得られなかったが、重複する2軒の住居跡それぞれには位置的な無理があり、覆土には故意の埋め戻しが窺えた。よって、第480号住居跡に伴うものと判断した。この場合、位置は北隅部と言うことになる。上面は径約98cmの円形で、深さは36cmである。

遺物の出土は見られなかった。

第481号住居跡 (第11・208図)

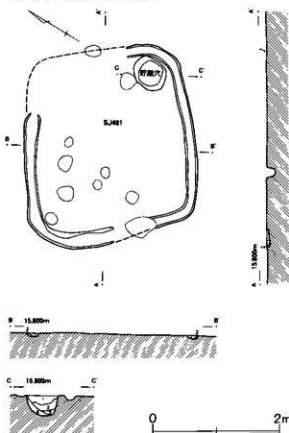
AN-24グリッドに位置する。壁溝での検出であり、床面やカマドは表土除去時に削平してしまった。全体は軸長3.05m×2.73mの隅丸長方形で、面積はおおよそ8.33㎡である。主軸方向はほぼN-56°-Eを指す。

壁溝は本来、全周したものと思われる。幅は15~25cm、深さは約6cmである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径53cm×46cmの円形で、深さは31cmを測る。カマドは壁溝と貯蔵穴の形態から見て、北東壁の中央部に備わっていたようである。

遺物は検出できなかった。

第208図 第481号住居跡



第481号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行地山灰多く含む。
2. 10YR1/6 深い青藍色土 ほとんど地山、壁の石灰化層。

第481号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行地山灰多く含む。
2. 10YR2/1 黒褐色土 1層に非ずる。地山灰土少なく色濃縮し、多量の炭上。炭灰熱地山粒・ブロック、若干の炭化物含む。カマドからの灰入だらう。
4. 10YR1/6 深い青藍色土 ほとんど地山、壁の硬質土ブロック。

第482号住居跡 (第11・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。西側は第483・485号住居跡に大きく切られ、南隅で第456号土壇を切る。ほとんど壁溝での検出であるため、第484号住居跡、第506号土壇との重複関係は確認できなかった。主柱穴の配置から想定される規模は、軸長5.05m×5.10m、面積25.76㎡である。

壁溝は幅約10~20cm、深さ約3cmを測る。

柱穴は主柱が4本検出された。径32~49cm、深さ20~54cmで、ともに柱根が観察された。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は壁溝より、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。いずれも数個の破片であり、図示するには至らなかった。

第483号住居跡 (第11・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。第482・484・485号住居跡を切り、北隅付近を第455号土壇に切られる。また、住居跡内に第506号土壇が掘り込まれているが、新旧関係は確認できなかった。西側は第485号住居跡の覆土(人為的埋め戻し)だが、本跡構築に伴うか否かは判断としない。)上となるため、平面での検出は困難であった。断面観察から得られた知見を補えば、全体は軸長約2.95m×3.10mの方形で、北を指準とする軸方向はおおよそN-38°-Wとなる。

床までの深さは10cm前後、覆土は自然堆積のようである。壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ平坦である。埋め戻し部分にも、特に貼り床の施された形跡は窺えなかった。検出部分の壁溝は幅約20cm、深さは2cmを測る。

カマド、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は土師器の細片を少量出土したが、図示するには至らなかった。

第484号住居跡 (第11・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。第483・485号住居跡にそのほとんどを掘り抜かれており、北東壁の一部を確認したにすぎない。よって、全体の規模や形状、施設等についてはまったく不明である。

壁溝は東隅部にごく一部を確認した。幅約20cm、深さは約3cmである。

カマド、柱穴、貯蔵穴などは検出されなかった。

遺物の出土も一切認められなかった。

第485号住居跡 (第11・209・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。第482・484・491号住居跡を切り、第483・486号住居跡、第456号土壇に切られる。第115・116号溝跡、第506号土壇との重複関係は確認できなかった。全体は軸長5.45m×5.55mの方形を呈し、面積は30.25㎡を測る。主軸方向はおおよそN-37°-Wを指す。

床までの深さは20cm前後、覆土は人為的な埋戻しである。おそらくは、第483・486号住居跡の構築に伴うものであろう。

壁の立ち上がりは急で、床面は中央がやや高まる。壁溝はおおむね全周し、幅約20～40cm、深さ約5～10cmを測る。

カマドは北西壁のおおむね中央に設けられる。燃焼部は径約86cm×48cmの長方形で、火床面は壁に向かってわずかに傾斜する。中央壁寄りには、地山を用いた支脚が造り付けられる。その奥からは、支脚から転落したと思われる甕が出土している。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径29～44cm、深さ

22～44cmである。

貯蔵穴はカマドの右脇に備わる。上面は径62cm程の円形で、深さは53cmを測る。

遺物はカマドの他、貯蔵穴の肩部から底部にかけて、土師器の坏・小甕甕・長胴甕・甎、白玉(第424図16)などが出土している。

第486号住居跡 (第11・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。人為的に埋戻された第485号住居跡の覆土を切る。但し、この埋戻しは本跡に伴うものなのか、第483号住居跡の構築の際のものなのかは判然としない。大部分は調査区外になるため、全体の規模や形状、またカマドなどの施設は不明である。断面観察から想定される軸長は、南北が約4.43mである。

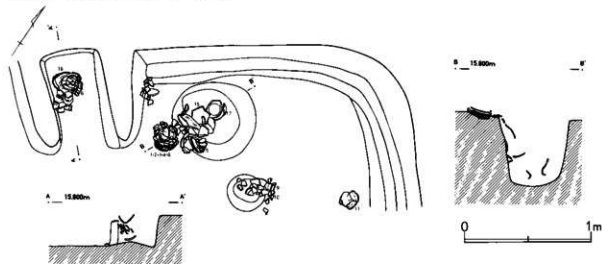
床までの深さは約12cmで、覆土は自然堆積である。床面は概ね平坦で、貼り床が施されている。壁溝は幅約18cm、深さ5cmを測る。

柱穴は1本のみ検出された。大きさは径50cm、深さ30cmで、位置的に見て主柱穴と思われる。

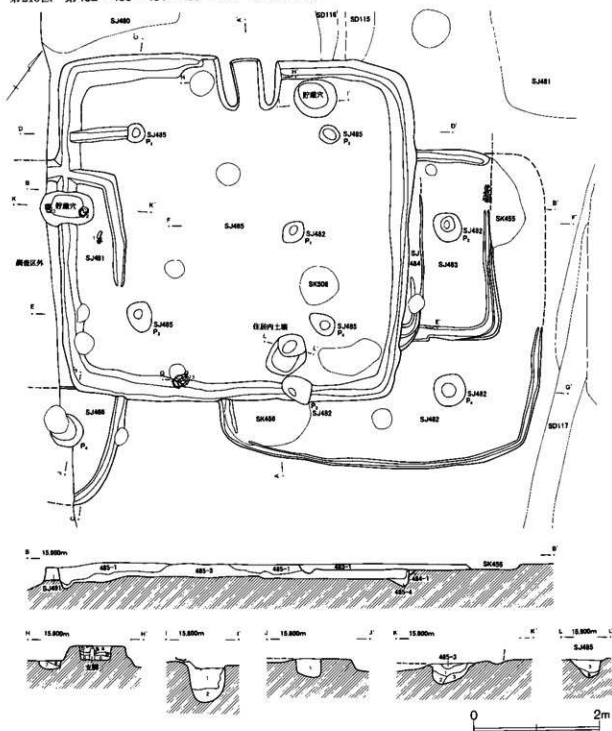
カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より土師器の破片が検出されたが、図示できたものは3点のみである。

第209図 第485号住居跡カマド・貯蔵穴



第210図 第482・483・484・485・486・491号住居跡



第482号住居跡 土層説明 (貯蔵穴含む)

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒少量。
2. 10YR2/1 黒褐色土 炭化物を含む。灰灰。
3. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。柱痕。
4. 10YR3/4 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック含む。

第483号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。

第484号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。壁の崩落か人爲的埋め戻しか不明。

第486号住居跡 土層説明

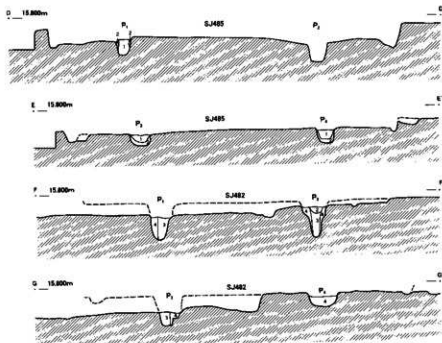
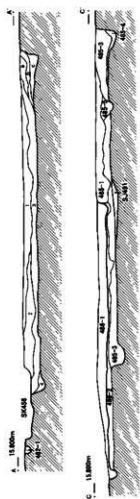
1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物少量。自然堆積層。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。跡り痕。

第486号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。

第491号住居跡 貯蔵穴土層説明 (土色観察穴層)

1. 黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量含む。遺物混入層。
2. 黄褐色土粒多く含む。
3. 黄褐色土粒・焼土粒 炭を含む。灰灰じりの層



第485号住居跡 土層説明 (住居内土層含む)

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。人為的埋め戻し。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロッカ多く含む。人為的埋め戻し。
3. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。人為的埋め戻し。
4. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロッカ多く含む。人為的埋め戻し。
5. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。黄仕切り部だが、埋積状況不自然。人為的埋め戻し。
6. 10YR2/2 黒褐色土 カマド脇埋積。焼土粒・炭化物多く含む。
7. 10YR2/3 黒褐色土 カマド脇埋積。黄褐色土粒・ブロッカ多く含む。
8. 10YR4/6 褐色土 黄褐色ブロッカ多く含む。住居内土層遺土。

第485号住居跡 埋藏土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロッカ・粒多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロッカ多く含む。

第485号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土・焼土・炭化物粒含む。
2. 10YR4/6 褐色土 よくしまる。

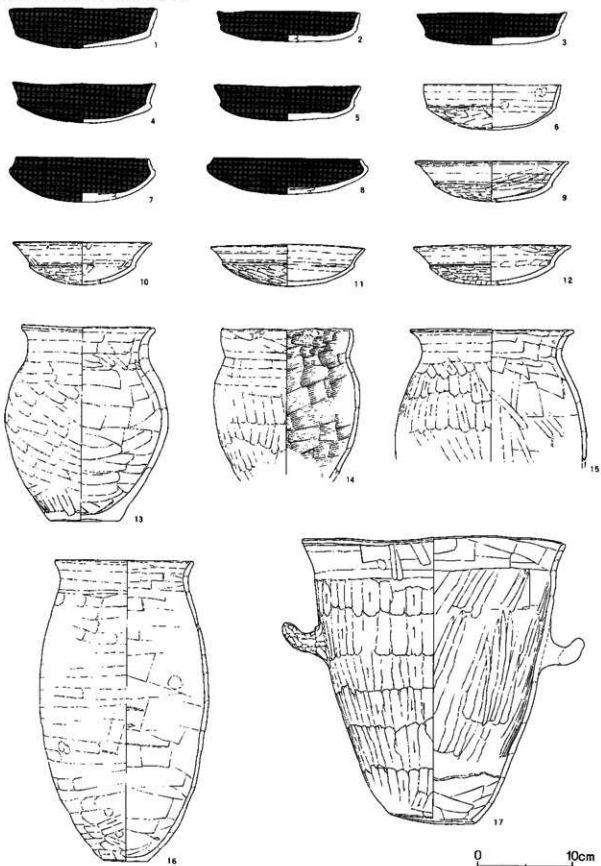
第485号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・黄褐色土粒少量。黄褐色埋積部への流入土。
- b. 10YR2/2 黒褐色土 天井縁埋積の後に焼土多く含む。
- c. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。カマドへの流入土。

第89表 第485号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色澤	残存率	備考
1	坏	16.0	4.1		微(W, B)	良	明赤褐	100	内外黒色処理
2	坏	(15.4)	(3.1)		微(W, B)	良	明赤褐	50	内外黒色処理
3	坏	16.1	3.5		細(W, B)	良	赤褐	90	内外黒色処理
4	坏	15.3	4.3		微(W, B)	良	明赤褐	100	内外黒色処理
5	坏	15.8	3.6		微(W, B)	良	赤褐	90	内外黒色処理
6	坏	(14.4)	4.8		細(W, B, R)	普	橙	60	
7	坏	(14.4)	(4.4)		微(W, B)	普	明赤褐	30	内外黒色処理
8	坏	(16.0)	(3.7)		微(W, B)	良	にぶい赤褐	35	内外黒色処理
9	坏	16.6	(4.4)		微(W)	良	にぶい黄橙	75	小針型
10	坏	15.0	(4.5)		微(W, B)	良	橙	破片	小針型
11	坏	16.6	4.2		微(W, B)	普	橙	90	小針型
12	坏	17.0	(4.2)		微(W, B, R)	普	橙	75	小針型
13	甕	(14.4)	(20.5)	7.5	粗(W, 片)	普	橙	75	
14	甕	(14.0)	(15.5)		細(W, C)	良	にぶい褐	20	
15	甕	17.6	(15.0)		粗(W, 片)	普	橙	40	
16	甕	(14.9)	(32.0)	4.6	粗(W, C)	普	橙	60	
17	瓶	28.5	29.7	(9.2)	確(W, C, 片)	普	橙	95	

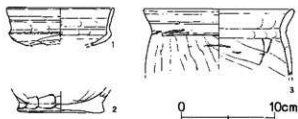
第211図 第485号住居跡出土遺物



第90表 第486号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.3)	(4.0)		細(W, B, R)	普通	灰にぶい橙褐色	20	
2	甕	(16.0)	(2.3)	9.2	粗(W, B, R, 片)	普通	明赤褐色	破片	
3	甕	(16.0)	(7.1)		粗(B, R)	普通	明赤褐色	破片	

第212図 第486号住居跡出土遺物



第487号住居跡 (第11・213図)

AO-26グリッドを中心に位置する。南西壁で第488号住居跡を切る。全体は軸長4.16m×4.12mの方形で、面積は17.14㎡を測る。主軸方向はおおよそN-44°-Eを指す。

床までの深さは10cm前後、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは急で、床面はおおよそ平坦である。壁溝は全周し、幅13~20cm、深さ5~10cmを測る。

カマドは北東壁の中央に付設される。燃焼部は100cm×42cmの長方形で、火床面は床より3cm程深い。左袖の脇には、焼土を多く含む浅いピットが検出された。このPは径45cm、深さ18cmである。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径30~39cm、深さ30~34cmである。いずれも柱痕は観察できず、覆土も乱れていた。抜き取り後の埋め戻しのようなものである。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径65cm×49cmの楕

円形を呈し、深さは42cmを測る。

遺物は貯蔵穴の周辺に、ややまとまって出土した。土師器の坏・碗・甕などが見られるが、ともに破片である。

第488号住居跡 (第11・213図)

AO-25グリッドを中心に位置する。北東壁で第487号住居跡に切られる。全体は軸長6.25m×6.25mの方形を呈し、面積は39.06㎡を測る。主軸方向はおおよそN-57°-Eを指す。

床までの深さは5~20cm、覆土は自然堆積を示す。床面はやや凹凸が見られ、炭化物の薄層で覆われていた。垂直に立ち上がる壁には、全周する壁溝が伴う。幅は15~30cm、深さは5~15cmを測る。

カマドは北東壁の中央に設けられる。燃焼部は90cm×42cmと細長く、火床面は丸底気味で、床から約4cm窪まる。

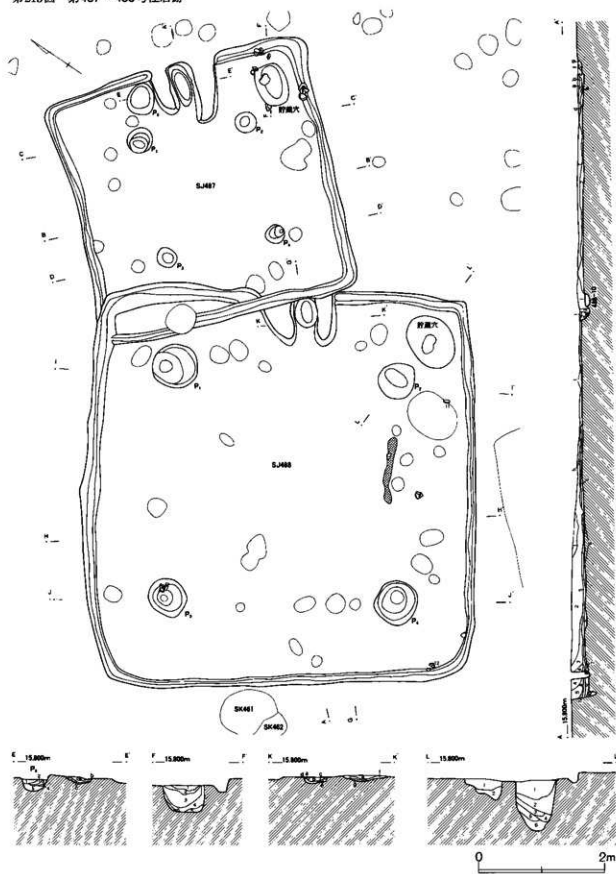
柱穴は主柱穴が4本検出された。径57~70cm、深さ約30cmである。柱痕は認められず、覆土も乱れている。柱の抜き取りが行なわれ、故意に埋め戻されたものと推測される。

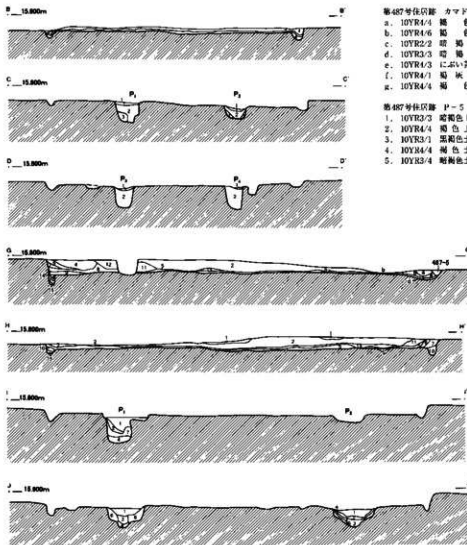
貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径88cm×68cmの楕円形で、横断面がU字形を呈する。床から底面までは80cmとかなり深い。

第91表 第487・488号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.2)	3.7		粗(C, R)	普通	橙	25	
2	坏	(16.0)	(3.9)		微(W, B)	普通	にぶい黄褐色	破片	
3	坏	(12.2)	(3.4)		細(W)	普通	にぶい橙褐色	破片	
4	坏	(15.2)	(3.6)		細(W, B, R)	良	にぶい黄褐色	30	内外黒色処理
5	坏	(14.0)	(4.0)		細(W)	普通	橙	破片	
6	碗	(12.4)	(4.9)		微(W)	許	灰白	破片	
7	甕?	(20.3)	(11.3)		粗(片)	普通	にぶい赤褐色	30	
8	甕	(22.6)	(13.8)		粗(W, C)	普通	橙	20	
9	坏	(10.5)	(4.8)		微(B, R)	許	にぶい橙褐色	25	
10	坏	(17.4)	(5.4)		微(B, R)	良	にぶい橙褐色	20	
11	坏	17.8	5.4		細(B, R)	普通	にぶい黄褐色	50	
12	鉢	(12.3)	10.5	(5.1)	粗(W, C, R)	良	橙	50	

第213图 第487・488号住居跡





第487号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。土器片含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒。土器片含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒。土器片含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 炭褐色土ブロック・焼土・炭化物粒に含む。
5. 10YR2/3 暗褐色土 炭褐色土ブロック多・焼土・炭化物含む。

第487号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/6 褐色土 仔細質土。
2. 10YR4/6 褐色土 1層より明。堀の戻し上か。
3. 10YR4/6 褐色土 2層より明い。

第488号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 S1487-1層に近似。
2. 10YR3/4 1層より明。埋め戻し上か。褐色土粒含む。
3. 10YR3/4 2層より明い。
4. 10YR2/3 焼土粒含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・炭化物が密かに埋積。
6. 10YR2/8 黄褐色土 表面の。土と土層が少量混じる。
7. 10YR2/3 暗褐色土 焼土・炭化物粒含む。
8. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒含む。
9. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物含む。
10. 10YR3/1 暗褐色土
11. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック含む。
12. 10YR3/3 暗褐色土 1層より焼土粒多含む。
13. 10YR3/4 暗褐色土 2層と3層の混合層。
14. 10YR2/3 暗褐色土
15. 10YR4/6 褐色土

第487号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/4 褐色土 焼土粒含む。
- b. 10YR4/6 褐色土 焼土粒含む。
- c. 10YR2/2 暗褐色土 少量の焼土・炭化物粒含む。
- d. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物含む。
- e. 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭化物粒多含む。
- f. 10YR4/1 暗褐色土 焼土・炭化物粒含む。
- g. 10YR4/4 褐色土 焼土・炭化物粒含む。

第487号住居跡 P-5土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒・土器片含む。
2. 10YR4/4 暗白土 焼土粒含む。
3. 10YR2/1 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
4. 10YR4/4 褐色土 焼土・炭化物粒含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。

第487号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土
2. 10YR4/6 褐色土
3. 10YR4/6 褐色土
4. 10YR4/6 褐色土
5. 10YR2/3 暗褐色土

第488号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒含む。
- b. 10YR2/1 黒色土 焼土粒・炭化物含む。
- c. 10YR2/2 黄褐色土 焼土粒・炭化物含む。
- d. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物含む。
- e. 10YR2/4 暗褐色土 焼土・炭化物含む。
- f. 10YR2/3 暗褐色土 焼土・炭化物含む。焼土層より。
- g. 10YR2/1 黒色土 炭化物と焼土の混合。焼土層より。

第488号住居跡 貯蔵穴土層説明

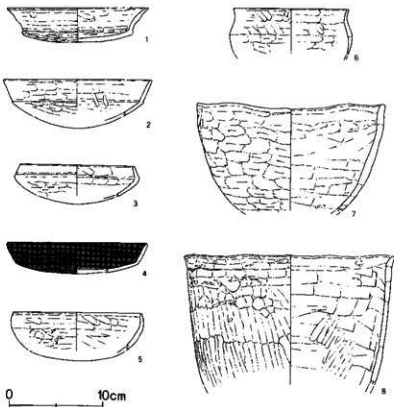
1. 10YR2/4 暗褐色土 住居質土。
2. 10YR2/4 暗褐色土 住居質土。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土・炭化物粒含む。灰黄層状に埋積。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 3層に焼土ブロック含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 焼土・炭化物粒多らに含む。
6. 10YR3/4 暗褐色土 焼土中に埋積あり。

第488号住居跡 柱穴土層説明

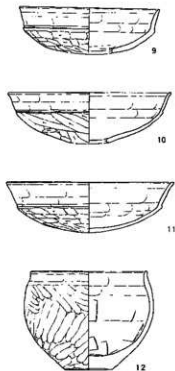
1. 10YR3/4 暗褐色土 住居質土。
2. 10YR2/8 黄褐色土 住居質土。
3. 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック含む。埋め戻し上か。
4. 10YR3/4 暗褐色土 3層より明い。
5. 10YR3/4 暗褐色土 焼土・炭化物粒含む。
6. 10YR2/6 黄褐色土
7. 10YR3/1 暗褐色土 褐色土ブロック含む。

第214図 第487・488号住居跡出土遺物

SJ487



SJ488



遺物の出土は少量で、しかも細かい破片であった。床に散在する程度で、集中する様子は窺えなかった。土器のほか、砥石(第420図11)が1点見出されている。

第489号住居跡 (第10・207図)

AN-23グリッドを中心に位置する。壁溝のみの検出である上、その大半は第479号住居跡に掘り抜かれ、北西部も第114号溝に切断されている。さらに南西は調査区外となるため、全体の規模や形態は明らかとしない。わずかに残存する北隅の形状から推定すれば、東西の軸長は約4.10mとなる。

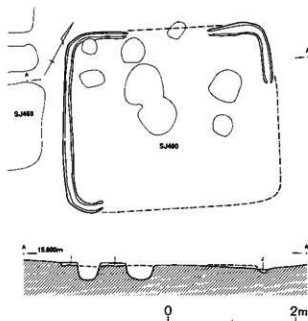
壁溝は幅15~20cm、深さは約6cmである。

カマド・柱穴・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第490号住居跡 (第11・215図)

AN-25グリッドを中心に位置する。表土除去時にその大半を削平してしまったため、壁溝の一部を検出

第215図 第490号住居跡



第490号住居跡 土層説明

1. 10YR5/3 用 輪 色 土 地山粒多く含む。
2. 10YR5/3 に近い黄褐色土 地山粒非常に多く含む。

できたにすぎない。壁溝から想定される規模は、軸長2.86m×3.30mの方形で、面積は9.44㎡となる。全体は長方形で、長軸方向はほぼN-60°-Wである。

壁溝は幅約15cm、深さは約4cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は壁溝より、土師器の破片が数点出土した。しかし、いずれも微細であるため、図示するには至らなかった。

第491号住居跡 (第11・210図)

AO-24グリッドを中心に位置する。第485・486号住居跡に切られる上、大部分は調査区外となる。このため、全体の規模や形状については明らかとし得ない。検出できたのは、北隅部と南東壁のごく一部のみである。ここから得られる軸長は、約3.52mとなる。

壁や床面は第485号住居跡構築時に、ほぼ削り取られてしまっていた。検出した壁溝は幅約20cm、深さ約

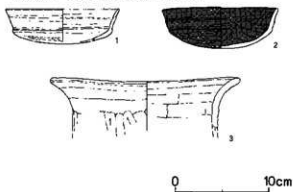
4cmである。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径86cm×55cmの楕円形を呈し、床からの深さは34cmを測る。

カマド、柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴中より、土師器の坏や甕などが出土している。

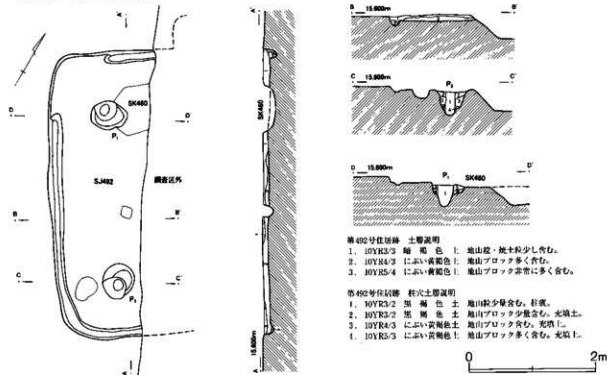
第216図 第491号住居跡出土遺物



第92表 第491号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	貯土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.2)	(3.4)		段 (W, C)	青	橙	破片	内外黒色処理
2	坏	12.5	4.3		粗 (C)	良	橙	85	
3	甕	(20.6)	(5.6)		細 (W, C, R)	苜	浅黄 橙	破片	

第217図 第492号住居跡



- 第492号住居跡 土器説明
1. 10YR2/3 緑褐色土 土山段・焼土較少を含む。
 2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 土山ブロック多く含む。
 3. 10YR5/4 に近い黄褐色土 土山ブロック非常に多く含む。

- 第492号住居跡 柱穴土器説明
1. 10YR2/2 黒褐色土 土山段少量含む。石灰。
 2. 10YR3/2 黒褐色土 土山ブロック少量含む。灰土。
 3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 土山ブロック含む。灰土。
 4. 10YR5/3 に近い黄褐色土 土山ブロック多く含む。灰土。

第492号住居跡 (第11・217図)

AO-27グリッドを中心に位置する。東側の大半は調査区外になるため、西辺部が確認できたにとどまる。南北の軸長は約4.53mで、主軸方向はおおよそN-34°-Wを指す。

床までの深さは8cm前後、覆土は人為的な埋め戻しと思われる。床面はほぼ平坦で、一部を第460号土壌に掘り抜かれる。壁溝は西隅部で途切れる。幅は14~22cm、深さは4~7cmである。

カマドは検出されなかったが、調査区の壁に焼土や炭化物を多量に含む土層が観察された。その位置は北壁の延長部であることから、カマドはその付近(図中に破線で示した部分)に備わるものと推定される。

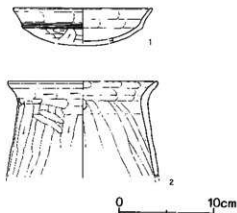
柱穴は2本の主柱穴を検出した。大きさは、径50~53cm、深さ38cmである。ともに明瞭な柱痕が観察され

た。

貯蔵穴は検出されなかった。

覆土中より土師器の高杯が1点出土しているが、細片のため図示し得なかった。

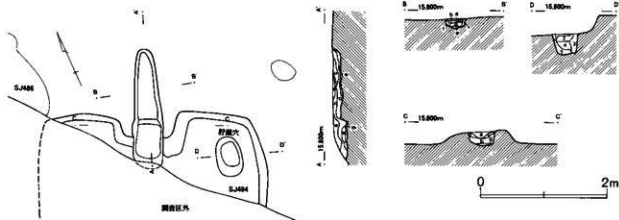
第218図 第493号住居跡出土遺物



第93表 第493号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.9)	(3.8)		細 (B, R)	香	浅黄橙	破片	
2	薬	(15.9)	(10.3)		硬 (W, B, R)	青	にぶい橙	破片	

第219図 第494号住居跡



第494号住居跡 カマド土層説明

- 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・ブロック含む。
- 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック含む。
- 10YR2/2 にぶい黄褐色土 焼土粒・ブロック・黄褐色土ブロック含む。
- 10YR3/3 黒褐色土 焼土ブロック含む。
- 10YR4/4 褐色土 扉面と同色。粘炭土含む。
- 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土粒・黒褐色土粒含む。
- 10YR2/1 黒色 1. 灰土と考えられる。

第494号住居跡 貯蔵穴土層説明

- 10YR3/3 暗褐色土 灰土層。
- 10YR3/3 暗褐色土 灰土粒含む。
- 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む。
- 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土粒含む。
- 10YR3/4 暗褐色土 しまりが弱い。

第494号住居跡 (第11・219図)

AO-24グリッドを中心に位置する。大部分は調査区外となるため、カマドから東隅部付近が検出できたにすぎない。故に、全体の規模は明らかとしない。カマドから見た主軸方向は、およそN-21°-Eである。

床までの深さは約30cm、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかで、壁溝は検出されなかった。

カマドは北東壁に設けられる。煙道は長さ112cm、幅39cmの溝状で、平坦な底面は先端で垂直に立ち上がる。燃焼部は80cm×49cmの長方形で、火床面は平坦で、床よりわずかに低い。覆土の上層は焼土ブロックを多く含んでいることから、天井部や壁の崩落土と考えられる。また、火床面には灰の薄層が形成されている。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径64cm×40cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。全体は箱型であり、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がる。

柱穴は検出されなかった。

遺物の出土は認められなかった。

第495・496号住居跡 (第11・221図)

AO-27グリッドを中心に位置する。2軒は入れ籠状に重複し、カマドと主柱穴も共用している。このことから、第495号住居跡は第496号住居跡を、一回り縮小したものと判断した。先行する第496号住居跡は、東壁で第497号住居跡を切り、中心部の第578号土壌を

埋め戻して構築される。そして、第495号住居跡埋没後、床を第464・465・466号土壌に掘り抜かれる。なお、北隅部で重複する第467・468・469号土壌との新旧関係は、これを確認することが叶わなかった。

全体はともに方形で、主軸方向はおよそN-24°-Eを指す。

(第495号住居跡)

軸長4.65m×4.20m、面積19.53㎡に縮小される。

床までの深さは10cm前後、覆土は人為的な埋め戻しのようである。床面は概ね平坦なものの、南から北へわずかに傾斜する。埋め戻した第578号土壌部分のみ、貼り床が施される。壁溝は第496号住居跡を含め、幅約15~25cm、深さは3~6cmである。

カマドは北壁の中央に設けられる。ほとんど削平してしまい、かろうじて燃焼部を確認したにとどまる。その大きさは、推定で径96cm×55cmである。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径49~61cm、深さ39~51cmである。いずれからも明瞭な柱痕が観察された。

貯蔵穴は検出されなかった。

図示した甕を含め、遺物は細かく破片ばかりであった。古墳時代後期の甕や坏、赤彩の坏、白玉(第424図17)などが認められるが、量はごくわずかである。

(第496号住居跡)

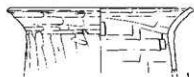
全体は軸長5.25m×5.20m、面積は27.30㎡を測る。

床までの深さは10cm前後であるが、第495号住居跡構築に際し、薄く濡き取られたようである。また、壁際の覆土も、縮小に伴う故意の埋め戻してである。

カマドと主柱穴は付け替えられた様子がなく、縮小後もそのまま使用されたと考えられる。

遺物は第495号住居跡と一括して取り上げたが、図示できるものは出土しなかった。

第220図 第495号住居跡出土遺物

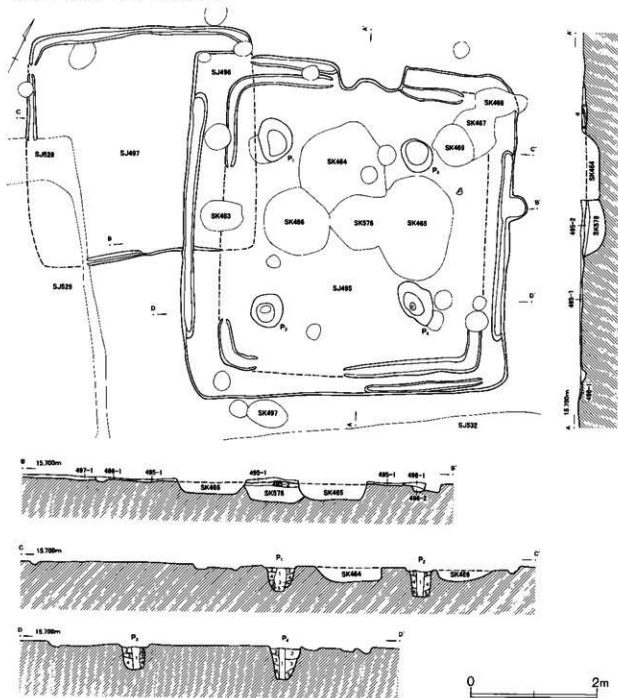


0 10cm

第94表 第495号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(20.0)	(6.9)		粗 (W. R)	良	にぶい橙	破片	

第221図 第495・496・497号住居跡



第495号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒少量含む。用み直し。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック非常に多く含む。盛り土。

第496号住居跡 キマド土層説明

- a. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒多く含む。
- b. 10YR2/1 暗褐色土 地山ブロック・炭化物粒少量、灰余体的に含む。灰層。
- c. 10YR2/2 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

第497号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック若干含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多く含む。

第495・496号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒多く、焼土粒少量含む。柱痕。
2. 10YR3/2 暗褐色土 地山ブロック少量含む。充填土。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック含む。充填土。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。充填土。
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。充填土。

第497号住居跡 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック非常に多く含む。

第497号住居跡 (第11・221図)

AO-26グリッドを中心に位置する。北東辺を第495・496号住居跡に、南隅を第528～531号住居跡に、それぞれ切られる。全体は軸長3.70m×3.50mの方形を呈し、面積は12.95㎡を測る。長軸方向はおおよそN-28°-Wを指す。

床までの深さは5cm程度で、覆土は人為的な埋め戻しと思われる。床面は数かに東へ向け下がるが、ほぼ平坦である。検出範囲での壁溝はほぼ全周し、幅約15cm、深さ約4cmを測る。

カマド・貯蔵穴・柱穴等は検出されなかった。壁溝の状況からすれば、カマドは北東壁にあったものと思われる。

遺物の出土は認められなかった。

第498号住居跡 (第10・223図)

AK-23グリッドを中心に位置する。北西の大部分を第452号住居跡に、南西壁付近を第500・501号住居跡に切られる。その後、第499号住居跡の構築の際、埋め戻される。また、南西部中央の第477号土壌は、本跡がこれを切る。主柱穴の位置から想定される規模は、軸長約4.50m×4.05m、面積はおおよそ18.23㎡である。北を指準とした時の軸方向は、ほぼN-50°-Eとなる。

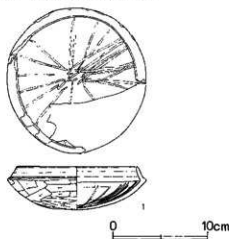
覆土は第499号住居跡の貼り床で、主に地山の砂質土ブロックで構成される。床面は遺存が少ないものの、概ね平坦である。壁溝は幅約10～20cm、深さ約3cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径30～43cm、深さ40～57cmである。柱痕が観察されたが、柱は折り取られたようである。

カマドと貯蔵穴は検出されなかった。位置的には第583号土壌が貯蔵穴のようだが、第498・499号住居跡の覆土を掘り抜いている。

遺物の出土は見られなかった。

第222図 第499号住居跡出土遺物



第95表 第499号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考	
1	杯	12.9	4.6		網(W.B.R)	普	褐	灰	75	暗文

第499号住居跡 (第10・223図)

AK-23グリッドを中心に位置する。北西の大半を第452号住居跡に、南西壁付近を第500・501号住居跡に切られる。第498号住居跡を埋め戻しての構築である。主柱穴の位置から想定される規模は、軸長6.26m×6.20m、面積38.81㎡である。北を指準とした時の軸方向は、おおよそN-47°-Eとなる。

床までの深さは10cm程度であるが、床面はほとんど遺

存していない。覆土は人為的な埋め戻しのようである。壁溝は幅約20cm、深さ約4cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径50～58cm、深さ40～74cmである。柱痕が観察されたが、主柱自体は折り取られたものと考えられる。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の出土はわずかで、図示した土師器の杯以外は、いずれも微細な破片である。

第500号住居跡 (第10・225図)

AK-23グリッドを中心に位置する。その大部分は第501・502・506号住居跡に切られており、わずかに北隅部を検出できたにすぎない。このため、全体の規模や形状、施設等については明らかとしない。構築は第498・499号住居跡、第232号井戸跡を切り込んで行なわれる。

床までの深さは10cm前後、覆土は人為的な埋め戻しのようである。壁溝は幅約18cm、深さ約4cmを測る。

遺物は図示したものを含め、土器の薄片を数点出土したのみである。

第501号住居跡 (第10・225図)

AL-23グリッドを中心に位置する。北部で第498・499・500・506号住居跡を切り、床を第478・480・481号土壌に掘り抜かれる。第479号土壌との重複関係

第224図 第500号住居跡出土遺物



は、確認できなかった。軸長の測れるのは一方のみであるが、柱穴の位置から想定すると、全体は5.80m×5.80mの方形で、面積は33.64㎡となる。主軸方向はおおよそN-37°-Wを指す。

床までの深さは20cm程で、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかで、軟質な床面は北から南へやや傾斜する。壁溝は検出範囲では全周し、幅約25cm、深さ3~6cmを測る。

カマドは、北西壁の北隅部近くに設けられる。煙道は長さ118cm、幅35cmで、底面は緩やかに立ち上がる。燃焼部は86cm×72cmの円形で、火床面は床より約7cm掘り込まれる。なお、袖は検出されなかった。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径44~72cm、深さ32~40cmである。ともに柱痕が観察された。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径87cm×38cmの楕円形を呈し、深さは17cmを測る。周囲の床は、ここへ向けてだらだらと下がっていく。

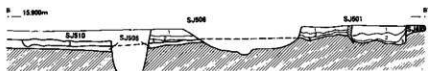
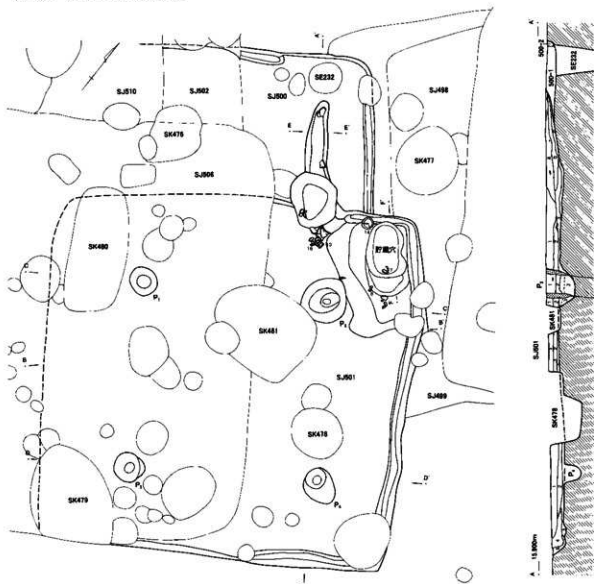
遺物はカマドと貯蔵穴を中心に、土器の坏・皿・甕、須恵器の高台付坏、ガラス玉(422図13)、鉄製の刀子(第427図13)などが出土している。このうち、高台付坏5点は群馬県の高井窯産と思われる、高台がわずかに削り出されている。

第96表 第500号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		(7.1)	(5.0)	細(W, C)	良	にぶい 橙	破片	

第97表 第501号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.4		細(W, B)	普	橙	60	
2	坏	(12.0)	3.7		微(W, B)	良	橙	50	
3	坏	(12.8)	(3.1)		細(W, B, C)	普	橙	20	
4	皿	17.8	4.5		微(W, B)	良	橙	100	
5	皿	(18.8)	(2.8)		微(W, B)	普	橙	破片	
6	須恵器高台付坏		(2.8)	(10.8)	細(W, R, F)	良	灰 白	破片	湖西
7	須恵器高台付坏	16.7	3.7	11.3	粗(W)	良	灰	80	金井窯 胎土分析 No.17
8	須恵器高台付坏	(17.2)	4.5	10.7	粗(W)	良	灰	40	金井窯 胎土分析 No.18
9	須恵器高台付坏	(18.1)	4.4	(10.9)	粗(W)	良	灰	20	金井窯 胎土分析 No.19
10	須恵器高台付坏	(18.0)	(3.7)		粗(W)	良	灰	破片	金井窯 胎土分析 No.20
11	須恵器高台付坏	(16.2)	(2.8)		粗(W)	良	灰	破片	金井窯
12	須恵器坏		(1.9)	(4.0)	細(W, F)	良	灰	破片	
13	須恵器蓋		(3.7)		粗(F)	良	灰 白	破片	湖西
14	須恵器蓋	(19.4)	(1.4)		細(W, F)	良	灰 灰	破片	末野
15	須恵器蓋				粗(W, F)	良	灰	破片	末野 表面摩耗
16	壺	22.1	(25.7)		粗(W, R)	普	橙	65	
17	壺	(25.0)	(3.3)		微(W)	良	橙	破片	



第500号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行堆山段少量含む。
2. 10YR2/3 暗褐色土 1層に準ずる。溶化粘質堆山ブロック多く含む。

第501号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土微量、灰色粘質土混有。
2. 10YR3/4 暗褐色土 1層に準ずる。焼土较多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 2層基本、溶化進行粘質堆山ブロック多く含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 未溶化砂質堆山較多く、焼土較少量含む。
5. 10YR4/4 褐色土 ほんと堆山、礫の混入。

第501号住居跡 コマド土層説明

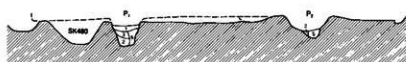
- a. 10YR2/3 暗褐色土 溶化進行堆山段・焼土・小型ブロック多く含む。灰層混入。
- b. 10YR2/2 無彩色土 焼土・炭化物少量含む。灰層。
- c. 10YR3/3 暗褐色土 ほんと焼加熱の堆山、礫の混入。

第501号住居跡 貯蔵穴土層説明

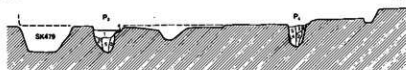
1. 10YR3/3 暗褐色土 微細堆山段、多量の焼土を含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行粘質堆山段・小型ブロック多く、焼土較少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行粘質堆山ブロック多く、焼土較少量含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 1層に近部。焼土少なく炭化物含む。
5. 10YR3/4 に近い無彩色土 ほんと砂質堆山。底の溶酸化層。



C 15.800m



D 15.900m



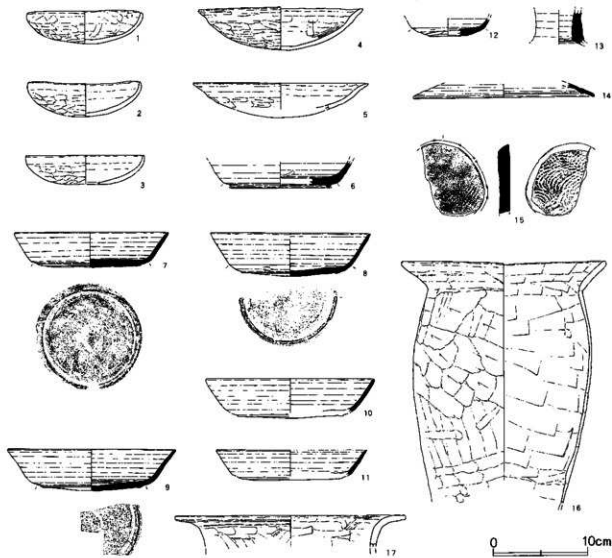
C'

第501号住居跡 柱状土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山殻・焼土较多く、炭化物少量含む。
2. 10YR2/4 黒褐色土 粘質地山殻・大型ブロック多く含む。肥壤土。
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘質地山小塊ブロック少量含む。肥壤土。
4. 10YR4/4 褐色土 砂質地山。焼の遊炭化層。
5. 10YR2/3 黒褐色土 地山殻・焼土较多く含む。柱状。

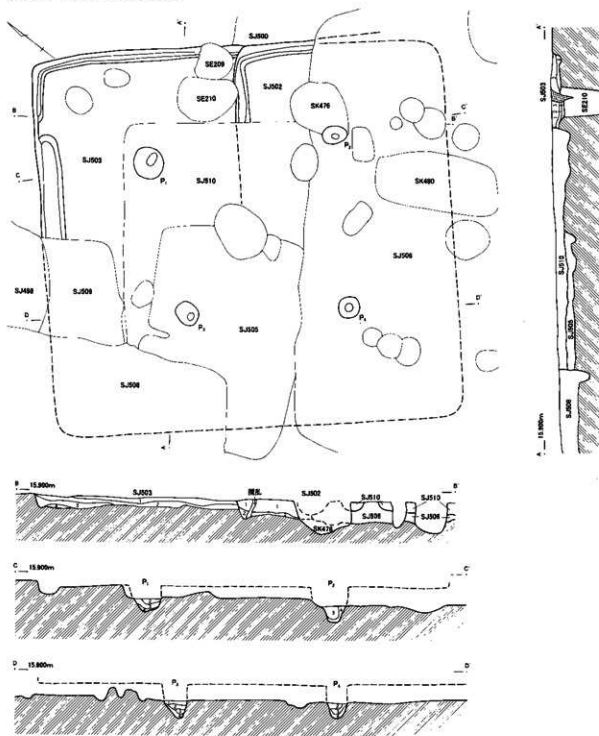
0 2m

第226図 第501号住居跡出土遺物



0 10cm

第227図 第502・503号住居跡



第502号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 溶化進行地山砂・礫土散見を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行砂質地山砂・ブロック多く含む。貼り床状。

第503号住居跡 土層説明 (上色観察欠番)

1. 溶化進行砂質地山砂多く含む。
2. 地山ほとんど含まない。
3. 溶化進行粘質地山砂・小ブロックで土構成。故意の投入。層の厚し。
4. 2層に準ずる。地山砂少量含む。

第503号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/2 暗褐色土 未溶化粘質地山砂ブロック多く含む。S.505貼り床。
2. 10YR2/3 暗褐色土 溶化進行砂質地山砂ブロック多く含む。
3. 10YR2/3 暗褐色土 はほとんど砂質地山。礫の層埋入上。
4. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行粘質地山砂多く、礫土若干含む。

第502号住居跡 (第10・227図)

AK-23グリッドを中心に位置する。第500・503号住居跡を掘り抜いての構築だが、埋没後、その大半を第506・510号住居跡に切り取られる。検出し得たのは北隅のごく一部分であるため、全体の規模や形状、施設などについては一切不明である。

床までの深さは23cm程で、覆土は自然堆積のようである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は幅約20cm、深さ約5cmを測る。

遺物の出土はなかった。

第503号住居跡 (第10・227図)

AK-23グリッドを中心に位置する。第502・505・508・509・510号住居跡に大半を切られており、北隅部と主柱穴を確認したにとどまる。また、住居跡内には第476・480号土塊、第209・210号井戸跡が掘り込まれている。その関係は第210号井戸跡を切り、2基の土塊に切られるものである。柱穴の位置から想定される規模は、軸長6.10m×6.60m、面積40.26㎡となる。全体は長方形を呈し、北を指準とした時の軸方向は、およそN-52°-Eである。

床までの深さは10~20cm、覆土は人為的な埋め戻しである。

壁の立ち上がりは急で、床面は凹凸を生じている。壁溝は幅約20~36cm、深さ3~10cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径32~48cmで、想定される床からの深さは45~56cmである。覆土は乱れており、柱根も根固めのための充填土も確認できなかった。後出の住居跡が構築される際、抜き取られたものと思われる。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の確実な伴出は認められなかった。

第504号住居跡 欠番

第505号住居跡 (第10・228図)

AL-22グリッドを中心に位置する。第503・506号住居跡を切り、埋没後に第510号住居跡が構築され、

その後、西隅部を第508号住居跡に掘り抜かれる。全体は軸長3.45m×2.45mの長方形を呈し、面積は8.45㎡を測る。主軸方向はおよそN-28°-Wを指す。

床までの深さは約28cm、覆土は自然堆積である。

壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は凹凸が目立つ。壁溝は検出範囲で全周し、幅約16cm、深さ約6cmを測る。

カマドは北壁の西寄りに付設されるが、左側は第508号住居跡に切り取られている。燃焼部は64cm×48cm程の楕円形に復元され、火床面は床より約5cm深い。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は第510号住居跡と混在してしまい、確実に伴うものは識別できなかった。但し、カマドや床面上からの出土は見られなかった。鉄製の棒状品(第428図29)などが図示できた。

第506号住居跡 (第10・229図)

AL-23グリッドを中心に位置する。埋没後、第501・505・510・511・512号住居跡に切られる。また、壁や床を第476・479・480・481号土塊に掘り抜かれる。全体は軸長7.08m×6.68mの方形を呈し、面積は47.29㎡を測る。長軸方向はおよそN-34°-Wを指す。

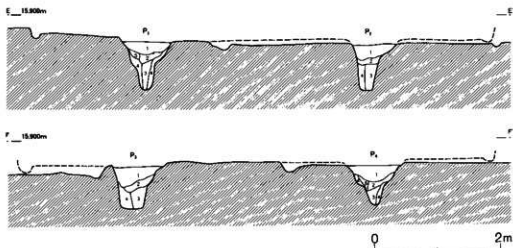
床までの深さは30cm前後で、覆土は自然堆積を示す。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は北東壁を除いて全周する。幅10~50cm、深さ約5cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径39~50cm、深さ24~42cmで、3本で柱根が観察された。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径90cm×72cmの楕円形を呈し、深さは53cmを測る。

カマドは検出されなかった。壁溝や貯蔵穴の状況からすると、土塊に切られた北東、北西壁の中央に想定できるかもしれない。

遺物は床面上に土師器の坏・甕・甔などが散財していた。砥石(第420図10)が1点見出されている。



第506号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 灰褐色土 溶化進行粘質地山粒多く、焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 1層に準ずる。灰色を帯び、鼠毛物なく早。的。
3. 10YR2/4 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒多く含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 3層に準似。葉山減少。

第505号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行粘質地山粒・焼土粒・小型ブロック多く含む。天井崩落土。
- b. 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物少量含む。灰層。
- c. 10YR2/3 暗褐色土 ほとんど被加熱の地山。砂の崩落土。

第510号住居跡 土層説明 (納0床)

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土中に砂質地山ブロック多く含む硬固構築土。
2. 10YR2/4 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒多く含む。

第510号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/3 黒褐色土 焼土と被加熱地山の粒・ブロックからなる天井崩落土。下に灰層は形成されていない。

第510号住居跡 柱穴土層説明 (貯蔵穴含む)

1. 10YR2/3 暗褐色土 本溶化粘質地山粒土少量。焼土・炭化物微量含む。
2. 10YR2/3 暗褐色土 地山の混入増加。
3. 10YR2/3 暗褐色土 未溶化砂質地山粒・小型ブロック・焼土・炭化物多く含む。
4. 10YR2/2 暗褐色土 3層に準ずる。地山粒より多く、溶化進行。
5. 10YR2/4 暗褐色土 ほとんど粘質地山。6層地層後、壁の崩落土が混入したものと推定。
6. 10YR2/3 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒多く含む。
7. 10YR2/4 暗褐色土 ほとんど地山。壁の滑動化層。

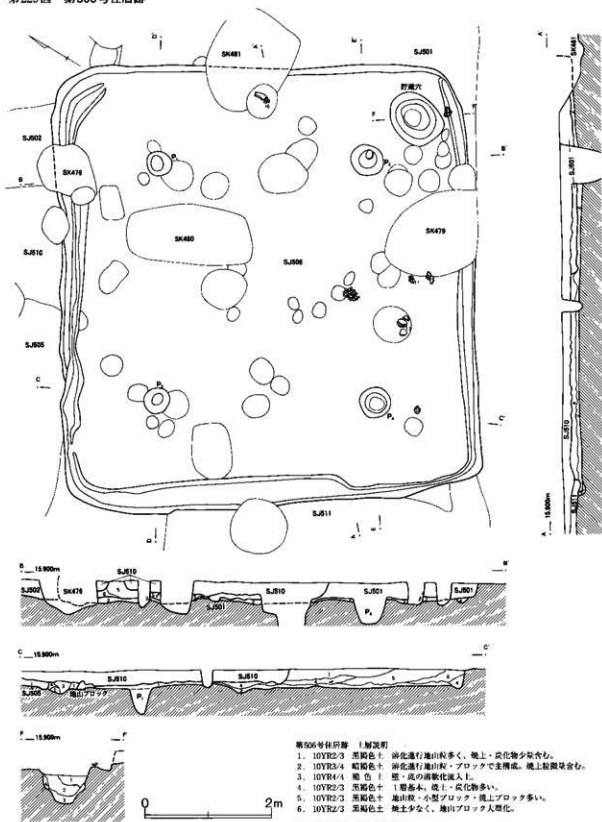
第510号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 本溶化地山粒・焼土粒・炭化物多く含む。
2. 10YR2/2 暗褐色土 焼土・炭化物ほとんど含まず。溶化進行粘質地山粒・小型ブロック多く含む。
3. 10YR2/2 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒多く含む。
4. 10YR2/4 暗褐色土 粘質地山ブロック主体。充塞土。
5. 10YR2/2 暗褐色土 溶化進行粘質地山ブロック多く含む。根元の焼土の残存。

第98表 第506号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	(3.2)		礫(W, C, R)	青	にぶい 橙	20	
2	坏	(13.0)	(3.8)		礫(W, C)	良	橙	20	比企型 赤彩
3	坏	13.2	4.5		粗(B, R)	青	橙	75	
4	坏	14.5	5.3		粗(B, R)	青	にぶい 橙	90	
5	坏	(15.3)	3.7		粗(W, B, R)	良	灰 黄 褐	70	赤彩
6	坏	(15.3)	(3.9)		粗(W, B, R)	青	にぶい 黄 橙	20	
7	坏	(15.2)	4.2		礫(W, B, F)	青	橙	30	8と同一個体か
8	坏	(15.8)	(4.3)		礫(W, B, F)	青	橙	30	7と同一個体か
9	坏	(17.2)	(4.9)		微(W)	青	淡 橙	破片	
10	坏	(15.2)	(5.0)		細(B, R)	良	橙	50	
11	坏	(15.9)	(5.1)		細(W, B, R)	青	橙	20	
12	坏	(15.0)	(4.3)		細(W, R, F)	青	橙	20	
13	坏	18.8	4.9		細(B, R)	青	にぶい 橙	75	
14	坏	(15.9)	(4.9)		細(B, R)	青	にぶい 赤 褐	30	
15	壺	(6.2)	(7.2)		礫(W, R, 片)	青	灰	褐	破片
16	甕	(17.8)	(10.1)		礫(W, B, R)	良	橙	破片	
17	甕	(16.3)	(21.5)		細(W, F)	良	明 赤 褐	35	
18	甕	(21.4)	(29.2)	(6.2)	細(W, C, 片)	青	にぶい 橙	40	
19	甕	(8.6)	(8.7)		礫(W, R, 片)	青	にぶい 黄 橙	破片	
20	甕	(10.0)	(7.1)		礫(W, R, R, 片)	青	橙	破片	
21	甕	(3.8)	(4.0)		細(W, B, R)	良	にぶい 橙	破片	
22	甕	(6.1)	(5.6)		礫(W, B, R)	良	にぶい 黄 橙	破片	

第229図 第506号住居跡



第506号住居跡 土層説明

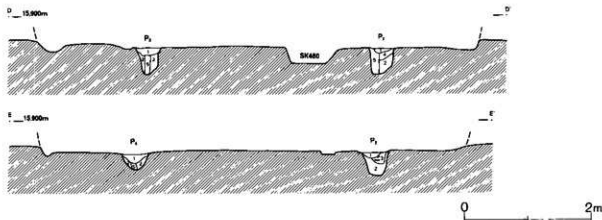
1. 10YR2/1 黒褐色土 焼土粒・灰を含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 溶化進行した粘質堆山粒多く焼土粒少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 はとんど粘質堆山。望の礫層1層。
4. 10YR4/3 にじい黄褐色土 砂質堆山ブロック。

第506号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行堆山粒多く、焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行堆山粒・ブロックで主構成。焼土粒間草含む。
3. 10YR4/4 黒色土 壁・底の溶軟化層入上。
4. 10YR2/3 黒褐色土 1層基本。焼土・炭化物多い。
5. 10YR2/3 黒褐色土 堆山粒・小瓦ブロック・焼土ブロック多い。
6. 10YR2/3 黒褐色土 焼土少なく、堆山ブロック大粒化。

第506号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘質堆山粒・焼土粒・炭化物多く含む。土体掘り取り後の堆積。
2. 10YR3/4 暗褐色土 主に粘質大粒堆山ブロックからなる。光累土。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物多く含む。柱部分に堆積したもの。
4. 10YR1/3 暗褐色土 粘質堆山小粒ブロック多く含む。光累土。
5. 10YR2/3 暗褐色土 粘質堆山粒多く含む。花灰。



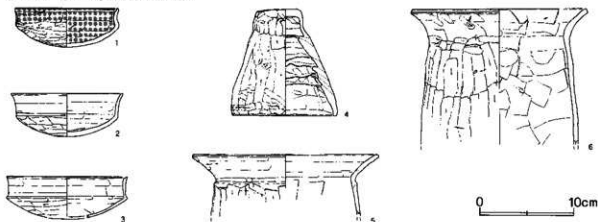
第507号住居跡 (第10・232図)

AK-22グリッドに位置する。第509号住居跡を掘り抜いて構築され、埋没後は南西部を第508号住居跡に切られる。全体は軸長3.60m×5.10mの長方形を呈し、面積は18.36㎡を測る。主軸方向はおおよそN-5°-Wを指す。

床までの深さは20~25cmで、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、貼り床の施された床面はおおよそ平坦である。壁溝は検出範囲で全周し、幅約15~30cm、深さは約8cmを測る。

カマドは北壁の中央、やや西寄りに設けられる。然

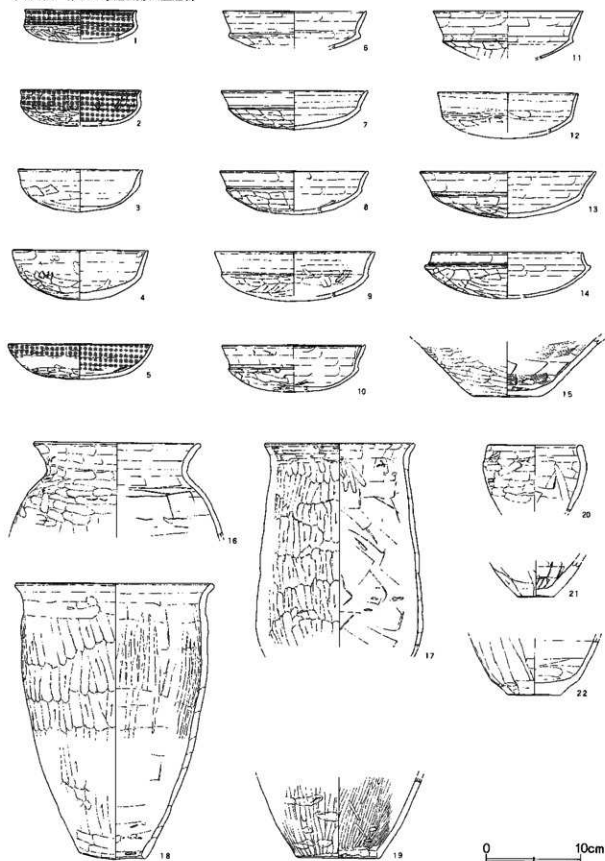
第230図 第507号住居跡出土遺物

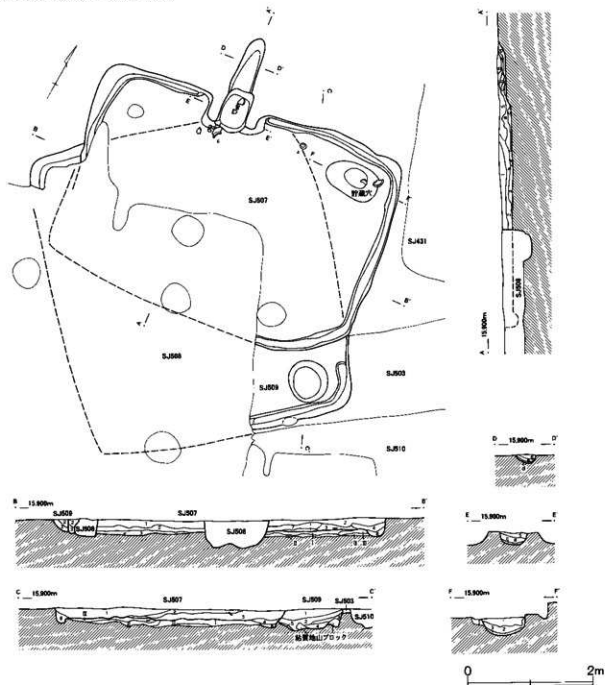


第99表 第507号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	4.1		礫 (B, C, R)	良	にぶい 橙	95	赤彩
2	坏	(11.9)	4.6		礫 (W, B, R)	良	淡 黄	70	
3	坏	(12.4)	(4.4)		礫 (W, R)	良	橙	20	
4	土製支脚	4.3	11.3	11.0	礫 (W, R)	良	橙	80	
5	甕	(19.8)	(6.5)		礫 (B, R)	良	橙	破片	
6	甕	(18.7)	(14.3)		粗 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	破片	

第231图 第506号住居跡出土遺物





第507号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行地山段・ブロック多く、焼土粒少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 溶化土の溶化進行地山段を含むが、概ね単一的。
3. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行砂質地山段・ブロック多く、焼土少量含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 3層基本。地山段・焼土含まず。
5. 10YR2/3 黒褐色土 1層に準ずる。地山較少なく、焼土微量含む。
6. 10YR3/3 暗褐色土 1層に準ずる。焼土多く含む。
7. 10YR4/4 褐色土 はほとんど地山。焼土の溶酸化層。
8. 10YR3/2 黒褐色土 焼土・炭化物多く含む。

第507号住居跡 1層説明 (完結上・陥り床)

- I. 10YR4/4 褐色土 粘質地山小型ブロックと褐色土からなる。陥り床。
- II. 10YR4/4 褐色土 1層に準ずるが、ブロック少なく、褐色土主体。
- III. 10YR4/4 褐色土 はほとんど地山ブロック。

第507号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/3 暗褐色土 溶化粘質地山段・焼土段・ブロック多く含む。天幕の壁面上。
- b. 10YR3/3 暗褐色土 a層に準ずる。焼土少なく、ギソク。
- c. 10YR3/1 黒褐色土 焼土・炭化物微量含む。灰層。
- d. 10YR4/4 褐色土 はほとんど地山。底面の溶酸化層。

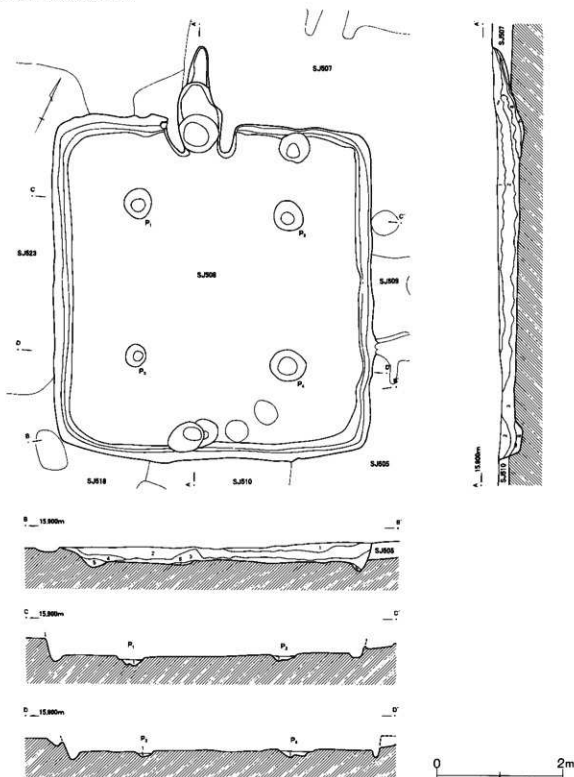
第507号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行地山段・ブロック多く、焼土粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行人野地山ブロック多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 はほとんど地山。壁・底の溶酸化層。

第509号住居跡 1層説明

1. 10YR2/3 黒 褐色土 焼土粒・小型ブロック・炭化物・赤褐色土・ブロック多く含む。
2. 10YR2/2 黒 褐色土 1層に準ずる。赤褐色土・炭化物多量。
3. 10YR1/3 に近い黄褐色土 粘質地山粒主体。焼土・炭化物微量。
4. 10YR2/3 黒 褐色土 粘質地山粒多く含む。1層との境界は明確。
5. 10YR4/4 褐色土 はほとんど地山。壁の溶酸化層。

第233図 第508号住居跡



第508号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行砂質粘土多量、炭上・炭化物混入含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 溶化進行砂質粘土・ブロック多量、炭土粒少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 未溶化粘質粘土・ブロック少量含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行粘質粘土・ブロック多量含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行粘質粘土・ブロック多量含む。炭の遺落多。
6. 10YR4/4 褐色土 ほとんど粘土。炭の細粒状混入。

第508号住居跡 カマド土層説明

- a. 2.5YR4/6 赤褐色土 炭土と粘質土・ブロックからなる。天井遺構上。
- b 層との境は完全粘土層（火を直接受けた面）。
- c. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物混入含む完全灰層。
- d. 10YR3/3 暗褐色土 粘質粘土・ブロックからなる火床面厚層七。

第508号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 未溶化粘質粘土・ブロック少量含む。

第508号住居跡 (第10・223図)

AL-22グリッドを中心に位置する。周囲に分布する、第503・505・507・509・510・523号住居跡を切る。全体は軸長5.35m×5.06mの方形を呈し、面積は27.18㎡を測る。主軸方向はほぼN-25°-Wを指す。

床までの深さは20~35cmで、覆土は部分的に故意の埋め戻しが窺える。壁はやや緩やかに立ち上がり、床面は東から西へわずかながら傾く。壁溝は全周し、幅15~30cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北西壁の中央、西寄りに付設される。壁道は長さ110cm、幅31cmで、底面は燃焼部から緩やかに

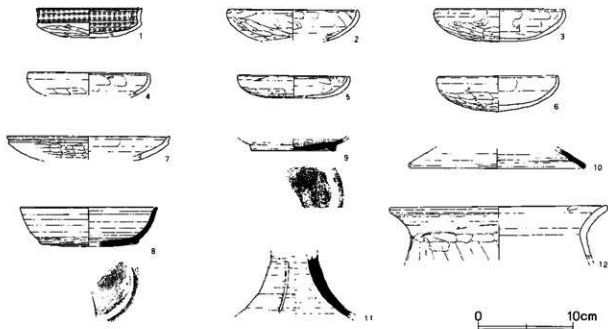
立ち上がる。燃焼部は約62cmの円形で、火床面は床から深さ5cm程深くなる。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径32~53cm、深さ8~12cmである。いずれもごく浅いもので、柱痕などは観察できない。主柱は掘り込みのない、置き柱のようなものであろうか。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の出土は少なく、しかも小さな破片ばかりであった。土師器の坏や甕、須恵器の高台付坏・蓋・高坏、白玉(第424図18)などがある。

第234図 第508号住居跡出土遺物



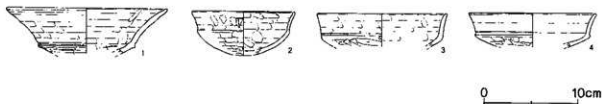
第100表 第508号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(11.2)	(3.0)		粗 (W, R)	良	にぶい 橙	破片	赤彩	
2	坏	(13.7)	(3.3)		細 (W, B, R)	良	橙	破片		
3	坏	(13.6)	3.5		細 (W, B, R)	良	橙	30		
4	坏	(12.8)	(2.4)		細 (W, B, R)	普	にぶい 橙	破片		
5	坏	(11.7)	(2.4)		細 (W, B, R)	良	橙	25		
6	坏	12.7	3.8		細 (W, B, R)	良	にぶい 橙	90		
7	坏	(17.4)	(2.5)		細 (W, B, R)	良	にぶい 橙	90		
8	須恵器高台付坏	(14.6)	(4.2)	(10.5)	細 (F)	良	灰	40		湖西 胎土分析 No.22
9	須恵器高台付坏		(1.3)	(9.0)	細 (W, R)	普	灰 白	破片		
10	須恵器蓋	(18.5)	(2.1)		粗 (W, B, F)	良	灰	破片		
11	須恵器高坏		(6.9)		粗 (W, B)	普	灰 黄	破片		
12	甕	(23.1)	5.7		細 (B, R)	普	橙	破片		

第509号住居跡 (第10・232図)

AK-22グリッドを中心に位置する。第503号住居跡を切って構築されるが、大半を第507・508号住居跡に切られるため、検出できたのは東西の隅部のみである。これより推定される全体の規模は、軸長5.00m×4.55m、面積22.75㎡である。全体は長方形となり、北を指準とした時の長軸方向は、およそN-45°-Wを指す。

第235図 第509号住居跡出土遺物



第101表 第509号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	高 杯	(16.9)	(4.9)		細 (B)	良	にぶい 橙	破片	
2	杯	(10.9)	(4.7)		細 (B)	良	にぶい 黄橙	破片	
3	杯	(13.9)	(3.6)		粗 (W, R)	良	橙	破片	
4	杯	(13.5)	(3.7)		細 (B, R)	良	にぶい 黄橙	破片	

第510号住居跡 (第10・228図)

AK-23グリッドを中心に位置する。第501-503・505・506・511・518号住居跡を切り、西隅部を第508号住居跡に切られる。南隅部で重複する第512号住居跡との関係は確認できなかった。また、住居跡内を第480号土壌に切られる。大部分が他住居跡の覆土に乗るため、平面での確認は困難であった。断面観察や柱穴の位置から想定すると、全体は軸長7.90m×7.60mの方形で、面積はおよそ60.04㎡に復元できる。主軸方向はほぼN-50°-Wを指す。

床までの深さは10-25cmで、覆土は自然堆積である。床面は他住居跡の覆土に貼り床を施したもので、概ね平坦である。壁溝は幅20-25cm、深さ約10cmを測る。

カマドは土層の断面観察によって確認された。北東壁のはほぼ中央に位置すると思われるが、左側を第476号土壌に切られていることもあり、規模や袖の有無などは明らかとし得なかった。

柱穴は主柱穴4本が検出されている。径67-90cm、

床までの深さは20-30cm程で、覆土は人為的な埋め戻しのようである。わずかに確認し得た壁溝は、幅約20cm、深さ3-6cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。東隅に円形の浅い掘り込みが見られたが、貯蔵穴とは判断できなかった。

遺物は覆土中より土師器の坏や高坏片が少量出土している。

床からの深さは64-78cmである。柱は抜き取られたようで、覆土は乱れ、柱痕も観察できなかった。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径80cm×63cmの円形で、想定される床からの深さは約65cmを測る。

遺物は覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏・蓋・甕、白玉(第424図20-23)などが出土している。但し、重複する他住居跡との識別が困難であったため、それらの遺物と混交してしまつた可能性が高い。

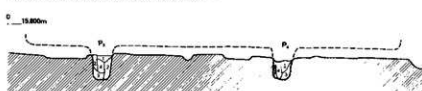
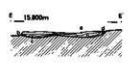
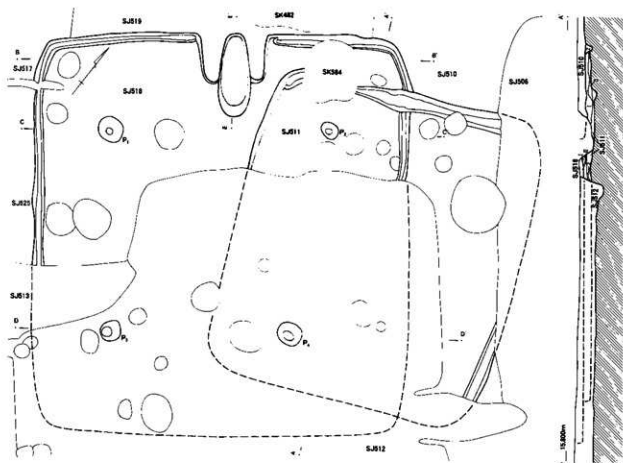
第511号住居跡 (第10・236図)

AL-22グリッドを中心に位置する。第506号住居跡を切り、第510・512・518号住居跡に大半を掘り抜かれる。壁溝の位置から推定される規模は、軸長5.10m×4.70m、面積23.97㎡である。北を指準とした時の長軸方向は、ほぼN-15°-Wとなる。

床までの深さは約24cmで、覆土は人為的な埋め戻しのようである。壁溝は検出範囲で幅約25cm、深さ約2cmである。残存する床面は、概ね平坦である。

カマド・柱穴・貯蔵穴・遺物は検出されなかった。

第236図 第511・518号住居跡



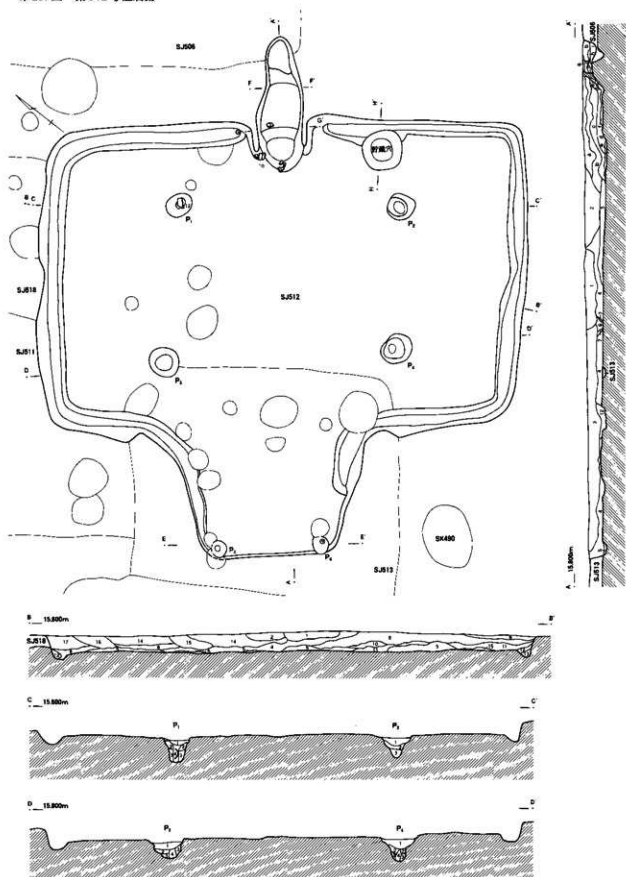
- 第518号住居跡 カマド土層説明
- 10YR3/3 暗褐色土 焼加熟地山段・焼土粒含む。天井崩落土。
 - 10YR3/2 黒褐色土 地山粒少量。灰層に相違。
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山からなる。灰の溶軟化層。
 - 10YR4/4 褐色土 ほとんど地山。灰の溶軟化層。

- 第511号住居跡 土層説明
- 10YR3/4 暗褐色土 粘質地山大型ブロックで主構成。
 - 10YR3/3 暗褐色土 2層に近似。地山少ない。
- 第518号住居跡 土層説明 (部別)
- 10YR1/4 藍色土 粘質地山ブロックで主構成。
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山ブロックと雑草の焼土含む。

- 第518号住居跡 土層説明
- 10YR2/3 黒褐色土 地山粒多く、焼土若干含む。
 - 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・ブロック多く含む。
 - 10YR1/4 褐色土 ほとんど地山。灰の溶軟化層。

- 第518号住居跡 柱穴土層説明
- 10YR2/2 黒褐色土 粘質地山粒多く焼土粒を含む。平土採取が例取物の用層。
 - 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックの多い光線土。
 - 10YR4/4 褐色土 主に粘質地山からなる光線土。
 - 10YR2/3 黒褐色土 地産く粘多い柱底。

第237图 第512号住居跡





第512号住居跡 土層説明

1. 10YR2-1 黒褐色土 焼土ブロック含む。上部片含む。
2. 10YR2-2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物少量含む。
3. 10YR2-2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物少量含む。
4. 10YR2-3 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量含む。
5. 10YR2-3 黒褐色土 褐色土ブロック多く、焼土粒・炭化物少量含む。
6. 10YR2-2 黒褐色土 炭化物の大型ブロック含む。
7. 10YR2-4 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む。
8. 10YR2-3 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量含む。
9. 10YR2-3 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量、褐色土含む。
10. 10YR2-3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・土器片含む。
11. 10YR4-3 に近い黄褐色土 褐色土多く、焼土粒少量含む。
12. 10YR2-3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
13. 10YR4-1 暗灰色土 焼土粒・炭化物粒少量、褐色土ブロック含む。
14. 10YR2-1 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量、褐色土大型ブロック多い。
15. 10YR2-2 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量、褐色土含む。
16. 10YR2-3 暗褐色土 焼土ブロック・褐色土・少量の炭化物粒含む。
17. 10YR3-4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒多い。



第512号住居跡 キマド土層説明

- a. 10YR2-3 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。
- b. 10YR4-3 に近い黄褐色土 焼土ブロック少量含む。
- c. 10YR2-3 暗褐色土 焼土・炭化物含む。
- d. 5YR3/6 暗赤褐色土 焼土大型ブロック多い。煙燻の痕あり。
- e. 10YR2-1 黒色土 焼土ブロック含む。炭化物無し。
- f. 10YR4-3 に近い黄褐色土 焼土粒少量含む。砂質。
- g. 10YR4-4 暗灰色土 褐色土ブロック。
- h. 10YR3-4 暗褐色土 焼土ブロック含む。粘土層。
- i. 10YR2-4 暗褐色土 焼土粒・炭化物含む。

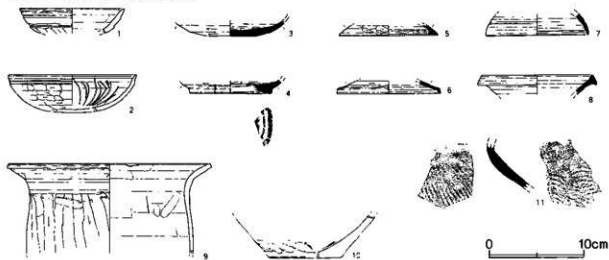
第512号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2-3 暗褐色土 溶化層打砂質堆山粒・ブロック・焼土粒多く含む。柱が折れた跡への埋め。
2. 10YR4-3 に近い黄褐色土 粘質堆山を主体とする光沢土。
3. 10YR3-4 暗褐色土 粘質堆山ブロックと褐色土の混合層。炭焼土。
4. 10YR2-3 暗褐色土 溶化層堆山小型ブロック少量含む。柱底。

第512号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2-3 暗褐色土 溶化層堆山粒多く含む。焼土は含まない。
2. 10YR2-3 暗褐色土 1層堆山。堆山は大型ブロックで多く含む。
3. 10YR2-2 灰質褐色土 ほんだん灰褐色の粘質土。砂質堆山含む。

第238図 第510号住居跡出土遺物



第102表 第510号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	杯	(11.1)	(2.7)		細 (W, B, R)	良	淡黄	25	
2	杯	(13.6)	(3.9)		細 (W, B, R)	良	橙		暗文
3	須恵器杯		(1.7)		粗 (W)	良	灰		破片
4	須恵器高台付杯		(1.5)	(8.8)	微 (F)	良	灰白		破片
5	須恵器盃	(10.5)	(1.1)		細 (W, F)	良	橙		破片
6	須恵器盃	(11.0)	(1.4)		細 (F)	良	灰		破片
7	須恵器盃	(10.9)	(2.3)		微 (W, F)	良	灰		破片
8	須恵器盃	(11.8)	(2.1)		微 (W, F)	良	灰		破片
9	盃	(21.5)	(9.5)		産 (W, R, F)	良	青		破片
10	甕		(4.9)	(7.8)	粗 (W, R)	良	にぶい橙		破片
11	須恵器甕				細 (F)	青	灰		破片

第512号住居跡 (第10・237図)

AM-23グリッドを中心に位置する。北から西側に分布する第506・511・513・518号住居跡を、切り込んで構築される。全体は軸長4.97m×7.80mの長方形で、その西南辺に2.00m×7.80mの張り出し部を持つ。この部分を含めた面積は44.37㎡となり、主軸方向はおよそN-52°-Eを指す。

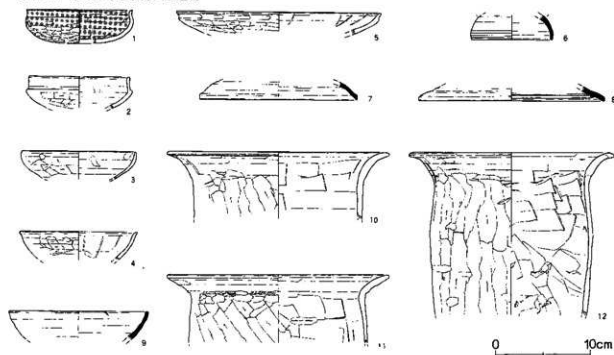
床までの深さは25~30cmで、覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は、張り出し部の端辺を除いて全周する。幅25~40cm、深さは6~10cmである。

カマドは北東壁の中央に設けられる。煙道は長さ72cm、幅46cmで、先端はビット状に掘り込まれる。燃焼部は約142×72cmで、焚き口部付近は床から6cm程深くなる。

柱穴は主柱穴4本と、張り出し部先端に2本が検出された。主柱穴は径38~46cm、深さ34~39cm、張り出し部のものは径24cm、深さ8~16cmである。主柱穴では柱痕が観察された。

貯蔵穴はカマドの東側、壁溝の一部を切るようにして備わる。上面は径60cmの円形を呈し、深さ約34cmを測る。

第239図 第512号住居跡出土遺物



第103表 第512号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.2)	(3.5)		細 (R)	良	にぶい黄橙	50	赤影 暗文
2	坏	(10.8)	(3.4)		微 (B)	常	灰黄褐		
3	坏	(12.1)	(2.9)		細 (W, B)	常	橙	破片	
4	坏	(12.5)	(3.0)		細 (W, B, R)	常	にぶい橙	破片	
5	坏	(21.9)	(2.3)		細 (W, B, R)	常	にぶい橙	破片	
6	須忠器蓋	(8.5)	(2.6)		微 (F)	良	灰	破片	
7	須忠器蓋	(16.7)	(2.0)		微 (F)	良	灰	破片	
8	須忠器立	(19.8)	(1.6)		粗 (W, F)	良	灰白	破片	
9	須忠器坏	(14.8)	(3.0)		細 (F)	良	灰	破片	
10	甕	(23.9)	(7.1)		細 (B, R)	常	黄橙	破片	
11	甕	(23.8)	(7.2)		細 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	破片	
12	甕	(22.0)	(17.2)		細 (W, B, R)	良	にぶい橙	破片	

張り出し部は南西壁から逆台形に突出し、端部の両隅には柱穴が備わる。床面は住居内から段差なく続き、壁溝も延長されている。おそらくこの張り出しは、住居の入り口にかかわる施設であろう。

遺物は覆土中より、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋、ミニチュアの坏(第426図1)、鉄製の鎌2点(第427図2・6)などが図示できたのみである。

第513号住居跡 (第10・241図)

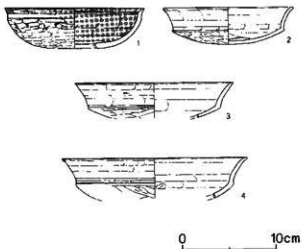
AM-22グリッドを中心に位置する。第512・514・518号住居跡に大きく切られる他、南西壁を地震の亀裂によって破壊される。全体は軸長4.24m×4.34mの方形を呈し、面積は約18.40㎡を測る。北を指準とした場合の軸方向は、およそN-38°-Wとなる。

床までの深さは20~25cmで、覆土は人為的な埋め戻しと考えられる。

壁はおおぼ垂直に立ち上がり、床面はおおよそのところ平坦である。壁溝は検出範囲で全周し、幅15~40cm、深さ5~10cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径18~30cm、深さ20~28cmである。

第240図 第513号住居跡出土遺物



貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径68cmの円形を呈し、深さは54cmを測る。

カマドは検出されなかった。

遺物は壁溝中より、土師器の坏、石製紡錘車(第421図8)、鉄製の鎌と刀子(第427図3・8)が出土している。

第104表 第513号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.9)	(4.8)		礫 (W, R)	良	橙	40	赤彩
2	坏	(13.9)	4.0		細 (B, R)	良	橙	30	
3	坏	(16.8)	(3.7)		細 (B, R)	良	浅黄橙	破片	
4	坏	(19.8)	(4.3)		微 (B, R)	良	にぶい橙	破片	

第514号住居跡 (第10・241図)

AM-22グリッドを中心に位置する。第513・525号住居跡を切り、第515・517号住居跡に切られる。西側は調査区外になり、半分ほどが検出されたにすぎない。軸長の測れるのは一方のみで、長さは約4.85mである。全体は方形を呈すものと思われ、北を指準とした時の軸方向は、N-30°-Wとなる。

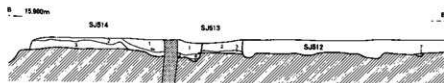
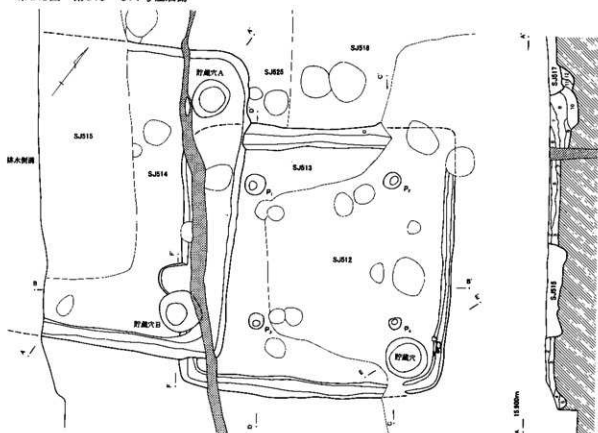
床までの深さは15~18cmで、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは急で、床面はおおぼ平坦である。南壁部に確認された壁溝は、幅約25cm、深さ約8cmを測る。

貯蔵穴は2基検出された。北東隅部に備わる貯蔵穴Aは径60cm、床からの深さ15cmを測る。南東隅部に備わる貯蔵穴Bは径62cm、深さ56cmを測る。

カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は床面、および第515号住居跡に落ち込んだ状態で、碧玉製の管玉10点(第422図2~11)、ガラス製の小玉14点(第422図14~27)、白玉(第424図19)がまともに出土している。土器はいずれも破片で、土師器の坏や高杯、須恵器の坏などが覆土中より見出されている。

第241図 第513・514号住居跡



第513号住居跡 土層説明

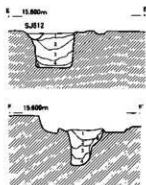
1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・褐色土粒含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック状に多く含む。埋め戻しあるいは崩り落ち。
4. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック含む。
5. 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
6. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物粒含む。
7. 10YR4/4 褐色土 焼土土ブロック。

第514号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 少量の焼土・炭化物を含む。柱穴。
2. 10YR4/4 褐色土 砂質粘土状。焼土のよう。光沢上。
3. 10YR4/6 褐色土 はとんど粘質粘土。光沢上。
4. 10YR3/3 暗褐色土 全体に地山混入。P2。焼土・灰含む。炭質土。

第514号住居跡 土層説明 (野焼穴A含む)

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物・少量の焼土粒含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多く、焼土粒少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。砂質に近い。
5. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。4層より砂質。
6. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック・少量の炭化物粒含む。
7. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・褐色土粒含む。
8. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・少量の褐色土ブロック含む。
9. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
10. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック、少量の炭化物粒・褐色土ブロック含む。
11. 10YR4/3 に近い黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
12. 10YR3/3 暗褐色土 11層とはほぼ同。



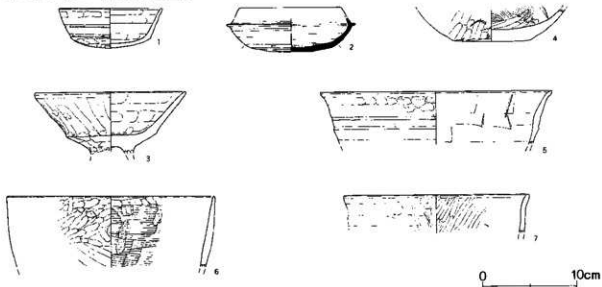
第513号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 未溶化燧山粒・小骨ブロック・焼土粒多く含む。SJ512標差時の粘り赤光肌土。
2. 10YR2/2 黒褐色土 溶化流行燧山ブロック多く含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 2層に準ずる。炭化物多く含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 溶化流行燧山ブロック多く含む。
5. 10YR4/4 褐色土 ほとんど粘質燧山・砂・炭の遊離土層。

第514号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化・未溶化燧山粒多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 燧山燧山混入。単・再・再。
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘質燧山基本。焼土ブロック・炭多く含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 ほとんど粘質燧山・砂の遊離土と認められる。

第242図 第514号住居跡出土遺物



第105表 第514号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	LJ径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.0	4.7		粗 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	80	外面自然輪付着
2	須恵器 坏		(3.5)		細 (W, F)	良	灰	50	
3	高 坏	16.1	(6.6)		粗 (W, B)	善	橙	坏部 100	
4	甕		(3.4)	(8.4)	粗 (W, R)	良	にぶい黄橙	破片	
5	鉢	(24.7)	(5.7)		粗 (W, R)	善	橙	破片	
6	飯 甌	(22.1)	(7.5)		粗 (W, B, R)	善	にぶい橙	破片	
7	瓶	(19.7)	(4.2)		粗 (W, R)	良	にぶい褐	破片	

第515号住居跡 (第10・243図)

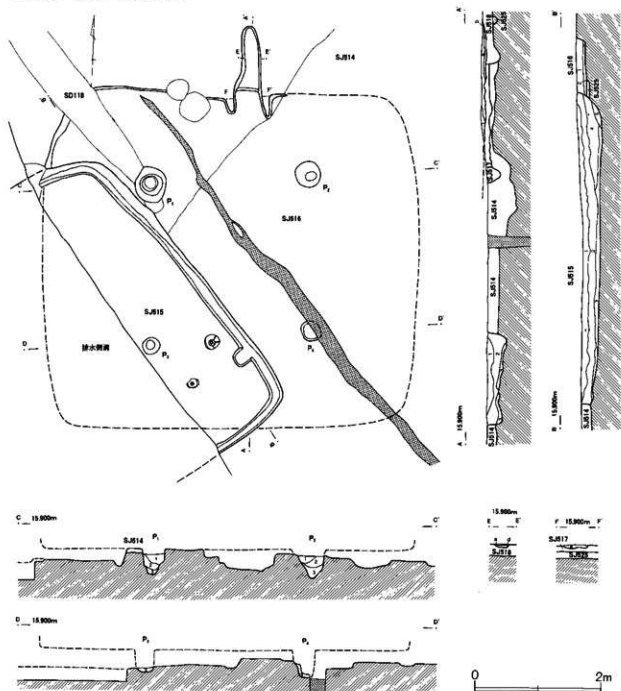
AM-22グリッドを中心に位置する。第514・516号住居跡を切り込んで構築されるが、大部分は調査区外となる。検出得たのは北東辺のみであるため、全体の規模や施設などは明らかでない。一方の軸長は約5.26mで、平面は方形を呈すものと思われる。北を指準とした時の軸方向は、およそN-41°-Wである。

床までの深さは20~25cm、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は中央部がいくぶん窪む。壁溝は検出範囲で全周し、幅10~25cm、深さ約4cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は床面より、土師器の坏や甕、鉄器の鎌(第427図7)などが出土している。

第243図 第515・516号住居跡



第515号住居跡 土層説明

1. 10VR3/3 暗褐色土 溶化流行砂質地山礫多き含む。腐葉の残土・炭化物含む。
2. 10VR2/3 黒褐色土 溶化流行粘質地山礫微量・焼土较多含む。上層との境界明確。
3. 10VR3/3 暗褐色土 溶化流行小型ブロック多き含む。
4. 10VR2/3 黒褐色土 2層に準ずる。焼土少々、炭化物多き含む。
5. 10VR2/3 黒褐色土 地面に溶化流行粘質地山小型ブロックを僅かに含む。平。

第516号住居跡 土層説明 (土色観察欠)

1. 溶化流行砂質地山較多き。焼土若干含む。
2. 溶化流行粘質地山小型ブロックで主構成。

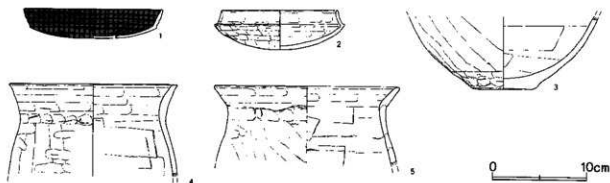
第516号住居跡 カマド土層説明

- a. 10VR3/3 暗褐色土 炭化流行砂質地山礫・焼土較・ブロックで主構成。天井構造土。
- b. 10VR4/1 暗灰色土 炭化物・焼土較少量含む灰層。

第516号住居跡 柱穴土層説明

1. 10VR3/3 黒褐色土 未溶化地山ブロック多き含む。未柱状土後、充填。
2. 10VR2/3 黒褐色土 溶化流行地山全体に溶混。同質化し単一的。
3. 10VR4/4 黒褐色土 柱とんど輪山。壁の崩落土。

第244図 第515号住居跡出土遺物



第106表 第515号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.8)	(5.1)		縄(B.R)	良	にぶい橙	20	略文
2	坏	(12.3)	4.2		縄(W.B.R)	良	にぶい橙	30	
3	甕		(7.7)	6.3	縄(W.B.R)片	普	橙	破片	
4	甕	(17.9)	(9.8)		縄(W.B.R)	良	にぶい黄橙	破片	
5	甕	(19.7)	(8.6)		縄(W.B.R)	良	にぶい黄橙	破片	

第516号住居跡 (第10・243図)

AM-22グリッドを中心に位置する。第517・518号住居跡埋没後の構築で、大半を後出の第514・515号住居跡、および第118号溝跡に切られる。また中央部には、北西から南東にかけて地割れが走っている。主柱穴の位置から想定される規模は、軸長約5.25m×6.05m、面積31.76㎡である。全体は方形を呈すものと思われ、主軸方向はおおよそN-Sとなる。

床までの深さは約12cm、覆土は自然堆積のようである。床面は特に貼り床なども施されず、壁溝も確認できなかった。

カマドは北壁中央、わずかに東寄りに設けられる。煙道は長さ102cm、幅30cmの溝状で、底面は緩やかに立ち上がっていく。燃焼部は約50cm×44cmの方形で、火床面は床面と同一高である。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径25~52cm、深さ43~52cmである。主柱は抜き取られたようで、覆土は乱れていた。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より土師器が少量出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

第517号住居跡 (第10・245図)

AL-22グリッドを中心に位置する。第514・525号

住居跡の覆土を掘り込んで構築され、埋没後、その大半を第518・519号住居跡に切られる。表土除去で覆土をほとんど削平してしまったこともあり、検出はカマド周辺に限られた。このため、全体の規模や形状等については明らかとし得なかった。なお、西側で重複する第520・526号住居跡との関係は、地震の亀裂により確認できなかった。カマドから見た主軸方向は、おおよそS-50°-Wである。

床までの深さは10cm以下で、覆土は自然堆積のようである。壁溝はごく部分的な検出であるが、幅約20cm、深さ約14cmを測る。

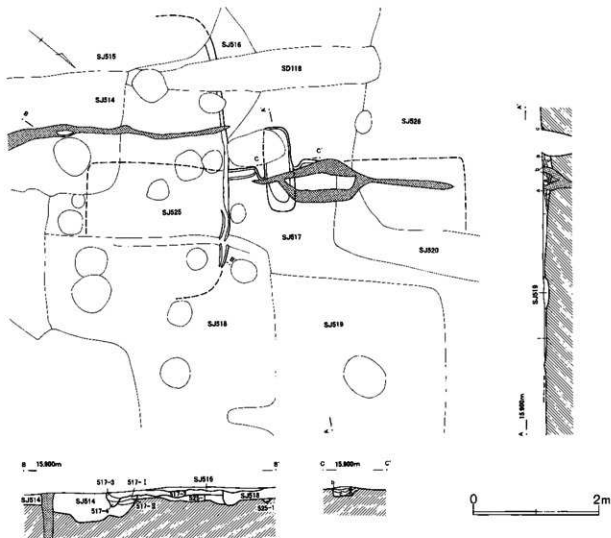
カマドは北西壁に位置する。燃焼部は136cm×44cmの長方形で、火床面は床よりわずかに窪む。袖は痕跡程度ながら、削り出された基底部を確認した。

柱穴・貯蔵穴、遺物は検出されなかった。

第518号住居跡 (第10・236図)

AL-22グリッドを中心に位置する。四周の第511・513・517・525号住居跡、および第584号土壇を切り込んで構築される。埋没後、第510・512・516・519号住居跡に切られるため、検出し得たのは北西の半分ほどである。主柱穴の位置から復元される規模は、軸長6.00m×6.40m、面積38.40㎡である。全体は方形を呈し、主軸方向はおおよそN-36°-Wとなる。

第245図 第517・525号住居跡



第517号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 焼加熟地山・焼土粒・灰多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 未溶化地山灰・焼土粒少量含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 2層に準ずる。地山粒多く含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒多く・灰化物少量含む。

第517号住居跡 盛り土層説明

- I. 10YR3/3 暗褐色土 未溶化砂質・粘質地山ブロック混合上による盛り床構築土。
- II. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行粘質地山ブロックで主構成。光賦上。

第517号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/3 暗褐色土 未溶化砂質地山粒多く含む。
- b. 10YR3/2 暗褐色土 粒・小型ブロック硬土からなる天井層土。
- c. 10YR3/1 暗褐色土 焼加熟地山・焼土・小形ブロック少量含む状態。
- d. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行粘質地山ブロック多く含む。崩落面の流入土。

第525号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行粘質地山粒・小形ブロック多く、焼土粒若干含む。自然埋積土。

床までの深さは7cm程で、覆土は自然堆積と思われる。床面は平坦で、第511号住居跡と重複する部分は、貼り床が施されている。壁溝は全周し、幅15~30cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北西壁の中央に設けられる。燃燒部は約133cm×42cmの細長い楕円形で、火床面は床から3cm程度低い。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径25~37cm、深さ

第246図 第518号住居跡出土遺物



第107表 第518号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	椀	(9.8)	5.4		細 (W. B)	良	にぶい橙	35	
2	杯	(13.0)	4.2		細 (W. B)	普	橙	65	

33~52cmである。いずれも、柱痕と根固めの充填土が観察された。

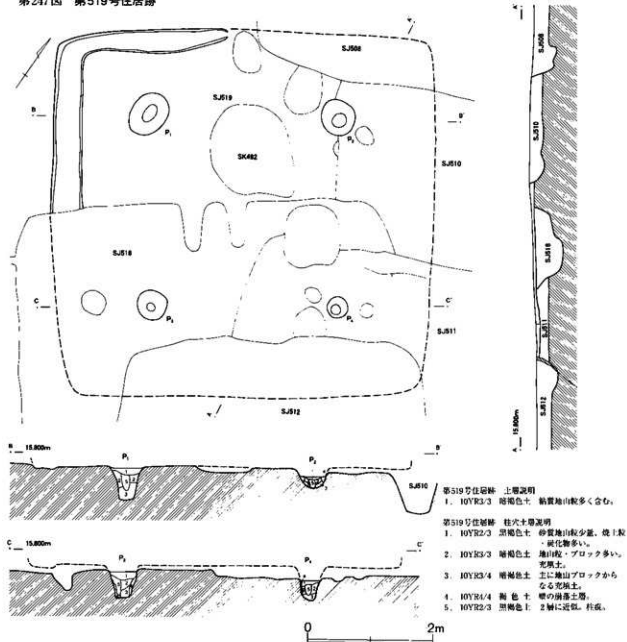
貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の坏や甕を出土しているが、大半が細片であるため、図示できたものは少ない。

第519号住居跡 (第10・247図)

AL-22グリッドに位置する。第511・517・518号住居跡を切り、第512号住居跡、第482号土塊に切られる。重複が激しく平面的な確認は取れなかったが、支柱穴の位置から想定される規模は、軸長約5.85m × 6.20m、面積36.27㎡である。全体は方形を呈するものと思われ、北を指準とした時の軸方向は、およそN

第247図 第519号住居跡



-35°-Wとなる。

床までの深さは約7cm、覆土は自然堆積のようである。床面はほぼ平坦で、貼り床の施された様子は窺えなかった。壁溝は幅約30cm、深さ約3cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径36~64cm、深さは33~50cmである。いずれも柱痕が観察された。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

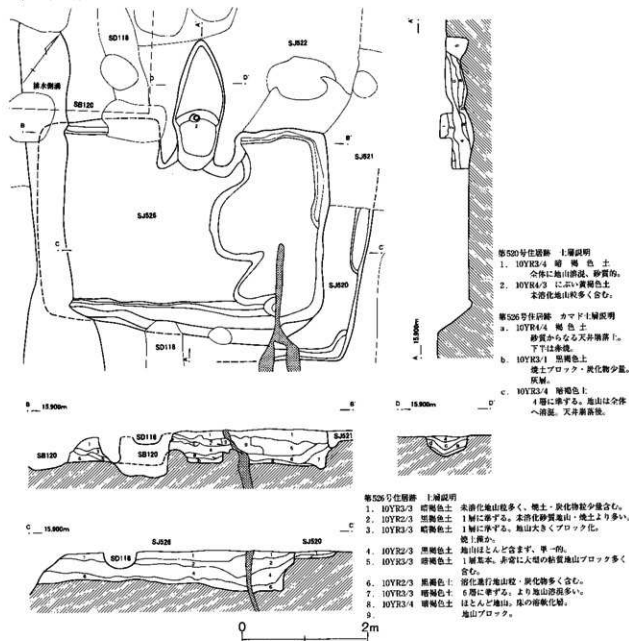
遺物は壁溝中より土師器片を少量出土しているが、細片のため図示し得なかった。

第520号住居跡 (第10・248図)

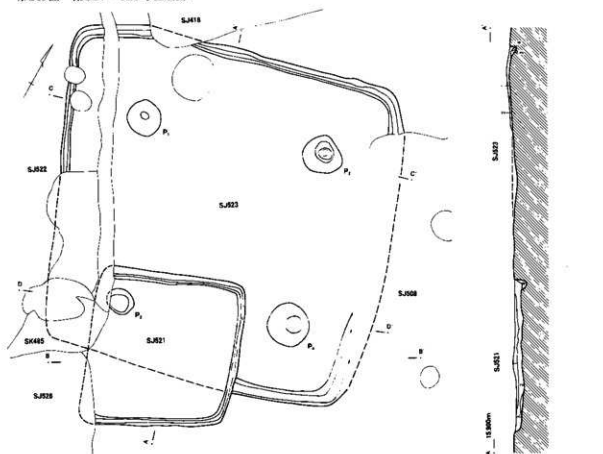
AL-22グリッドを中心に位置する。大半を第520・526号住居跡に切られるため、全体の規模や形状、施設などについては明らかとし得ない。また、地震の亀裂を境に、南壁の西側は検出されなかった。

床までの深さは10cm前後で、覆土は人為的な埋戻しと考えられる。壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ平坦である。検出された壁溝は幅20~30cm、深さは2cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

第248図 第520・526号住居跡



第249図 第521・523号住居跡



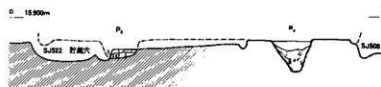
B 15.900m S.521 S.523 B



- 第521号住居跡 土層説明
1. 10YR2/3 赤褐色土 砂質堆山全体に淤泥
 2. 10YR2/3 赤褐色土 淤化基行堆山砂・小礫ブロック多く
焼土・灰化層少量
 3. 10YR4/6 褐色土 はと人と製瓦堆山。床の淤散化層。
1. 10YR2/3 赤褐色土 2層に準ずる。未淤化堆山砂少量。



- 第523号住居跡 土層説明 (土色調査欠番)
1. 淤化基行砂質堆山砂多く、焼土粒少量含む。
 2. 未淤化砂質堆山ブロック主体。
 3. 2層に準ずる。場所への充填土か。
 4. 淤化堆山砂少量含む。



- 第521号住居跡 特穴土層説明
1. 10YR2/3 赤褐色土 砂質堆山砂多、焼土粒微量含む。
 2. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロックと砂質堆山ブロック
の混合土。充填土。
 3. 10YR1/4 褐色土 主に砂質堆山からなる。充填土。
 4. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック多く含む。柱穴。

第521号住居跡（第10・249図）

AL-22グリッドを中心に位置する。第523・526号住居跡を切る小型の住居跡である。西側で重複する第522号住居跡との関係は、確認できなかった。断面観察の知見を補うと、全体は軸長2.50m×2.50mの方形で、面積は6.25㎡となる。北を指準とした場合の軸方向は、ほぼN-20°-Wである。

床までの深さは10~18cmで、覆土は自然堆積のようである。壁は垂直に立ち上がり、床面は中央部がやや窪む。壁溝は検出範囲で全周し、幅9~18cm、深さ2~6cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物の出土は少なく、かつ小片ばかりである。須恵器の蓋・坏・甕、土師器の赤彩坏・甕などが見られる。

第250図 第521号住居跡出土遺物



第108表 第521号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.8)	(2.7)		粗 (W, R)	良	橙	破片	赤彩
2	坏	(12.8)	(2.6)		細 (R)	良	にぶい橙	破片	
3	須恵器 坏		(0.8)		粗 (W, F)	良	灰 白	破片	瀬西 転用硯
4	須恵器 甕	(17.9)	(2.3)		細 (W, B, F)	良	灰 白	20	瀬西
5	須恵器 甕		(2.3)		粗 (W, F)	良	灰 黄	破片	末野

第522号住居跡（第10・253図）

AL-21グリッドを中心に位置する。第523・540・541号住居跡を切り、第542号住居跡、第118号溝跡に切られる。南東壁を検出できなかったため、第521・526号住居跡、第120号掘立柱建物跡との重複関係は確認できなかった。全体は方形を呈するものと思われるが、規模については明らかとしない。

床までの深さは最大5cm程で、覆土は自然堆積である。床面は南へ向けわずかに傾斜し、貼り床は施され

ない。壁溝は検出範囲で全周し、幅約15~25cm、深さ約10cmを測る。

貯蔵穴は東隅部に備わるが、第485号土壇に大きく掘り抜かれる。深さは約30cmで、上面は径70cm×110cmの楕円形に復元される。

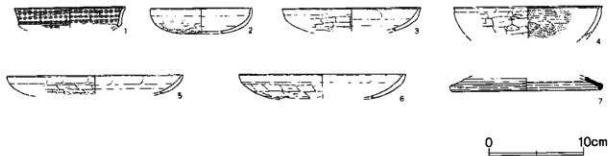
カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物の出土はごく少量で、しかも小さな破片ばかりである。須恵器の蓋・坏・甕、土師器の坏・甕などが見られるが、図示し得たものはわずかである。

第109表 第522号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	(2.2)		細 (R)	良	にぶい橙	破片	赤彩
2	坏	(10.8)	(2.2)		細 (W, B, R)	良	褐 灰	破片	
3	坏	(14.9)	(2.5)		細 (B, R)	青	橙	破片	
4	坏	(15.8)	(3.4)		細 (W, R)	良	灰 褐	破片	
5	坏	(18.7)	(2.0)		粗 (B, R)	青	にぶい橙	破片	
6	坏	(17.8)	(2.6)		細 (W, R)	良	にぶい黄橙	破片	
7	須恵器 甕	(15.8)	(1.4)		微 (F)	良	灰 白	破片	瀬西

第251図 第522号住居跡出土遺物



第523号住居跡 (第10・249図)

A L-22グリッドを中心に位置する。西壁を第522号住居跡、東壁を第508号住居跡、南壁を第521号住居跡にそれぞれ切られる。北壁に重複する第418号住居跡との新旧関係は、これを確認できなかった。全体は軸長5.30m×5.30mの方形を呈し、面積は28.09㎡を測る。長軸方向はおよそN-19°-Wを指す。

床までの深さは5cm程度で、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は中央がわずかに

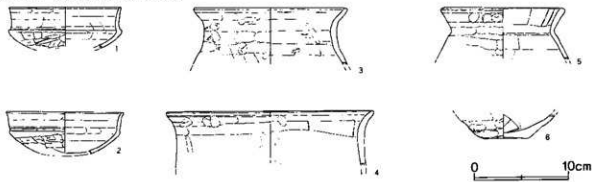
に高まる。壁溝は検出範囲で全周し、幅10~20cm、深さ約8cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径40~68cm、深さは29~64cmである。ともに明瞭な柱痕が観察された。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は少量の破片が出土したにとどまる。土師器の坏・甕・瓶の把手などであるが、図示し得たものはわずかである。

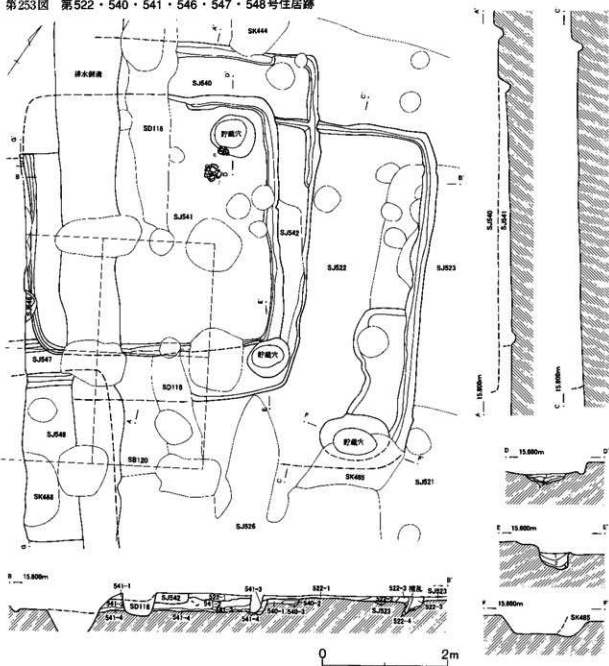
第252図 第523号住居跡出土遺物



第110表 第523号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	(4.4)		細 (W, R)	良	橙	破片	
2	坏	(12.5)	(4.4)		細 (W, B)	良	灰 白	20	
3	甕	(16.3)	(6.0)		粗 (W, B)	良	にぶい黄橙	破片	
4	瓶	(22.0)	(5.9)		雑 (W, R, F)	良	にぶい橙	破片	
5	甕	(13.3)	(5.5)		雑 (W, B)	良	黄 台	破片	
6	甕		(2.6)	4.8	雑 (W, 片)	良	橙	破片	

第253図 第522・540・541・546・547・548号住居跡



第522号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 溶化進行砂質地山較多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 1層の基層。
3. 10YR2/2 黒褐色土 溶化進行砂質地山較少量・焼土粒散在含む。
4. 10YR4/4 暗色土 ほとんど砂質地山、壁・底の溶軟化流入土層。

第540号住居跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 溶化進行砂質地山較多く含む、熱り赤。
2. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行砂質・粘質地山較多く含む、自然堆積。
3. 10YR4/4 暗色土 主に粘質地山からなる壁の溶流入土層。

第541号住居跡 貯蔵穴土層説明

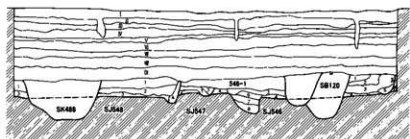
1. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行砂質地山較多・焼土粒多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山較多く、焼土粒・フロック少量含む。
3. 3層との境に炭化物多く含む。
4. 10YR4/2 灰褐色土 ほとんど砂質地山からなる壁の溶流入土層。

第541号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行砂質地山較多く、焼土粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 1層に準ずる。地山粘結質化し少ない。
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山較多・フロックよく含む。
4. 10YR4/3 灰褐色土 砂質地山ブロック主体、床の溶軟化層。

第541号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 溶化進行粘質地山較多く、焼土粒若干含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 1層基層。全層に砂質地山混在。
3. 10YR3/4 暗褐色土 ほとんど砂質地山、壁・底の溶軟化流入土層。



第546号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土壌、小径ブロック多い。
3. 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土質土層、焼土粒・炭化物少量含む。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 ほとんど砂質土山からなる。表面の溶融化層。
5. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土山粒多く含む。
6. 10YR2/3 黒褐色土 焼き固まった焼土塊と炭化物多く含む。
7. 10YR4/2 灰黄褐色土 ほとんど灰黄色シルト質土山。炭土の塊も認められる。
8. 10YR4/4 褐色土 ほとんど砂質土山。炭土の塊も認められる。

基本土層 (内訳)

- I. 10YR4/2 灰黄褐色土 浅層A軽石を多量に含む。水田耕作土。
- II. 10YR4/3 に近い黄褐色土 1層との境はFe・Mnの集中で明確。浅層A軽石多し残り強い床土。
- III. 10YR4/3 に近い黄褐色土 暗色土層。河川(元荒川)沿層厚積土。
- IV. 10YR4/3 に近い黄褐色土 シルト状。泥層土。黄色味強。
- V. 10YR3/4 暗褐色土 シルト状ではあるが、河川性堆積の砂層。泥層土。
- VI. 10YR4/3 に近い黄褐色土 互層と同層黄色味強。砂のブロックが多く含む。泥層土。
- VII. 10YR3/4 暗褐色土 互層に互層。より砂っぽく色調強い。
- VIII. 10YR3/3 暗褐色土 互層暗色。互層が混入。ほぼ14世紀代までの地表面。腐植土。
- IX. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量含む。本層より下の遺構が覆り込まれる。腐植土。
- X. 10YR2/3 黒褐色土 互層に互層。互層の堆積前には層は焼土粒欠したと思われる。腐植土。
- XI. 10YR4/4 褐色土 ほとんど砂質土山。互層ブロック混入。腐植土。

第547号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質土山多く、焼土粒・炭化物少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 ほとんど砂質土山。床の砂化層。
3. 10YR2/3 黒褐色土 1層に準ずる。土山多く含む。

第548号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 砂質土山粒・焼土粒多い。
2. 10YR3/3 暗褐色土 砂質土山粒・小型ブロック。焼土粒炭化物多く含む。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 2層層外。地山粒・ブロック多し。
4. 10YR3/3 暗褐色土 2層に準ずる。焼土・炭化物多し。

第524号住居跡 (第11・254図)

AP-25グリッドを中心に位置する。南東壁で第534・535号住居跡を切る。全体は軸長4.76m×4.80mの方形で、面積は22.85㎡を測る。主軸方向はおおよそN-47°-Eを指す。

床までの深さは15cm前後、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ平坦である。全周する壁溝は幅約20cm、深さは3~5cmを測る。南東壁には、間仕切り状の溝が取り付く。

カマドは北東壁の中央部、やや東寄りに付設される。燃焼部は96cm×46cmの倒円形を呈し、火床面は平坦で、床より7cm程度掘り込まれる。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径37~42cm、深さは30~44cmである。ともに太目の柱根が観察された。また貯蔵穴に隣接して、小穴が1本検出された。覆土全体に焼土が見られることから、カマドの土を投棄したのではないかとと思われる。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径90cmの円形を呈し、深さは58cmを測る。周囲には幅30cm、高さ約5cmの半円状の突堤が巡る。

遺物は東半部の床面を中心に、土師器の杯・碗・壺・甕などが出土している。

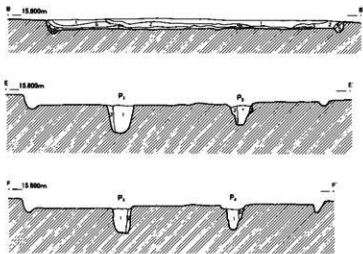
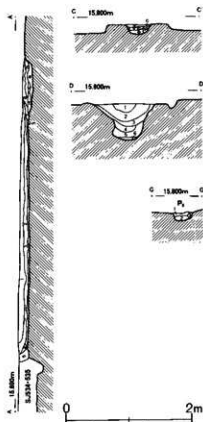
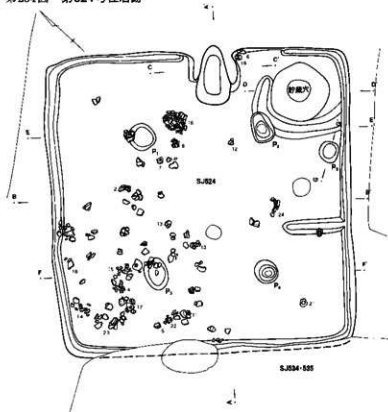
第525号住居跡 (第10・245図)

AL-22グリッドを中心に位置する。北西壁の一部が検出されたのみで、大部分は第514~518号住居跡、および第118号溝跡に切り取られている。故に、全体の規模や形状、その他の施設等については明らかとしない。

床までの深さは23cmを測れるが、覆土はほとんど掘り取られていた。残存したものを見る限り、埋め戻された様子は窺えない。壁溝はごく一部での確認であるが、幅約10cm、深さ約6cmを測る。

遺物は覆土中より、少量の赤彩の杯や甕(古墳時代後期)などを出土している。

第254図 第524号住居跡



第524号住居跡 I層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土
2. 10YR2/3 黒褐色土: 焼土・炭化物粒多く含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土: 赤面土と2層の混合。
4. 10YR4/6 褐色土: 焼土粒含む。
5. 10YR4/6 褐色土: 炭化物なし。
6. 10YR4/6 褐色土: 5層と堆山の混合。
7. 10YR2/3 黒褐色土: 2層とa層の混合。

第524号住居跡 カマド土層説明

- a. 7.5YR6/8 褐色土: 焼土粒多く含む。
- b. 10YR3/3 暗褐色土: 焼土粒・炭化物粒含む。
- c. 10YR3/3 暗褐色土: b層とd層の混合土層。
- d. 5YR4/8 赤褐色土: 焼土層に炭化物粒含む。
- e. 10YR4/4 褐色土: かなり細く、セラセラ。
- f. 10YR4/4 褐色土: 焼土粒含む。

第524号住居跡 貯蔵土層説明

1. 10YR3/2 暗褐色土: 焼土ブロック・褐色土含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土: 褐色土・粘土ブロック含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土: 炭化物粒含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土: 粘性が強い。
5. 10YR3/3 暗褐色土: 粘性が強い。焼土粒散在含む。
6. 10YR4/4 褐色土: 炭化物の濃集層。

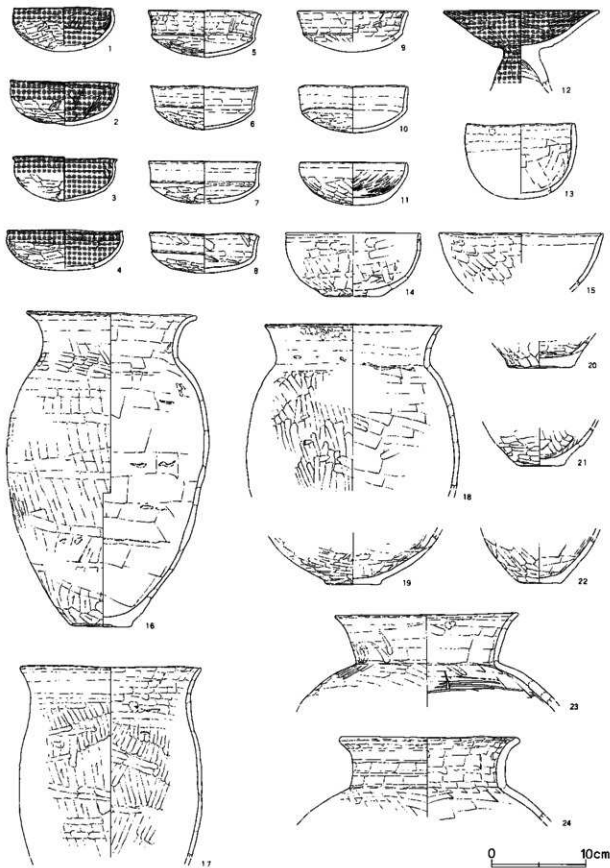
第524号住居跡 P-5土層説明

1. 10YR4/1 暗灰色土: 焼土ブロック多く含む。全体の広がる。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土: 焼土粒・黄褐色土粒少し含む。
3. 10YR4/4 褐色土: 焼土ブロック多く・黒色土粒少し含む。

第524号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土: 柱穴と思われる。P103は焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 暗褐色土

第255図 第524号住居跡出土遺物



第111表 第524号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(10.7)	(4.2)		粗(W, C)	良赤	褐	50	比企型 赤影	
2	坏	(11.7)	(4.7)		粗(W, C)	良	橙	95		
3	坏	(11.2)	4.5		粗(W)	明赤	褐	90		
4	坏	(12.4)	(4.0)		粗(W, C)	良	橙	20		
5	坏	12.2	4.7		微(W)	明赤	褐	100		
6	坏	(11.5)	(4.6)		微(W, B)	良	橙	55		
7	坏	(12.0)	(4.5)		微(W, R)	普	浅黄	橙		40
8	坏	11.8	3.9		微(W, B)	普	浅黄	橙		90
9	坏	(12.0)	(3.3)		粗(W, R)	良	明赤	褐		破片
10	坏	(11.8)	(4.9)		微(W)	普	浅黄	橙		70
11	碗	(12.2)	(4.4)		粗(W, R)	普	橙	40	赤影	
12	高坏	16.7	(8.0)		粗(W, C)	良	赤	褐		70
13	鉢	(11.6)	(7.5)		粗(W, C, 片)	劣	灰	黄		40
14	鉢		(6.6)	(6.2)	粗(W, C, R)	良	橙	破片		
15	鉢	(17.6)	(5.7)		粗(W)	良	橙	破片		
16	甕	(18.3)	33.5	6.5	粗(W, C, 片)	普	にぶい	橙		80
17	甕	(19.4)	(20.2)		粗(W, 片)	良	にぶい	黄橙		破片
18	甕	(19.0)	(17.3)		粗(W)	良	橙	破片		
19	壺		(3.5)	(6.3)	粗(W, C)	良	橙	破片		
20	甕		(3.0)	7.0	粗(W)	良	橙	破片		
21	甕		(4.1)	5.2	粗(W, 片)	普	にぶい	橙		破片
22	甕		(4.7)	4.5	粗(W, C)	普	橙	破片		
23	壺	(19.7)	(10.0)		粗(W, R)	良	橙	破片		
24	壺	(19.5)	(8.8)		粗(W, 片)	良	にぶい	橙		破片

第256図 第525号住居跡出土土物



第257図 第526号住居跡出土土物



第526号住居跡 (第10・248図)

AL-22グリッドを中心に位置する。第520号住居跡を大きく掘り抜いて構築され、故意に埋め戻された後、東壁を第521号住居跡、北壁を第120号掘立柱建物跡、南壁を第118号溝跡にそれぞれ切られる。西壁は排水用の側溝で掘り抜いてしまったため、軸長を測れるのは一方向のみである。それは約3.30mで、主軸方向はおよそN-33°-Wを指す。

床までの深さは50cm前後、覆土は地山ブロックを主体とする人為的な埋め戻しである。壁は急角度で立ち上がるものの、南壁は大きく崩落している。床面は地震の影響からか、東側は軟質で一段下がっている。壁溝は幅15~25cm、深さ3~6cmを測る。



第112表 第525号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.9)	(3.9)		粗(W, B, R)	良	にぶい	橙	25

第113表 第526号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	125	4.2		微(W, B)	香	にぶい橙	80	
2	壺		(24.1)		粗(W, C)	良	赤褐	70	

カマドは北西壁はほぼ中央に付設される。煙道は長さ113cm、幅69cmで、底面は燃焼部より一段高い。先端部はビット状の掘り込みとなる。燃焼部は約97cm×55cmで、火床面は床より4cm程深い。

柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物はカマドから土師器の甕、覆土から須恵器の甕や坏の破片が見出されている。いずれも微細で図示し得たのはわずかである。

第527号住居跡 (第10・259図)

AM-22グリッドを中心に位置する。表土除去時に削平してしまったため、主柱穴と貯蔵穴、壁溝の一部を確認したにすぎない。さらに、南西側は調査区外となるため、全体の規模などについては明らかとし得ない。

壁溝は幅約18cm、深さ最大3cmで、北隅付近は地割れて破壊されている。

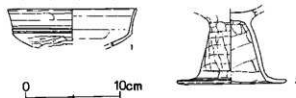
柱穴は主柱穴が2本検出された。径52~66cm、深さは50~55cmである。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径90cm×106cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土は自然堆積である。

カマドは検出されなかった。

遺物は貯蔵穴より、土師器の坏・高坏・甕の破片が出土している。また、床面から大型の凹石(第417図9)が見出されたが、縄文時代の遺物のようである。

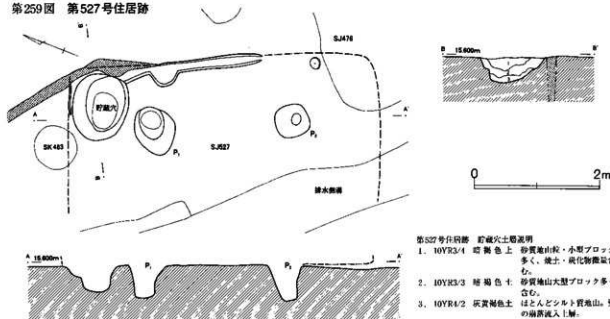
第258図 第527号住居跡出土遺物



第114表 第527号住居跡出土遺物観察表

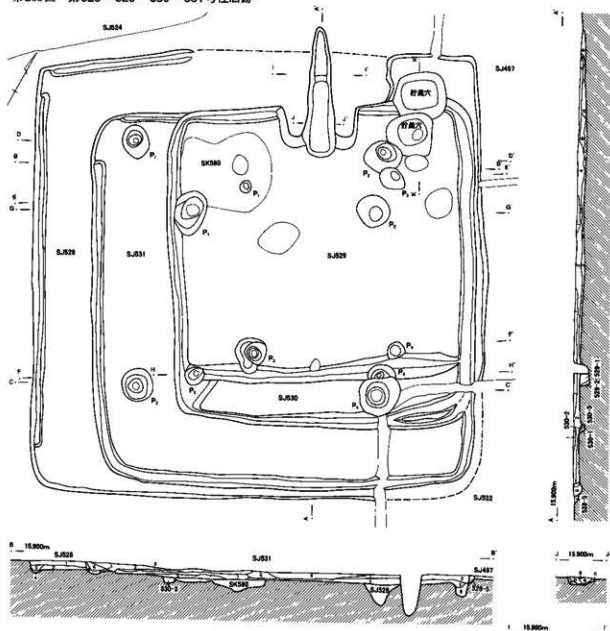
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.7)	(4.0)		細(B)	良	浅黄橙	破片	
2	高坏		(8.0)	(11.7)	微(W, B)	良	橙	脚部50	

第259図 第527号住居跡



第527号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質地山紀・小型ブロック多く、炭土・炭化物混入あり。
2. 10YR3/3 暗褐色土 砂質地山大型ブロック多く含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 はとんどシルト質地山。壁の崩落流入土層。



第528号住居跡 土層説明

1. 10YR2/4 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR4/6 褐色土 炭化時+凝灰に含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒少量含む。
4. 10YR4/6 褐色土 焼土ブロック。
5. 10YR2/3 暗褐色土

第529号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 凝り固したものと思われる。
2. 10YR3/2 暗褐色土 粘り層。

第530号住居跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 粘り層。
2. 10YR4/6 褐色土 焼土ブロック。
3. 10YR2/2 暗褐色土 粘り層。

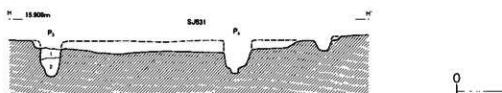
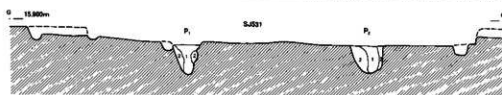
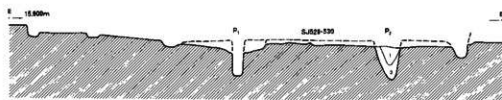
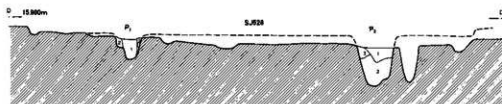
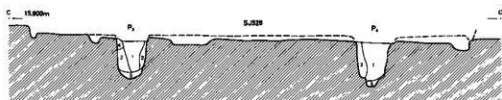
第531号住居跡 土層説明

1. 10YR4/6 褐色土 暗褐色土との混合。黄褐色土ブロック含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒少量含む。
3. 10YR4/6 褐色土 1層に互層。焼土粒少量含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 2層に互層。焼土ブロック・多量の炭化物粒含む。
5. 10YR4/6 褐色土 1層に互層。暗褐色土少量含む。
6. 10YR3/2 暗褐色土 焼土ブロック・少量の炭化物粒含む。
7. 10YR3/4 暗褐色土 2層に互層。焼土ブロック少量含む。
8. 10YR2/2 暗褐色土 焼土ブロック含む。

第532号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 10YR2/1 黒色土 炭化物層。
3. 10YR5/3 に近い黄褐色土 炭化物粒少量含む。砂質。

0 2m



第528号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。柱穴。
2. 10YR4/4 褐色土 堆山土が下に埋まる。
3. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。柱穴の崩れ。
4. 10YR6/1 褐灰色土 粘土のプロック層。
5. 10YR5/6 黄褐色土 砂質。

第530号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 堆山ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 堆山ブロック多く含む。

第531号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック・焼土粒・炭化物含む。柱穴。
2. 10YR4/6 褐色土 褐色土ブロック多く、焼土・炭化物粒少量含む。

第531号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- b. 10YR2/2 黒褐色土 大形の焼土ブロックを多く含む。
- c. 10YR2/1 黒色土 前面の炭層。
- d. 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土をベースに人形の焼土ブロックを多く含む。
- e. 5YR5/6 明赤褐色土 焼土ブロック。

第528号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
4. 10YR4/1 褐灰色土 形骸がある。
5. 10YR4/6 褐色土 褐色土ブロック。
6. 10YR5/1 黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
7. 10YR4/6 褐色土 褐色土ブロック。

第528号住居跡 (第11・260図)

A P-26グリッドを中心に位置する。内部に第529・530・531号住居跡が構築される。同一方向に、しかも入れ籠状の重複であるが、覆土は自然堆積であるため、後三者と一連のものとは半断できなかった。仮に4軒が一続きの建て替えてあったとすれば、一旦縮小し、その後2度の拡張を行なったことになる。それもやや不自然な感を拭えないため、ここでは先行する単独の住居跡と捉えておく。

全体は軸長7.10m×7.35mの方形を呈し、面積は52.19㎡を測る。長軸方向はおよそN-33°-Wを指す。

床までの深さは15cm程で、覆土には人為的に埋め戻された様子は窺えない。壁溝は西壁を中心に検出された。幅約20cm、深さは約7cmである。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径45~65cm、深さは40~70cmである。いずれも柱痕が観察された。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径75cm×84cmの方形で、床からの深さは20cmを測る。

カマドは検出されなかった。

遺物の出土はごくわずかで、かつ小片のため図示できなかった。

第529・530・531号住居跡 (第11・260図)

A P-26グリッドを中心に位置する。第497・528号住居跡を切る。3軒はカマドを共有したまま、南側へ次第に拡張していった一連の住居跡と判断される。拡張は第529号住居跡→第530号住居跡→第531号住居跡の順になる。また、住居跡内に掘り込まれる第580号土壇は第530・531号住居跡より古い。

全体はともに方形で、主軸方向はおよそN-33°-Wを指す。第531号住居跡は、床までの深さが10cm前後である。しかし、拡張に際して、先行する住居の床を掘り下げたか否かは不明である。壁溝はそれぞれほぼ全周し、幅約10~25cm、深さは3~10cmを測る。

(第529号住居跡)

規模は軸長4.35m×5.10m、面積22.19㎡である。

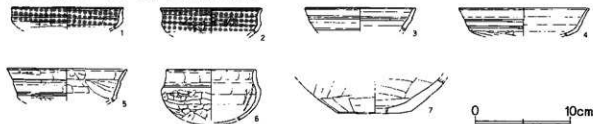
柱穴は主柱穴を2本検出した。径約20~50cm、深さは約30~60cmである。柱は抜き取られており、覆土は埋め戻しであった。南東に予想される2本は、これを確認できなかった。

(第530号住居跡)

規模は軸長5.10m×5.10m、面積26.10㎡である。

主柱穴は南東部に2本を検出した。拡張が南東壁のみであることから見て、北西の2本はそのまま利用され、拡張部の2本のみを付け替えたものと考えられる。これも次の拡張に際し、柱は抜き取られている。

第261図 第529・530・531号住居跡出土遺物



第115表 第529・530・531号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	(2.3)		縄 (R)	良	にぶい黄橙	破片	赤彩
2	坏	(10.7)	(2.7)		縄 (B, R)	良	にぶい黄橙	破片	赤彩
3	坏	(11.7)	(2.5)		縄 (B, R)	普	にぶい黄橙	破片	
4	坏	(13.8)	(3.0)		縄 (W, B, R, F)	良	にぶい黄橙	20	
5	坏	(12.8)	(3.5)		縄 (W, B, R)	良	灰黄褐	破片	
6	筒	(9.4)	(5.4)		粗 (B, R, F)	普	褐	25	
7	甕		(3.7)	7.9	縄 (W, R)	普	にぶい橙	破片	

カマドや貯蔵穴は第529号住居跡のものをそのまま利用したと思われ、独自の検出はなかった。

(第531号住居跡)

規模は軸長5.90m×6.20m、面積は36.58㎡である。覆土は層序が乱れており、故意に埋め戻されたようである。床面は南から北へやや傾斜する。

カマドは北西壁の中央、やや北寄りに位置する。先行する住居跡に見られず、造り替えられた様子もないことから、カマドは拡張時もそのまま残されたものと考えられる。煙道は長さ78cm、幅31cmで、底面は燃焼部より緩やかに立ち上がる。燃焼部は約131cm×47cmと細長く、火床面はおぼ平坦である。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径29~61cm、深さは43~56cmで、こちらは柱痕が確認された。

貯蔵穴は北隅部に検出された。上面は径55cm×72cmの不整な円形で、深さは37cmを測る。

遺物の出土は少なく、かつ小片ばかりであった。一括して取り上げたため、各々の所属住居跡は明らかでない。

第532号住居跡 (第11・262図)

AP-27グリッドを中心に位置する。北東壁を第533号住居跡に切られる。西隅で重複する第528・530・531号住居跡、および床を掘り抜く第496号土壇、第237号井戸跡との関係は確認できなかった。全体は軸

長8.84m×9.13mの方形を呈し、面積は80.71㎡を測る。主軸方向はおよそN-61°-Eを指す。

床までの深さは10cm前後、覆土は自然堆積である。床面は貼り床が施されており、西から東へわずかに傾斜する。壁溝はおぼ全周し、幅約4~25cm、深さ8~13cmを測る。南東壁には間仕切り状の浅い溝が1条取り付く。

カマドは検出できなかったが、第533号住居跡に切られる北東壁の中央部に灰土の分布が見られた。この部分に壁溝の検出されなかったことを考え合わせれば、ここにカマドが設けられていた可能性は高いといえる。

柱穴は主柱穴が4本と、その間に支柱穴3本が検出された。主柱穴は径57~70cm、深さ56~70cm、支柱穴は径30~42cm、深さ49~55cmである。いずれも覆土は乱れており、柱痕は観察されなかった。

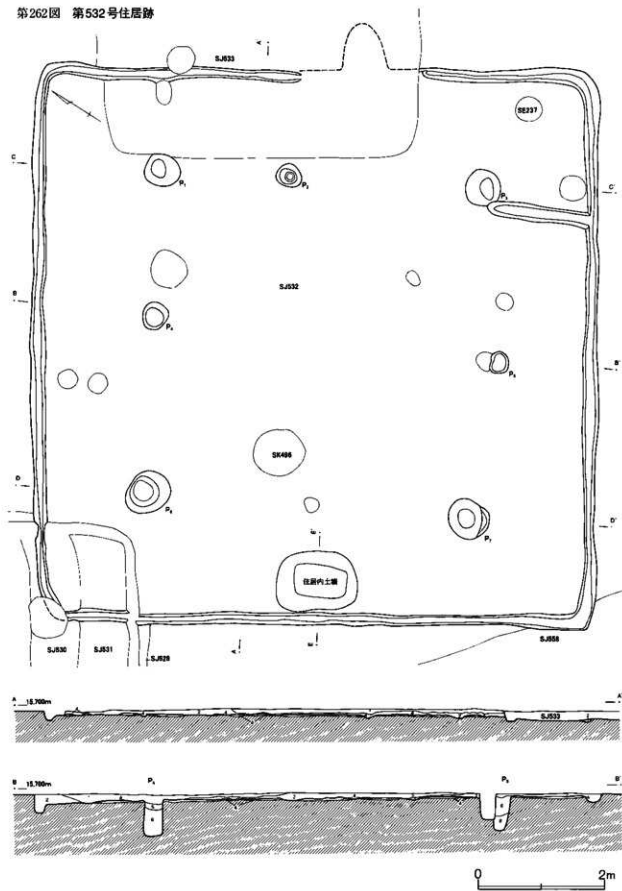
位置的には特異ではあるが、貯蔵穴状の掘り込みが南西の壁際中央で検出された。これは径130cm×90cmの長方形で、深さは約60cmを測る。

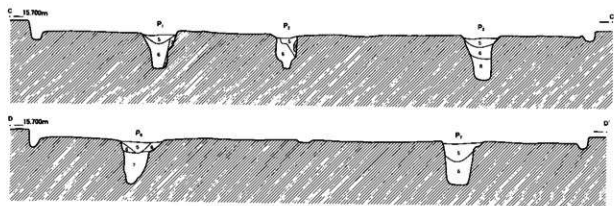
遺物の出土は少なかった。いずれも床からは浮いており、投棄されたような状態であった。土師器の壺などは数個体分あるものの、まったく接合できなかった。このほか、滑石製の剣形模造品1点(第425図3)が見出されている。

第116表 第532号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.8)	(4.6)		粗(W, C, R)	良	赤 褐	30	比全型 赤彩 内外黒色処理
2	坏	(15.0)	(4.8)		細(W, R)	良	明 褐 灰	破片	
3	坏	(14.8)	(4.3)		細(W, C)	良	橙	55	
4	坏	(14.0)	(4.1)		粗(W, R)	普	橙	45	
5	坏	(11.3)	3.5		微(W)	洋	橙	70	
6	坏	(19.0)	(4.2)		微(W)	良	橙	破片	
7	坏	(18.0)	(4.4)		微(W, B)	良	橙	35	
8	坏	(17.0)	(4.9)		粗(R)	良	橙	95	
9	坏	(18.0)	(4.5)		粗(W, R)	良	橙	30	
10	瓶	(19.0)	(3.5)		粗(W, 片)	洋	橙	破片	
11	甕	18.6	(4.2)		細(W, R)	普	にぶい 橙	破片	
12	壺	(15.0)	(5.0)		粗(W, R, F)	普	橙	破片	
13	壺	(18.0)	(10.0)		粗(W, C, R)	良	明 赤 褐	破片	
14	壺		(6.2)	5.4	粗(W, C, R)	良	橙	破片	
15	壺		(4.1)	7.1	粗(W, C, R)	普	橙	破片	
16	高 坏		(3.8)	(12.0)	粗(W, 片)	普	にぶい 橙	破片	

第262图 第532号住居跡





第532号住居跡 1. 層説明 (柱穴含む)

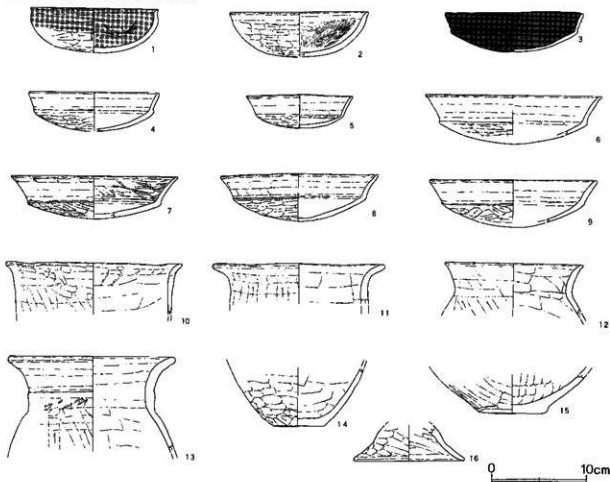
1. 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土粒・炭化物多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黒褐色土粒多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物多く含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 粘り床。
5. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物多く含む。
6. 10YK3/4 暗褐色土 粘り床。
7. 10YR4/4 褐色土
8. 10YR3/3 暗褐色土 2層に近似。砂質。

第532号住居跡 住居内土塊土解説明

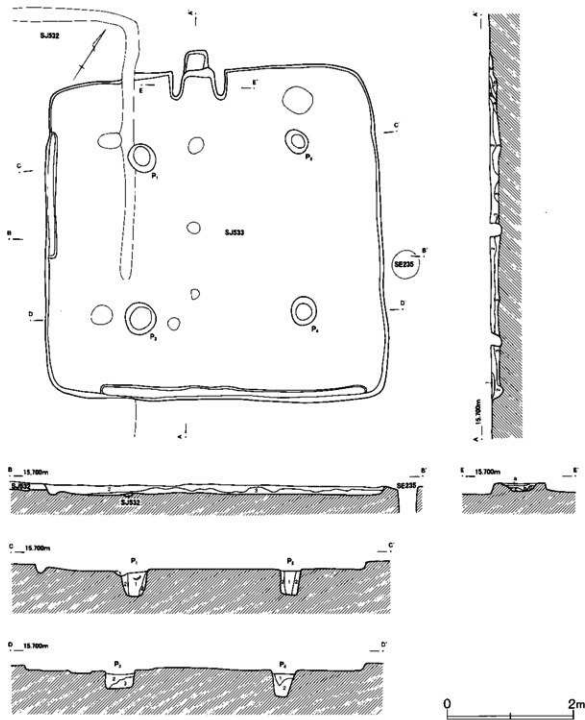
1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・褐色土少量含む。
3. 10YR4/3 褐色土 褐色土と暗褐色土の混合土。
4. 10YR4/4 褐色土 黄褐色土ブロック。壁の崩落土。



第263図 第532号住居跡出土遺物



第264図 第533号住居跡



第533号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭土粒多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土多量に含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 2層に近似。炭土粒含む。

第533号住居跡 キマド土層説明

- a. 10YR5/2 黒褐色土 炭土粒多く含む。天井部の崩落土。
- b. 10YR5/2 灰黄褐色土 灰層。
- c. 5YR4/8 赤褐色土 火床面。焼山の焼土化。

第533号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR5/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒含む。
2. 10YR4/3 濃い黄褐色土 焼山ブロック含む。
3. 10YR5/3 暗褐色土 焼灰色粘土含む。

第533号住居跡 (第11・264図)

A P-27グリッドを中心に位置する。南西辺で第532号住居跡を切る。全体は軸長5.25 m × 5.40 m の方形を呈し、面積は28.35 m²を測る。主軸方向はおおよそ N-34°-Wを指す。

床までの深さは15cm程で、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ平坦である。壁溝は南西壁の一部と、南東壁に検出された。幅15~20cm、深さは3~9cmである。

カマドは北東壁の中央部、わずかに東寄りに設けら

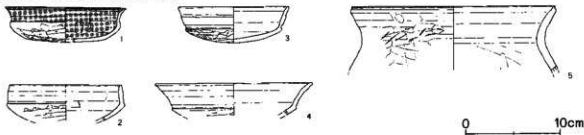
れる。燃焼部は約46cm × 55cm の方形で、火床面は平坦で、床とおおよそ同じ高さである。煙道は長さ31cm、幅38cmで、底面は火床面より一段高くなっている。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径35~49cm、深さ28~40cmである。北側の2本には柱根が見られたが、南側のものは覆土が混れていた。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の坏や甕が少量出土している。大半は細かい破片であり、図示できたものはわずかである。

第265図 第533号住居跡出土遺物



第117表 第533号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.9)	(3.7)		裸 (W, C, R, F)	良	にぶい黄緑	20	赤彩
2	坏	(11.7)	3.8		細 (W, B, R)	良	橙	破片	
3	坏	(11.8)	3.9		細 (W, B, R)	良	にぶい橙	50	
4	坏	(16.8)	(3.4)		粗 (W, R)	良	橙	破片	
5	甕	(21.6)	(7.1)		粗 (W, B)	良	橙	破片	

第534・535号住居跡 (第11・266図)

A P-25グリッドを中心に位置する。西半部に二重の壁溝が巡り、カマドが2基検出されたことから、拡張の行なわれた住居跡であると判断した。構築は第535号住居跡→第534号住居跡の順である。他遺構との重複関係は、第536号住居跡を切り、第524号住居跡、第470号土壇、第117号溝跡に切られる。また、住居跡内には南西壁と平行して地割れが走っている。

(第534号住居跡)

全体は軸長6.40 m × 6.50 m の方形を呈し、面積は41.60 m²を測る。主軸方向は180度移動し、N-43°-Wとなる。

床までの深さは25~40cm、覆土は基本的に自然堆積である。

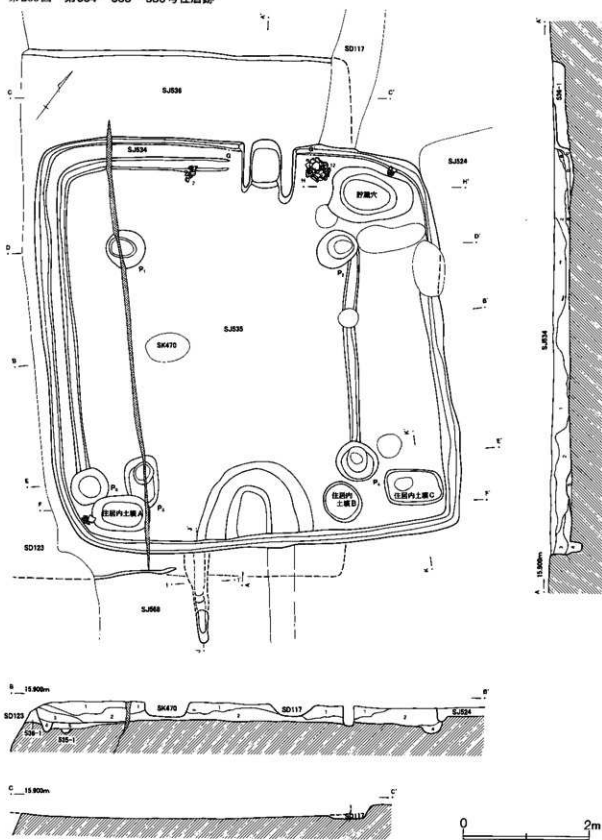
壁の立ち上がりは急で、床面は中央部が高まる。第535号住居跡の床をわずかに掘り下げ、その一部に貼り床を施している。壁溝はほぼ全周しており、幅約10~20cm、深さは6~18cmを測る。

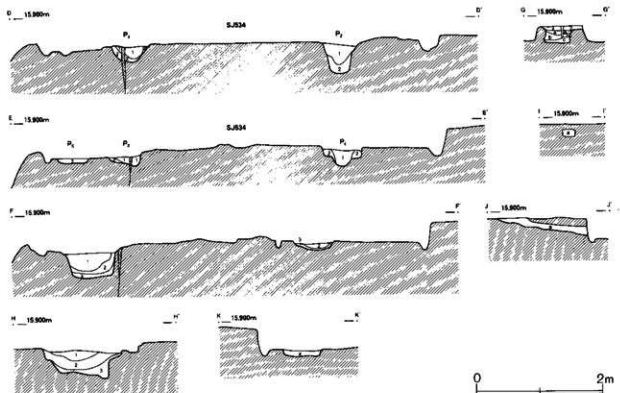
カマドは北西壁の中央部、やや北寄りに新設される。燃焼部は径78cm × 52cm の長方形で、火床面は床より3cm程深くなる。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径60~67cm、深さ16~48cmである。主柱は抜き取られており、覆土はともに混れていた。

貯蔵穴は北隅部に穿たれる。上面は径88cm × 134cm の不整な楕円形で、深さは44cmを測る。また、東隅部には土壇Cが検出された。径57cm × 92cm の長方形で、深さは8cmと浅い。覆土は人為的な埋め戻しである。

第266图 第534・535・536号住居跡





第534号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・粒多い。SD117層割時人為的埋め戻し。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒多く含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 2層に近接。炭化物粒多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒含む。自然埋保護。
5. 10YR5/8 黄褐色土 盛り土。

第534号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 人為的埋保護。黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック不連続に含む。
2. 10YK3/3 暗褐色土 1層と近接。黒褐色土ブロック含まない。
3. 10YK3/3 暗褐色土 壁付近に黄褐色土ブロック多く、上層部部の黒褐色と底部の自然埋積土。

第534号住居跡 カマド土層説明

- a. 25Y5/4 黄褐色土 天井部崩落土層、粘質土。
- b. 5YR4/6 赤褐色土 天井部内側の壁上化したもの。
- c. 10YR2/1 黒色土 壁上粒多く含む。灰層。

第534号住居跡 柱穴土層説明 (P-5含む)

1. 10YR2/3 黒褐色土 柱抜き取り跡の埋戻し。
2. 10YK3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む。掘り方への充填土。
3. 10YK3/3 暗褐色土 2層と近接。掘り込みが深い。

第534号住居跡 住居内1層土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 人為的埋め戻し。黄褐色土ブロック不連続に含む。
2. 10YK3/2 黒褐色土 炭化物・焼土を人為的に投げ入れた層。
3. 10YK3/2 黒褐色土 壁面に流れ込んだ自然埋積層。
4. 10YK3/2 黒褐色土 埋めの戻し。黄褐色土粒多く、炭化物粒少量含む。

第535号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒多い。SJS34拡張時、人為的埋め戻し。

第535号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。

第536号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。人為的埋め戻し。

この他、カマド対面の壁下には、U字形の突堤が備わる。突堤は幅47~76cm、高さ約7cmで、地山土を床に貼っている。内部に柱穴は見られないうが、入り口にかかわる施設であろう。

遺物はカマドの右脇や床面より、土師器の坏・壺・甕などが出土している。

(第535号住居跡)

北隅と南東辺が検出されなかつたが、北東辺はP₂とP₁を結ぶ壁溝である。全体は6.00m×4.75mの長方形で、面積は28.60㎡を測る。主軸方向はおおよそS

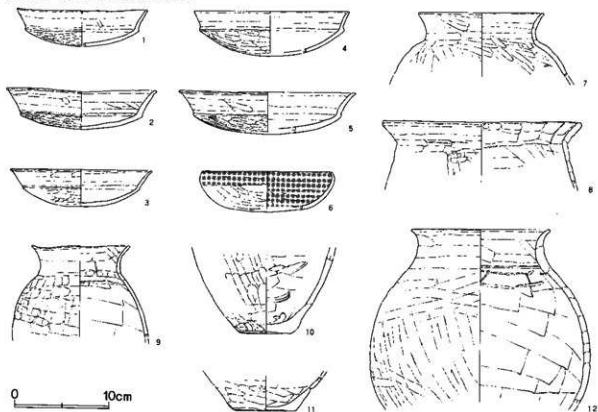
-43°-Eを指す。

床面は拡張に際して掘り下げられたようで、壁溝は途切れている。

カマドは南東壁の中央、やや南寄りに設けられる。煙道はトンネル状に掘り抜かれたもので、天井部がきれいに残っていた。横断面は長方形で、長さ102cm、幅29cmである。燃焼部は拡張に際し、完全に取り壊されている。

貯蔵穴は明確ではないものの、東と南の隅部に検出された土塊A・Bにその可能性を窺える。ともに覆土

第267図 第534号住居跡出土遺物



第118表 第534号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼 成	色 調	残 存 率	備 考
1	坏	(14.0)	(4.0)		微 (W)	青	橙	破片	
2	坏	(16.1)	(3.9)		細 (W, R)	青	にぶい黄橙	55	
3	坏	(15.0)	(3.9)		微 (W)	青	橙	破片	
4	坏	(16.6)	(4.4)		微 (W, B)	青	にぶい黄橙	25	
5	坏	(19.0)	(4.4)		微 (W, B)	良	浅黄橙	破片	
6	坏	(14.0)	(4.0)		細 (W, B)	青	にぶい橙	破片	赤彩
7	甕	(13.5)	(6.7)		細 (W, B)	良	褐	破片	
8	甕	(21.5)	(6.5)		粗 (W, R)	良	にぶい橙	破片	
9	甕	10.6	(9.8)		細 (R)	青	橙	40	
10	甕		(8.5)	5.6	粗 (W, C, R)	良	明黄褐	破片	
11	甕		(3.2)	6.5	微 (W, 片)	良	橙	破片	
12	壺	(14.9)	(18.5)		微 (W, 片)	良	灰 褐	40	

は人為的な埋め戻しであり、拡張に伴う廃棄と考えられる。土壇Aは径55cm×94cmの楕円形で、深さ41cm、土壇Bは径63cmの円形で、深さ13cmをそれぞれ測る。

柱穴と遺物の検出はなかつた。

第536号住居跡 (第11・266図)

A P-25グリッドを中心に位置する。大半を第534・535号住居跡に切られており、北西壁・南東壁の一部を検出できたにとどまる。さらに、北隅部は第117号溝跡に、西側は第123号溝跡に切られる。軸長の

測れるのは南北の一方のみで、それは約8.35mである。長軸方向はおよそN-32°-Wを指す。

床までの深さは20cm前後、覆土は第535号住居跡構築に伴う、人為的な埋め戻しである。壁は不明瞭であり、壁溝は見られない。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかつた。

遺物は覆土中より、古墳時代後期の坏や甕などが微量出土している。但し、いずれも小さな破片であるため、図示するには至らなかつた。

第537・538号住居跡 (第11・12・269図)

AQ-28グリッドを中心に位置する。第539号住居跡を切って構築され、その後には拡張(第538号住居跡→第537号住居跡)が行われた住居跡である。改築は北側2辺の拡張と床の嵩上げ、およびカマドと支柱の付け替えである。全体はともに方形で、カマドが同一部分に付くため、主軸方向はおおよそN-46°-Eで一致する。

(第537号住居跡)

拡張後の規模は軸長9.05m×9.02m、面積は81.63㎡となる。

床までの深さは20~25cmで、覆土は大部分が人為的な埋め戻しである。床面はほぼ平坦で、拡張の際、貼り床で嵩上げしている。壁溝はほぼ全周しており、幅約15cm、深さは6~12cmを測る。南半の2辺は拡張前のものと共有すると判断される。南東と北西の壁には、間仕切り状の浅い溝が取り付いている。

カマドは北東壁の東隅部寄りに付け替えられる。燃焼部は径100cm×52cmの長方形で、火床面はほぼ平坦である。このため、全体的には箱型となっている。その中央部やや奥寄りには、地山を用いた支脚が造り付けられる。

柱穴は支柱穴4本と、その間に配置される支柱穴4本が検出された。拡張に伴って建て替えられたもので、径40~65cm、深さ43~66cmである。いずれも覆土は乱れ、柱痕は観察されなかった。

貯蔵穴は拡張前と同様、東隅部に備わる。上面は径88cm×100cmの不整な円形で、深さは38cmを測る。さらに北隅部でも、浅い土塊状の掘り込みが検出された。上面は径82cmの円形で、深さは20cmを測る。

その他、南東壁の中央部には、入り口状の施設が見られた。U字形の突堤は幅約50cm、高さ7cmで、地山の黄褐色土を床に貼りつけたものである。中央部には浅い小穴が穿たれるが、柱痕は観察できなかった。

遺物は床面に破片が散乱したような状態で、土師器の坏・高坏・鉢・甕、須恵器の坏・皿、縄文時代のものと思われる凹石(第417図8)などが出土している。(第538号住居跡)

拡張前の規模は軸長7.90m×7.84m、面積61.94㎡である。

覆土は第538号住居跡構築時の埋め戻し(ほとんどは貼り床)で、本来の床面は3cm程低い。壁溝は全周していたものと思われるが、北半は拡張に際して埋められている。

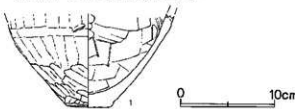
カマドは北東壁の中央付近に、燃焼部の遺存が認められた。径82cm×56cmで、床からの深さは約10cmである。拡張での削平で、袖はまったく残っていない。

柱穴は支柱穴が4本検出された。径35~66cm、深さ14~50cmである。上面は貼り床で覆われており、覆土は乱れていた。おそらく、拡張の際に柱が抜き取られ、その痕が埋め戻されたと考えられる。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径73cm×82cmの不整な円形で、深さは44cmを測る。覆土は拡張時の埋め戻しで、開口部は貼り床で覆われている。

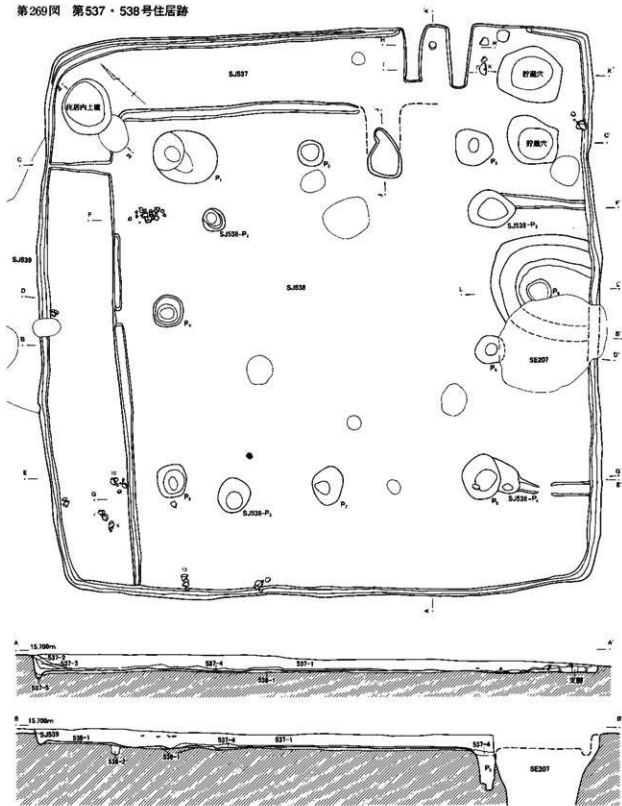
遺物は壁溝より、土師器の甕片が1点見出されたのみである。

第268図 第538号住居跡出土遺物



第119表 第538号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
I	類	(99)	4.6	覆 (W, C, 片)		良	明赤褐	破片	



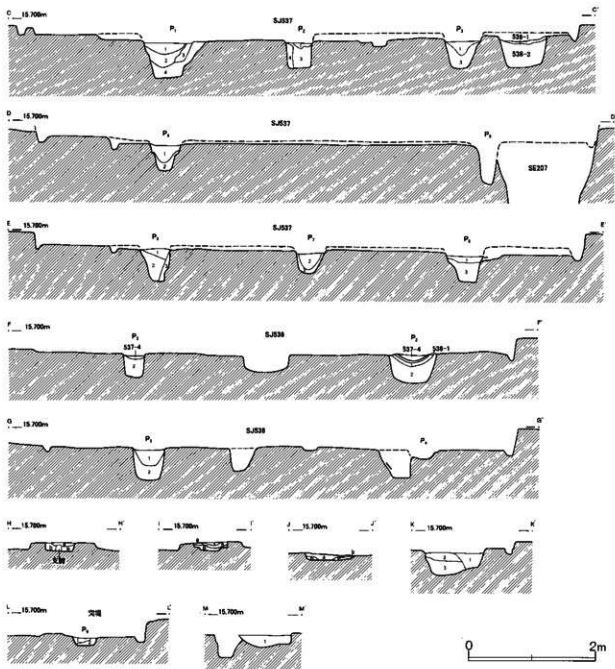
第537号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 人為的埋め戻し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭・炭化物多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 炭土・炭化物・黄褐色土程多く含む。
4. 10YR2/1 黒色土 炭化物層。北西角上ほぼ全面に散在。
5. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土程多く含む。

第538号住居跡 土層説明 (貯蔵穴含む)

1. 10YR4/6 褐色土 S.537の埋り床。
2. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土程多い。人為的埋め戻し。
3. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。S.537構築時に埋め戻し。





第537号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR5/4 濃い黄褐色土 天井跡遺存上。一部焼土化著しい。
b. 10YR2/1 黒色土 炭化物・少量の焼土を含む。灰層。

第537号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YK2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YK2/2 黒褐色土 黄褐色土粒多く・焼土粒少量含む。
3. 10YK2/2 黒褐色土 焼土粒少量、黄褐色土ブロック多く含む。

第537号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒少量。
2. 10YR3/2 黒褐色土 柱抜き取り後、住居4層が流入。
3. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 3層と同様の黄褐色土ブロック多く含む。

第537号住居跡 住居内土層説明

1. 10YK2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒少量含む。

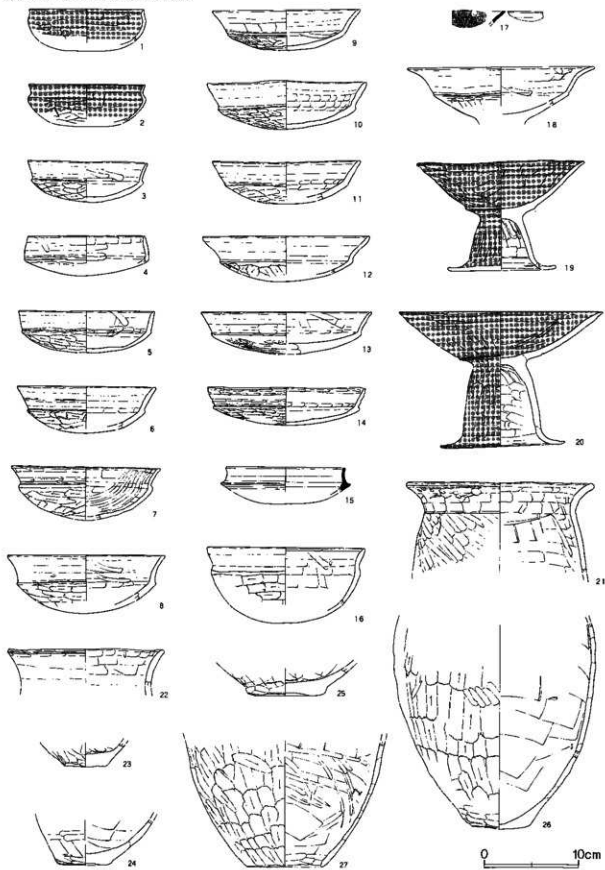
第538号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多く含む。
b. 10YR4/3 濃い黄褐色土 カマド裏り方への充填土。

第538号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土粒・ブロック多く含む。

第270图 第537号住居跡出土遺物



第120表 第537号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.3)	(3.5)		細 (W, R)	良	橙	破片	比企型 赤彩
2	坏	(12.6)	(4.1)		細 (R, C)	良	明赤	破片	比企型 赤彩
3	坏	(12.8)	4.3		微 (W)	良	赤褐	70	
4	坏	(12.6)	(2.9)		微 (W)	良	赤褐	破片	
5	坏	(14.6)	4.4		微 (W)	良	赤	40	
6	坏	(15.0)	(4.5)		粗 (R)	良	橙	破片	
7	坏	(16.0)	(5.6)		粗 (W, B, R)	良	橙	40	
8	坏	(17.0)	(4.9)		微 (W, B)	良	にぶい	破片	
9	坏	(16.0)	4.3		粗 (W, R)	良	赤	35	
10	坏	(17.0)	5.1		微 (W, B)	良	明赤	40	
11	坏	(16.0)	(4.2)		微 (W, B)	良	明赤	30	
12	坏	(18.0)	(4.1)		細 (W, R)	良	明赤	破片	
13	坏	(18.4)	4.5		粗 (R)	良	赤	25	
14	坏	(17.0)	4.1		微 (W)	良	赤	55	
15	須恵器 坏	(12.8)	(2.6)		(針)	良	灰	破片	南比企
16	須恵器 鉢	(16.8)	(6.1)		粗 (W, 片)	良	橙	破片	
17	須恵器 盃		(1.3)		細 (W, 片)	良	灰	破片	未野?
18	高坏	(20.2)	(4.1)		微 (W, B)	良	明赤	破片	
19	高坏	18.0	(11.6)		細 (W, C)	良	赤	70	赤彩
20	高坏	(21.9)	14.3	(13.4)	粗 (W, C, R)	良	赤	50	赤彩
21	甕	(20.2)	(9.6)		粗 (W, C)	良	灰	破片	
22	甕	(16.9)	(4.0)		粗 (W, R)	良	にぶい	破片	
23	甕		(2.6)	4.5	粗 (W, C)	良	橙	破片	
24	甕		(4.8)	5.8	粗 (W, 片)	良	橙	破片	
25	壺	(3.0)	8.4		礫 (W)	良	明赤	破片	
26	壺	(21.8)	6.2		礫 (W, 片)	良	赤	60	
27	甕	(13.3)	(7.9)		粗 (W, R)	良	にぶい	破片	

第539号住居跡 (第11・272図)

AQ-28グリッドを中心に位置する。大部分を第537・538号住居跡に切られており、検出し得たのは北西の隅部近辺と主柱穴のみである。このため、全体の規模や計上は明らかでないが、主柱穴の位置から想定すれば、軸長約6.05m×6.00mの方形で、面積は約36.30㎡の住居跡となる。北を指準とした時の軸方向は、ほぼN-30°-Wである。

床までの深さは約15cmで、覆土は故意の埋め戻しのようである。壁溝は幅約14cm、深さ約10cmを測る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径35~47cm、深さ14~50cmである。覆土は乱れ、柱間は観察されなかった。埋め戻しに際し、柱は抜き取られたと判断される。カマドは検出されなかったが、北西隅部で貯蔵穴らしき掘り込みが検出された。上面は径88cm×76cmの楕円形で、深さは21cmを測る。

遺物は床面より、土師器の甕などが出土している。

第271図 第539号住居跡出土遺物

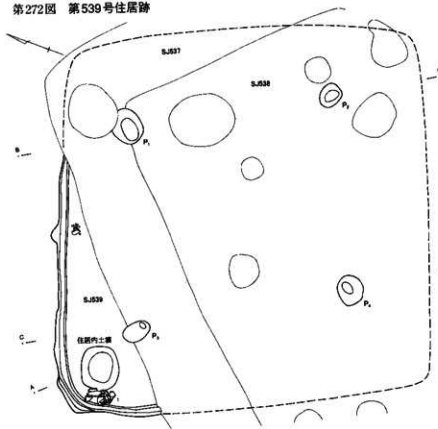


0 10cm

第121表 第539号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(15.8)	34.9	5.4	礫(W, C)	瓦	にぶい橙	50	

第272図 第539号住居跡



第539号住居跡 土層説明

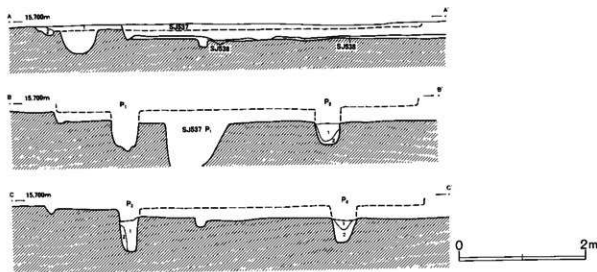
1. 10YR2/3 黒褐色土
焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土
甕の崩壊土。

第539号住居跡 住居内土壇土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土
焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土
黄褐色土粒・ブロック多く含む。
甕の崩壊土。

第539号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/1 黒褐色土
黄褐色土粒・炭土粒少量。柱状
木取り後の跡のみ。
2. 10YR2/4 暗褐色土
黄褐色土粒・ブロックや多い。
支障土。



第540号住居跡 (第10・253図)

A L-21グリッドを中心に位置する。大部分を第522・541号住居跡、第118号溝跡に切られたため、三方の壁と貯蔵穴が検出されたにとどまる。第546・547・

548号住居跡、第120号掘立柱建物跡、第444号土壇との重複関係は確認できなかった。南北の軸長は約5.70mで、北を指準とした時の軸方向はおよそN-30°-Wとなる。

床までの深さは10cm前後、覆土は自然堆積である。北隅部に見られる壁溝は、幅約15~25cm、深さは約6cmを測る。

貯蔵穴は南東隅部に備わる。上面は径約60cmの円形を呈し、深さは25cmを測る。

カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より須恵器の甕、土師器の甕や坏などが出土している。但し、いずれも小さな破片であり、図示するには至らなかった。

第541号住居跡 (第10・253図)

AL-21グリッドを中心に位置する。第540号住居跡を掘り抜いて構築され、埋没後、第522・542号住居跡、第118号溝跡に切り込まれる。第546・547・548号住居跡、第120号掘立柱建物跡との重複関係は確認で

きなかった。全体は軸長4.05m×4.10mの方形を呈し、面積16.61㎡を測る。長軸方向はおよそN-36°-Wを指す。

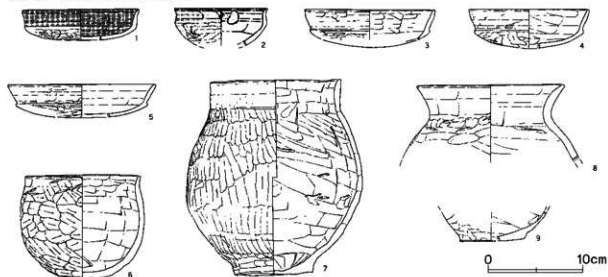
床までの深さは30cm程で、覆土は自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は概ね平坦である。壁溝は検出範囲で全周し、幅約10~20cm、深さは3~5cmを測る。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径65cm×72cmの円形で、床からの深さは12cmと浅い。

カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は土師器の甕2個体が、貯蔵穴の肩部より出土している。図示した他の坏などは、いずれも覆土中からの出土である。

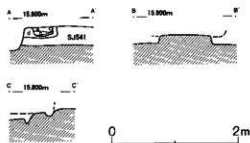
第273図 第541号住居跡出土遺物



第122表 第541号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	Li 径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.4)	(3.2)		粗 (W, R)	良	にぶい 橙	20	赤彩
2	坏	(9.9)	(4.0)		粗 (W, R)	良	にぶい 橙	21	赤彩
3	坏	(14.0)	(3.3)		微 (W)	普	橙	破片	
4	坏	(12.7)	(4.2)		微 (W, B, R)	良	にぶい 黄橙	30	
5	坏	(15.7)	(3.5)		細 (B, R)	普	褐	20	
6	甕	12.3	11.0	5.7	細 (W, B)	良	橙	95	
7	甕	14.0	20.7	8.3	粗 (W)	良	橙	90	
8	甕	(15.5)	(8.2)		粗 (W, B, R)	良	にぶい 赤褐	破片	
9	甕	(3.2)	6.9		粗 (W, B, R)	普	橙	破片	

第274図 第542号住居跡



第542号住居跡 カマド1層説明

- NOYR3/3 層褐色土 微細砂質地山砂多く、焼土塊を含む。
- NOYR3/2 層褐色土 焼土ブロック主体、大角礫多し。
- NOYR3/1 層褐色土 焼土質、炭化物少量含む。灰層。
- NOYR2/2 層褐色土 層褐色粘質土主体。カマド構築時の粘土。

第542号住居跡（第10・274図）

AL-21グリッドを中心に位置する。第541号住居跡の埋没後、その覆土を掘り込んで構築される。北壁を第118号溝跡に切られるが、第522号住居跡、第120号掘立柱建物跡との関係は確認できなかった。ほぼ覆土中に構築されていたため、平面での確認は困難で、カマドを検出するに至ってその存在が判明した。このため、全体の規模や形状については、明らかと心得ない。カマドから見た主軸方向は、およそN-28°-Wである。

第540号住居跡の床に検出した壁溝は、幅約10~15cm、深さは約3cmを測る。

カマドは北壁に位置する。燃焼部は112cm×37cmで、底面は平坦である。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はカマドより、妻の胴部破片が出土したが、図示するには至らなかった。

第543号住居跡（第12・275図）

AR-29グリッドを中心に位置する。南東壁の一部を第544・545号住居跡に切り取られる。全体は軸長5.60m×5.53mの方形を呈し、面積は30.97㎡を測る。

主軸方向はほぼN-50°-Eを指す。

床までの深さは35cm程度で、覆土は地山のブロックを主体とする、人為的な埋め戻しである。壁は垂直に立ち上がり、床面は概ね平坦である。全周する壁溝は幅20~25cm、深さ約10cmを測る。また、北西と南東の壁からは、各主柱穴に向かって間仕切り状の溝が延びている。

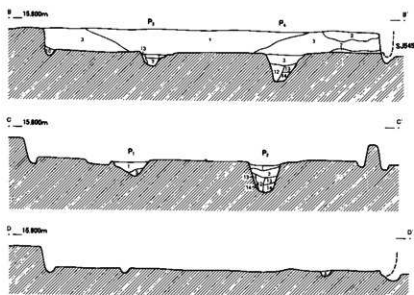
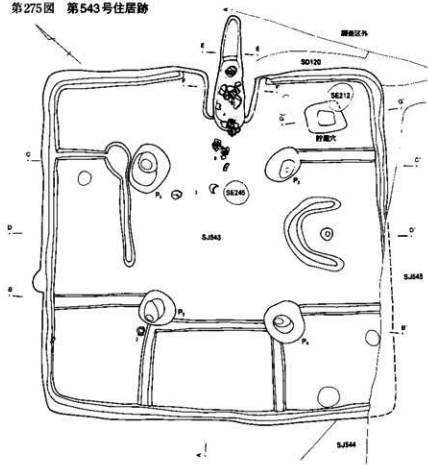
カマドは北東壁の中央、わずかに東に寄って付設される。煙道は長さ67cm、幅33cmで、底面は火床面より緩やかに立ち上がる。燃焼部は約116cm×46cmと細長く、火床面は床から5cm程度窪る。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径53~67cm、深さ19~46cmである。柱は折り取られたようで、柱痕は下半部のみに見られた。

貯蔵穴は東隅部に備わる。第212号井戸跡と重複するが関係は不明である。上面は径46cm×60cmの方形で、深さは42cmを測る。住居跡とともに埋め戻されたらしく、覆土は地山ブロックを主体としている。

遺物はカマドを中心に、土師器の坏・甕、須恵器の坏、磁石(第420図8)、土製丸玉(第423図3)などが出土している。

第275図 第543号住居跡

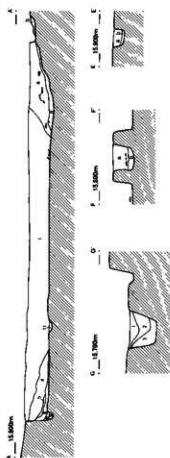


第543号住居跡 ノマド土層説明

- a. 10YR3/4 暗褐色土 地山アロック多く、炭土粒・炭化物粒少量含む、天井部の崩落。
 b. 10YR4/1 黒灰色土 多量の灰・少量の炭化物粒・焼土粒を含む。灰層。

第543号住居跡 貯蔵穴土層説明

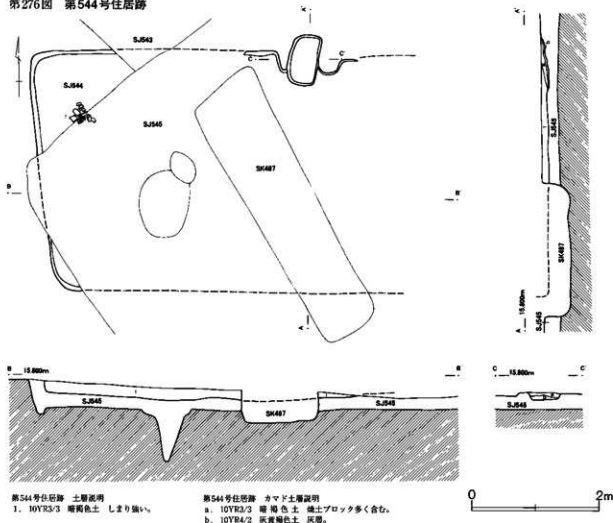
1. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック若干含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック・焼土粒若干含む。
 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山アロック多く、焼土若干含む。



第543号住居跡 土層説明 (柱穴含む)

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山アロック多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック若干含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 1. 地山アロック多く含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 7. 地山アロック非常に多い。
5. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック多く含む。
6. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒多い。灰層の層上。
7. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック・焼土粒・炭化物粒若干含む。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山アロック・焼土粒・炭化物粒多く含む。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山アロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
10. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック多く含む。
11. 10YR3/3 にぶい黄褐色土 地山アロック非常に多く、焼土粒少量含む。
12. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒若干含む。柱穴。
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山アロック多く、焼土粒少量含む。灰層上。
14. 10YR3/3 暗褐色土 地山アロック・焼土粒・アロック少量含む。灰層上。

第276図 第544号住居跡



第544号住居跡 (第12・276図)

AS-29グリッドを中心に位置する。第543・545号住居跡を埋め戻して構築される。住居跡内を第487号土壌に切られる。大部分が覆土中になるため、平面での観察は困難であった。このため、検出できたのはカマドと西側の両隅部の一部のみである。土層断面より得られた南北の軸長は約3.85mで、平面は長方形を呈すものと思われる。主軸方向はおよそN-Sを指す。

床までの深さは10~18cm、覆土は人為的な埋め戻しと思われる。断面で見ると、床面は中央部がやや窪んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は見られない。

カマドは北壁に設けられる。燃烧部は82cm×50cmの

長方形で、火床面は床からわずかに低くなる。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は北西隅部の床より、土師器の甕などが破片となって出土している。

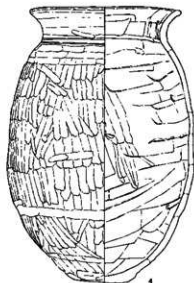
第545号住居跡 (第12・278図)

AS-29グリッドを中心に位置する。第543号住居跡を埋め戻して構築され、その後、第544号住居跡の構築に際して埋め戻される。住居跡内を第487号土壌に切られる。全体は軸長7.75m×7.85mの方角を呈し、面積は60.84㎡を測る。主軸方向はおよそN-57°-Eを指す。

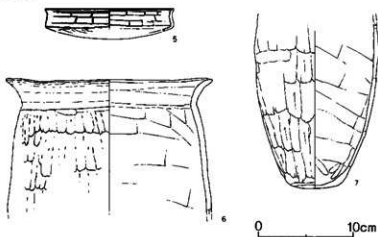
床までの深さは15~35cmで、覆土は人為的な埋め戻しである。壁の立ち上がりは急で、床面は西から東へ

第277图 第543・544号住居跡出土遺物

SJ543



SJ544



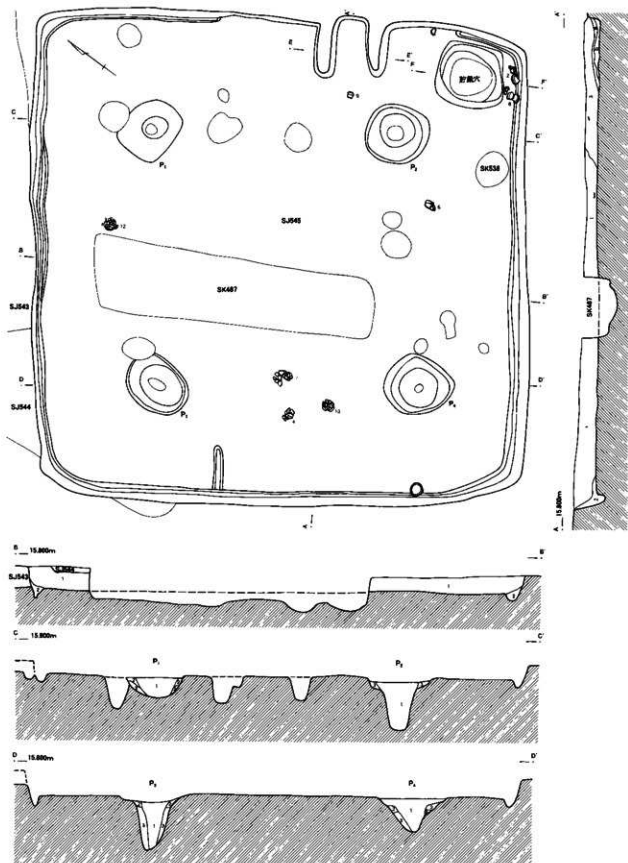
第123表 第543・544号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	16.0	4.5		微(W)	普	橙	95	二次被熱
2	須恵器 坏	(12.4)	4.6		細(W, C)	良	灰	50	
3	壺 (埜)		(8.3)		微(W)	普	にぶい橙	50	
4	壺	16.1	29.2	5.7	雜(W, 片)	良	にぶい橙	80	
5	坏	(13.6)	2.5		細(C)	良	赤 褐	破片	比金型 赤彩
6	壺	(22.0)	(14.5)		粗(W, C)	普	橙	破片	
7	壺		(17.5)	5.2	粗(W, C, R)	普	にぶい黄橙	30	

第124表 第545号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	(4.3)		細(W, C)	良	赤 褐	20	比金型 赤彩
2	坏	15.1	(3.8)		微(W)	良	にぶい橙	70	内外黒色処理
3	坏	15.4	(4.0)		細(W, R)	普	にぶい橙	85	内外黒色処理
4	坏	14.3	(4.4)		微(W)	良	にぶい橙	80	
5	坏	(18.4)	(5.1)		微(W, B)	普	浅 黄 橙	30	
6	坏	(18.4)	(5.2)		微(W)	良	橙	45	
7	坏	16.9	5.6		細(W, R)	良	明 赤 褐	100	
8	坏	17.4	5.4		粗(R)	普	橙	70	
9	坏	16.6	4.8		微(W, B)	良	浅 赤 橙	100	内外煤ける
10	坏	15.0	4.4		細(W)	良	にぶい橙	100	
11	坏	15.0	3.8		微(W)	良	にぶい橙	95	
12	坏	13.2	4.7		微(W, B)	普	橙	90	
13	壺 (埜)		(8.9)		微(W, B)	良	橙	35	
14	壺	(12.7)	(9.0)		細(W, R)	良	橙	破片	
15	高 坏		(6.9)	(9.2)	粗(W, 片)	良	橙	脚部 85	

第278图 第545号住居跡





第545号住居跡 土器説明

1. 10YR4/3 に多い黄褐色土 黒褐色層 (10YR3/2) を多く含む。SJ544構築のための埋め戻し。
2. 10YR3/2 黒 褐色 土 焼土ブロックを含む。SJ545の壁面の構築。
3. 10YR2/3 黒 褐色 土 焼土ブロック多く含む。

第545号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/3 に多い黄褐色土 焼土ブロック含む。天井構築土。
- b. 10YR5/1 黒 灰色 土 灰層。

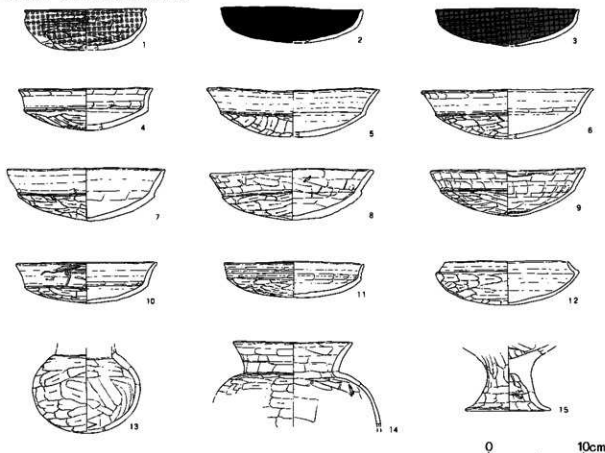
第545号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR4/3 に多い黄褐色土 黄褐色土層含む。主柱抜き取り後埋め戻し。
2. 10YR3/3 暗 褐色 土 焼土ブロック少量含む。光燧土。
3. 10YR4/3 に多い黄褐色土 暗褐色土層含む。光燧土。

第545号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 柱穴の埋め戻し時、1層が多少くぼみを見せた夢により厚様。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量。黒褐色土層含む。SJ544構築の際の埋め戻し。

第279図 第545号住居跡出土遺物



わずかに傾斜する。壁溝はほぼ全周し、幅15~30cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁の東寄りに付設される。燃燒部は約111cm×62cmの長方形で、火床面は床とほぼ同一高である。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径88~95cm、深さ

35~80cmである。柱は抜き取られたようで、覆土は埋め戻しの土であった。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径102cm×105cmの方形で、深さは37cmを測る。これも覆土は埋め戻しである。

遺物は床に押し潰された状態で、土師器の坏・甕・

鉢などが少量出土している。

第546・547・548号住居跡（第10・253図）

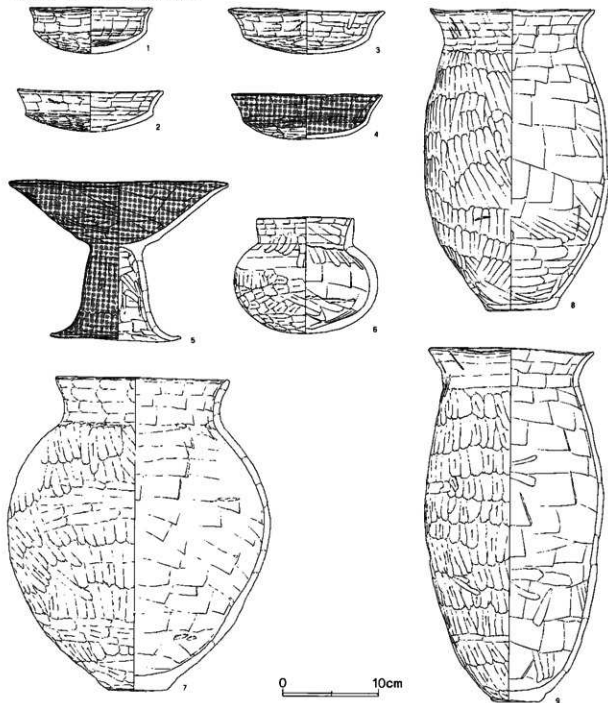
AL-21グリッドを中心に位置する。3軒ともに、調査区の壁面に確認された住居跡である。大半は調査区外となるため、それぞれの規模や形状、施設等については明らかとし得ない。3軒の重複関係は、第546

号住居跡→第547号住居跡→第548号住居跡の順である。また、第546号住居跡は第120号掘立柱建物跡に、第548号住居跡は第488号土壇に切られる。

覆土はともに自然堆積を示し、後続住居による埋め戻しは窺えなかった。

第546・547号住居跡の壁溝は幅約20cm、深さ約3

第280図 第549号住居跡出土遺物



第125表 第549号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	13.1	5.0		灰(W)	良	淡 橙	100	
2	坏	(15.6)	4.3		灰(W)	良	に ぶい 橙	50	
3	坏	16.7	4.7		灰(W)	良	橙	100	
4	坏	16.1	4.7		粗(C, R)	普	赤 橙	70	赤彩
5	高 坏	23.4	16.9	14.0	粗(W, C)	良	橙	90	赤彩
6	壺	10.4	12.3		灰(W, B)	良	橙	100	
7	壺	(18.4)	33.2	6.3	粗(W, C)	良	に ぶい 橙	80	
8	壺	17.6	31.8	7.2	粗(W, C, 片)	普	に ぶい 橙	90	
9	壺	17.8	37.4	5.3	粗(W, C)	普	に ぶい 橙	100	

cm、第548号住居跡のそれは幅約20cm、深さ約10cmを測る。

カマドなどは検出されなかったが、第546号住居跡では貯蔵穴状の掘り込みが見られた。径48cm、深さ25cmである。

遺物は土師器の破片がわずかずつ出土したが、小片のため図示できなかった。

第549号住居跡 (第12・281図)

A T-29グリッドを中心に位置する。東隅部で第492・493号土壌を切り、南西辺を第123号溝跡、中央を第122号溝跡、第244号井戸跡に切られる。軸長の測れるのは一方向のみであるが、主柱穴の位置から想定すると、全体は約6.70m×6.25mの方形で、面積は41.88㎡となる。主軸方向はおおよそN-47°-Eである。

床までの深さは50cm前後で、覆土は人為的な埋め戻しである。床面直上の12層は焼土を主体としており、ドーナツ状に堆積している。但し、床面はまったく焼けておらず、炭化材がほとんど見られない。このことから、この焼土層は火災に伴うものではなく、住居の廃絶に際して投棄したものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝は検出範囲内で全周し、幅15~20cm、深さは4~8cmを測る。

カマドは北東壁の中央、やや東寄りに設けられる。大半は第122号溝跡に掘り抜かれており、右軸と燃焼部の一部が残存するのみである。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径52~70cm、深さ43~60cmである。いずれも柱は抜き取られており、覆土は乱れていた。

貯蔵穴は西隅部に備わる。上面は径70cmの円形状を

呈し、深さは50cmを測る。やはり、故意に埋め戻されている。

遺物は床面に押し潰された状態で、土師器の坏・高坏・壺・小型壺、ミニチュアの坏(第426図2)などが少量出土している。

第550号住居跡 (第13・14・283図)

A X-32グリッドを中心に位置する。西壁を第126号溝跡、カマド付近を第508号土壌にそれぞれ切られる。全体は軸長4.96m×4.80mの方形を呈し、面積は23.90㎡を測る。主軸方向はおおよそN-41°-Wを指す。

床までの深さは30cm前後で、覆土は中層以下が自然堆積、上層のみが故意の埋め戻しである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は軟質でほぼ平坦である。壁溝は幅15~30cm、深さ約5cmを測る。

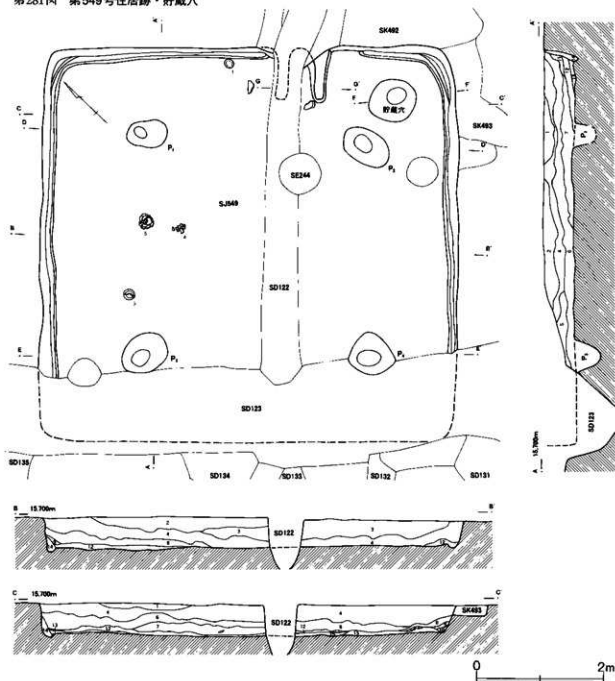
カマドは北西壁の中央に付設される。燃焼部は約47cm×41cmの長方形で、火床面は床から3cm程深い。煙道へは段をなして移行し、底面は緩やかに立ち上っていく。煙道は長さ118cm、幅24cmである。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径39~58cm、深さ16~20cmである。ほとんど隅部に備わり、柱根は観察されなかった。位置的に特異であるが、「置き柱」のような構造であったのだろうか。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物はいずれも覆土中からの出土である。土師器の坏や壺、須恵器の坏、土製丸玉(第423図5)などが見られるが、大半は微細な破片であるため、壺1点を図示し得たにすぎない。

第281図 第549号住居跡・貯蔵穴



第549号住居跡 十層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山殻・焼土粒少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山殻・焼土粒若干含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山殻・ブロック多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック・焼土粒少量含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック少量に多く含む。
6. 10YK3/3 暗褐色土 地山ブロック少量に多く含む。
7. 10YK3/2 黒褐色土 地山ブロック少量に多く、焼土粒・炭化物粒若干含む。
8. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック・焼土粒多く含む。
9. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック・炭化物少量含む。
10. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物多く含む。
11. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック・焼土粒少量含む。
12. 10YK3/3 暗褐色土 地山ブロック・炭化物粒多く含む。
13. 10YR4/4 黒褐色土 地山が多く混じり込んで形成。炭化物粒・焼土粒若干含む。
14. 10YR2/3 黒褐色土 地山殻少量含む。
15. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山殻・焼土粒少量、灰まだらに多く含む。

第549号住居跡 カマド土層説明

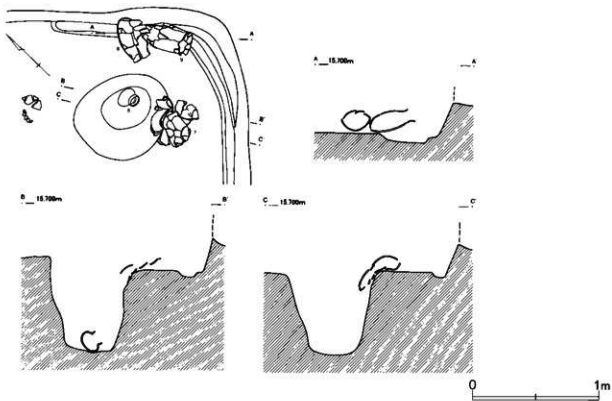
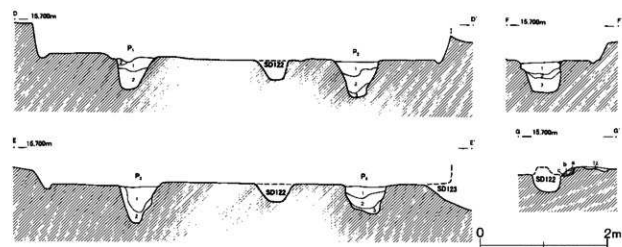
- a. 10YR3/2 黒褐色土 地山殻・焼土粒若干含む。
- b. 10YR4/1 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒多く、灰まだらに含む。灰層。
- c. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多く含む。覆り方。

第549号住居跡 柱穴十層説明

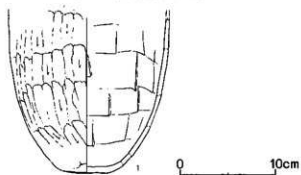
1. 10YK3/3 暗褐色土 地山ブロック少量に多く含む。
2. 10YK3/2 黒褐色土 地山ブロック多く、焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック・焼土粒・炭化物粒多く含む。

第549号住居跡 貯蔵穴土層説明

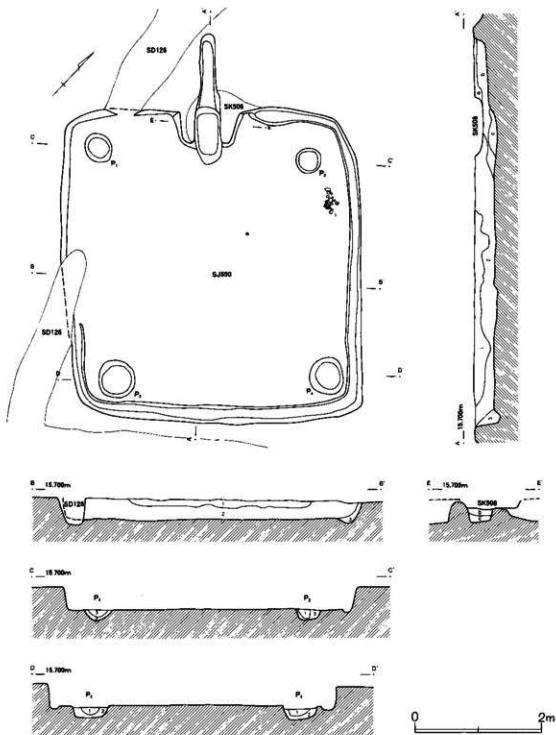
1. 10YK3/3 暗褐色土 地山ブロック多く、焼土粒若干含む。
2. 10YR4/3 灰黄褐色土 地山ブロック少量に多く含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック・焼土粒・炭化物粒多く含む。



第282回 第550号住居跡出土遺物



第283図 第550号住居跡



第550号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多い。人為的押し直し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。自然凝結層。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多い。壁の崩落土。

第550号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。半柱抜き取り後の流入土。
2. 10YR2/3 黒褐色土 柱廻り方の土層土。
3. 10YR3/2 黒褐色土 半柱抜き取り後の流入土。燧土粒多く含む。

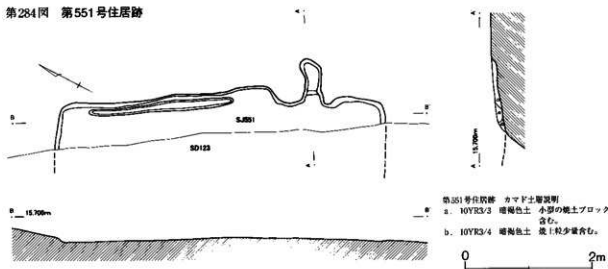
第550号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/1 黒色土 カマドへの流入土。燧土粒・炭化物粒少量。
- b. 10YR2/3 黒褐色土 流入土。燧土ブロック・粒多く。黄褐色土粒少量。
- c. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物・燧土粒多く含む。灰燼。

第126表 第550号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		16.5	6.4	粗 W	昏	橙	破片	

第284回 第551号住居跡



第551号住居跡 カマド土層説明
 a. 10YR3/3 暗褐色土 小部の焼土ブロック含む。
 b. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。

第551号住居跡 (第13・284回)

AU-30グリッドを中心に位置する。自然堤防の肩部にあたる上、大部分は第123号溝跡によって切られている。このため、検出し得たのは東辺部のみで、全体の規模や形状は明らかでない。南北の軸長は約5.20m、主軸方向はおよそN-60°-Eである。

壁溝は部分的な検出で、幅10~15cm、深さ約3cmを測る。

カマドは南東隅部近くに設けられる。煙道は長さ51cm、幅29cmで、燃焼部は不明瞭であった。袖もほとんど遺存せず、わずかにその基底部分が確認できたにすぎない。

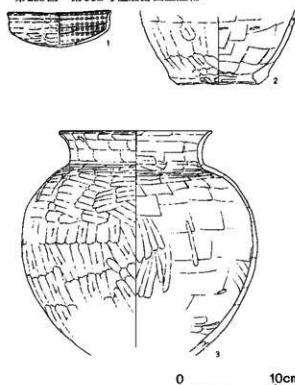
柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

覆土からは、白玉(第424回24)が1点検出されたにすぎない。

第552号住居跡 (第12・286回)

AS-28グリッドを中心に位置する。北辺部で第553・555号住居跡を掘り抜く。全体は軸長5.67m×

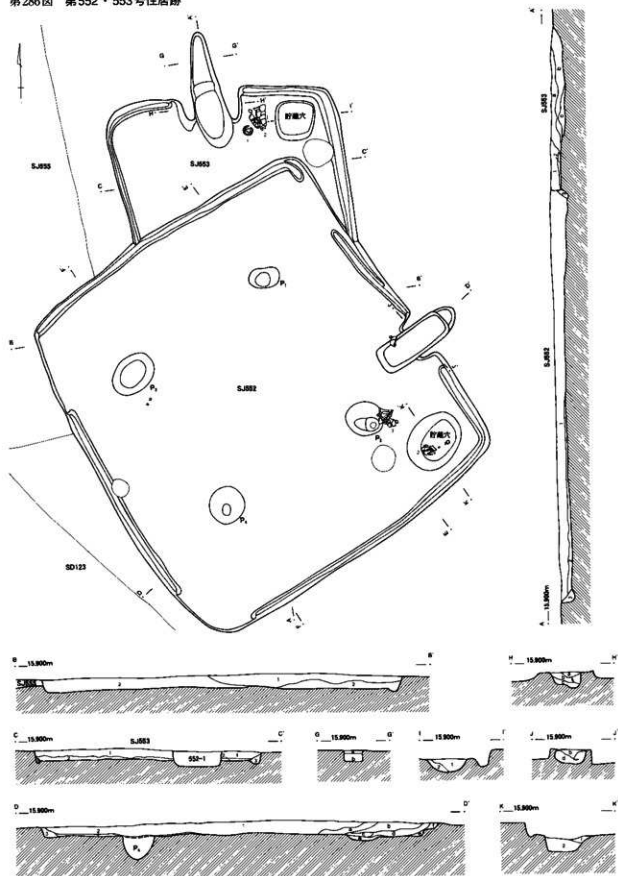
第285回 第552号住居跡出土遺物

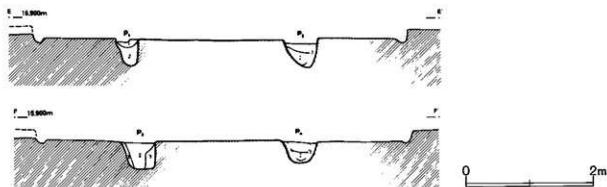


第127表 第552号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.1)	(3.5)		粗 (W, C)	良	橙	65	比企型 赤彩
2	甌		(7.2)	(8.5)	粗 (W, C)	良	昏	破片	
3	壺	16.2	(22.9)		粗 (W, C, R)	良	明赤 褐	45	

第286图 第552・553号住居跡





第552号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗 褐色 土 褐色土ブロック・焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 1層と2層間に赤褐色土の層が薄く入る。
3. 10YR3/3 暗 褐色 土

第552号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/4 暗 褐色 土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
- b. 10YR2/3 暗 褐色 土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
- c. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒少量含む。
- d. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土ブロック多く含む。
- e. 10YR4/4 暗 色 土
- f. 10YR4/4 暗 色 土 焼土粒少量含む。

第552号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土粒多量含む。柱抜き取り後の埋没土。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒多量。柱穴は焼土・炭化物含む。柱抜き取り後の埋没土。
3. 10YR4/4 暗 色 土 黄褐色土粒・ブロック多く含む。光曜土。

第552号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR4/6 暗 色 土 壁の前層土。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。

第553号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗 褐色 土
2. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR3/3 暗 褐色 土

第553号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土粒多く含む。

第553号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/4 暗 褐色 土 焼土ブロック少量含む。
- b. 10YR4/3 に近い黄褐色土 焼土ブロック多く含む。
- c. 10YR2/1 黒 色 土 焼土ブロック多く含む。砂質の灰土。

6.15mの方形を呈し、面積は34.87㎡を測る。主軸方向はほぼN-55°-Eを指す。

床までの深さは20~25cmで、覆土は人為的な埋め戻しと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は概ね平坦である。壁溝は隅部付近で数箇所が途切れる。幅は15~20cm、深さは2~6cmである。

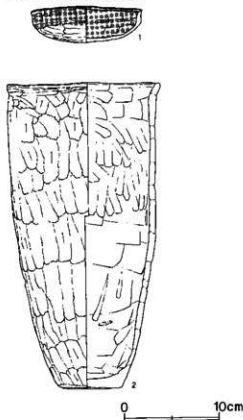
カマドは北東壁のやや東寄りに付設される。燃焼部は約124cm×49cmの長方形で、火床面は床面よりわずかに窪まる。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径40~64cm、深さ35~40cmである。柱は抜き取られたようで、覆土は乱れており、柱痕も観察できなかった。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径95cm×75cmの楕円形を呈し、床からの深さは28cmを測る。

遺物はカマドや貯蔵穴周辺から出土しているが、いずれも小さな破片で量も少ない。土師器の坏・壺・甕・甔や、白玉(第424図25)を図示し得たのみである。

第287図 第553号住居跡出土遺物



第128表 第553号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.8	3.8		細(W, C)	良	にぶい 橙	95	比金型 赤彩
2	甕	(16.3)	32.3	6.4	粗(W, C)	良	赤 褐	70	

第553号住居跡 (第12・286図)

AR-28グリッドを中心に位置する。南半部を第552号住居跡に大きく切り取られる。よって、軸長は南北約3.60mが測れるにすぎない。主軸方向はおおよそN-7°-Wを指す。

床までの深さは15cm前後で、覆土は自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺存する床面は概ね平坦である。壁溝は検出範囲内で全周し、幅10~25cm、深さ約5cmを測る。

カマドは北壁の中央、わずかに西寄りに設けられる。燃焼部は約104cm×51cmの楕円形で、火床面は床より4cm程掘り込まれる。煙道は長さ80cm、幅33cmで、底面は燃焼部から緩やかに立ち上がっていく。

貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径63cmの方形を呈し、深さは20cmを測る。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド右脇の床より、土師器の坏・甕、石製紡錘車(第421図9)などが出土している。甕は長胴だが口縁はごく短く、器壁も厚い。

第554号住居跡 (第13・288図)

AV-31グリッドを中心に位置する。北隅部を第127号溝跡が微かに切り取るものの、ほぼ単独で検出された。全体は軸長4.48m×4.10mの方形を呈し、面積は18.37㎡を測る。主軸方向はおおよそN-42°-Eを指す。

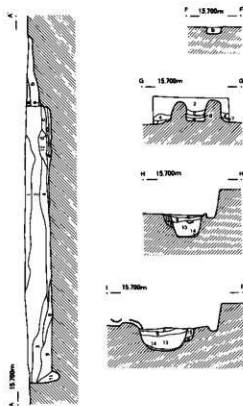
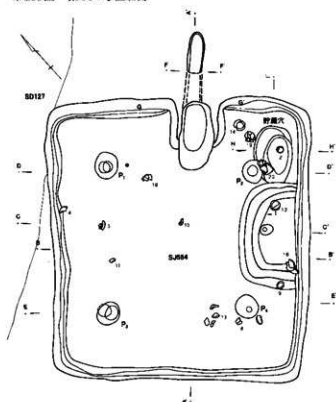
床までの深さは40cm程で、覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面は概ね平坦である。全周する壁溝は幅15~30cm、深さ3~10cmを測る。また、南東壁中央の床面には、半円形の突堤が検出された。その中央部には若干斜行するピット(径15cm、深さ15cm)があり、出入り口にかかわる施設と思われる。突堤の規模は、長さ170cm×88cm、幅30cm、床面からの高さ約5cmを測る。地山の黄褐色土を貼り付けたもので、硬く締まっている。

カマドは北東壁の中央部、やや東寄りに設けられる。燃焼部は約105cm×55cmの方形で、火床面は床よりわずかに窪んでいる。煙道は壁面中位から掘り抜かれ、長さ114cm、幅23cmのトンネル状を呈する。

第129表 第554号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.6)	5.0		粗(W, C)	良	赤 褐	50	比金型 赤彩
2	坏	13.6	4.9		微(W)	良	にぶい 橙	100	内外黒色処理
3	坏	(12.1)	5.3		細(W, C)	普	橙 褐	70	内外黒色処理
4	坏	13.8	4.6		細(W, C)	普	にぶい 橙	90	内外黒色処理
5	坏	(13.0)	(4.9)		細(W, C)	普	橙 褐	30	
6	坏	(16.4)	(3.5)		細(W, R)	良	浅 黄 橙	20	小針型
7	坏	(15.3)	(3.5)		細(C, R)	普	橙 褐	30	
8	坏	14.5	4.9		粗(R)	良	橙 褐	85	
9	坏	13.8	4.9		粗(W, C, R)	普	橙 褐	100	
10	坏	15.0	4.4		粗(R)	普	橙 褐	80	
11	坏	15.7	4.7		細(R)	普	にぶい 橙	75	
12	坏	15.9	5.1		細(W, R)	良	橙 褐	100	
13	坏	(17.0)	(5.1)		微(W, B)	普	明 赤 褐	60	
14	坏	16.8	4.4		粗(R)	普	橙 褐	95	
15	坏	(16.5)	4.9		細(R)	普	明 赤 褐	50	
16	坏	16.5	5.4		粗(R)	普	明 赤 褐	100	
17	坏	(17.0)	(4.8)		粗(R)	良	橙 褐	35	
18	坏	(16.8)	(5.0)		粗(R)	普	橙 褐	45	
19	甕 (埴)	11.3	14.3		微(W, B)	良	橙 褐	95	
20	甕	(24.0)	(21.3)		粗(W, C, R)	普	にぶい 橙	50	

第288図 第554号住居跡



第554号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山ブロック多く含む。天井部。
- b. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。
- c. 10YR3/2 暗褐色土 地山ブロック多く含む。積層部の巻落。
- d. 10YR3/2 暗褐色土 地山ブロック非常に多い。天井部の積層。
- e. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物・灰非常に多く含む。灰層。

第354号住居跡 住穴土層説明

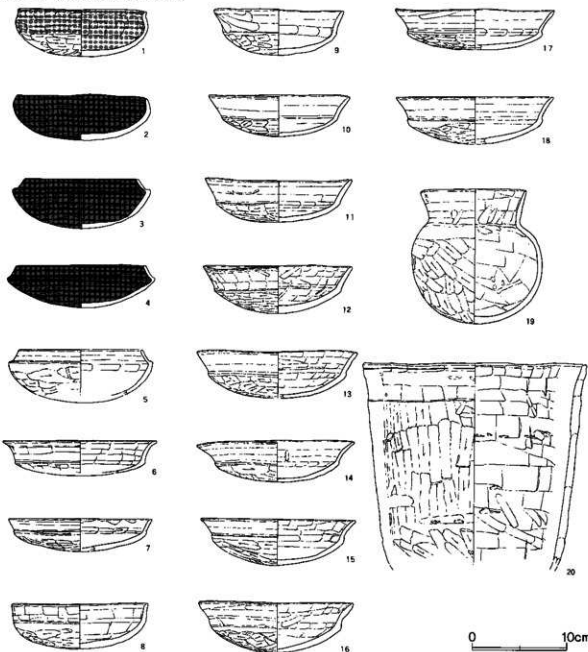
1. 10YR3/2 暗褐色土 地山粒少量含む。柱網。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック非常に多く含む。陥り床。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山ブロック含む。光礫土。
4. 10YR5/3 に近い黄褐色土 地山ブロック多く含む。光礫土。

第554号住居跡 十層説明 (貯蔵穴含む)

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒五千含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロック多く含む。
3. 10YR3/2 暗褐色土 地山粒・ブロック多く含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒少量。
5. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・焼土粒少量。
6. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多く含む。
7. 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭化物粒若干。地山多く含む。
8. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒少量。
9. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山ブロック多く含む。
10. 10YR3/2 暗褐色土 炭化物粒・地山少量含む。
11. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒若干含む。
12. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロック・焼土粒・炭化物粒少量含む。
13. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック・炭化物粒・焼土粒多い。
14. 10YR5/1 黒褐色土 非常に粘性高い。
15. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山ブロック非常に多い。焼め戻し。
16. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック非常に多い。焼め戻し。



第289図 第554号住居跡出土遺物



柱穴は主柱穴が4本検出された。径34～39cm、深さ63～83cmである。いずれも明瞭な柱痕を有し、根固めの充填土も確認された。上面は柱部分を除き、貼り床でふさがれている。

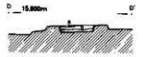
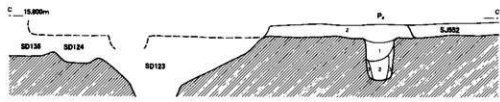
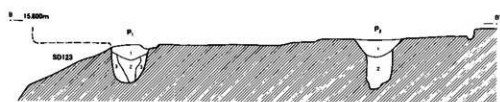
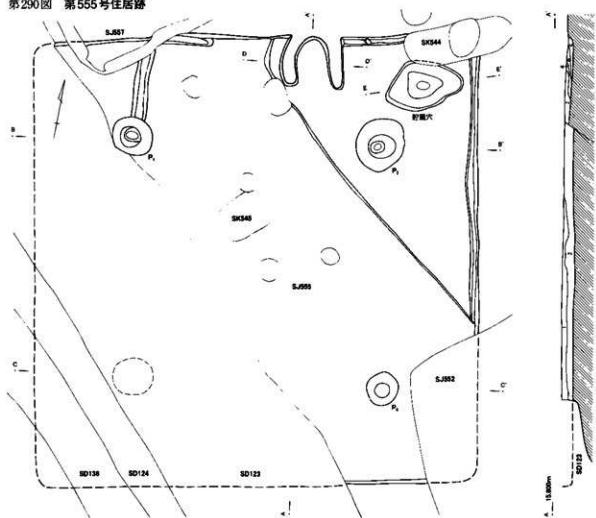
東隅部に備わる貯蔵穴は、付け替えが行なわれている。新貯蔵穴は一旦旧貯蔵穴を埋め戻し、その後掘削し直したものである。新貯蔵穴の上面は径78cm×47cmの楕円形で、床からの深さは35cmを測る。

遺物は床面に散在するものの、大半は小さな破片である。土師器の坏や甕、土製丸玉(第423図7)などが見られるが、坏以外は図示できたものが少ない。

第555号住居跡 (第12・290図)

AR-28グリッドを中心に位置する。北西隅部を第557号住居跡、南東隅部を第552号住居跡に切られる他、南西部を第123・124・136号溝跡に大きく掘り抜かれる。第544・545号土塊との重複関係は確認できな

第290図 第555号住居跡



第555号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。
2. 10YR4/6 褐色土 黄褐色土粒多量に含む。

第555号住居跡 キマド土層説明

- a. 10YR5/8 黄褐色土 粘土質・ブロック主体。黒褐色土含む。天竹器残存土。
- b. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少ない。
- c. 5YR3/6 暗赤褐色土 焼土ブロック・炭化物・灰多く含む。

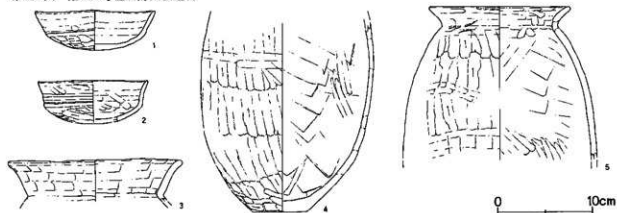
第555号住居跡 柱土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロック少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。充填土。

第555号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多い。人為的埋め戻し。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多い。埋の層内土。

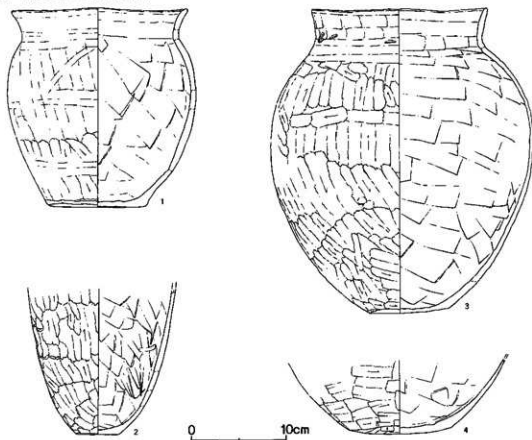
第291図 第555号住居跡出土遺物



第130表 第555号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	128	4.3		粗 (R)	劣	段 白	75	
2	坏	(118)	(4.3)		微 (W, B)	劣	灰 白	40	
3	壶	(186)	(4.3)		粗 (W, 片)	良	にぶい 段	破片	
4	壶		(19.6)	5.8	粗 (W, R)	良	段	35	5 と同一個体
5	壶	(15.0)	(16.2)		粗 (W, R)	良	段	破片	4 と同一個体

第292図 第556号住居跡出土遺物



第131表 第556号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(18.8)	30.9	10.4	焼 W, R	青	にぶい橙	65	
2	甕		15.4	4.4	焼 W	良	にぶい黄橙	破片	
3	甕	18.8	32.1	6.6	焼 W, C	青	橙	100	
4	甕		7.8	11.2	焼 W	青	橙	破片	

かった。主柱穴の位置より推測すると、全体は軸長7.10m×7.00mの方形で、面積は49.70㎡となる。主軸方向はおおよそN-12°-Wを指す。

床までの深さは10~20cmで、覆土は人為的な埋め戻しと考えられる。壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ

平坦である。但し、地震によって段差を生じており、北東部は一段高くなっている。壁溝は幅10~15cm、深さ約5cmを測る。

カマドは北壁の東寄りに付設される。燃焼部は約113cm×57cmの楕円形で、火床面は平坦である。

柱穴は主柱穴が3本検出された。径52~70cm、深さ50~88cmで、覆土は乱れ柱根は観察できなかった。南西に予想される1本は、第123号溝跡により削り取られてしまったようである。

貯蔵穴は北東の隅部に備わる。上面は径126cm×80cmの不整形で、床からの深さは32cmを測る。

遺物は土器の坏や甕など、少量の破片が覆土中より出土している。

第556号住居跡 (第12・293図)

AS-28グリッドを中心に位置する。自然堤防の肩部に存在する上、大半は第123号溝跡に切り取られている。このため、検出できたのは北東辺のみで、全体の規模や形状、カマドなどは明らかとし得なかった。測り得る一方の軸長は約5.20mで、北を指準とした時の軸方向は、おおよそN-30°-Wとなる。

わずかに残る覆土は、自然堆積のようである。壁溝は検出範囲で全周し、幅約20cm、深さ約6cmを測る。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径55cm×65cmの楕円形で、床からの深さは18cmを測る。

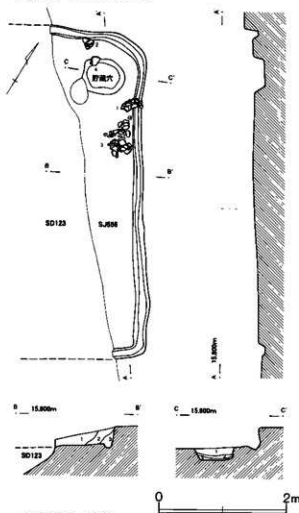
カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴周辺の床面より、土器の壺や甕などが出土している。

第557号住居跡 (第12・294図)

AR-27グリッドを中心に位置する。南隅で第555号住居跡を切り、北隅を第559号住居跡に切られる。全体は軸長6.15m×6.20mの方形を呈し、面積は38.13㎡を測る。主軸方向はおおよそN-50°-Eを指す。

第293図 第556号住居跡



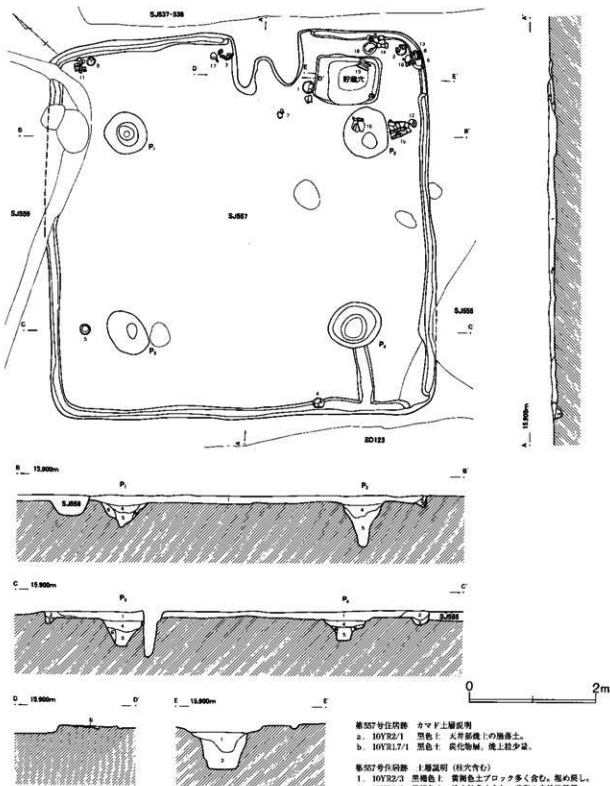
第556号住居跡 土器説明

1. 30YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 30YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 焼土プロック含む。

第556号住居跡 貯蔵穴土器説明

1. 10YR2/4 暗褐色土 焼土粒・焼土粒少量含む。
2. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土プロック。

第294図 第557号住居跡



第557号住居跡 野火穴土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒微量含む。人為的埋めの戻し。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・粒多く含む。人為的埋めの戻し。

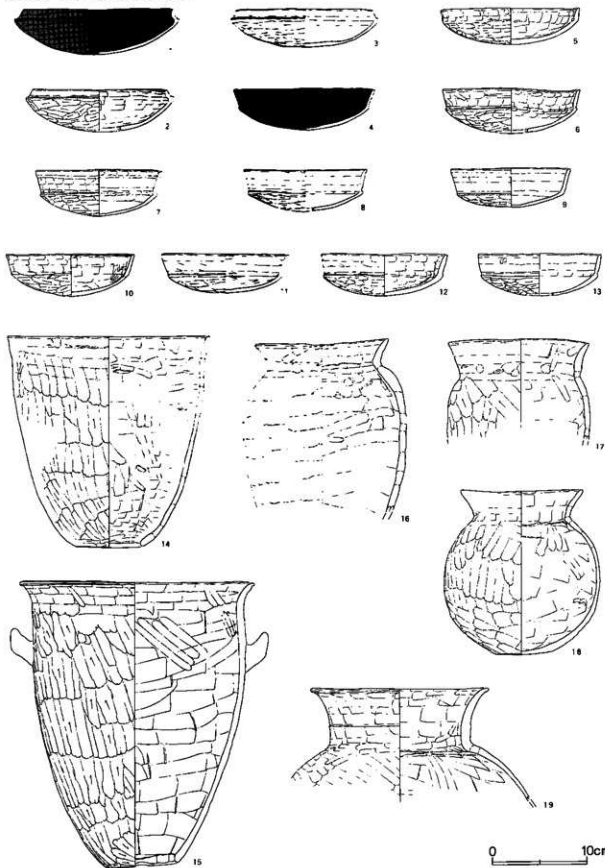
第557号住居跡 カマド土層説明

- a. 10YR2/1 黒色土 天井部焼土の崩落土。
- b. 10YR17/1 黒色土 炭化物層。焼土粒少量。

第557号住居跡 土層説明 (柱穴含む)

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。埋めの戻し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒多く含む。埋めの自然堆積層。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。埋めへの混入土か。
4. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く、炭化物少量含む。土柱抜き取り後の人為的埋めの戻し。
5. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多い。土柱抜き取り後の人為的埋めの戻し。
6. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。充填土。

第295图 第557号住居跡出土遺物



第132表 第557号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	15.8	4.8		微(W)	良	橙	95	内外黒色処理
2	坏	14.4	(4.3)		微(W)	良	橙	75	
3	坏	14.7	4.0		微(W)	普	明赤褐	70	
4	坏	15.0	4.4		微(W)	良	橙	95	
5	坏	14.9	3.9		粗(R)	良	橙	100	
6	坏	(14.8)	(4.6)		微(W)	良	明赤褐	40	
7	坏	(13.6)	4.9		微(W)	良	明赤橙	60	
8	坏	(13.4)	(4.4)		微(W)	良	橙	50	
9	坏	12.9	4.1		細(W, C)	普	橙	100	
10	坏	13.7	4.4		細(W, C, R)	良	橙	60	
11	坏	13.6	4.2		微(W)	普	橙	95	
12	坏	13.4	4.5		微(W, B)	良	橙	100	
13	坏	(13.2)	(4.3)		細(W, C)	劣	明赤褐	45	
14	甌	(21.6)	22.3	(7.2)	細(W, R)	良	橙	30	
15	甌	25.0	29.6	7.8	粗(R)	良	にぶい橙	95	
16	甌	14.8	(18.4)		粗(W, C, 片)	劣	にぶい橙	70	
17	甌	(15.0)	(10.3)		粗(W, C)	普	橙	破片	
18	甌	(13.1)	17.5	6.1	粗(W, C)	劣	明赤褐	75	
19	壺	19.0	(11.9)		細(C, R)	良	橙	破片	

床までの深さは5~15cmと一定せず、覆土は人為的な埋め戻しを示す。壁は垂直に立ち上がり、凹凸のある床面は、中央部がやや高まる。壁溝はほぼ全周し、幅15~20cm、深さ約10cmを測る。

カマドは北東壁の中央部、いくぶん東に寄って付設される。燃焼部は約68cm×48cm、火床面は床から3cm程窪む。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径65~75cm、深さ34~68cmである。柱は抜き取られ、その後埋め戻されている。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径78cm×102cmの長方形を呈し、深さは64cmを測る。これも人為的に埋め戻されている。

遺物は貯蔵穴周辺の床面を中心に、土師器の坏・壺・甌・甌などが出土している。

第558号住居跡(第11・298図)

AQ-27グリッドを中心に位置する。周囲に分布する第559・560・561・562・563・564号住居跡を切り、第543号土壌に切られる。なお、第532・566号住居跡、第542号土壌、第133号溝跡との新旧関係は確認できなかった。全体は軸長9.65m×7.95mの長方形で、面積は76.72㎡を測る。主軸方向はおおよそN-51°-Wを指

す。

床までの深さは20~30cm、覆土は人為的な埋め戻しである。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁溝はほぼ全周し、幅約15cm、深さ約10cmを測る。

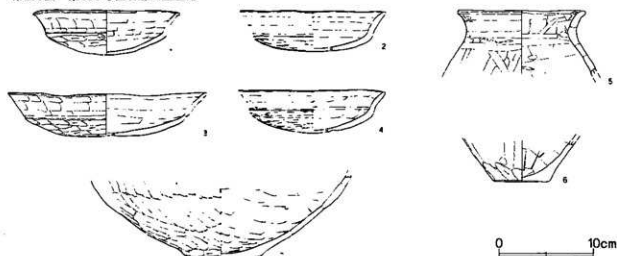
カマドは北西壁の西寄りに設けられる。燃焼部は約132cm×52cmと細長く、火床面は床面より5cm程深い。その中央部には、地山を用いた支脚が造り付けられていた。煙道は長さ76cm、幅44cmで、底面は緩やかに立ち上がっていく。

柱穴は主柱穴が4本検出された。径40~65cm、深さ36~60cmである。柱痕は観察されず、覆土は乱れていた。柱は抜き取られたものと思われる。

貯蔵穴は西隅部に備わる。上面は径90cmの円形を呈し、深さは床から49cmを測る。また、カマドの右脇には2基の小型土壌が存在する。土壌Aは径54cmの円形で、深さ13cm。土壌Bは径80cm×30cmの楕円形で、深さは7cmである。ともに浅い掘り込みで、遺物を含んでいた。

遺物は少量ながら、土師器の坏・甌、石製紡錘車(第421図11)、滑石製の小玉(第422図29)、土製の丸玉(第423図6)などの出土があった。

第296図 第558号住居跡出土遺物



第133表 第558号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(16.0)	11.8		粗 R	普	橙	35	
2	坏	(15.5)	(4.2)		微 W	普	橙	30	
3	坏	21.2	(4.7)		微 W, B	良	明赤褐	70	
4	坏	15.5	(4.4)		粗 R	劣	橙	95	
5	甕	(13.6)	(7.0)		粗 W, 片	普	橙	破片	
6	甕	(4.4)	5.8		粗 W, C, R	良	橙	破片	
7	壺	(9.0)	7.9		粗 W, R	良	にぶい橙	破片	

第559号住居跡 (第11・299図)

AQ-27グリッドを中心に位置する。第557号住居跡を掘り込んで構築され、その後埋め戻されて、第558・560・562号住居跡、および第543号土壇に切られる。第561・563・564・565号住居跡との新旧関係は確認できなかった。全体は軸長6.40m×6.45mの方形を呈し、面積は41.28㎡を測る。長軸方向はおよそN-23°-Wを指す。

床までの深さは約12cm、覆土は人為的な埋め戻しである。壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ平坦である。壁溝は検出範囲ではほぼ全周し、幅15~30cm、深さ5~10cmを測る。

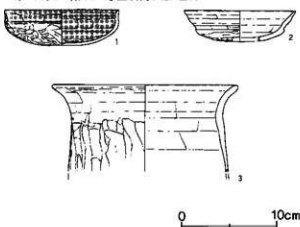
柱穴は主柱穴が4本検出された。径63~85cm、深さ58~100cmである。柱は抜き取られており、覆土は乱

れていた。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の出土は主柱穴Pなどから、土師器の坏や甕、白玉(第424図26)が出土している。

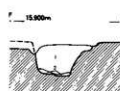
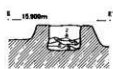
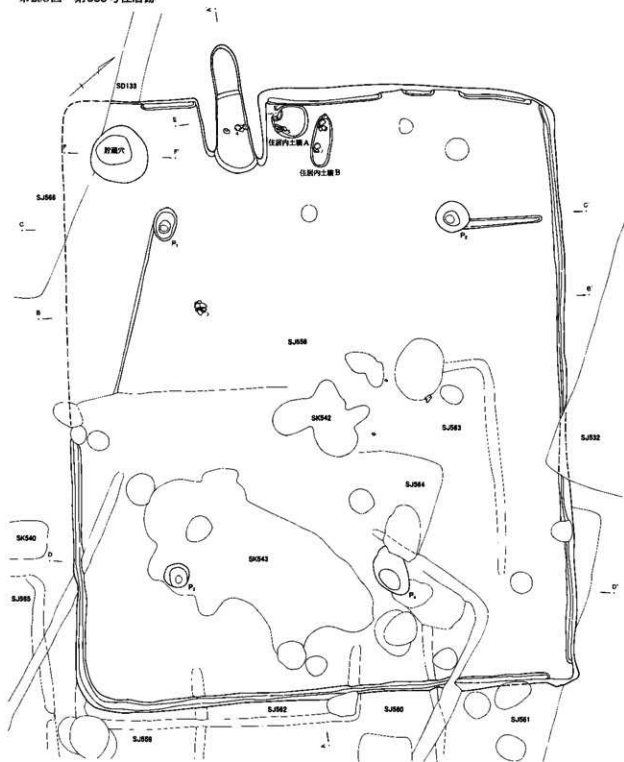
第297図 第559号住居跡出土遺物



第134表 第559号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.9)	3.8		細 (W, B, R)	良	橙	50	赤彩
2	坏	(11.8)	(3.2)		細 (W, B, R)	普	にぶい橙	20	
3	甕	(19.7)	(9.2)		細 (W, R)	良	にぶい橙	破片	

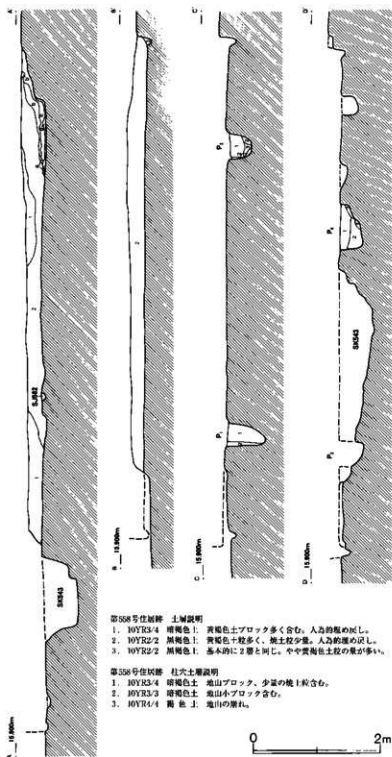
第298図 第558号住居跡



第558号住居跡 カマド土層説明
 a. 10YR6/4 濃い黄褐色土 天井部粘土の残欠。
 b. 10YR2/1 黒色土 焼土ブロック・焼土殻主体。天井部内面焼土化部の崩落土。
 c. 10YR2/1 黒色土 焼土殻少量、炭化物や多く含む。カマド内への流入土。
 d. 10YR1.7/1 黒色土 炭化物層。

第558号住居跡 貯蔵穴土層説明
 1. 10Y7C3/4 暗褐色土 焼山小ブロック含む。
 2. 10YR2/1 黒色土 炭化物多く含む。





第558号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。人為的埋め戻し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒多く、焼土粒少量。人為的埋め戻し。
3. 10YR2/2 黒褐色土 基本的に2層と同じ。やや黄褐色土粒の集が多い。

第558号住居跡 柱土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 火山ブロック、少量の焼土を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 火山小ブロック含む。
3. 10YR4/4 褐色土 火山の崩れ。

0 2m

第560号住居跡 (第11・300図)

AQ-27グリッドを中心に位置する。埋め戻された第559号住居跡を大きく切り込み、埋没(埋め戻し?)後、第558・562号住居跡に切られる。東西の軸長は約4.00mで、北を指準とした時の軸方向は、およそN-

47°-Wとなる。

床までの深さは10cm前後、覆土は人為的な埋め戻しかと思われる。床面は概ね平坦で、第559号住居跡の床を嵩上げするよう、貼り床を施している。壁溝は検出範囲で全周し、幅約15cm、深さ約6cmを測る。

貯蔵穴は東隅部に備わる。上面は径88cmの方形を呈し、床面からの深さは約50cmを測る。覆土の上半は、やはり埋め戻しである。

カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴より、土師器の坏・高坏・甕が出土したのみである。

第561号住居跡 (第11・302図)

AQ-27グリッドに位置する。大部分を第558号住居跡、第543号土壇に切られるため、東壁と主柱穴を検出したにとどまる。故に、第560・562・563・564号住居跡、第246号井戸跡との新旧関係は確認できなかった。軸長は南北約4.50mで、北を指準とした時の軸方向は、およそN-54°-Eとなる。

東隅部に見られる壁溝は幅約12cm、深さ約3cmである。床面はほとんど残っていない。

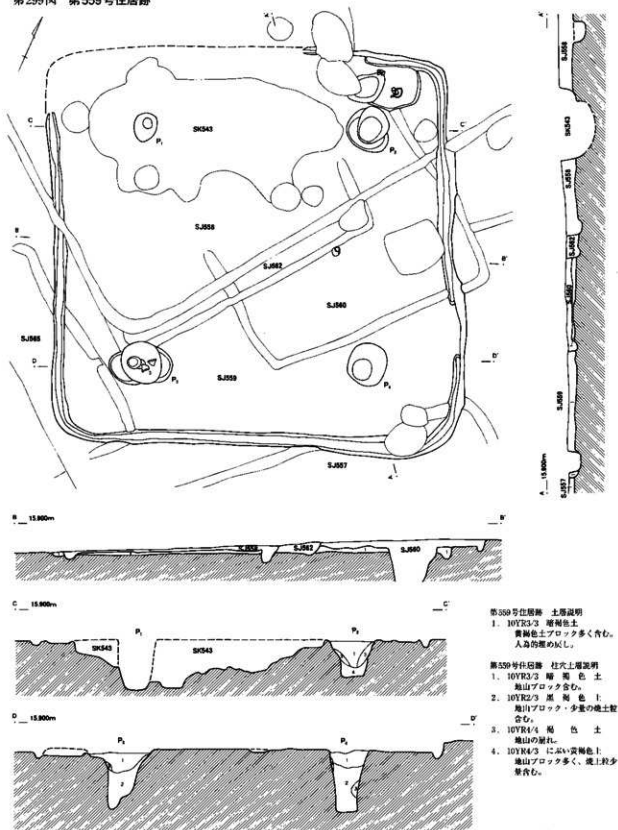
柱穴は主柱穴が4本検出された。径34~43cm、深さ20~33cmである。いずれも覆土は乱れており、充填の様子や柱痕も観察されなかった。

カマド・貯蔵穴、および遺物は検出されなかった。

第562号住居跡 (第11・300図)

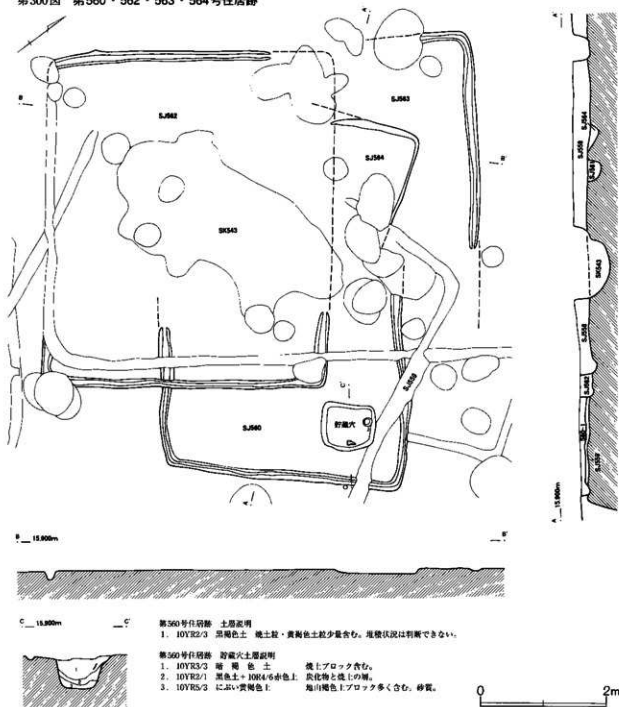
AQ-27グリッドを中心に位置する。第559・560号住居跡を切り、第558号住居跡、第543号土壇に切られる。第561・563・564号住居跡との新旧関係は確認できなかった。全体は軸長5.88m×4.55mの方形を呈

第290図 第559号住居跡



- 第559号住居跡 土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土
黄褐色土ブロック多く含む。
人身的埋のKし。
- 第559号住居跡 柱穴土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土
地山ブロック含む。
 2. 10YR2/3 黒褐色土
地山ブロック・少量の焼土粒
含む。
 3. 10YR4/4 褐色土
地山の層状。
 4. 10YR4/3 に近い黄褐色土
地山ブロック多く、焼土粒少
量含む。

第300図 第560・562・563・564号住居跡



し、面積は26.75㎡を測る。長軸方向はおよそN-53°-Wを指す。

床までの深さは10~20cmで、覆土は人為的な埋め戻しと思われる。床面のほとんどは、第588号住居跡に削り取られている。検出された壁溝は幅約14cm、深さ

約3cmを測る。

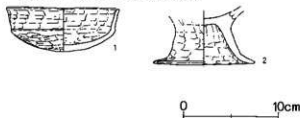
カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は土器の小片を数点出土したのみで、図示するには至らなかった。

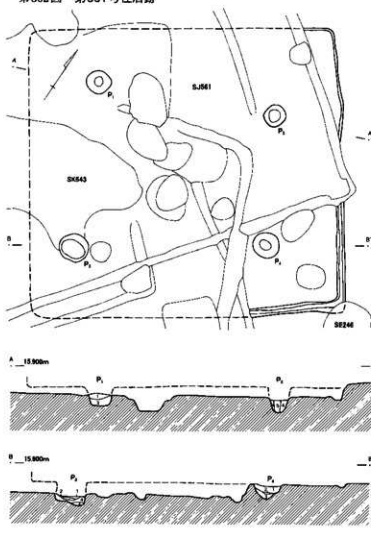
第135表 第560号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.1	4.6		粗 (R)	良	橙	100	
2	高環		(5.7)	10.8	粗 (C, R)	普	灰白	脚部90	

第301図 第560号住居跡出土遺物



第302図 第561号住居跡



第561号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR2/4 暗褐色土 炭土較少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック。
3. 10YR3/4 におい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
4. 10YR2/3 暗褐色土 地山褐色土小ブロック多く含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物和少量含む。

第563号住居跡 (第11・300図)

AQ-27グリッドを中心に位置する。大部分を第558号住居跡に削り取られるため、北陸部の壁溝を確認したにすぎない。よって、全体の規模や形状などについては明らかとしない。

壁溝は幅約15cm、深さ約2cmを測る。

カマド・貯蔵穴・柱穴・遺物は検出されなかった。

第564号住居跡 (第11・300図)

AQ-27グリッドを中心に位置する。第563号住居跡同様、そのほとんどを第558号住居跡に削り取られているため、北隅のごく一部を検出したにとどまる。主柱穴などの施設も不明であり、全体の規模や形状などについては明らかとしない。

壁溝・カマド・貯蔵穴・柱穴、および遺物の検出はなかった。

第565号住居跡 (第11・303図)

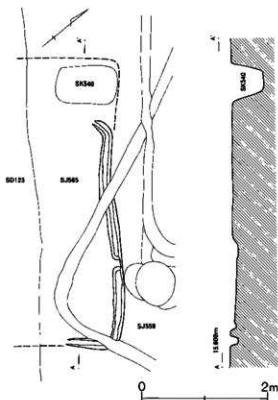
AR-27グリッドを中心に位置する。自然堤防の肩部に構築されている上、南西部は第123号溝に大きく切り取られている。このため、検出は壁溝のごく一部に限られ、全体の規模や形状、第559号住居跡との新旧関係などについては明らかとしない。

検出された壁溝は幅約7cm、深さ約2cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は壺と思われる土師器の破片が1点出土しているが、微細なため図示できなかった。

第303図 第565号住居跡



第566号住居跡 (第11・304図)

AQ-26グリッドを中心に位置する。北西壁で第567号住居跡を切り、埋め戻された後、南西部の大半を第123・124号溝跡に切り取られる。このため、全体の規模や形状などは明らかでないが、軸長の一方は約5.95mで、北を指準とした時の軸方向はおおよそN-32°-Wとなる。

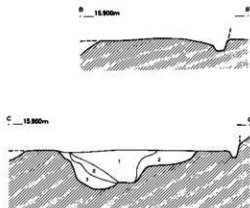
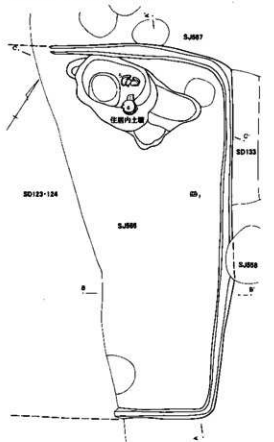
床までの深さは最大35cm程度で、覆土は人為的な埋め戻しである。壁の立ち上がりは急で、床面は中央部がやや高まるようである。壁溝は検出範囲で全周し、幅約20cm、深さ約5cmを測る。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径225cm×103cmの不整形で、床からの深さは25~60cmを測る。これも覆土は埋め戻されたものである。

カマド・柱穴は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴より、土師器の坏・甕・瓶、床面上より須恵器の無蓋高坏・蓋などが出土している。

第304図 第566号住居跡



第566号住居跡 土層説明

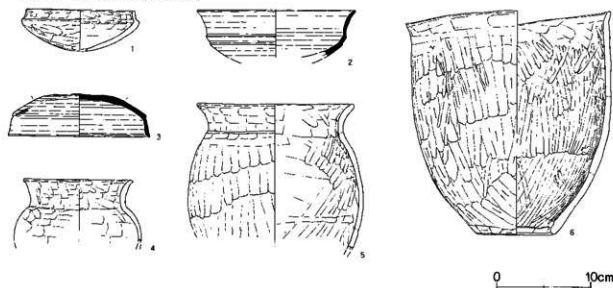
1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼山褐色土ブロック、少量の褐色土粒含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
4. 10YR4/4 黄褐色土 焼山ブロック。

第566号住居跡 住居内土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭上粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック多く含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。

0 2m

第306図 第566号住居跡出土遺物



第136表 第566号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.6)	(4.3)		細 (C, R)	普通	灰黄褐	50	
2	須恵器無蓋高坏?	(17.0)	(5.2)		細 (W)	普通	灰白	破片	末野?
3	須恵器蓋		4.3	(15.6)	(針)	良	灰	35	南比企
4	甕	(11.8)	(6.6)		微 (W, B)	普通	にぶい黄橙	破片	
5	甕	16.9	(15.5)		粗 (W)	普通	明赤褐	60	
6	甕	22.2	23.6	8.0	粗 (W, C, 片)	良	橙	100	

第567号住居跡 (第11・306図)

AQ-26グリッドを中心に位置する。南西辺で第568号住居跡を掘り抜き、埋め戻された後、東隅部を第535号住居跡のカマドに、南東壁を第566住居跡と第133号溝跡に切られる。全体は軸長5.44m×5.47mの方形を呈し、面積は29.76㎡を測る。主軸方向はおおよそN-32°-Wを指す。

床までの深さは20~25cm、覆土は人為的な埋め戻しである。壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ平坦である。部分的に途切れる壁溝は、幅約20cm、深さ約4cmを測る。

4本検出された主柱穴は、位置的にはかなり隅部へ寄っている。径55~75cm、深さ50~67cmである。いずれも柱は抜き取られたらしく、覆土は乱れていた。

カマドや貯蔵穴は確認できなかったが、南隅部に2

基の土壌を検出した。土壌Aは径60cmの円形で、床からの深さは74cmを測る。隣接する土壌Bは径45cm×60cmの楕円形で、深さは17cmと浅い。

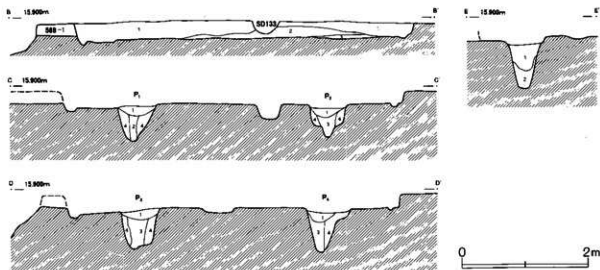
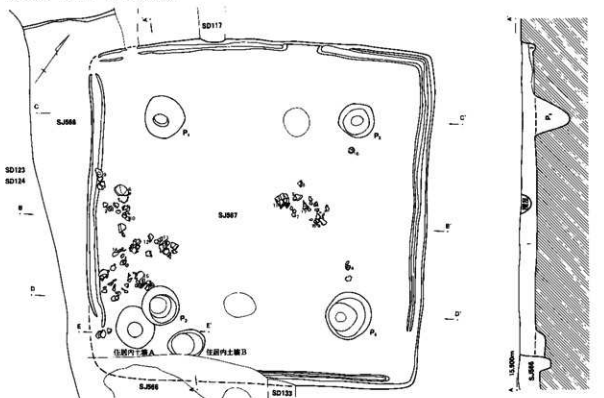
遺物は住居跡の中央部、および南西の壁際に集中して見出された。多くは小さな破片であり、床面からは浮いた状態であった。

第568号住居跡 (第11・306図)

AQ-25グリッドを中心に位置する。大半を第567号住居跡、第123・124号溝跡に掘り抜かれ、北西壁と床の一部が検出されたにすぎない。このため、全体の規模や形状、施設等については明らかとし得ない。

床までの深さは約17cmで、覆土は故意の埋め戻しと判断される。

壁溝・カマド・貯蔵穴・柱穴、および遺物は検出されなかった。



第567号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山褐色土ブロック含む。下部に土器片多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 地山褐色土ブロック含む。土器片・焼土ブロック・焼土粒多く含む。
3. 10YR2/1 黒色土 炭化物の多い層。

第567号住居跡 住室内土層入土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭褐色土粒・黒褐色土粒を多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 底部に黄褐色土粒少量含む。

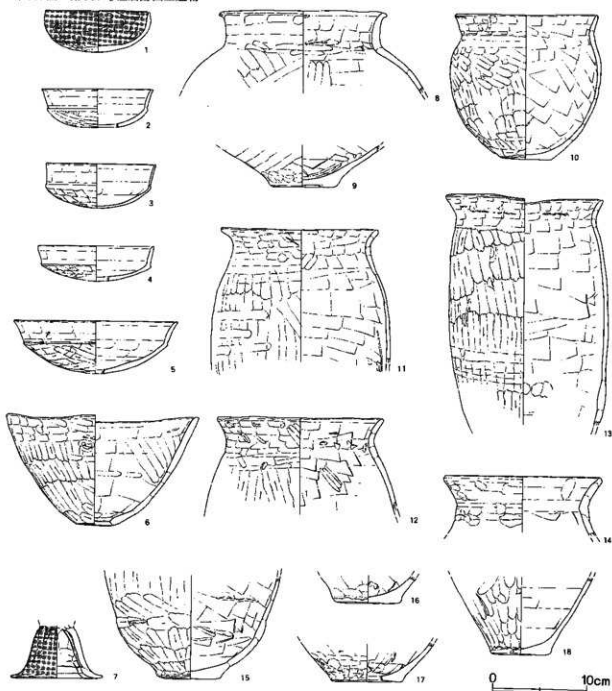
第567号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。主柱抜き取り後の地層等。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土ブロック多い。
3. 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック多い。主柱抜き取り後の人為的運の戻し。
4. 10YR4/3 に近い黄褐色土 黄褐色土ブロック多い。灰土上。

第568号住居跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 灰色粘土少量含む。

第307図 第567号住居跡出土遺物



第569号住居跡 (第12・308図)

AR-27グリッドを中心に位置する。自然堤防の肩部に構築されており、斜面方向は既に流失していた。さらに、北東部はそのほとんどを第136号溝跡に切られているため、全体の規模や形状、施設等については明らかとしない。軸長の一方は約3.35mを測り、主軸方向はおおよそN-44°-Wを指す。

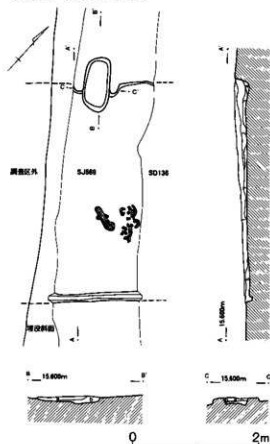
床までの深さは7~16cmで、覆土は自然堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は南東から北西へわずかに傾斜する。壁溝は南東の一部が検出された。幅約13cm、深さ約5cmである。なお、床面には炭化材の出土が見られたが、床自体は焼けておらず、焼土の堆積も認められなかった。

カマドは南東壁に設けられる。燃焼部は約88cm×42

第137表 第567号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(11.0)	4.3		粗(C,R)	良	橙	65	比金型 赤彩	
2	坏	(11.9)	(4.0)		細(B,R)	良	浅黄橙	25		
3	坏	11.7	4.7		細(B,R)	良	にぶい橙	50		
4	坏	(12.3)	(3.8)		緻(W,B,R)	良	にぶい黄橙	50		
5	坏	(17.5)	(5.6)		緻(B,R)	良	にぶい橙	30		
6	高 瓶	20.7	11.7	4.0	粗(W)	良	にぶい黄橙	95		
7	高 壺		(5.6)	(9.9)	粗(W,R)	良	橙	破片		赤彩
8	壺	18.0	(8.5)		細(C,R)	良	橙	破片		
9	壺		(4.5)	7.0	緻(W,B,R)	良	にぶい橙	破片		
10	壺	15.4	15.5	5.4	粗(W,R)	良	橙	75		
11	壺	17.0	(14.1)		緻(W,片)	劣	にぶい橙	25		
12	壺	18.0	(10.3)		緻(W,C,R)	良	にぶい黄橙	20		
13	壺	16.9	(24.1)		粗(W)	良	にぶい黄橙	30		
14	壺	(15.7)	(6.7)		粗(W,B,R)	良	にぶい黄橙	破片		
15	壺		(11.0)	6.8	粗(W,C)	青	黒 褐	破片		木炭灰
16	壺		(3.0)	6.7	緻(W,R)	青	橙	破片		
17	壺		(4.2)	(7.7)	緻(W,B,R,片)	良	褐	破片		
18	壺	(6.2)	(8.3)		緻(W,B,R)	良	灰 褐	破片		

第308図 第569号住居跡



- 第569号住居跡 土器説明
1. 10YR3/4 暗 褐色 土 地山粘着中・炭化物含む。
 2. 10YR3/3 暗 褐色 土 地山粘・炭化物粘・炭土粒多く含む。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粘多く含む。
 4. 10YR3/3 暗 褐色 土 地山粘多く含む。
 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。

- 第569号住居跡 カマド土層説明
- a. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
 - b. 10YR2/3 黒 褐色 土 焼土粒・炭化物少量含む。

cmの長方形で、火床面は床よりわずかに窪む。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は覆土中より、土師器の赤彩坏や壺などが出土している。いずれも細かい破片のため、図示し得なかった。

第570号住居跡 (第7・310図)

Y-20グリッドを中心に位置する。本跡以降は、調査区の拡張に伴って検出されたものである。位置的にはC区の北辺、新幹線と悪水路の交差点付近である。

住居跡の東側は調査区外になり、壁や床は第125号掘立柱建物跡に掘り抜かれる。このため、全体の規模や形状は明らかでない。南北の軸長は約3.90mで、主軸方向はおよそN-28°-Wを指す。

床までの深さは10cm前後、覆土は自然堆積のようである。床面は中央部がわずかに高まるが、全体的には北へ向けてやや傾斜する。壁溝は検出範囲で、幅約10cm、深さ約6cmを測る。

カマドは北壁に設けられる。燃焼部は約77cm×52cmの楕円形で、火床面は緩やかに立ち上がっていく。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は少量ながら、土師器の坏や壺、須恵器の坏や蓋の破片を出土している。

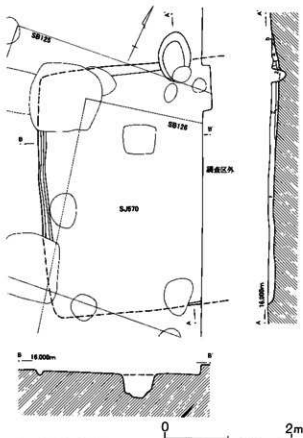
第309図 第570号住居跡出土遺物



第138表 第570号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.8)	(3.3)		細 (W, B)	良	橙	破片	南比企
2	須忠器 坏	(14.8)	(1.2)	(8.6)	細 (W, F, 針)	良	灰 黄	破片	
3	須忠器 壺	(13.8)	(1.5)		細 (W, 片)	良	灰 黄 褐	破片	
4	甕	(21.8)	(10.1)		細 (W, B, R)	良	黄 橙	破片	
5	甕		(7.8)	5.5	細 (W, B)	良	橙	破片	

第310図 第570号住居跡



第570号住居跡 土層説明

- 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粉を含む。
- 10YR4/3 におい黄褐色土 炭化物粉を少量含む。

第570号住居跡 カマド土層説明

- 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック多い。下部部に薄い炭化物粉。
- 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック。

第571号住居跡 (第7・311図)

Y-20グリッドを中心に位置する。その大部分は第198号住居跡、攪乱坑に切られる上、拡張前に設けた排水側溝でも切断してしまった。このため、検出し得たのは南西壁と西隅部、および床面の一部のみである。残存部から推定される住居跡の全体は、軸長5.95 m × 4.08 m の長方形で、面積は24.28㎡となる。また、北を指準とした時の軸方向は、およそN-54°-Eである。

床までの深さは最大で約10cm、覆土は人為的な埋め戻しと半断される。床も遺存状態が良くないが、概ね平坦である。

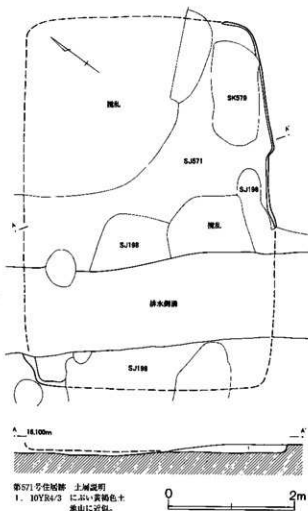
カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は土器器の坏や甕(古墳時代後期)が少量出土したが、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第572号住居跡 (第7・313図)

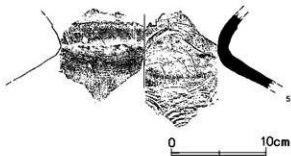
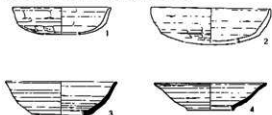
X-19グリッドを中心に位置する。第574号住居跡に掘り抜かれるが、壁と壁溝の一部を検出したに過ぎず、第12号櫓列跡、第554~557号土塙、第250・252・253・263号井戸跡との新旧関係は確認できなかった。主柱穴の位置から推測すれば、北西-南東の軸長は約6.70mで、北を指準とした時の軸方向は、およそN-

第311図 第571号住居跡



第571号住居跡 土層説明
1. 10YR6/3 近い黄褐色土
地山に産出。

第312図 第572号住居跡出土遺物



第139表 第572号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(10.4)	(2.9)		細 (W, B, R)	普通	橙	20	南比余
2	坏	(12.6)	(3.2)		粗 (R)	普通	にぶい黄橙	破片	
3	須恵器 坏	(11.9)	(3.6)	(6.3)	微 (F, 針)	良	灰	25	
4	須恵器 坏	(12.0)	(2.9)	(5.0)	細 (W)	良	灰	破片	
5	須恵器 甕		(8.2)		粗 (W)	良	灰	破片	

44°-Wとなる。

検出した壁溝は幅約20cm、深さ約3cmを測る。床面は南東から北西へわずかに傾斜する。

検出された2本の柱穴は、位置的に見て主柱穴と思われる。大きさは径40~68cm、深さ37~52cmである。柱痕は観察されず、覆土は乱れていた。北東に予想される2本は、精査したが検出できなかった。カマド・貯蔵穴についても同様である。

遺物は残存する覆土から、土師器の坏や須恵器の甕・坏が出土している。

第573号住居跡 (第7・314図)

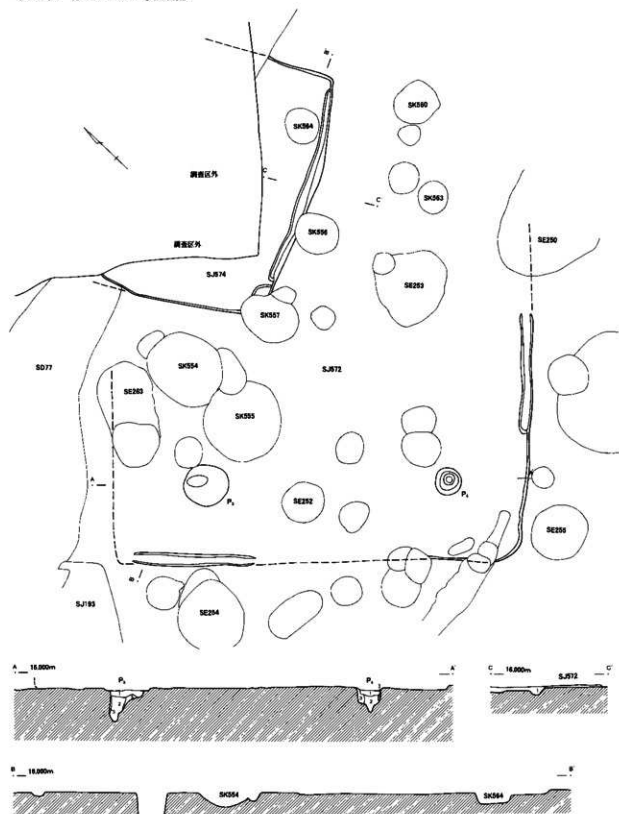
X-20グリッドを中心に位置する。西隅部分を検出したにとどまり、大半は東側の調査区外となる。このため、全体の規模や形状、施設などについては明らかでない。北を指準とした時の軸方向は、ほぼN-30°-Wとなる。

床までの深さは7cm程で、覆土は自然堆積と思われる。壁溝は検出範囲で全周し、幅15~17cm、深さ7~10cmを測る。床面は中央部がやや高まるようである。

カマド・貯蔵穴・柱穴は検出されなかった。

遺物の出土は微量で、かつ細片ばかりであった。須恵器の蓋や土師器の甎などが見られる。

第313図 第572・574号住居跡



第572号住居跡 柱穴土層説明

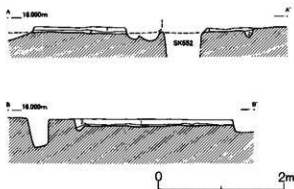
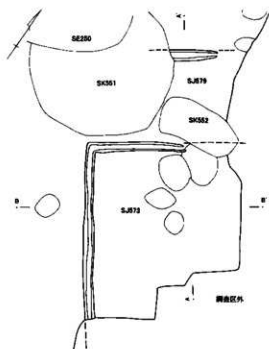
1. 10YR3/4 暗褐色土 細灰色土質・多量の焼土ブロック含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。
3. 10YR4/3 に近い黄褐色土

第574号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土

0 2m

第314図 第573・579号住居跡



第573号住居跡 土層説明

1. 10YR3/3 黒褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 火山ブロックを多く含む。

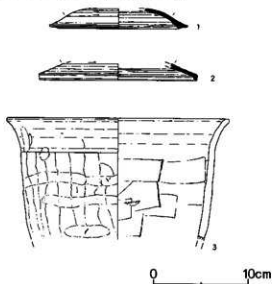
第579号住居跡 土層説明

1. 10YR2/2 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 火山ブロックを多く含む。

第140表 第573号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 釜	(14.7)	(2.2)		粗 (W, B, F)	良	灰	破片	群馬 胎土分析 No 23
2	須恵器 蓋	(16.7)	(1.8)		細 (F)	良	灰白	破片	
3	須恵器 瓶	(23.7)	(13.0)		粗 (W, R, 片)	普通	橙	破片	

第315図 第573号住居跡出土遺物



第574号住居跡 (第7・313図)

X-19グリッドを中心に位置する。大半が調査区外となるため、全体の規模や形状、施設などについては明らかとしない。第572号住居跡を切り込んでの構

築であるが、その重複関係は不明である。第556・557・564号土壇との新旧関係は確認できなかった。軸長は東西約4.20m、北を指準とした時の軸方向は、ほぼN-25°-Wである。

床までの深さは約5cm、覆土は自然堆積のようである。床面は概ね平坦で、壁溝は南東辺に備わる。幅10~20cm、深さ約6cmである。

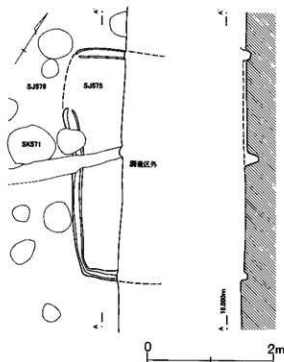
遺物は土師器が数片出土したのみである。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第575号住居跡 (第7・8・316図)

AA-21グリッドを中心に位置する。北側を第578号住居跡に切られ、東側は大半が調査区外となる。このため、検出したのは南西辺のみであり、全体の規模や形状、施設などについては明らかでない。南北方向の軸長は約3.67mで、北を指準とする軸方向はおおよそN-33°-Wとなる。

壁溝は検出範囲で全周し、幅約15cm、深さ約7cmを

第316図 第575号住居跡



測る。床面は南東から北西へやや傾斜する。

カマド・貯蔵穴・柱穴は検出されなかった。

遺物は甕の小片が数点出土したが、図示するには至らなかった。

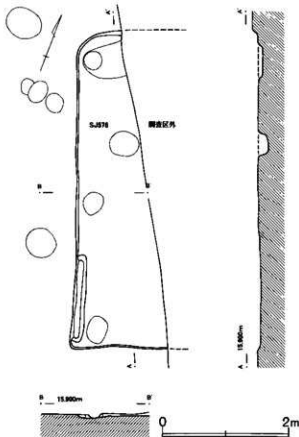
第576号住居跡 (第8・317図)

AA-21グリッドを中心に位置する。南西辺が検出できたのみで、大部分は東側の調査区外に延びている。故に、全体の規模や形状、施設などについては明らかでない。南北方向の軸長は約5.02m、北を指準とする軸方向はほぼN-20°-Wとなる。

床までの深さは5cm前後で、覆土は自然堆積か、人為的埋め戻しかの判断はつかなかった。検出部分の床面は、南から北へわずかに傾斜する。壁溝は南西隅部に限られ、幅約20cm、深さ約14cmを測る。

カマド・貯蔵穴・柱穴は検出されなかった。

第317図 第576号住居跡

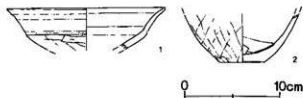


第576号住居跡 土曜説明

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 地山褐色土ブロック多く含む。

遺物は少量の坏や甕が出土している。微細な破片ばかりで、図示し得たものはわずかである。

第318図 第576号住居跡出土遺物



第141表 第576号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏 甕	(16.9)	(4.4)	(5.2)	4.7	細 (W, B) 粗 (W, R)	青 橙	20	破片

第577号住居跡（第7・319図）

Z-20グリッドを中心に位置する。南東を第578号住居跡に切れ、南西辺は調査区排水側溝で切断してしまった。このため、全体の規模は明らかとしない。なお、第126号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。拡張前の調査区に西隅部が検出されなかったことから、全体は長方形を呈するものと思われる。北西-南東方向の軸長は約5.20m、北を指準とする軸方向はほぼN-50°-Wとなる。

床までの深さは10cm前後で、覆土は自然堆積と判断される。壁の立ち上がりは急で、床面は西から東へ

や傾斜する。壁溝は検出範囲で全周し、幅約20cm、深さ10~15cmを測る。

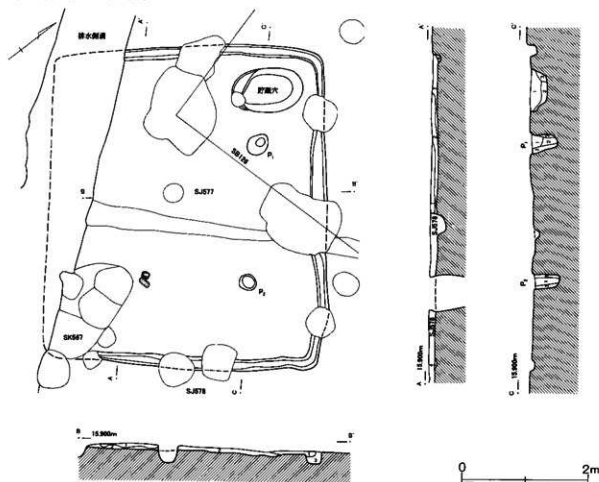
柱穴は主柱穴が2本検出された。径25~30cm、床からの深さは42cmである。ともに明瞭な柱痕が観察された。

貯蔵穴は北隅部に備わる。上面は径70cm×113cmの楕円形で、深さは28cmを測る。

カマドは検出されなかった。

遺物は覆土中より、古墳時代後期の甕や坏がわずかに出土した。いずれも微細な破片であるため、図示することは叶わなかった。

第319図 第577号住居跡



第577号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黄褐色土 粘土粒少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 雑山礫色土ブロック多い。
3. 10YR3/4 暗褐色土 雑山礫色土ブロック含む。
4. 10YR4/4 褐色土 雑山ブロック。

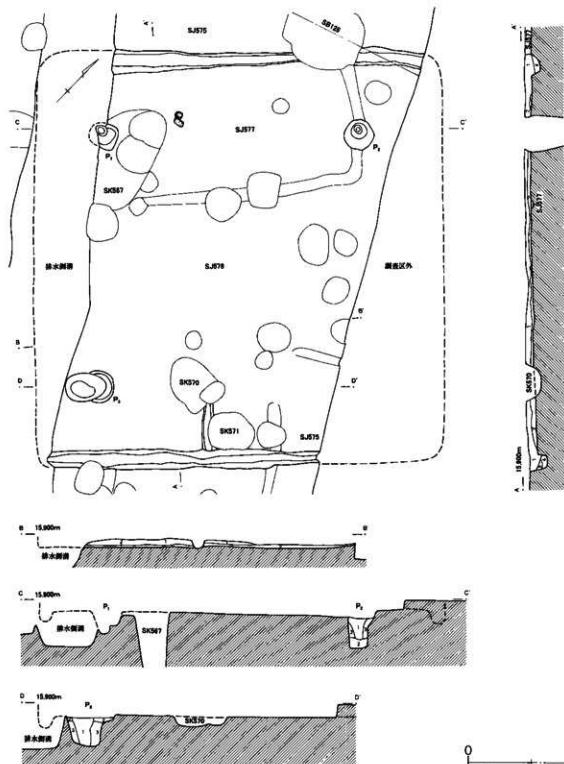
第577号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。柱痕。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 雑山礫色土ブロック多い。柱痕。
3. 10YR4/4 褐色土 雑山礫色土ブロック。充填土。

第577号住居跡 貯蔵穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多い。
2. 10YR2/3 暗褐色土 炭化物含む。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック。

第320図 第578号住居跡



第578号住居跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭土粒・炭化物部分に含む。
2. 10YR4/3 にふい黄褐色土 焼山褐色土ブロック多く含む。S.577を埋めて床を結る。
3. 10YR4/4 褐色土 焼山ブロック。
4. 10YR2/3 黒褐色土 焼山ブロック少量含む。

第578号住居跡 柱穴土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。柱穴。
2. 10YR3/4 暗褐色土 焼山粒少量含む。柱穴土。
3. 10YR4/3 にふい黄褐色土 焼山ブロック含む。柱穴土。

第578号住居跡 (第7・8・320図)

AA-21グリッドを中心に位置する。東側は調査区外になり、西辺は排水側溝で切断してしまった。第575・577号住居跡を切って構築され、埋没後、第570号土壌に床を掘り抜かれる。第126号掘立柱建物跡・第567号土壌との重複関係は確認できなかった。主柱穴の位置から推定される規模は、軸長約6.65m×6.70m、面積約44.56㎡となる。全体は方形を呈すると判断され、北を指準とする軸方向はおぼろげにN-45°-Wを指す。

床までの深さは5~15cmで、覆土は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は西から東へわずかに傾斜する。壁溝は検出範囲で全周し、幅20~30

cm、深さ約14cmを測る。

カマド・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の出土はごく微量で、しかも細片ばかりであった。古墳時代後期の壺や杯が確認できるが、図示するには至らなかった。

第579号住居跡 (第7・314図)

X-20グリッドを中心に位置する。第551号土壌に切れ、東側は調査区外となる。また、表土除去で大部分を削平してしまったため、検出は北西の壁溝と付近の床のみであった。

わずかに観察し得た覆土は、自然堆積のようである。壁溝は幅約17cm、床からの深さ約10cmを測る。

カマド・貯蔵穴・柱穴、および遺物の検出はなかった。

第142表 住居跡一覧表 (1)

番号	位置	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	深さ (m)	主軸方位	カマド	本遺構より新 (SJ)	本遺構より古 (SJ)	備 考
193	X-18	4.56	4.40	20.06	0.05	S-42°-W	北東			
198	Y-19	4.15	3.46	14.36	0.15	N-25°-W	北東		371	
209	Z-20	5.10	3.00	25.50	0.10	(N-45°-W)	-	210		
345	AF-21	6.98	-	-	-	(N-7°-W)	-	-	-	
346	AF-21	(4.25)	3.10	(13.18)	0.07	(N-42°-E)	-	349		SJ330の壁溝乃至SJ330へ部分
347	AF-21	-	-	-	-	-	北	-	-	
348	AF-22	5.40	(5.10)	(27.54)	0.05	(N-58°-W)	-	-	-	
349	AF-21	5.34	-	-	0.02	(N-33°-W)	-	-	346	
350	AF-21	6.70	6.50	43.55	-	(N-7°-W)	-	-	-	SJ365の壁溝乃至SJ365へ部分
351	AE-22	3.60	2.75	9.90	0.30	N-67°-E	北東	-	352	
352	AE-22	5.16	-	-	0.08	(N-26°-W)	-	351	-	
353	AE-22	6.06	(5.22)	(31.63)	0.08	(N-30°-W)	-	-	-	
354	AI-21	4.20	3.68	15.46	0.04	N-21°-W	北西	-	-	
355	AI-21	4.91	4.70	23.08	0.25	S-42°-E	南	-	357	
356	AI-20	3.75	3.50	13.13	0.30	N-23°-W	北西	-	357	
357	AI-20	(4.80)	-	-	0.25	(N-30°-W)	-	335・356	-	
358	AF-22	4.40	4.30	18.92	0.10	S-23°-E	西	-	-	
359	AF-22	3.90	-	-	-	(N-18°-W)	-	-	-	
360	AF-22	4.4	-	-	-	(N-36°-W)	-	-	-	SJ361へ拡張か
361	AF-22	(4.42)	-	-	-	(N-36°-W)	-	-	-	SJ360の拡張か
362	AF-22	(6.18)	6.16	(38.07)	-	(N-S)	(北)	364	-	
363	AF-23	6.85	-	-	-	(N-19°-W)	-	364	-	
364	AF-23	4.03	(3.83)	(15.43)	-	(N-39°-W)	-	-	362・364	
365	AI-20	(9.00)	-	-	0.40	N-23°-W	北	-	369	
366	AJ-21	8.10	7.98	64.64	0.50	N-39°-W	北西	-	401	
367	AG-23	4.25	3.94	16.75	-	(N-59°-E)	-	-	-	
368	AG-22	-	3.43	-	-	N-25°-W	北	-	-	
369	AJ-20	-	-	-	0.20	-	-	365	370	
370	AJ-20	7.85	-	-	0.20	N-58°-E	北東	369	-	
371	AG-21	2.75	-	-	-	(N-50°-E)	-	-	-	
372	AG-21	-	-	-	-	-	-	-	-	
373	AG-21	-	-	-	-	-	-	-	-	
374	AII-23	3.24	2.95	9.56	0.10	(N-28°-W)	-	-	-	

第143表 住居跡一覧表(2)

番号	位置	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方位	カマド	本遺構より西(SJ)	本遺構より古(SJ)	備考
375	AG-24	(4.63)	4.36	(20.19)	-	(N-50°-W)	-	-	-	
376	AG-20	4.10	-	-	0.10	(N-34°-W)	-	-	282	
377	AG-19	7.04	6.55	46.11	0.15	N-60°-E	北東	281	379	
378	AH-19	(4.60)	4.50	(20.70)	0.25	N-30°-W	北西	-	379	
379	AH-19	-	-	-	0.18	-	-	377・378	-	
380	AH-19	(5.80)	-	-	-	(N-38°-W)	-	-	-	
381	AH-19	(4.80)	-	-	-	(N-38°-W)	-	-	-	
382	AG-20	8.06	7.95	64.00	0.40	N-30°-W	北西	383	386	
383	AH-20	5.50	5.44	29.92	0.35	N-61°-E	北東	-	382・386	
384	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
385	AH-20	6.40	6.37	40.77	0.40	(N-69°-E)	-	386・387	388	
386	AH-20	8.00	8.00	64.00	0.45	N-50°-E	北東	382・383	385	
387	AI-20	3.57	(3.50)	(12.50)	0.20	N-50°-E	北東	-	385・388	
388	AI-20	7.55	7.40	55.87	0.10	N-49°-E	北東	387	389	SJ 389の拡張
389	AI-20	5.70	5.62	32.03	-	S-50°-W	南西	388	-	SJ 389へ拡張
390	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
391	AG-24	4.50	-	-	-	-	-	-	-	
392	AH-23	4.78	-	-	-	(N-27°-W)	-	-	393・394	SJ 393か394を縮小
393	AH-23	5.73	-	-	-	(N-27°-W)	-	392	-	SJ 394へ拡張乃至SJ 393の縮小
394	AH-23	6.40	-	-	-	(N-27°-W)	-	392	-	SJ 393の拡張乃至SJ 394へ縮小
395	AH-24	3.87	3.70	14.32	-	N-20°-W	北西	-	-	
396	AH-23	3.54	-	-	-	-	-	-	-	
397	AI-19	4.65	-	-	0.20	(N-30°-W)	-	-	398	SJ 398の縮小
398	AI-19	-	-	-	0.20	(N-30°-W)	-	397	-	SJ 397へ縮小
399	AI-23	3.67	3.46	12.70	0.05	S-65°-W	南西	-	-	
400	AI-24	4.65	4.26	19.81	-	(N-S)	-	419	-	
401	AJ-21	6.50	6.40	41.60	0.25	(N-25°-W)	-	366・402	-	
402	AK-21	7.00	-	-	0.20	S-51°-W	南西	-	401・406	
403	AI-23	3.10	-	-	0.10	(N-30°-W)	-	-	-	
404	AH-22	3.80	3.18	12.08	0.05	N-21°-W	北西	-	-	
405	AH-22	4.05	-	-	-	(N-25°-W)	-	-	-	
406	AK-21	4.25	-	-	0.20	(N-60°-E)	-	402	-	
407	AI-24	5.10	-	-	-	N-30°-W	北西	408	-	SJ 408へ拡張
408	AI-24	5.90	-	-	0.08	N-30°-W	北西	-	407	SJ 407の拡張
409	AH-22	5.23	-	-	0.20	N-65°-E	北東	410	415	
410	AH-22	6.17	5.22	32.21	0.25	N-25°-W	北西	-	409・411・415	
411	AI-22	4.80	(3.75)	(18.00)	0.10	(N-30°-W)	-	410	-	
412	AJ-23	4.38	4.25	18.62	0.04	S-61°-W	南西	414	413	SJ 413の改善
413	AJ-23	4.40	4.38	19.27	0.08	S-61°-W	南西	412・414	-	SJ 412へ改善
414	AI-24	5.25	5.22	27.41	0.05	N-52°-E	北東	-	412・413	
415	AH-22	-	-	-	-	N-25°-W	北西	409・410	-	
416	AJ-21	3.45	-	-	0.05	N-38°-W	北西	-	417	
417	AK-22	7.25	7.00	50.75	0.15	(N-41°-W)	-	416・418・421	-	
418	AK-21	5.85	5.73	33.52	0.30	N-47°-E	北東	421・440	417・446	
419	AI-24	4.30	4.20	18.06	0.15	N-30°-W	北西	-	400	
420	AH-22	-	-	-	-	-	-	-	-	
421	AK-21	(4.20)	4.10	(17.22)	0.40	(N-27°-W)	-	-	417・418・446	
422	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
423	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
424	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
425	AI-22	8.50	8.16	69.36	0.15	N-61°-E	北東	426	427~429	
426	AI-23	5.00	3.82	19.10	-	(N-8°-W)	-	-	425	
427	AJ-23	5.10	4.30	21.93	-	(N-60°-E)	(北東)	428~430	-	SJ 428へ拡張

第144表 住居跡一覧表 3

番号	位置	長軸(m)	短軸(m)	面積 ²	深さ(m)	主軸方位	カマド	本遺構より新(SJ)	本遺構より古(SJ)	備考
428	AJ-23	5.80	5.80	31.90	-	N-60°-E	北東	429・430	427	SJ 429へ拡張
429	AJ-23	6.50	6.80	41.60	0.20	N-60°-E	(南西) 430		427・428	SJ 428の拡張
430	AJ-23	5.6	5.60	31.64	0.40	S-62°-W	南西		427~429・431	
431	AK-24	5.40	5.06	27.43	0.15	N-68°-E	北東	430		
432	AJ-25	5.40	-	-	0.06	N-24°-W	北東		433	SJ 433の拡張
433	AJ-25	5.00	-	-	-	N-24°-W	-	432		SJ 432へ拡張
434	AJ-20	(3.23)	3.1	10.27	0.06	N-33°-W	-			
435	AJ-24	-	-	-	-	-	-			
436	AJ-24	5.37	4.95	26.58	0.15	N-29°-W	北西	439	442	
437	AI-24	(5.30)	5.30	28.09	-	N-24°-W	-			
438	AI-25	4.00	-	-	-	N-25°-W	-			
439	AJ-24	5.24	(4.20)	22.01	0.15	N-40°-W	北西	443	436・442	
440	AK-21	3.90	3.90	12.87	0.15	N-53°-E	北東		418	
441	AJ-22	4.45	4.34	19.31	0.15	N-48°-E	北東			
442	AJ-21	-	-	-	0.06	-	-	436・439・443		
443	AK-24	5.66	5.44	30.79	0.25	S-54°-W	南西		439・442・444・445	
444	AK-25	5.76	4.70	27.07	0.15	N-29°-W	北西	443	445	
445	AK-24	6.60	6.58	43.43	0.15	N-62°-E	北東		443・444	
446	AK-21	-	-	-	0.17	-	-		418・421・440	
447	AJ-25	-	-	-	0.20	(N-40°-W)	-	448・449	450	SJ 448へ拡張
448	AJ-25	-	-	-	-	(N-40°-W)	-	449	447・450	SJ 449へ拡張
449	AJ-25	-	-	-	0.70	(N-40°-W)	-		447・448・450	SJ 448の拡張
450	AK-25	-	-	-	0.05	-	-	447~449		
451	AK-26	5.00	-	-	0.06	(N-25°-W)	-	448		
452	AK-24	6.44	6.26	40.31	0.30	N-59°-E	北東		488・499	
453	欠番	-	-	-	-	-	-			
454	AL-25	5.40	5.20	28.08	0.10	(N-61°-W)	-	455・456・467		
455	AL-25	5.50	(3.70)	(20.35)	0.06	(N-45°-E)	-		454・456・467	
456	AL-25	5.15	4.50	24.80	0.10	N-38°-W	北西	455・467	454・457	
457	AL-25	8.60	8.54	73.44	0.15	S-30°-E	南東	455・456		
458	AL-26	2.56	-	-	0.10	N-26°-W	北			
459	AM-26	3.14	-	-	0.02	(N-33°-W)	-			
460	AM-25	4.34	(4.08)	(17.71)	0.16	S-60°-W	南西			
461	AL-24	8.25	8.15	67.24	0.25	S-32°-E	南東	465・466	462	
462	AM-23	5.80	(5.80)	(33.64)	0.15	N-32°-W	北東	461		
463	AN-27	4.78	-	-	0.07	(N-35°-E)	-			
464	AN-26	3.60	3.45	12.42	-	N-50°-W	-			
465	AM-24	4.50	4.17	18.77	0.18	(N-20°-W)	-		457・461・466	
466	AM-24	4.75	4.05	19.24	0.18	N-34°-W	北西・北東	465	461	
467	AL-25	(4.37)	(4.35)	(19.01)	0.13	(N-38°-W)	(北西)	455	454・456	
468	AN-24	-	-	-	0.60	-	-	469		
469	AN-25	3.80	3.75	14.25	0.28	N-38°-E	北東		468	
470	AN-25	3.10	2.60	8.06	0.20	N-64°-E	北東	471・493		
471	AN-25	3.80	3.45	13.11	0.20	S-64°-W	南西		470・493	SJ 493の拡張
472	AN-26	4.70	4.60	21.62	0.30	S-62°-W	南西			
473	AM-23	6.00	4.60	27.60	0.15	N-35°-W	北西	474	475~478	SJ 474へ拡張
474	AM-23	6.00	5.70	34.20	0.15	N-35°-W	北西		473・475~478	SJ 473の拡張
475	AN-23	6.73	-	-	-	(N-51°-E)	(北東)	473・474・476	477・478	SJ 476へ拡張
476	AN-23	7.10	7.00	49.70	0.10	N-51°-E	北東	473・474	475・477・478	SJ 475の拡張
477	AN-23	(6.20)	-	-	0.10	N-68°-E	東	475・476		
478	AM-23	-	-	-	0.07	-	-	473~476		
479	AN-23	(4.25)	-	-	0.10	N-45°-E	北東		480・489	
480	AO-23	-	-	-	0.06	-	-	479		

第145表 住居跡一覧表(4)

番号	位置	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	高さ(m)	主軸方位	カマド	本遺構より新(SJ)	本遺構より古(SJ)	備考
481	AN-24	3.05	2.73	8.33	-	(N-66°-E)	(北東)			
482	AO-24	5.10	5.05	25.76	-	(N-38°-W)	-	483・485		
483	AO-24	(3.10)	(2.95)	(9.15)	0.10	(N-38°-W)	-		482・484・485	
484	AO-24	-	-	-	-	-	-	483・485		
485	AO-24	5.55	5.45	30.25	0.20	N-37°-W	北西	483・486		
486	AO-24	(4.43)	-	-	0.12	-	-		482・484・491 485	
487	AO-26	4.16	4.12	17.14	0.10	N-44°-E	北東		488	
488	AO-25	6.25	6.25	39.06	0.20	N-57°-E	北東	487		
489	AN-23	4.10	-	-	-	-	-	479		
490	AN-25	3.30	2.86	9.44	-	(N-60°-W)	-			
491	AO-24	3.52	-	-	-	-	-	485・486		
492	AO-27	4.53	-	-	0.08	(X-34°-W)	(北)			
493	AN-25	3.68	2.55	9.38	-	X-64°-E	北東	471	470	SJ 471へ拡張
494	AO-24	-	-	-	0.30	X-21°-E	北東			
495	AO-27	4.66	4.20	19.53	0.10	N-24°-W	北		496・497	SJ 496の輪小
496	AO-27	5.25	5.20	27.30	0.10	N-24°-W	北	495	497	SJ 495へ輪小
497	AO-26	3.70	3.50	12.95	0.05	(N-28°-W)	-	495・496・528～531		
498	AK-23	4.30	(4.05)	(18.23)	-	(N-50°-E)	-	452・499～501		
499	AK-23	6.26	6.20	38.81	0.10	(N-47°-E)	-	452・500・501	498	
500	AK-23	-	-	-	0.10	-	-	501・502・506	498・499	
501	AL-23	5.80	5.80	33.64	0.20	N-37°-W	北西	510	498～500・506	
502	AK-23	-	-	-	0.23	-	-	506・510	500・503	
503	AK-23	6.60	6.10	40.26	0.20	(N-52°-E)	-	502・505・508～510		
504	欠番									
505	AL-22	3.45	2.45	8.45	0.28	N-28°-W	北	508・510	503・506	
506	AL-23	7.08	6.68	47.29	0.30	(N-34°-W)	-	501・505・510～512		
507	AK-22	5.10	3.60	18.36	0.25	N-5°-W	北	508	509	
508	AL-2	5.35	5.08	27.18	0.35	N-25°-W	北西		503・505・507・508・510・523	
509	AK-22	5.00	(4.55)	(22.75)	0.30	(N-45°-W)	-	507・508	503	
510	AK-23	7.90	(7.60)	(60.04)	0.25	N-50°-W	北東	508	501～503・505・511・518	
511	AL-22	(5.10)	4.70	(23.97)	-	(X-15°-W)	-	510・512・518	506	
512	AM-23	7.80	4.97	44.37	0.30	X-52°-E	北東		506・511・513・518	
513	AM-22	4.34	4.24	18.40	0.25	(N-38°-W)	-	512・514・518		
514	AM-22	4.85	-	-	0.18	(N-30°-W)	-	515・517	513・525	
515	AM-22	5.26	-	-	0.25	(N-41°-W)	-		514・516	
516	AM-22	6.05	5.25	31.76	0.12	N-S	北	514・515	517・518	
517	AL-22	-	-	-	0.10	S-50°-W	北西	518・519	514・525	
518	AL-22	(6.40)	6.00	(38.40)	0.07	N-36°-W	北西	510・512・516・519	511・513・517・525	
519	AL-22	(6.20)	(5.85)	(36.27)	0.07	(N-35°-W)	-	512	511・517・518	
520	AL-22	-	-	-	0.10	-	-	520・526		
521	AL-22	2.50	(2.50)	(6.25)	0.18	(N-20°-W)	-		523・526	
522	AL-21	-	-	-	0.05	-	-	524	523・540・541	
523	AL-22	5.30	5.30	28.09	0.05	(N-19°-W)	-	508・521・522		
524	AP-25	4.80	4.76	22.85	0.15	N-47°-E	北東		534・535	
525	AL-22	-	-	-	0.23	-	-	514～518		
526	AL-21	3.30	-	-	0.50	X-33°-W	北西	521	520	
527	AM-22	-	-	-	-	-	-			
528	AP-26	7.35	7.10	52.19	0.15	(N-33°-W)	-	529～531		
529	AP-26	5.10	4.35	22.19	-	N-33°-W	北西	530・531	497・528	SJ 530へ拡張
530	AP-26	5.10	5.10	26.01	-	N-33°-W	北西	531	497・528・529	SJ 529の拡張
531	AP-26	6.20	5.90	36.58	0.10	N-33°-W	北西		497・528・529・530	SJ 530の拡張
532	AP-27	9.13	8.84	80.71	0.10	(N-61°-E)	(北東)	533		
533	AP-27	5.40	5.25	28.35	0.15	N-34°-W	北東		532	

第146表 住居跡一覧表(5)

番号	位置	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	深さ(m)	主軸方位	カマド	本遺構より新(SJ)	本遺構より古(SJ)	備 考
534	AP-25	6.50	6.40	41.60	0.40	N-43°-W	北西	534	535・536	SJ 535の拡張
535	AP-25	(6.00)	4.75	(28.50)	-	S-43°-E	南東	524・534	536	SJ 534へ拡張
536	AP-25	8.35	-	-	0.20	(N-32°-W)	-	534・535	-	-
537	AQ-28	9.05	9.02	81.63	0.25	N-46°-E	北東	-	538・539	SJ 538の拡張
538	AQ-28	7.90	7.84	61.94	-	N-46°-E	北東	537	539	SJ 537へ拡張
539	AQ-28	(6.05)	(6.00)	(36.30)	0.15	(N-30°-W)	-	537・538	-	-
540	AL-21	5.70	-	-	0.10	(N-30°-W)	-	522・541	-	-
541	AL-21	4.10	4.05	16.61	0.30	(N-36°-W)	-	522・542	-	-
542	AL-21	-	-	-	-	N-28°-W	北	-	540	-
543	AR-29	5.60	5.53	30.97	0.35	N-50°-E	北東	544・545	-	-
544	AS-29	(3.85)	-	-	0.18	N-S	北	-	543・545	-
545	AS-29	7.85	7.75	60.84	0.35	N-57°-E	北東	544	543	-
546	AL-21	-	-	-	0.30	-	-	547・548	-	-
547	AL-21	-	-	-	0.12	-	-	548	546	-
548	AL-21	-	-	-	0.25	-	-	-	546・547	-
549	AT-29	6.70	(6.25)	(41.88)	0.50	N-47°-E	北東	-	-	-
550	AX-32	4.98	4.80	23.90	0.30	N-41°-W	北西	-	-	-
551	AU-30	5.20	-	-	-	N-60°-E	南東	-	-	-
552	AS-28	6.15	5.67	34.87	0.25	N-55°-E	北東	-	553・555	-
553	AR-28	3.60	-	-	0.15	N-7°-W	北	552	-	-
554	AV-31	4.48	4.10	18.37	0.40	N-42°-E	北東	-	-	-
555	AR-28	7.10	(7.00)	(49.70)	0.20	N-12°-W	北	552・557	-	-
556	AS-28	5.20	-	-	-	(N-30°-W)	-	-	-	-
557	AR-27	6.20	6.15	38.13	0.15	N-50°-E	北東	559	555	-
558	AQ-27	9.65	7.95	76.72	0.30	N-51°-W	北西	-	559~564	-
559	AQ-27	6.45	6.40	41.28	0.12	(N-23°-W)	-	558・560・562	557	-
560	AQ-27	4.00	-	-	0.10	(N-47°-W)	-	558・562	559	-
561	AQ-27	4.50	-	-	-	(N-54°-E)	-	558	-	-
562	AQ-27	5.88	4.55	26.75	0.20	(N-53°-W)	-	558	559・560	-
563	AQ-27	-	-	-	-	-	-	558	-	-
564	AQ-27	-	-	-	-	-	-	558	-	-
565	AR-27	-	-	-	-	-	-	-	-	-
566	AQ-26	5.95	-	-	0.35	(N-32°-W)	-	-	567	-
567	AQ-26	5.47	5.44	29.76	0.25	(N-32°-W)	-	535・566	568	-
568	AQ-25	-	-	-	0.17	-	-	567	-	-
569	AR-27	3.35	-	-	0.16	N-44°-W	南東	-	-	-
570	Y-20	(3.90)	-	-	0.10	N-28°-W	北	-	-	-
571	Y-20	(5.95)	(4.08)	(24.28)	0.10	(N-54°-E)	-	198	-	-
572	X-19	(6.70)	-	-	-	(N-44°-W)	-	574	-	-
573	X-20	-	-	-	0.07	(N-30°-W)	-	-	-	-
574	X-19	4.20	-	-	0.05	(N-25°-W)	-	-	-	-
575	AA-21	3.67	-	-	-	(N-33°-W)	-	578	-	-
576	AA-21	5.02	-	-	0.05	(N-20°-W)	-	-	-	-
577	Z-20	5.20	-	-	0.10	(N-50°-W)	-	578	-	-
578	AA-21	(6.70)	6.63	(44.56)	0.15	(N-45°-W)	-	-	575・577	-
579	X-20	-	-	-	-	-	-	-	-	-

以上、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集『築道下遺跡Ⅲ』第1分冊には、「Ⅳ 遺構と遺物 1. 住居跡」までを収録した。

「Ⅳ 遺構と遺物 2. 掘立柱建物跡」より付編まで、および写真図版は第2分冊に収録する。

報告書抄録

ふりがな	つきみちしたいせき							
書名	築道下遺跡Ⅲ							
副書名	行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業関係報告書							
シリーズ番号	第245集							
編著者名	鑑持和夫							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦 2000 (平成12) 年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
築道下遺跡	埼玉県行田市 大字野字高畑 3744番地5他	11206	144	36° 05' 31"	138° 28' 15"	19970401～ 19971013 19971215～ 19980224	10.050	工業団地 造成に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
築道下遺跡	集落跡	奈良・平安時代 ～中世	住居跡 堀立柱建物跡 土壇 井戸跡 溝跡 竈跡 墓跡	228 28 167 111 35 1 2	土師器 須恵器 土製品 金属製品 石製品 木製品 ガラス製品 陶磁器	元荒川左岸の自然堤防上に展開する古墳時代後期から中世にかけての大規模集落		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第245集

行田市

築道下遺跡Ⅲ

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

-Ⅳ-

平成12年3月15日 印刷

平成12年3月24日 発行

<第1分冊>

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷/有限会社 平電子印刷所